増田篤夫編

三富朽葉詩集

第一書房版

三富朽葉詩集

増田篤夫編

三富朽葉
詩集

三富朽葉詩集

三富朽葉

三富朽葉詩集

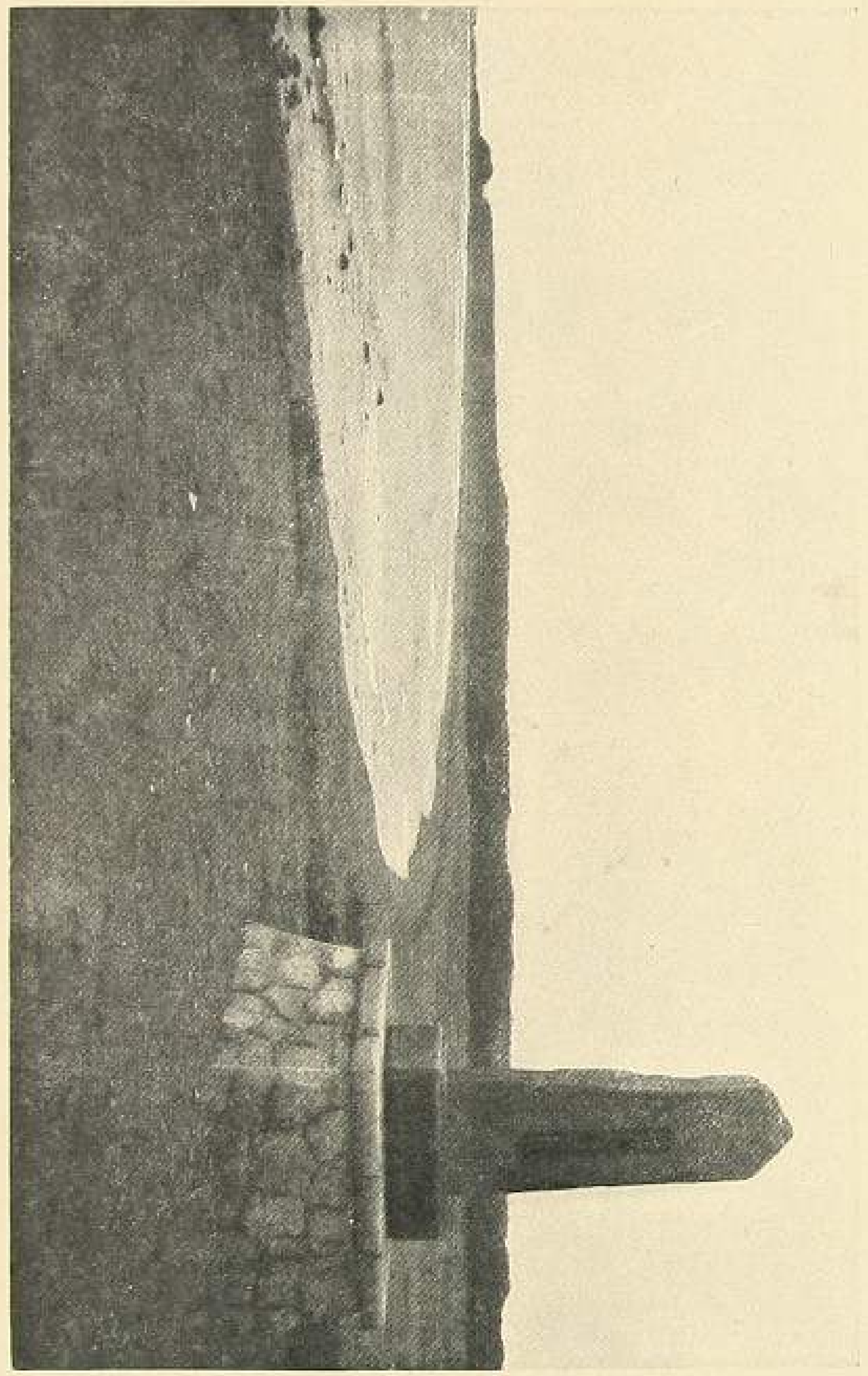
三富朽葉

25 Février '13.

日曜日

今日の日は黄金の手もて身を飾る太陽は
目に見えぬ中空の希望（のぞみ）の虹は
処女の胸み（誘惑か）
揺き消えること、顕れること、
そのピアノを鳴らす…

あまりる恋に、それよりも病ましい
霊（たましひ）の真（まこと）の歌唄は
優しき餘る処女の喉み口説（くどき）る…
其の日曜の訪れ（おとづれ）に
処女よ、触れよ火の指を。



遭難場所(君ヶ濱)と其紀念碑

三富朽葉　今井白楊　紀念碑

第一部

又新しく爽かな憂ひの祭り――
　昨日は悲み　明日は死
色も香ひも惱ましく雨に塗れて
花と咲く　魂の花　今日のわれ

三富朽葉――雨の唄。

第一詩集

これは、明治四十二年朽葉が友人と詢つて自由詩社を結んでより二年間、自由詩社のパンフレット「自然と印象」、雜誌「早稻田文學」、「文章世界」、「劇と詩」、「創作」等に發表された詩作である。之を一括して編者が次期の作品と區別したのには理由がある。なほ外にも詩人のノオト。ブックに年代を共にする十數篇の詩作が發見されたが、執筆の當時旣に作者の冷遇を受けたものと認むべき節が多いので、いづれも本全集には取り除くこととした。

顫律

倦怠、倦怠、
夜と日に、
絕えず痲痺して働く意識の、
心苦しく、懶い連續。

消え失せる日日に
自分の思ひが浮動して、
色彩褪せ、

にほひ薄れ、
音の顫ひかすれるときにも、
笑も涙も
再び内に花と咲かぬときにも、
默つて、默つて…
鐵鎖の夢が曳き摺る
重い無言。

暗い空氣に錆びゆく
わが傷。

午睡の枕元に、
さみしいものの、絕えず
降り注ぎ、閃く…

青い死水、
光りのなげき、
靜けさ籠りゆく
一室一室のけ踈さ。

いつも眼の上にくづれて、
生命に纏はる死のくるめき、
永久に、永久に、

乏しさ、
貧しさ、
死にゆく肉體を廻る
感覺の、活きた顫慄！

水のほとりに

水の邊りに零れる
響ない眞晝の樹魂。
物のおもひの降り注ぐ
はてしなさ。
充ちて消えゆく
もだしの應へ。

水のほとりに生もなく死もなく、
聲ない歌、
書かれぬ詩、
いづれか美しからぬ自らがあらう？

たまたま過ぎる人の姿、獸のかげ、
それは皆遠くへ行くのだ。

色、
香、
光り、
永遠に續く中。

長嘯

（私は眠ります）
敷石に落ち散る死んだ葉と
細い、溫かい雨…
やがて、青く疲れる街燈。

鋭い憂愁は窓を廻つて
近くさまよへど、
圓かな女の夢は

醒めもせず、靜かに眠りゆく。

幽かな夜の光り、
曇つたひと室に、
蔭はぬ夢融け、
終夜の歌の零れ…

聞くに由ないそれに
　繫がれて、
　濡れ濡れて、
淚は繁に、玻璃の霜に泣く！

殘餘

むなし、
夕暮の思ひ。

風は、幽い旅に疲れ、
森に
樹樹の葉の影を拾つて
佗しい夢の巢を搜す。

水の上に漂つた白鳥よ、

死ぬる地平の一すぢに
なはいつしか
朽ちゆく如く吸はれて…

ものの文(あや)めぐり
全い沈默の底に絶え入る、
そを見れば、そを見れば…
接吻(くちづけ)の脣の響して、

額に喰ひ入りし
白い指の冷たさ…
隱れてゆく眠りよ、
なぜ不意に二人はめざめた？

・・・・・・・
・・・・・・・
靜かに充ちてゆく
夕暮の中。

盡きせぬ霧の面(おも)にまつはる
むなしい思ひの
刹那刹那に
顫ふ、魂(たま)の悲鳴！

遠く、永く
むなしい思ひをする故に
寂しさまさる悲み。

午睡の歌

I

此の世の明りを
私は疲れて、見てゐた。

蟬の聲が地熱に印せられて、
重いものを絶えずひきずる。
羽蟲の舞ひがひとすぢに、

瓦斯の臭ひを注ぎ、狂ふ。
靜けさと嵐と別き難い
模樣ある夢がただ廻る。

それが影となり、眠りとなり、
溫かい息となり、むなしい蔽ひとなり――

總べて恣まに、
ちぎれちぎれに落ちてゆく……
(引きつけられるものがある!)
・・・・・・・

II

死は外面まで來てゐる、
綵花の飾りの棺が据ゑられた。
もう寢よう、
戀も終りだ。
ひと室の中に眼は見ず、
思ひは忘れを夢む。
倦んだ口は再び言はぬもよい。
まして白い笑ひを何か求めよう。

何れともよし、
蒸し狂ふ夏の午後に
全身を擧げて自分は、
闇のにほひと眠りの歌に包まれてゐる！

III

室室に人氣無く、
淡黃の花と紅の花と
日に燃えて、絡み合ふ。
　斯かるとき
　青い接吻の音を聞く。

廢れた庭を廻つて
降り注ぎ、閃めく
靜けさと氣疎さと。
　ときをり
　歎く青いくちづけ。

見よ、脚を病む亞剌比亞人は
水際の水松に裸形を投げて
空しい死の心を凝視む。
　いつしか
　遠ざかる青いくちづけ。

草も木も冷たい石も

鋭く黑い記憶を響かせ、
きれぎれの過去を撒布す。

飛び去りゆく時の音、
青いくちづけ、
　其の他は殘餘なり。

IV

日が燃える、
綠に過ぎる海と
紅に過ぎる豆の花と、
餘りに暑い洋館の
窓より覗く苦しさ。

ぎらぎらと
鍍銀の洞に、
白鵠のやうな君の首を
抱く思ひは爍かれて…

希望と戀と薔薇と
蠅の圓舞の群りと
重い空の下に
困迷を重ね、狂亂を盡し、
靜平と調和を分解しゆく！
涼しく匂ふ夕暮を

待ち兼ねて、
ひしと君の首を
諸手に介抱く苦しさ！

V

眠りの羽の飛び來る靜けさ、
痲痺と忘却とわが魂を搖るとき…
愛人よ、愛人よ、胸と胸を締めて
同じ息の下に（離れぬ）と言つたけれど、
我等の戀の巣は燒かれたぢやないか。
（夢であつたか）と君は泣くけれど、
その聲は遠のいて、
眠りの羽の飛び來る靜けさ。

夜の鳥

柔かい夜(よる)の模様に
羽(はね)も見えず
跡も止(とゞ)めぬ鳥の歌——
ひそかに、ひそかに、
心は印象に打たれる……

ひとすぢ
心を捲く

顫音の——
はてしなさ。

緑の心を、いつまでも
忘れな、と
夜の鳥の
仄白い
歌聲、
消えては續く
闇の方の
ああ懷しい
ねむげなひとすぢ！

聞き分けよ、
眠りの影の
浄らかな、時の敷布を
轉じゆく
刹那の歌の麗しさ
やる瀬ない静けさを、また。

ひそやかに、ひそやかに、
負債を逃れ行くごとく
——はても知らず——
寂しさの限りを
下りつづける
魂消ゆる歌の階段…

パステル

水際に
緑を彩る
水の上——
いつしか
白い影が集まる。
重り合ふ影の
白白と

顫へる印象。
柔らかい羽搏を水に、
すべり、啄む
水鳥の靜けさ。

暗らみ、明るみ
ちりぢりに
そよ風の吐息を誘ふ
微溫い日ざし。

庭の面、
野薔薇の垣根、

寄邊ない悲みの行方——

音も無い
時の糸のつながれて
廻りゆくかぎり、
何處ともなく
憂はしい魅力にとらへられて、
池の心は
波立ち、顫へ、なげく。

悲しい散歩

此處にも無いか夢の巣、
草原に、林に、丘に
音もなく
繋がれて
立ち迷ふ煙のやうに、
寂しくも私はただ獨り。

花を摘み、花を摘み、

艶やかな、祕事を語ると見える
憂はしい嬌態つくる
紗の、絹の。
花を摘み、花を摘み、
揉み碎き、揉み碎く。
おお月よ、
親しい月よ、
今宵も野薔薇の垣根に凭れて、
遣瀬ない青春の思ひを
共に歎いてくれ給へ。

二階より

斜に注ぐ雨、
雨のしぶき、
憂はしく、惱ましい
心の…跡、跡、跡。
動いて止まぬ
安樂椅子の
底深く

陷る惡夢。

支那の歌の
麗しい、滑かな節節が
騷がしい此の晝の
眠りを誘ふ…

花壇を縫うて
ひそやかに
歩み入る雨の足、
いつしか綠の苔の白み行くまで。
・・・・・・・・
・・・・・・・・

花瓣と花粉

I

快活なランプのまはりに
何ものか宿つてゐる。

柔らかに眼を閉ぢて
衰へゆく君の脣。

そのしなやかな頬に
眞紅の花の咲くとき、

巣を擧げて飛びくる
蜜蜂の黄いろい歌ぞ鳴り渡る。

II

夜を浸す
水の光りの動搖。

窓の下で、
淨らかな敷石の上で、
蒼ざめて、空しく歌つた
乞食の行方は如何に？

冷たく陸に登り來る
水の光りの閃き。
遙かに小さい火影の
最後の絶望。

瓦斯の熱の昏睡。

III

此の夜半の眺めを閉し、
脣に杯を當て、
接吻の味を吸ひ、
薔薇の花の萎むまで、縮れるまで、消えるまで、

熱い抱擁を、生命のひまの青春を。
ああ！短い喜びの一曲を！

IV

黄ろい花粉を地に委して、
ああ、初秋の、
紅い花、
眞黒に、縮れた
姿よ…泥と別き難い…
誰か汝の名を尋ねよう、
夢の羽の
朽ちて漂ふ…
影——

初花

晩霞を取り捲く
野よ、畑よ、林よ。

ごろつき歩く赤貧の
黄蜂を恐れながら、
蝶は三三五五
色彩を點じて歸る。

果物畑の物陰に
破廉耻なことのありはせぬかと

紅らむ思ひを何氣なく
私は風に吹かれ佇む。
蕾の花を破るな、
傷ましい花粉の涙を見るときは
再び咲まぬ戀の花！
晩霞の取り捲く
野よ、畑よ、林よ、
優しい風よ、
このままに、このままに…

夢の懸巣の羅を
鎖せ晩霞、
このままに、ああこのままに。

シルエット

烈しい冬を彩る
ちぎれちぎれの明るさ、
その陰を行き、
零れるもののあるやうに
自分の像(かたち)は
群集の
かたへを過ぎる。

雜沓の中…

雜沓の中、
鋪石(しきいし)を踏んで
私は銀座通りを歩いてゆく。

夜(よる)を彩る火、
石の上に濁る水。

群集の一部と私は

横路へ消え入る。
この時、薔薇の花
紅く燦く、
紅(あか)より
闇へ。

冬の初め

A mon petit ami, M. Inoue.

明るい窓に
時時風が來て、行く、
半分絞つたカアテンが、
華やかな暗らみを持つて、
蔓草の模樣を夢のやうに煙らせる。
ストオヴの火が

傷いて鳥のやうに、燃えあがつては
衰へてしまふ。
利巧さうな男の子の顔は
房房とした髪の毛の中から
膝の上の畫帳を一心に見てゐた。
繪具箱の青色に
筆先を入れて、
彼は何か考へ込んでゐる。
冬の初めの庭には——水溜りに、
乾きかけた地の上に、
散りぢりに舞ひ落ちる木の葉、

梢から梢に繋がれて、
眩暈（めまひ）する午後の日に
飛び去りも得ぬ二三羽の小鳥。

十二月の夜の曲

公園の一角を
散りばふ花壇の匂ひの上を、
ベンチに歌へる醉ひどれの頭を、
冷たい夜の霧は
重重しく踊り行く。

彼方の黒い塔の尖から、
くづをれた柳の並木から、

歔欷りないじやくる噴水の歎きから、
煙のやうな、
幻のやうな、
明るく暗い影が續く。

憂愁と心痛と、
貧しさと、
さびしい冬の歩みを
早も運んで來る霧……

青く注ぐ瓦斯の
熱のいきれの
絕えだえに

昏睡しをはるまで、
街の夜を
行き交ふ
霧の舞の群。

STOVE

火の中へ
いつしか誘はれて
吸ひつけられる冬の魂。
枯枝を攀ぢ登る
狂はしい火の飾り。
窓の痛み、

壁の呻き
我が像と
暗い形と
火の枠にはめられて
薄明りの上に重なり合ふ
憂愁（うれひ）と寒さと
病ましい影。

いつしか誘はれて
吸ひつけられて、
荒荒しく心陷る
火の飾り、火の框（わく）。

冬の歌

古家を洩れて
蒼い夕をおとづれる
沈默の煙の翅。

徊ひ廻（めぐ）る霧の奥に
森や山が闇を語つてゐる。

ほそぼそと銀を亂す

蜘蛛の網の
濕り氣を吐く綠目にまつはつて
苦しい死を訴へる羽蟲のなきがら。

こごえた冬のうろつくところ
鬱陶しい魂の旅が始まる…

夜曲

蒼い夜、
黑い枝每に
月が銀を飾る、
窓際で、手を額に
私は光りの明るさを考へてゐた。
地に映る月と樹の陰に
眞夜中が漂つてゐる、
森や沼を振りすてて

矢のやうに消え失せる斑雲、
水潦に散り敷く
小鳥等の驚きやすい眠り、
身を切るやうな風の後から、
空虛の穴を尋ねて
死にに行く朽葉の憂愁、
無言の眺めの鬱陶しさ…

地下室に降りて見給へ、
圓かに優しい月の面の
殘忍な相に誰か呪はれぬ者があらう。

淡黄な暈を著て

紫の彩を零して行く月よ、
頭の上を旋つて
冷たい笑ひを注ぎかける月よ、
夜寢ぬ魂を引きつけて、
慰めの袖を蔽ふ月よ、

跡かたも無い幻像を追ふ、
ディレッタントな月よ、月よ、
夜すがらおまへのあとを慕つて
私は光りの明るさを考へつづける、
寂しい手を額に感じながら
私は古い、古い夢を見つめてゐる。

黄昏の歌

窓の外に、
黒い木の枝が匍つてゐる、
屋根の雪が解けて、
單調な雫の
絶えず何處かへ
旋り旋り行くやうな響…
この室の
蒼い、蒼い幻惑の底に、

降りかかるもの憂さの中に、
私は眠りを窺つてゐる、
周圍の壁をひそかに飾つて
閃く星を夢みてゐる。

夕暮の街

夕暮の街が
暗い繪模樣を彩る時。
人人が淡い影を引いて
舞踏するやうに過ぎて行く、
いつしらず、自分は
闇を慕うて來たかのやうに陷る、
冷たく黑い焔を燃す
冬の夜の吐息の中。

のぞみ

私は雜沓を追ひ求めて歩く、
人人に隨つて行きたい、
明るい眺めに眩惑されてゐたい、
のぞみは何處にあるのであらう、
群集の一人となりたい、
皆と同じく魂を支配したい、
荒い渇きに嚙ついて、
私は雜沓を追ひ求めて歩く。

私は

私は蹲つてゐる、
身震ひをする度毎
犬の頸輪に鈴が鳴る、
冷たい風が飛んで來て
輕輕と藁を運んでゆく、
犬も藁の群も私も、
微白(うすじろ)い日光に刺されて
風のまはりに投げ出されて
藁の行方に魅入られてゐる。

焰の繪

輝き出る星の表を
赤い、赤い太陽が渡つて行く。

街の上の隅隅に
匂ひと彩(あや)の巣食ひ初める
黄昏。

黄色い燈火(ともし)の冴えて、

暗い影繪の搖れる時、
徂き戻る、紅い幻…
しなやかな腕に囚はれて
銀の線條を織る夜。

光りを夢みてそこここに、
躍るやうな
泣き叫ぶやうな夜、
物狂はしく打たれて
穴へ誘はれる歡樂…

經驗

黃色い燈火が
石腦油を燻すやうに
煙り、靡く、
その廻りに
青く匂ふ葉の繁り、
膨らんで窺きかかる花の微笑…
雜沓の中から
影が活きて
騷がしい歌と一緒に

荒荒しく踊つてゐる。

この年弱な女と、
惡感に顫へてゐる私は
どこへ行かう、どこへ行かう。

纖細い線の蔭から
夢を囚へてゐる
うひうひしい紅の唇。

火の幻に魅入られて、
赤い舞踏の中に陷る、
花の笑、紅の唇…

黑框

窓を閉ぢて、
黑い花と自分と
無言の寂寞を吸ひ込む。
衰へる空氣の中に
狂ひゆく心の鬱陶しさ。

鈍い、鈍い闇の悶絕、
引きつけられる火の幻。

空しい疲弊(つかれ)の身を襲ふまで、
冷たい痛疼(いたみ)の沁み入るまで、
惡を搖る夢へ、
苦を盛る牢獄へ、
・・・・・・
・・・・・・
生を死に、
室(へや)を棺(ひつぎ)に、
この花束は
飾り…

午後の發熱

鈍く淀んで
押し默る、午後の光線、
水のにほひが
暗い屋根の上に徊ひ廻つてゐる。

眼の中に濁り、
脣の上に餓、
ああ此の曇つたひと時の悲しさ。

顫へを帶びた空氣.
虚空を掴むやうな黑い枝、
息を止める肉の衰へよ、
心は又も、むなしい糧を求めて狂ふ。

やがて重く蔽ひ來て、
病を死へ壓し移す
熱の夢、火の渇き、
額の上のものものしい
燒けた烙印。

微笑

陰へ、あくどい色彩を逃れて、
纖細(かぼそ)い手の上に落ちてゆく蒼い夢。
痙攣の跡より跡へ。

纖細い指の辿る調べは
煙のやうに湧き上つては死んでゆく。
明るみへ物言ひかける手の皓(しろ)は
言葉を歌ふ爪のにほひへ。

指の皓はこの燃える唇へ、
眼は笑ふ、眼は笑ふ、
優しい眺めに魅いられていつ知らず眼は笑ふ。

SPLEEN

果物の上に滑る手を
私は鬱陶しく眺めた、
ひそかに窓を越えて
暗い眼は野にあてどなくさまよふ。
しなやかに私の胸の邊りに動く手よ、
恐ろしい憂鬱病に囚はれて
病に欺かれて、私は身を震はす。

黒い焔の陰から
明るみへせり上らうとする發作、
全身を引きつけられて
私の心はあてどなく虚穴の底に狂ひゆく。
果物の上に滑る手を
私は鬱陶しく眺めた。

ピアノ

顫へては何處へか咽び入り
跡かたもないメロディよ、
淡蒼い影を搖かす
おまへの指は絶間なく咽び入り。
しなやかな幻にとり縋る。
眞白い指の王國は
恣まな壓制を

虐げの歌を掻き鳴らす、
薄明りの上に輝いて
裂けて死ぬ光りのなげき。

けぶりのやうな明るみへ、
祕密を探る指の白よ、

四阿のにほひと色彩に埋められて、
私の心は幾度も幾度も生き死ぬ。

憂鬱病

I 雨

青い洋館を取り卷く
畑の後の地平線よ、
雨が降る、雨が降る。

苧を績むやうな輕い唄が
雨の中から生れて、

雨の中へ消えてゆく。
のろのろと動いて
疲れて睡る田舎の雨。

おお、私は熱を病んで、
影のやうに飛び去る
火の鳥を夢みてゐる。

枝から枝へ舞ひ昇る
明るい水の煙の
雨に紛れるわびしさ、
窓硝子のみやがて白く

擴がりかかる夜の鬱陶しさ。

暗い焰の陰から
私の饑ゑた希望(のぞみ)は
人知れず狂ひに行く…雨の中。

II 夜

血なまぐさい室を出て
私は夢遊病者(ソムナンブリスト)のやうに迷つて歩く、
闇の底に蒼ざめた
光りの眠り。

薄明りの空が、どこからか

洩れるともないピアノを聽いてゐる。
火の渇きに打たれて、
私は獨り、病に魅いられて、
懶い夜のイリュウジョンを追つて歩く。

四月

カナリヤよ。鳴きも止まぬカナリヤよ、
露はな四月の光りの中に、
影を搖る微風の中に、
金の濁りを震はせるカナリヤよ。

戀人よ、窓を少し開けて
樹樹の芽ぐんだ香ひを吸ひませう、
あなたの忍び音はあんまり、あんまり——

この衰へた腦に鋭い…
淡緑の柔かい葉陰に
光りが撒き散らされて踊つてゐる、
樂しい幻想を抱き締めて
瞬きもせぬ空の明るさ。

ああ、銀の大時計は二時を打つ、
カナリヤよ、鳴きも止まぬカナリヤよ、
雪崩のやうな白い手に埋められる
微笑とながいながい嘆息、
（私の生命はもう長くない。）

六月

窓掛のクレエム色のにほひの陰に
この記憶は蘇る…
薄い衣服の微かに香を立てた夕暮、
雪降りのやうな空の明りの衰への中に。

柔かな扇の風を搖かして
黒い眸の笑つた時…
うす白い光りと影が室に溢れて、

私が竊かに涙を墜した時……
蒼（あを）ざめて、
苦しい夢に襲はれて、
おお戀しい胸に顔を埋めた時……

このシルエットは鮮かに
事もなくよみがへる、
病を包む白布（はくふ）の上に。

切抜畫

I

子供等は路の上にいつとはなく
白い印象を殘して消えゆく、
搖れて閃く影の群に
濃厚な彩（あや）を添へる黄昏。
生温（なまぬる）い風に壓される

か弱い蟲の飛び交ひが
重苦しい睡りの歌と變つてゆく。

路の上へ次第次第に
雪に積るやうな音がする、
往來の人人は何かしら微かな色を落して過ぎる。

とある鐵格子の逞しい門は
赤銹の鱗に蔽はれて、
夢魘になやんで壞れようとしてゐる。

II

飾りも無い室のけうとさ。

をりをり、團扇の風が輕く繞る、
女は黑塗りの柄を握つて
奇妙な風俗畫を眺めてゐる、

男は睡りを貪つて
深いふかいところへ落ちてゆく。

いつまでも目醒めない病氣の子供のやうな
昏れ方の空色の薄明り。

III

あてどなく、風に吹かれる鷺鳥は
鈍い叫びを撒き散らして歩く、

昏れ方となる時、
屋根の上に、うす寒くなる猫の眠りも
いつ知れず陰をつくる。

一時に室を照した白い光りが
永い間窓掛の模様のあたりに漂つてゐる。

鳩の夢の桐の葉裏に青みゆく時、
鷺鳥の叫びは遠ざかり
私の窓に黄色なランプが輝く…

IV

ランプの下で

熱い紅茶を啜りませう、
濡れた煙の明るみへ群つて
快い睡りを誘ふ時、
私達は子供のやうに
手を繋いで陰へ行きませう、
もつともつと明るい陰へ、
もつともつと熱い陰へ。

ああ、白い花束を捲り棄ててしまへ、
そして窓をあけませう、
大空の星の列が
生の繪を飾らん爲に！

メランコリア

午後の薄明りの中で、
奇妙な睡りに落ちて行く
影を曳く安樂椅子の
病の身を搖るままに。

懶げな雨の線條は
音もなく若葉の匂ひを煙らす
姿を見せぬ鳥の囀りの

壞れた胸に響くことよ！

永い間の疲勞が
重く夢を壓す時に
鳥は青い叫びを殘して翔る。

春は微笑んでゐるのかも知れないけれど
鬱い陰を搖る安樂椅子の
避け難い睡りに包まれる…

メランコリア

外から砂鐵の臭ひを持つて來る海際の午後。
象の戲れるやうな濤の呻吟は
疊の上に横へる身體(からだ)を
分解しようと揉んでまはる。

私は或日珍しくもない原素に成つて
重いメランコリイの底へ沈んでしまふであらう

えたいの知れぬ此のひと時の衰へよ、
身動きもできない痺れが
筋肉のあたりを延びてゆく…
限りない物思ひのあるやうな、空しさ。

鑠ける光線に續(つゞ)がれて
目まぐるしい蠅のひと群が旋(めぐ)る。
私は或日、砂地の影へ身を潜めて
水月(くらげ)のやうに音もなく鎔け入るであらう。

太陽は紅いあかいイリュウジョンを夢みてゐる、
私は不思議な役割をつとめてるのではないか。

無花果樹の陰の籐椅子や、
まいまいつむりの脆い殼のあたりへ
私は蝿の群となつて舞ひに行く。

壁の廻りの紛れ易い模様にも
ちよつと臂を突き出して止つて見た。

窓の下に死にゆくやうな尨犬よ。
私はいつしかその上で渦巻き初める、
・・・・・・
・・・・・・
砂鐵の臭ひの懶いひとすぢ。

秋のなげき

A une certaine chanteuse à Miyajima.

赤錆の西洋建築の中に住む異人さん、
此の上もなく懐しい其の人達の碧い眼の奥から
匂ひを籠めた秋が迷つて來る。

うろつき廻る蜻蛉を恐れて、
遠く寂しい原へ飛んで行く

蝶

蝶の姿のいぢらしさ。
おまへが睡つてゐるやうな睫毛を動かして
幼い苦みの涙を絞るひと時に、
摑まへどこのない
氣むづかしい私の歎きはどんなであつたらう。

生命(いのち)は悲しい、
主よ、御惠みを…と跪く異人さんよ、
靜かな靜かな秋の優しさ、
その中で、私達は銘銘に苦んでゐる…

夏の曙

黑黑とした、いかつい巖の間で、
未だ新しい墓石が砂に圍まれてゐる、
波の紆(うね)りの上に薄碧い夜の名殘りの漂ふとき、
優しい曙の消えぬ間にと
私は巖角へ坐りに行つた、
荒い羽搏きをして飛んで來る
鶫の鳥も私には嬉しい。

夏の日の此の曙の喜びと寂しさは
私の胸に悲しいにほひを漲らすことよ、
死んだ人の爲に、私は野菊の花を束にしたけれど、
墓には手向けずに持つて歸つた、
この心を誰か知らう、
私とても何と言ひ得よう、
今は萎れかけた机の上の花束に
蜜蜂が舞ひながら、露を吸ひに來てゐる。

黄昏の薄くらがりに…

黄昏の薄くらがりに
楓の葉は物狂はしく錆びてゆく。
石の上に腰掛けて
苦(にが)い涙を胸に包む友よ、

聞き給へ、僕の田舍唄を、
太陽の熱い疲れが四阿の上に消えた時
愛らしい花は自然と

一とこに身を寄せて愁ひに暮れる。
光りの中のヸジョンに酔ふ時
誰がくらやみを思はう、
花よ、けれど、おまへの優しさは夜（よる）にこそ匂ふのではないか。

聞き給へ、僕の田舎唄を、
石の上に腰掛けて、
苦い涙を胸に包む友よ。

公園の秋

明るい影に充ちた
公園の腰掛は
そこここに、砂金を掘るやうな
騒ぎの中に…素朴なノスタルジアの夢心地。

(女王よ)
葉巻の煙の輕く舞ふ時、
綠の陰からつと洩れる卑しい言葉の、

【女王よ】
佛蘭西大使館の大犬のピエロオは
主人に紛れてきよときよとと
人込の中へ迷ひ込んでゆく。

秋が來た、
餘りに蒼白い彼の手の上に
餘りに光の無い彼の眼の底に
悔いと惱みと恨みと限りない疲れと。

日は時をり快い暈色(ニユアンス)を
〔生〕の乾彩畫(パステル)の上に注ぎかける、

その時彼方、器械體操の子供達は
小鬼のやうに宙を踊つてゐる。
無頼漢(ならずもの)の恐ろしい足取りの後から
三羽の鵞鳥がすましてついてくる、
噴水のいつまでもいつまでも……
いらだたしさ、そつけなさ、やるせなさ。

初秋の蒼ざめた彼が胸には
さまざまの今日のヸジョンが
愔愔しい戀の終りと形を變へる。

墓場のREFRAIN

踊る、踊る、枯葉の上、
浄らかな、觸れ難いにほひをこめて
秋の光りの傾く時分。

枯葉の踊りは耀きながら
黒い淵に吸ひつけられる、
憂愁の閃き、追憶の唱歌——
明るい空から零れ落ちるルフラン。

黄昏を暫し隠す、鋭い光線、
墓場のむつつりした澁面を
からからと、笑ひそやす小鬼の群よ、
悲しい宗教の上を飛び廻る盲目共。

眠れる者の上に輝く月のやうに
冷たく寂しい
喜びのない笑ひと色彩のない装飾と、

踊る、踊る、枯葉が踊る墓の上、
浄らかな、觸れ難い匂ひを籠めて
秋の光りの消え去る時分。

盲人の歌

麗しくも捕へ難ない君の言葉に圍まれて
暗い影を逐ふ我が心、
夜(よる)の言葉をひとすぢの朱の唇より聞く時に
花の陰よりも匂はしい
碧い暗、
影をつくる暗、
夜の言葉に捕はれて盲ひとなる時に、
二重の暗の麗しさよ。

凡べての暗を忘るる暗、
そのくらやみに生命(いのち)を残して、
夏の終りを思ひ歎く
この、秋の終りの寒い寒い暮方の
微かな微かな
消えて跡もない物思ひ。

第二詩集　鶯み

朽葉はその第一自選詩集を飾るべき多くの詩を夢想したが、彼の手控へによれば、「雨の唄」、「日曜日」にその一端を實現した。同じ手控へに、「夜」、「薄命の唄」の名が見えるけれども、編者は遺品全部を調べて尙之を發見することができなかつた。「深夜」を以てその一篇に擬するとしても、題名の近似以外、推定の基礎は全く無い。おそらく、この二篇共嘗て詩人の夢想裡に存在したのみで、彼の言葉を借れば、(裸かな意味のままで著物をさがしてゐた)(遺稿雜纂)ものと思はれる。(營み)は第一自選詩集に冠すべく彼に祕藏された書名である。明治四十四年以後の作品を呼ぶに編者が之を以てしたのは、朽葉生前の計畫を記念し、旁々その詩人としての態度を偲びたいがためである。このうち數篇は當時「三田文學」、「朱欒」等に揭げられたが、他は篋底に藏せられてゐた。なほ五六の未定稿が發見されたが、大正三年七月を限りに詩作らしいものは見當らない。

CANTIQUE

A Atsuo Masuda.

I

わが心の上に碧い瞳の夜が擴がる、
わが足下の敷石には唯一つの花もない。
(神よ御惠を給へ、
わが祈る神よ、もし神あらば。)

優しい胸を我は持ちながら
わが足下の敷石には唯一つの花もない。
わが感覺の上に暗い大風が吹き渡る、
虚空はわが凍えた手に霜を置く。
(神よ御惠を給へ、
わが祈る神よ、もし神あらば。)
樂しい思ひを我は持ちながら
虚空はわが凍えた手に霜を置く。
わが祈る神よ、もし神あらば、
わが杯に酒を給へ、
わが脣に笑ひを給へ、

神よ御惠を給へ。

神よ御惠を給へ、
わが冬に火を給へ、
わが祕密に燈明を給へ、
わが祈る神よ、もし神あらば。

II

おお白い希望と、紅い喜びと、百合の花と…
おおわが咽び泣きと、絶望の怖れと、苦い毒と…
(神よ、わが心の病に憐みを給へ！)

幽妙な白旗を掲げる空よ、

わが胸の碧壁は夢魔を描く。
わが思ひ、わが黄熱の小川を照す
永久の戰慄と永久の太陽よ。

いつしか月の光りは野の印度更紗に斑をば置く。
いつしかわが唇は焦色の狂氣を摘み取る。
いつしかわが眼は黒く凍てついて
聾啞學校の沈默の窓を見つめる。
いつしか冬となる魂よ、
（神よわが心の病に憐みを給へ！）

（幻の力をも動かす神よ（神あらば）
燦けた眼にも星座を鏤める神よ、
雪と灰の中にも生を造る神よ…）

おお白い希望と、紅い喜びと…
おお咽び泣きと絶望の怖れと…
（わが肉に休息を給へ、
わが生に覺醒を給へ、
おお神よ、わが十二月！）

仇花

ELEGIE

O ma Pauvre H.., voici
ma pauvre offrande pour vous!

花束よ、優しい群衆(むれ)の鈴蘭よ、
花束よ、姿あどない石竹よ、
浄らかに曇る手に抱かれて
石竹よ、鈴蘭よ、黄金(こがね)の戀を唱(うた)へかし!

石竹よ、鈴蘭よ、乙女は迷ふ。
繰り返し繰り返し乙女は歎く、
石竹よ、日は滑(すべ)る、戀は無し、
鈴蘭よ、夜(よる)の眼は悪夢を睨む。

SENTIMENT

小春日の金絲雀の囀りか、
日向臭い三毛の小猫の居眠りか、
遠く身を運ぶそよ風か。
何事もない十二月の
眞晝を刺す悲みよ！

鳴く金絲雀か、
猫の欠伸か、

そよ風の縺れか、
知らぬ世界に身を置く者のわづらひか。
なり渡る嗄れ聲の悲みよ。
心の罠か、肉の恐怖か！

現在

いつしか母は居眠る。
いつしか娘は歎く、

蒼ざめた現在は
過去の手を闇に導く。
蒼ざめた現在は
未來の眼を闇に導く。

（わが愛よ、ランプを強めよ、
夜の瞳は更に碧く更に強い。）

盲ひの母は風を聽く。
啞の娘は霜を見る、
盲ひの母は浪を聽く、
啞の娘は森を見る。

（わが愛よ、ランプを強めよ、
夜の瞳は更に碧く更に強い。）

乾葉は狂ふ、月は舞ふ、
犬小屋に鎖がある、

蜂の巣に蜜は無い、
春は近い、冬は遠い。

(わが愛よ、ランプを強めよ、
夜(よる)の瞳は更に碧く更に強い。)

盲人の唄

わが怖れは紅の芽を伸ばす。
わが悲みは黄色の旗を飜す、
わが犬は影を吠える、
わが常春藤(きづた)は石を捲く、

わが愛は黒い日をかき抱く、
わが盲目は見えぬ瞼を押し開く、
わが手は固い自然を爪さぐる、
わが生も
わが死も
わが窓を開く由なし。

深夜

影と銀の亂れる夜へ
月は死葉を刈り立てる。
(魂は忍び音を聞く。)——
虚空の淵に搖られる
星の瞳は鈴を響かす。
(魂は灰を見つめる。)——

渦巻の雲より覗く
烈しい闇の裸形。
(魂は火を失ふ。)——
いつも地平を逍ふ獣の群よ、
いつも雪の降る薄明りよ、
いつもわが閉ぢた窓に映る幻よ、
いつも暖をとる寒い魂よ、
いつも我を裏ぎる我の
心の畏よ、肉の恐怖よ。
いつもいつもつまづくわが神經のいらだたしさ…

冬の唄

I

寨の中の五人の王女
守護神に燈火を捧げ
黄金の扉に鍵を置く。
(戀人よ、火を守れ、
跫音は心を覗く。)

五人の王女は草鞋を踏み締め
巡禮の熱い涙を
悲みの日日にふり落す。
（戀人よ、焰は暗い、
（香爐の上に霜を見る。）

五人の王女は巡禮の足を止めて、
蒼海色の空の下に
荒い歎きの接吻を交す。
（戀人よ、焰は燻る、
（鈴の音はいつか硬ばる。）

五人の王女は啞となる、

五人の王女の血は語る、
五人の王女は鍵を棄てる。
（戀人よ、火は消える、
（戀人よ、火は眠る。）

II

鐘は鳴る、鐘は鳴る、
冬の底より鐘は鳴る、
子供の唄は巷に充ちてゐる。
（妹よ、春は間近い、
妹よ、苦むな、恐れるな。）
日は旋る、日は旋る、

時の梭、日は旋る、
大空の黄金の織師。
（妹よ、戀は目覺める、
　妹よ、苦むな、恐れるな。）
芽は燃える、蕾は紅い、
優しい花の羞恥は
そよ風におどおど笑ふ。
（妹よ、喜びの戸を開け、
　妹よ、苦むな、恐れるな。）
野は飾る、少女は踊る、
わが家の窓を開いて

兩親は花瓶を盛る。
（妹よ、わが魂痛む、
　妹よ、苦むな、恐れるな。）

III

姉よ、淨く優しい御身の手は
現在と未來をば掻き亂す、
——塔に飜る赤い旗——
街にうなだれた人影は
黄昏のくらみに躓く。
姉よ、涼しく匂ふ御身の髪は
今日と昨日のけぢめを摘み取る、

――赤い旗は闇にも目立つ――
冬の夜の寒い心は
細い火に暖を取る。

姉よ、捉へ難ない御身の表情は
窓を越えて遠く迷ふ、
――赤い旗は重く流れる――
雪の上に曇る朝あけ
薄ら明りに獸の群はうろつく。

姉よ、物狂はしい御身の胸は
黒い過去を掻き抱く、
――いつもいつも赤い旗――

静かに寂しい魂は、
むなしい空へ合掌を擧げる。

唄

わが戀は李の苦い皮を嚙む
夏草に埋もれてわが戀は血を夢む
わが戀は蜜蜂の群と日もすがら
夏草に埋もれて、わが戀は火を夢む
わが戀は蠱の牢屋に繋がれてまじろがぬ裸形の憂ひ
わが戀を如何なる毒か癒し得る？

如何なる毒か、わが戀を？
惡の旗、祭禮の痛み、わが戀は麗しい悲鳴の唄を！
死苦の笑、炎の渦輪、わが戀は花と咲く素足の舞を！

寨を圍む麥の穗よ…

寨（とりで）を圍む麥の穗よ、
おお、季節、熟（う）れゆく麥よ、
　希（のぞ）みの海に今日もまた、
　溺れつつ、叢の中、
　わが魂はひざまづく！

希みはいつか光りの旗をわが肉に
黄金（こがね）の戀をわが生に、捲きつける、

　夢の渚に今日もまた、
　泣き濡れて、紅き額に、
　わが祈る、念ひよ、花よ！

密かに建てし夢の寨は物古りて
眠りの唄は、おお季節、野に鳴りひびく、
　飽く日を知らす今日もまた、
　くるほしく、わが戀の火の鳥は
　焰の潮（しほ）に漂へる！

雨の唄

綠の苔も白みゆく
此の麗しい雨の時
　わが指は火の如く
此上ない虹を胸に描く

雨の抛つ蠱の唄
生命の死の蠱の夢
　わが渇く脣は

　　黃金の春を喉に摘む
又新しく爽かな憂愁の祭禮——
　昨日は悲み　明日は死
色も香ひも惱ましく雨に塗れて
花と咲く　魂の花　今日のわれ
おお降り注ぐ淨らかさ　此の生の時——
豐かさ　優しさ　麗しさ　此の雨の時——

日曜日

今日の日は黄金(こがね)の手もて身を飾る。
目に見えぬ中空(なかぞら)の希望(のぞみ)の虹は
處女の胸に(誘惑か)
搔き消えるごと、顯れるごと
幻のピアノを鳴らす…

生(せい)よりも爽かに、死よりも麗しい
靈(たましひ)の眞(まこと)の唄は

優しさ餘る處女の喉に口籠る…
此の日曜の訪れに
處女よ、觸れよ、火の指を。

第十六月の女性の園に
瞳に綠、手に燕、
御身の脣は時ならぬ苺の匂ひ、
・・・・・・・
(御身を念ふ束の間の、永遠のわがねがひ、
御身の胸にわが墓の白く輝く、死のねがひ…)

山の木木の中に…

山の木木の中に
姿の見えぬ鳥が騒ぐ。
枝のやうに
わが思ひの搖れるとき。
　野の笑ひを後にして
風景は坂路を攀ぢ上る、
　森の高い梢を
わが希望の覗くとき。

響は谷へ、
　わが夢は運命の何處の空へ？

土地

畑は怒りと長い歯とに充ちた口を一杯に開いて、
無言の叫びを擧げる泥の嵐の中へ
一息に、多分、木の群を呑み込まうとしてゐる、
おお、樫の木の上の烏、
聾のやうに、彼は食後の痲痺を味つてゐる。
裸の風景は最上の理性を抱いてゐる。

遠くなだれかかる綠の層は
沒日の眼をあてる山の涙か、
影のマントオが襞を母らしい手で著せる。
ムウジックが死を眺めるやうに
鈍くおだやかな眺めよ!

田舍の虛しさは充實に充ちてゐる。

黑い生で胎の膨れた丘の上に
地と一層親む爲に、恐らく、
腰の曲つた一人の老爺が
石のやうに古い自然な態度で
やがて足の下に滅込むべき穴を、

パスカルの淵をみつめてゐる。

序曲

お伽噺の羊毛の雲よりもなほ輕い
病後(やみあがり)の笑ひが地の上に迷ふ、
　冬は、煤のやうに
　　臺所を荒してゐる、
時は緩く震へ、色彩(いろ)は曇る。
目の腫れた太陽(ひ)は手さぐりに
並藏(なみぐら)の窓にうづくまる、

河の上には家の影、冬の聲、
聲を立て得ぬ祈りの影、
季節は鈍く淀み、絶えず流れる。

樹立は堅い手への賜物
樂園の夢を差し上げて
氣輕な春を戒めつつ
明日の空へ野と共に
模様を描いて舞ひ立たうとしてゐる…

風は單純な樂音を洩らす…

散文詩集 生活表

大正三年八月早稻田文學に（火の鳥）の匿名で「生活表」と題する散文詩を公にした朽葉は、既に同じ「生活表」の名を冠する散文詩集を計畫してゐた。「營み」の姉妹篇とも見られるこの「生活表」は、生涯の辻辻に立てられて、彼が運命の一續きの繪解きと成る筈であつた。けれども、わづかに門出を記念する六種の文章が綴られただけである。うち、「岬（或ひは岬角）」の散逸は編者の深い悲みである。遺品の手帳には、一九一三年十月作と錄せられてある。單行本「生活表」には序詩及び（藝術への祈り）が添へられる筈であつた。「遺稿雜纂」の HYMNE その他は後者の面影をやや傳へてゐるやうに思はれる。又別に、直譯して、（この小さき文集をわが唯一の REGRET なるS・Tに卑下して捧ぐ）といふ佛蘭西文の獻辭がある。もと朽葉がほんの覺えに書きとめておいたもので正しい文章ではないから、原文は揭げぬことにした。因みに、S・Tはマドゥモアゼル・ブランシュ（朽葉の手紙參照）の本名の頭字を採つたものである。

魂の夜

もはや秋となつた。やがて此の明るい風物に續いて、鴉の群が黑い礫のやうに灰色の空を飛び散る、鬱陶しい冬が來るであらう。

四季と群集との中に在つて、脆く苦い、また物怯ぢする私の生命をば運命は異樣に麗しく飾つた。私は常に感性の谷間を彷徨つて空氣から咽喉へ濃い渇きを吸つた。又、夢魔に魘されるやうな私のか碧い生活の淵にも、時時幽妙な光りが白んで煌いた。幽玄と酷薄との海に溺れて、私の紅い祈禱と生命の祕鍵とは永久に沈み入るであらう。

秋の夜の長い疲勞の後、私は眠られぬまま、とりとめのない、やや熱に浮かされたやうな物思ひに耽つてゐた。

私は何處とも知れぬ丘の上に、ゆるやかなマントオに身を包ませて、土塗れのまゝ横はつてゐる。眼の上には一旒の黑い旗がどんよりと懸かつてゐて、その旗は夏の白日の太陽の燿くやうに烈しく私の額を照した。

私は薄ら明りの高窓から海底のやうな外を覗いた。遠方にもう夜が靜かに紅い翅を伸し擴げ、蒼い瞳を見開いてゐる。私の唯一の寶はおもむろに彼方の夜の中に搔き消えてしまつた。

泉の周邊に色や匂ひが一杯に溢れてゐる。その傍を獸は一匹づつ、人は一人づつ、長い間を置いて走る。獸は光りの如く飛び。人は悲鳴を擧げた。いつまで見てゐても影は一つづつであつた。

私は何といふこともなく涙を落した。そして〔愛〕に對する消し難い悲歎に襲はれた。

眼が覺めると、もう朝であつた！　雨の音と、そして、例へば牢獄の中へ僅かに射し入るやうな薄白い光線とが取り亂した身の周圍に零れてゐる…

一九一一――一九一二

爍けた鍵

夜！

夜はわが前に映像の文を展べた。時はいつしか枝折經を置いたのである。私は一瞥に之を讀んで、うなだれたまま神經の門を潛つた。

埋もれた聖堂はわが眼の前に在る、——茲への經路を顧る刹那には、私の血は悲鳴を擧げ、私の肉は地を覺えぬのである。—— とうとう私は到著した。

けれども…

私の見つめてゐるのは爍けた鍵であつた。時計はゼンマイを止めて私の瞳に喰ひ入つた。

閉ぢたる扉を開くべきわが唯一の鍵よ、わが言葉なき祈りよ。鍵はいつ燃え壞れて赤錆と成るのであらう？ わが祈りは溢るるに由ないわが胸をいつ殲してしまふのであらう？…わが希望と反省は刹那刹那に死と生を造る。エドガア・アラン・ポオは私に狂氣を教へた、《ひと聲を、叫ばんが爲のひと聲を！》

（一九一一・一一・五）

※

《私は如何ばかりか人を愛し、わが身を之が用に立てんと努めたであらう。今日でも人を愛するに於いて變りは無い、—— 啻、私は遠退いてしまつた。》アドルフ・レッテエ。

秋草は仄かな色と匂ひを傾けて、わが胸の幻惑を覗いた。優しい智慧の眼よ！ 私は多くの四季を通つて腐れ込んでゆくわが思ひの醜さをその前に隱すことをしなかつた、又、できもしまい。私は惡夢より醒めて自分の病を知る者のやうにわが身に恥と涙を覺えて胸を震はした。數數の問ひと神祕の念ひとを籠めた此の瞬間、私は絕對不二の苦い毒を飲ん

だ…

（一九一一・一一・七）

※

わが腕を捲いてわが胸に介抱くべき人よ！　死葉の上に手を置いておん身の黒瞳を見入る時、葉は蘇つて青い芽を出だす。けれどもおん身の姿は吹き荒ぶ幻の中に掻き消えてしまふではないか…

永久に輝く太陽と永久に顯滅する四季とを私は飛び越す…　けれども、今はわが眼界に無き戀人よ、愛人よ！　私がわれとわが夢魔を突然捉へ得るの日は私の兩眼は潤んでゐるのであらう、私の渇きは止まつてゐるのであらう。

私は雲の渦巻模樣を見た。

私は鮮かな虹を見た。

碧い月明りの中にくづれる花を見た。

曠野を右往左往する獸を見た。

これ等は凡べて觸れ難いといふ苦みをわが腦に印した。これ等は凡べておん身なのである。私はわが師マラルメの一句を抱いて輾轉する。——（空とは何だ？）

（一九一一・一一・七）

※

（杜には一羽の鳥が在つて、その唄は汝を止め、汝を赤面せしめる。）ジャン・アルテュウル・ランボオ。

戀人よ、御身といふ美しく熱い肉體を抱く時、わが心の病は眞紅の喜びの底に溺れてし

まふ。

わが傀羞（はぢらひ）はただ獨り椽に出て虹を見る時なぜ淨い戀を穢すのか？

梢の小鳥はなぜわが祕密を唄ふのか？

戀人よ、私の眞心はなぜ御身を裏切るのか？　御身の媚はなぜ私の胸を卑しい物思ひに塗（まみ）れしめるのか？

御身の肉體全部を愛する故に私は御身を戀してゐるのであらう、御身の心みなを愛する故に私は御身を戀してゐるのであらう。戀する故に、戀する故に、ああ、最も親しい御身に最も厭はしい力が籠つてゐようとは！

※

『敎會に贖罪なし。』ポリエ・ドゥ・リイル・アダン。

交番の瓦斯燈に闇夜は凶惡な赤を點じた。その赤が全力を籠めてわが腦に刺（とげ）をさすとすれば、その時私は、木偶人のやうに、案山子のやうに、ばつたり倒れてしまへばよい、聲を擧げず、踠かずに。

地獄と宙とを往來する夢魔があつて、いつかは私をその長い爪で一摑みに搔き裂くであらう、狙ひ正しくひと息に。

私の努力は谷底を指す…

茲に一つの階段がある。御身は何も北極や阿弗利加へ行つて冒險するまでもなく、その一段一段を無限の注意を聚めて踏め。すれば、或時御身は沙漠の中に王宮を見出だすであらう。澱（よど）の邊（ほと）りに優しい戀人のやうな青草を見出だすであらう。…『時』は永久に歌ふ、その永久性を其の時御身は破壞する力を持つ。その時にこそたじろがず奈落へ陥ちて、懷し

い人人を諸手に介抱け！

（一九一二・三・一二）

※

私の胸は地獄の焰を養つた。

或晩、私の夜具の裾はいとも優しく、又重く重くなつて、鬼が私の肩を覗いた。私は之と闘つて、遂に彼奴をわが天國へ曳きずり上げた。それ以來、私は夜を擧けて滿杯の血に醉ふ。

おお此の優しさ！

谷底を指して一直線に狂ふ三角帆の船がある。絶息の無感覺を身に覺えながら針路を枉けなとあせるわが額に、夜は紅の烙印を置いた。

おお波よ、おお船！　凡べてを飛び越えよ、飛び越えよ！

昔はわが魂は塵を嘗めた、今は此上ない血潮に地を塗れしめる。

《おお季節、おお寨！
如何なる魂か缺點なき？》ジャン・アルテュウル・ランボオ。

（一九一二・九・二）

海

面變りする海面に風は戰慄した。（おお夕燒け！）田舍漢が都會の感情を苛立たしめると同じく、海の荒荒しい擧動はいつしか脆い心を育てた都會人の纎細な感情を突如引き拔かうとする。濱の石塊の間に漠とした懸念に壓されて胸苦しく佇立する人は、浪の深みより重重しい元始の亡靈の伸び上り、暗い手を延ばして我の上にのしかかるのを見るのである。日沒前、犬吠岬の胎內潛りといふ崖穴を拔けて、私は最も安全に突き出た岩の先に寢そべると、周圍の岩に狂奔する蒼ざめた水の遊戲に圍まれる。眩惑は私に默想を許さず、驚異を强ひる。おお至る所の限られた眩惑 ―― 浪の CONVENTION ―― この退屈の EFFET ―― 時には生と死の爭力を現じる魔の海が湧き立つてゐる。私は現代の FRIGENDE HOLLENDER であつた。私の紅い額は永久に酷薄の海に溺れた。神經の耀きが近代藝術

の一創作であるなら、美の韻律を掻き鳴らすべき聯想の壞頽――この亡靈の手は原始の動物性と摑み合ふに足る感性である。

一九一三・九・一五

生活表

（三日）

五月の薄ら寒い曇り日は私の散漫（此の運命的凡力）に陥り行く午後に彼の冬を呼び起す——手套の暗い物語、傳說的な日沒時、焦けたものの永遠に醒め果てた匂ひ、未だ暑い意味のみが物狂ほしい祕密を照り反す惡寒、忽ち戸が開いて惡漢のやうに路に立ち上る影、戀の怖れ、額に喰ひ入る顫慄、顫慄…

とある壁の曝された廣告（?・）（店仕舞の赤インキではない）——茲を過ぎてENNUIへ、例の、例の…

とある敷石が菱形に陷ち込んでゐて、土が菱形の表情をしてゐる。誰が地下のひしと介

抱く抱合體を思はうぞ。盲ひのやうな索り足で踏む、踏む、踏む…

時計臺には針路の縮圖が貼つてある。又見えない帆が揚がつてゐる。永久に岸の無い海の、運命のどの方角へ?…

カッフェの白熱瓦斯の下に厭世の寒さにも挫げず戀人は花のやうに笑つた、彼の脆い花の微笑で…　おお、立派、立派、御身は少くとも飛ぶ心を持つてゐる、舞ふ術を知つてゐる…　おまけに例のENNUIの淀を蠢と掻き亂す力さへ或人にとつては備へてゐる。御身は現在の極致である！　不意の永久性である！　あらゆる四季の冬に御身のみが春の芽を出だす！　御身のみが樂音の純粹である！　ただ一音、わがREGRETの空になほ漂ふ…

（四日）

人類の歷史に放ち飼ひにされた私はここそこに、泡立つ海を見渡す岬を遊牧する。青草の上は鹽のやうに苦い。彼の原始的動物がわが潛在意識に彷徨する胸惡さ、地續きに。私の思想は銅版畫に成つた。この太陽の異樣な著色よ！　巖が、巖が、この塊が餘り多過ぎる、空に迷信が擴がり過ぎるやうに。見よ、わが祖先達は手を擧げて、雲の現象に媚び

る。何たる威嚇ぞ！　烈しい單純の雪崩に埋められて眞晝は重く顫ふ。痲痺は蜒り、怖れは降る。彼等は荒い感性を抱いて哲學の以前に長く暗くさまよつた。彼等によつて吸ひ込まれた瘴氣は我等の遺傳によつて吐き出されてゐる。霜に焼けた血を振ひ落せ、思ひも寄らぬ鋭さ、鮮かさ、純らかさを以て。《自然》よ、御身と賭をする、御身の造物主、わがDELICATESSE！

（六日）

感覺は漠然たる現象を本質的にする、現實の街の地である。彼の麗はしい花を鮮かな手つきで摘み取らんとする者よ、此の地の饒かさによつてのみ圓かな美は常に爽かな空氣を一杯に浴びて萠え出ることを忘れるな。嘘の眞理はいつも餘りに多くの土地へ灌がれてゐるではないか。

時には言葉の窓に凭つて人類の歴史を上下する。時には言葉を閉ぢて表現し難い純粋に魅せられる。おお個人と世界とを兼ね備へた此の魂よ、何故に御身は斯くは貧しい協和音

のみを出だすか？

常に冒險の雰圍氣を搖がして進まんとする身は常に癒し難いものに繋がれてゐる。わが足に伴はぬ豊かなリヅムは時にはわが夢魔の空を彩る。あらゆる痲痺を擧げて彼方へ私が攀ぢ上る時、おお思ひがけない此の優しさ…　如何なる負も私を反省せしめるに足りない賭がおごそかに開かれてある！

（八日）

空が稍蒼褪めてゐる。物語に聽き惚れる子供の單純を以て、ロビンソンのやうな孤獨を以て、私は夜の片隅に坐つた。木の梢のこと、梢の上の城のこと、叉築山の蛙のこと、凡べて水際の爽かさのこと、亞剌比亞、波斯、印度支那、安南、暹羅、日本、阿弗利加等に蒔き散らされた世界的な燈火のこと（おお其の涼しい暗綠のニュアンス！）、誠に無心な願ひを以て近世の惡熱を更に更に文明的な鋭感へまで REFINE さすべき性質のお伽噺の數數。

之等の優しく熱い顯現に、殆ど〔自然〕のやうな賢い態度で私は魅せられて行つた。此の豐かな良夜の玻璃窓に曉の萠す頃、又は工場の汽笛が朝の白さに期待を描く頃、私は多分眠りに落ちるであらう。（如何なる意志も〔偶然〕を挑むことはできぬ。直覺は理性を離れては成り立たぬ。彼の動物磁氣を空想に應用する暗愚と、直覺は何の關係もない――逆である外には。原始の狀態に彼を多く見出だし、文明の狀態は此を含む多少に依つて定められる。）

（十一日）

爽かさに渴いて熱を摑む者よ、鮮かさを訪ねて暗くさすらふ者よ、御身の焦れる曙が惡夢の空にのみ明るむ者よ、涼しい此の五月の淺綠の中にふと醒めてわれとわが病に氣づく時あらば、昔の孱弱い眞實（永遠に失はれた記憶）が餘りに失はれ過ぎたことの毒に驚くであらう。

――とある叢に御身の體が沒しる（犬であるか、友達であるか、御身に打衝つた）、岸邊には短劍のやうな水底がある。むせぽつたい徑に黃金の花が顫へた。潴水には垢だらけの

踊の一群が沈んでゐる。入口の無い家の不思議は日沒時の蟲の空氣に、御身を足も宙に走らせる…　隱れて見えぬ巨人の額が雲の中から狙つてゐる。

杜の奧から、坂の裾から、幻影の列が貧しい音樂の中に續いてゐる。始終つかまへどこのない苦みが友達から、家庭から、あらゆる出現から觀念に絡つてゐる。垣根を廻り廻る鷄の群は何たる醜さぞ！　支那の服よりも毒毒しい。曖昧な形に依つて何故瞭とした夢魔を感じるのであるか？　晝のやうに敏く、夜のやうに寂しく、幼時よ、御身は常に我知らす豐富である、何に？　眩暈のする樂園の眺めに。

（十四日）

話の相手から顏をそむけて、私は何の味も無い話題（此の思想の獸！）に漠然と思ひふけつた。疑ひもなく此處の空氣は濁つてゐる。片輪のやうに頑固な私は午後を重くする斷斷な言葉とそれに續がる沈默との終りを待ちながら、駱駄にも劣らぬ辛抱を以て眞摯を反嚙した。

私は耳を挾まれた子供のやうに苦しく笑つた。愚かな口振で聲高に爭つた、何か役立つ

爲に——何かさがし物を手傳ふ爲に、何か拾ひ上げて渡す爲に、灰色の中に躓きながら、誠に同胞の心を以て相手の滿足を得ようと私は熱中した…

（十五日）

わが唯一の許嫁 DELICATESSE の名に依つて此の晩春の頂點より私は彼の麗しい思慕の光景を夢みる。不可能な豐かさの漲る EDEN を想ふ。希望の光りと惠みの雨とに洗はれた虹を仰ぐ。おごそかに優しいお伽噺の ESSENCE を映す。

此の勞働的精神は私を群集から離れしめた。如何に遠く獨りわが耕すことよ！ 孤獨は誠にわが魂に熱を病ましめる。けれども私は鍬を肩に、更に立ち上つて大股に歩み去らねばならぬ、漠然たる彼方へ、何方へ紛れ込むとも知れぬ未開の性質へ。

童貞の嫌惡を以て私は公の場所ならぬ會合を厭ふ。

（十九日）

EDEN は ADAM と EVE にとつて背景ではない。彼等の觀念そのものである。私の動

搖する觀念は誠に私の暗い冒險である。振り搖かされ、眩く船暈の胸惡さを常に取り捲く鷗よ、常に抱く汐騷よ、飛び超えよ、純粹——舞へ、刹那を呼び起す律の嵐——　豐かさで私は嗚呼！ 恐らくは窒息せねばならぬ此の圓かなゆらゆり。

峯より峯を驅け旋る樂音を以て私は夕燒の曲を彈いた。熱い指は今もなほ火を感じてゐる。

私は近代劇の一場を演じて異樣な沈默を齎した、寶石のやうな犯し難さを觀客の額に。蜥蜴のやうな癩の身に《自然》を浴びて私はやがて悲みを乾かした。

——多くの時間を曳き摺る室内旅行の大疲勞の後、凄まじい夜を私は漕ぎ別けて行く。

（二十二日）

私は聯想の缺片を拾ひ集めるより早く撒き散らした。どんな平和を、どんな幸福を賭けても回復せねばならぬ物を漠然とした彼方へ失くなした。唯一の純粹を永遠の間に搜る手の恐ろしさよ！ 中心を逸れようとする手の最後を擧げて何を祈禱しよう？・何を、何を…けれども此の閑だらけな狼狽は微妙な反省の點を存してゐる。簡單に私はただ目が眩る

のだ。惑はされた文明の努力者よ、私は御身等の雄辯を厭ふ。私は或る緊張によつて御身等に告げる。意志の羅曼主義を棄てよ、應用的分量的な主張を抛てよ、彼の麗しさは自然を浴びて立つ一本の樹にある、その如くに我等も直覺に旋られてあれ。靈性が御身の歴史的動物性によつて常に裏切られてある事に、誠に多くの涙を濺け、疑ひもなく御身は淨められてある自分を見出だすであらう。其の後御身は更に更に苦むであらう。現實の苦しさと優しさは御身の想像力に狂氣を又は痴呆を伴ふであらう。御身の空想を自由と呼ぶ勿れ。宗教も智慧も進歩も私は窓から振り落した。私の童貞が地獄に在るならば、私は悲慘な光景に捕はれたままでいい、悲鳴は恐らく私の紅い喜びであらう。私は更に宛の無い賭けをする、おお如何なる理想の白さを以て…

（二十七日）

暮方。突然感動の全力にみなぎる〔我〕の姿。とある淵に白む光りのやうに、私は眩きながら靜けさに浸つてゐる。此の二重の消息は多くの詩人にしかく惜まれた子供の日の光景である。此の事を默想せよ。苦みと優しみとの簡單な繪本を繰り擴げる藝術、その魅力…

世界的な日沒時を何者かが指した。〔自然〕の蔭に蹲つて、私は灰の味ひに入り交る夕燒を見た。太古を運んでくる傳説の濤は今凄まじく荒れてゐる。此の連續の汐騒、此の彩られた現象はわが GROTESQUE な歴史的遺傳を酷しく搖り起す。巖と木と草との烈しさに取り捲かれた貧しい貧しい心の生活、あらゆる親と子と兄弟との野蠻、汗と惡寒との赤裸、無智な勇氣と無智な恐怖…　病んだ體は厚い林の奥に腐つた紫と成つた。嶺を驅け降りた若者は廣漠の中へ紛れ込んだ。ふと立ち上つて耳を澄ますに順れた暗い鬪ひ手、闇のダイヤモンドを犯してさまよふ焦げた皮膚の一群。荒荒しい不幸は何處の隅にも彼等を待ち伏せした。彼等の熱臭い快樂と愛とは常に動物にねらはれた。おお子孫よ、燈を點けて汝の親の暗い魂を祭れよ、淨めよ、祭るべき我等の祖先の擧動を恐れよ、でなければ、御身の原始の沼へ曳き込む爲に彼等の間歇力は延び上るであらう…

（二十九日）

雨は靜かな言葉のやうに私の思想を霑した。貧しい微笑と稚氣を帶びた滿足と其の外の

目立たぬ素直さとで私はそつと戀人を祝福した。彼女は踊りの型を踏んで昇天の恰好をした。誠に彼女のあらゆる低い氣質も魂の日に彼女の天國を障りは切れぬ程純粹な擧動に彼女は富んでゐる。彼女は許嫁の優しさを以て私に爽かな曙を指した。ああ身に魂に鮮かな映象を浴びた不思議な名乘り合ひの記憶は昨日の事のやうに CHARME に續がつてゐる。此の幸福の約束が告げ難い韻律に溺れてのみ現れることの口惜しさよ！

山の一角に私は旗を飜した、別れの爲に、彼女に送る最後の表情(此の魂の匂ひ)が暫く私の體よりも生殘る爲に。FOLIES 中に FOLIE を犯して私の血の言葉は彼方の谷間に唄ふであらう、死の聲を以て彼女の女性を頌める爲に。額は石へ、唇は蔭へ、心は刹那へ、凡べては新へ…

けれども如何なる危機も經過せねばならぬもの故、私は蝶のやうに現實の掌に怪しい粉をふるひ落す。午後、私は水玉の著物をつけた彼女と連れ立つて公園の熊に餌をやつた。とある堀割の石崖で目高を掬ふ爲に蹲つた。又ある日彼女の足は地を離れるであらう。踊りながら進む彼女の裾に私の差し上げる手を小さく小さく殘して。おお生活よ、此の病的な樂園！

—一九一四・五・—

微笑に就いての反省

今日、私は過ぎ去つた經驗に恐れを覺える。窓邊に立つて、手を額に、うらうらとした春の空を眺めてゐれば、如何にうら悲しくも物優しい靜けさの充ちてあることよ！　私は今日過去の營みの胸に蘇り來るを恐れる。

昨日は何でもない、けれども凡べてである。『彼女は唇に不斷の微笑を湛へてゐた、宛ら嗚咽のやうに私の心を刺した微笑を。』と、ラ・ブランギリエの「愛の備忘錄」に記されてある。此の晴れた日に私は自らの微笑の貧しきを恐れる。

春よ、御身は隱れん坊の遊びをするには餘りに快濶な子供のやうに、冬の蔭から躍り出でて手を拍つて笑ふ。御身の息づかひは常に匂やかな希望と約束との呼吸である。ああ何

といふ奇蹟的な單純さ！　花壇は狂ひ、森は舞ふ。私は石竹色の鮮かな乙女達を見た。きりきり舞ひをするテュリップ達、蛙跳びをするヒヤシンス達。私は愛人達の何事も思はぬげな遊歩の快さを見た。私は乞食の母子が草の萠える築地に身を凭せて、卑しい言葉を擧げて自然を樂むのを見た。私は病んだ犬が日向に身を横へて昏昏として眠るのを見た。鳥は枝を搖つて囀り、病人達はそよ風に取り捲かれ、魚は溫む水を飽かず吸ふ。皆己れ自身の世界を樂む。私も亦今日あたかも無限に似た喜びを以て彼等の爲に祈る。而も尙私が一番運命に滿足しない勝手ものかも知れないけれども、神も照覽あれ、言ひ知れぬ花の念ひは私の胸に湧いた、都の空にたなびく一道の黃の塵埃を指して、私は生命の豐かさを讃へる。如何なる悲みなればか　此の喜びを斯くも味ひ深くする！

光りは人の希みであり、幸は人の願ひである。幸は人の**心**に豐かさを與へ、**光り**は人の意識に清明を示す。**光り**と**心**とは連れ立つて、今日私の內なるものを外へ誘ふ。《ひいらいたひいらいた、つうぽんだつうぽんだ！》と、子供達はそよ風に首をくちづけられて、溫かい手を握り合ひながら、大眞面目で遠ざかつて行く。故國へ辿り著いた旅人のやうに、熱病から回復し初めた病人のやうに、自分も彼等と同じ空氣を吸ひ、自分も除けものにされたくない懷しさを以て、私は長く長く飮みほす、何を？　樹を、水を、聲を、**心**を、**光り**を…　凡べて、凡べて、土の上に一つ世界を形造るお隣り同士の喜びを泉のやうに！

私の**心**は今日人の**心**に近寄つて行つて、《誠に好いお天氣で…》と、西洋風に抱き合ひたく思ふ。あまたの人に此の挨拶を交して後、餘りの幸福に獨り塀に凭れて、心行くまでむせびたく思ふ…

私の魯かな魂が今日は賢く成つて、物事が良くわかるやうに思へる。

春の片隅に坐つて、私は想像のピアノを彈く。私の曲中の少女は、柔らかな綠の芽の肩掛けをして、眞白な新しい雲の帽子を冠つて、アリエルのやうに輕く飛ぶ舞ひ手であつた。彼女の周圍はお伽噺のやうに單純で、路傍の花は彼女に會ふより早く名を告げた。けれども光りに代つて闇が地を領した時、手品師の《夜》は虛無の穴から碧い瞳と紅い翅との鳥を取り出して、彼女の眠りを惑はした。彼女は夢に王子が戶を叩くと見て、起き上つて戶を開けた。外は無限の闇であつた。只《死》のやうに活活とした闇ばかりであつた。それが眞

黑なマントオのやうに彼女を纏んだ。その闇の暗さといつたら、彼女の魂の奥底にまで黑い蔭が出來たほどであつた。彼女は夢の中に〔夜〕の手品師のまじなひにかかつてしまつたのである。それ以來、彼女は、半ば熱病のやうに、半ば狂氣のやうに、闇と光りとの境を出たり入つたりしてゐる。

智識といふ分類法に從つて、夢と現實とを分けて見るならば、彼女の夢は卽ち現實である。

私の曲中の青年は裝飾のないまごころを以て彼女を愛してゐたが、彼女に現實が出現して以來、或る償ひ難い理由に依つて・彼女に別れを告げた。彼女への告別は彼にとつて漂泊であつた。彼女のマントオが闇であるやうに、愁ひが彼のマントオであつた。彼の魂は愁ひに塞がれて、熱病にかかつてしまつた。皆さんの或る方は御存じでせう、しよつちゆう愁ひを呼吸する魂は熱を病むものです。それ以來、彼は半ば熱病の中に、半ば狂氣の中に、よく

〔あの子は今どうしてるだらう、恐らく……〕

と思ひさして、彼女の身を氣遣ふ餘り、弱り行くその心から喉元へ嗚咽が込み上げて來るのであつた。

智識といふ分類法に從つて、涙と歌とを分けて見るならば、彼の涙は卽ち歌である。

何ものかを鍾愛し、之に告別をした人よ。自然を明るくする花の季節、春は綠と紅との淸らかさを傾けて御身に笑ひかける。今日、御身の顫へる魂は嚴しく締まつた唇を綻ばせて、此の愛らしい招待に應へねばなるまい。御身の答へは無音の唄にも紛ふ限りなき思ひの微笑でなくて何であらうか！　寔に今日、暗い運命は和やかな光りに融け合ひ、夢と現實と涙と歌とは入り交つて、人の面ざしに深い微笑をたたへしめる。微笑は贖ひの御堂に樹魂する無聲の樂章である。

嘗ては戀に狂つた若者の胸に、此の春の日は復活の祭のやうにおだやかな賑はしさを與へる。自然は今日嘗ては眩いた彼の眼に、眺め易く亦感じ易い壯嚴な景色を掲げる。柳の長い芽は彼の肩を慰め、溝のほとりの靑葉はオァシスのやうに彼の額を涼しくする。若や

かな日の照る今日は蔭さへも温かである。永遠に昇つて行く聖な道が、今日に限つて最も歩みよい只ひとすぢの安らかな行手であるやうに見える。彼の幽い眼が優しく成つたせるか、今日物皆は露はな現實のままで盡きない豐かさを現してゐる。

ああ斯くも貧しく斯くも聖な塵埃と愛との巷よ。光りは今日もの優しい永遠の眼差しを此の土に向けて、人の思ひを覆し、人の心を打ち開けさせる。心の祝ひ日、經驗にとつての日曜日、ああ此の愛著に充ちた無限の親み！　過去よ、過去よ、御身は今日天使の翼に送られて來たもののやうな微笑と共に貧しい胸に蘇る…　私が今日何かを悟つたとすれば、外でもない、

——微笑は過去の祭である！　祈る魂よ、諸共に招待されてあれ！

無智は無邪氣である。童貞は純粹である。けれども之等には認識と懷胎とが缺けてゐる。生きるとは自然に觸れることである。人の心は自然に觸れて悲愴と成る。悲愴より微笑に至るまでの過程を經ないならば、餘りに少く生きたことを人は悔まねばなるまいではないか！

そして、誠に人が死ぬものならば、誠に生存は虚無の餌食に過ぎないならば、言葉も足らず、思ひも足らず、日夜の流れに搖れる魂のみが高く感じ取る此の生活の感は、畢竟するに何の甲斐ぞ！　此の生きた感動が何の故に死ぬべきであらうか！　私が眞に愛し、私が眞に慕つた者はいつも私の内に宿つてゐる。私がいつかは呼吸の止まる日に會ふのは明らかなまことである。けれどもその故に彼等が私の内から去り得ようとは、何で信じられよう！　彼等は私の心臟のあらゆる襞に行き渡つた永遠の感じそのものである。此の凡べてが誠に消滅すべきものであるならば、人生は燃えない蠟燭にも遂に價しない。ああ、私に永遠を告げたものは何であるか？　愛慕の心である。私に生活を告げたものは何であるか？　愛慕の心である。慰藉は愛の眠りであり、微笑は愛の目覺めである。少くとも私を以てすれば、愛の意識にあらざるよりは微笑は完く微笑ではない。愛の經驗に依つて聖な營みを啓示するもの！　私は御身を微笑と呼ぶ。

ああ此の明るい日は暮れるのを忘れさせる、氣づいた時には、見る見るうちに光りは温かい翼を伸べ、彼方へ走りながら、天の一方に告別の双手を擧げる、——答へようではな

いか、早く、早く……
　眠る前には祈るがよい。
春の前にはほほ笑むがよい、
ああ日は傾く、ああ日は傾く、
暮れる前に謠ふがよい、
休息の前に告別するはよい。

去らば、去らば、わが慕ふ光りよ、去らば！
至上の告別は微笑の認識である。

一九一七・七

飜譯

これは朽葉が、十九歳より死に至る十年間、日頃好んで逍遙した佛蘭西の花園から折にふれて無心に摘みとつた花もしくは花びらである。編者は之を年代に基いて排列することをせず、哲學や語錄の樣式に屬するものと共に、わざと撒きちらしておいた。但し、ボオドレエルの PETITS POEMES EN PROSE の飜譯は、大半、曾て編者と共に思ひ立つた全譯計畫に繫るものの未定稿で、やや事情を異にしてゐる。又「生と藝術と」乃至「英雄の氣息」と題する甚だ巧みな拔萃譯は更に微妙な動機から匿名で雜誌に提供されたものであつて、ロマン・ロオランの文學の或るものが必ずしも故人の興味を捉へたことの證左ではない。

冬の唄

アドルフ・レッテエ

樂しげな絲繰車の華やぐひと室、
奥方と姉妹君はおはさぬ殿方の爲に絲紡ぐ——
冬のお城の幽ぢ籠めた靜けさ、
圍爐裏の炎は快濶に踊つてゐる。

雪に戲れる春の嬌音、
華やかな絲繰車は繞りめぐり唱ふ、
(わたしたちの優しい殿御は晴れの戰に出ておはす。

〔戀〕の御護りする方に誰が禍をし得ようぞ？〕
おお女御方、みだりに慢つた言ひやう——
屋根の上に墮ちて來るは凶の鳥……
過ぎゆく幾日、過ぎゆく幾月——
騎士達は十字軍で死に果てた。

奧方は室の中にただひとり絲紡ぐ、
姉妹君は墓場のうちへ。
その髪は骸を包む白布なして
室の中にただ獨り奧方は居睡る……

聽き給へ、聽き給へ、おお眠れる絲ひき手——

風が軒下で哭んでゐる、
此の夜の風は炬火を吹きつけた、
物の具の血汐とも思はれるまで……
ああ！風は病める子供にも似ていと低く歎く——
騎士達は十字軍で死に果てた。

LIED

ギュスタアヴ・カアン

彼は來て又立ち去つた、
私は知つてゐる、彼の重い心は
去るに當つて傷いてゐた
私はただ子供のやうに狂つて、
追羽根のやうに、戀人の
沈鬱を弄んだ

路の隈でなほ
彼はその唇の方へ
弧角を擧げようとした、別れの爲になほ

けれども彼は手を落したまま
そろそろと曲つて行つた
そして路の隈は彼を運び去つた

如何なるゆくへない路か又私に導くことがあらう、
その懐にわが身を投げんと待つ人を
わが接吻で彼の人を曇らす苦惱を追ひやらんと。

LIED

ギュスタアヴ・カアン

御身の美を、御身の美を、妹よ、如何にせし。
御身の美は衰へのうちに滑り入つた。
弟よ、弟よ、わが魂を、如何にせし。
私はかつて御身の美を映す純(きよ)い鏡を尋ねた。
妹よ、妹よ、御身の魂を、如何にせし。
私は嘗てわが貴い顔と

わが戀人達とわが誠を守つた。
弟よ、弟よ、御身の魂を、如何にせし。
私はかつてわが忠實な顏と
わがマントオとわが劍を守つた。
わが魂を、わが魂を、妹よ、如何にせし。

わがさすらひ

ジャン・アルテュウル・ランボオ

私は歩んだ、拳を底抜けの隠衣へ、
上衣も亦理想的に成つてゐる、
御空の下を行く私は、ミュウズよ、私は御身の忠臣であつた、
オオ、ララ、どんなにすばらしい戀を私は夢みたであらう！

わが唯一のズボンは大穴ができてゐる、
一寸法師の夢想家の私は路路
韻をひねくつた。私の宿は大熊星に在つた。

わが空の星むらは優しいそよぎを渡らせた、

そして私はそれを聽いた、路傍に坐つて、
此の良い九月の宵毎に、露の雫の
わが額に、回生酒のやうなのを感じながら、

異様な影の中に韻を踐みながら
七絃のやうに、私はわが傷いた靴の
護謨紐を引いた、片足を胸に當てて！

SENSATION

ジャン・アルチュウル・ランボオ

夏の碧い黄昏より、私は徑の中へ行かう、
麥の穗にそそられて、纖細い草を踏みつければ、
うつとりした私は爽かさが足に沁みるであらう、
私は露はな頭を風の洗ふに任せよう。

私はものを言ふまい、私は何も思ふまい、
けれど果てしない戀が私の胸の內に湧くであらう、
そして私は遠く行かう、遙かに遠くボヘミヤ人のやうに、

自然のままに —— 女と共のやうにいそいそと。

蜻蛉

アドルフ・ボッショオ

光線の中、空氣のやうな蜻蛉が
睡つた流れの上にじいつと舞つてゐる。
のぞいてごらん、青い金剛石が
網の翅の團扇の中で燃えてるだらう、ほら…

ETAT D'AME

シャルル・アドルフ・カンタキュゼエヌ

彼女は老いた、いとも速く、
とも人は言ふであらう——
彼女は二週間から床に就いてゐる、
そして今なほ床を離れない。
雨が降つてゐる、一週間以來。
そして「セント・ヘレナの追憶」を
私達は二人がかりで讀んでゐる…

若き詩人河の對岸に住める愛人を思ふ

エミイル・ブレモン

深沈な夜の中に
月は明るい天心に登る、
彼方に登り、女王の如く
麗しくやすらふ！

青い夢の搖するに似て

恣まに、倦んだ水の上を、
狹霧過ぎ行き、
過ぐる又、斯くて長い接吻となるまで。

いかに純らの和合、諧調ぞ、
いかばかり行手になごめる希望ぞ、
相合ふ爲に作られたる事物の
神聖な一致を味ひ見よ！

されど、我等の歡樂には全いものすべて無く、
地上には稀な幸福。
一致する爲に作られた事物の
極めて多くは一致せぬ。

LE MAUVAIS SOIR

アンリ・ドゥ・レニエ

夜、澄み渡つて、麗しくなりゆく、
自分の誓ひのやうに優しく。
わが涙しづかに落ちる、
私を押しかへす此の手の上に。

夜、麗しく澄みわたりゆく…
星一つ空の底にある、
汝は讀みえるか、わが眼の中に

汝の冷淡が制する、戀を。

夜は麗しく澄み渡りゆく、
私の聲はいと低く汝へと漂ふ、
ああどうか、私を離れるな、
汝の傲慢な女王の態度で。

夜は澄みわたつて麗しくなりゆく、
月が途の上に光る、
私の涙はその手の上に落ちる、
私を押しかへす愛らしいその手。

NEVER MORE

ジャン・モレアス

霧の中に涙するかながス、
涙するかな瓦斯、一眼なして、
——ああ！いざいざ採らう喪禮を、
我等が有つた此の總べてに。

驟かに石脳油を打つかな雨。
怒り來る暗礁の濤なして。
——さて人人の起す

我等が在つた此の總べての、棺。

おお！憐れ妹よ、
熱する子供のやうに
暴風の咆哮に驅られまい。

なほ靜けさを夢みて、
靜けさと剪綵花とを。
——冬は地上を刈り立ててる。

彼女は…

シャルル・ギルドラック

彼女は温い段段の上へ来て
さうして坐り込んだ。
そのなよやかな首は
少し横へ傾いてゐた。
その重ね合せた手は
裳の窪みに眠つてゐた。

そして彼女は足を前で組んでゐた、
か細い爪先の一方を天上向きにして。
彼は通らうとするには此の爪先へ觸らなければならなかつた、
そして彼女をつい見なければならなかつた。

部分譯

日曜日

ジュウル・ラフォルグ

Hamlet: Have you a daughter?
Polonius: I have, my lord.
Hamlet: Let her not walk i' the Sun: conception is a blessing; but not as your daughter may conceive.

空が時雨れる、宛もなく、據り所なく、
雨が降る、雨が降る、御覧よ！河の上…

河は日曜の浦安さ、

上り下りに、一艘の舟も通はぬ。

市の空には晩課の鐘の音、
河岸は寂れるがままに、風情なく。

寄宿舎の一列が通る、(おお可憐な肉體！)
多くはもう冬の腕套をしてゐる。

腕套もせず、マフラァもつけぬ一人の娘は、
貧しい姿が見すぼらしく見える。

と、彼女は列を脱ける、
そして一散に！おお神樣、何を思つて彼の子は？

そして彼女は河中へ身を投げた。
船頭もゐねば、新地犬もゐない。

黄昏と成る、河口は
火を點す。（ああ！いつもの、飾付け！）

雨は河を濡らしつづける、
空は時雨れる、宛もなく、據りどころなく。

港

シャルル・ボオドレエル

港は生の爭鬪に憊れた胸にとつてはそぞろ嬉しい寄泊である。空の遙けさ、雲の動き易いたたずまひ、海の變りやすい彩綾、燈臺の瞬き、之は飽かぬ眼を怡ばす此上なくふさはしい三稜鏡である。込み入つた船具の、船船から突き出た形は、圓かな動搖を印す油浪に連れて、胸臆に韻律と美との味ひを嗜ませる。それに、殊に、もはや好奇の心をも榮譽の心をも持たぬ者にあつては、望遠臺に伏したり、波止場に肘を凭せて、出で立つ者、歸り來る者、未だ欲する力や、旅行、致富などの希みを缺かぬ人人のあらゆる騷擾を眺め入るのが一種玄妙な貴族的快樂を齎すのである。

窓

シャルル・ボオドレエル

開放つた窓より外を眺める者は閉ぢ籠めた窓を眺める者ほど決して物ごとを見るものではない。燭に照される窓よりも底深い、幽玄な、にぎやかな、闇黒な、眩しいものはない。白日に見える物は窓硝子の内部に生じる物よりも味が無いにきまつてゐる。この明暗の洞の中に生は活き、生は夢み、生は亨受する。

甍の濤を超えた彼方に、ひとりの、運過ぎた、皺さへよつた、貧しい女、いつもいつも何かの上にくるぶいてゐて、外へ出た例のない女が私の眼につく。その顔つきからして、その著つけからして、その振舞からして、その何でもないところからして、私は、この女の生涯、といふより寧ろ昔噺をこしらへ上げる。そして、時には、之を我とわが身に語つて泣く。

これが憐れな老爺であつたとしても、やはり私は至極容易にその物語をこしらへ上げたであらう。

そして、我自らの事のやうに、他人の生活、苦みを感じたのを誇りとして、私は寝に就く。

多分、御身等は私に言ふであらう。『そんな昔噺がほんとに信じられるのかい?』と。私の生活のために、私の存在と私の存在の實體とを感じる爲に、それが幇助と成る以上は、私をよそにして据ゑられた現實がどうであらうと、それに何の用があらう!

醉ひ痴れよ

シャルル・ボオドレエル

いつもいつも醉つてゐるがよい。凡べてはこれ、——これが唯一不二の仕事である。御身の肩を碎き、御身をして地の上へくるぶかしめる凶惡な《時》の重荷を感ぜぬ爲には、跡かたもなく醉ひ痴れるがよい。

けれども如何にして？ 酒を以て、詩を以て、美徳を以て、好きずきでよい。ただ醉ひ痴れよ。

そして、時に、とある邸の段段の上に、とある溝の青草の上に、御身の部屋の鬱陶しい寂寞の中に、耽酒の力薄まり或ひは失せて御身の目覺めんことあらば問へよ、風に、濤に、星に、鳥に、時計に、凡べて飛び去る物に、凡べて呻く物に、凡べて轉轉する物に、凡べて謠ふ物に、凡べてもの言ふ物に、問へよ、今は何時かと。すれば、風と濤と星と鳥と時

計とは御身に答へるであらう、『醉ひ痴れる時だ！ 《時》の犠牲の奴隷たらぬため、御身醉ひ痴れよ、とめどなく醉ひしれよ！ 酒を以て、詩を以て、美徳を以て、すきずきでよい。』

二重の室

シャルル・ボオドレエル

夢幻めく室、まこと精靈的な室、その澱んだ雰圍氣は薔薇と碧とに輕く沁みてゐる。

魂は玆に悔いと願ひとに薫じ籠められた懈怠の浴をとる。――薄明るんだ、碧味がかつた、又薔薇立つた感觸である。蝕の間の歡樂の夢である。

調度類は寢そべつた、頸垂れた、倦じた形をして、夢みる風である。さながら彼等は植物や礦物同樣に、夢遊的生命を授けられてゐるかと見える。織物類は無音の言葉を語つてゐる、花のやうに、空のやうに、入日のやうに。

壁には何の美術の横姿も無い。純な夢、分解されぬ印象の前には、有限の藝術、實驗の藝術は一の褻瀆である。玆に、凡べては調和の充ち足りた明るみと匂ひこぼれる暗らみとを持つてゐる。

ひとすぢ、精じくも選まれた極微の香氣がいと淡い濕を含んで、精神の恍恍と溫室の念ひに搖すられる、此の雰圍氣を浮びめぐる。

綿紗は夥しく窓の前に又床の前に降り灑ぎ、雪なす小瀑と迸る。此の床の上に夢の女王《偶像》が横はつてゐる。けれども、どうして彼女が玆に？　誰の導きで？　如何なる蠱の力が此の夢幻と樂欲との王座に彼女を招じたのか？　何でもよい、彼女はゐる！　私は見とどけた。

如何にも薄明りを刺してゐるのはその炎の眼である。その竦とさせる惡意が、私に見覺えのある、彼の物柔らかな又凄まじいながしい目である！　それに見惚れる不覺者のまなざしは魅いられ、虐げられ、貪られてしまふ。私はよくそれを觀察したものだ、好奇と驚嘆とを呼び來る之等黑燿星のことを。

どんな慈悲深い惡魔のお陰でか、私は斯くも幽玄沈默平安又薫香に取り卷かれるのであらう？　おお圓けさ！　私達が一般に生と名づけるものは、そい幸の極致に於いてさへ、私が今意識し、私が分毎に秒毎に賞味してゐる此の優秀な生と何の交渉も無い！

否！　分時はもう無い、秒時はもう無い！　時間は消え失せた。領してゐるものは《永

遠》である。恍惚の永遠！　けれども、凄まじい、物物しい音なひが扉口に鳴り響いた。と、地獄の夢かなぞのやうに、私はまるで胃の腑に鶴嘴の一撃を見舞はれた心地がした。

　すると一つの《亡靈》が入り込んだ。是こそ法の名に依つて私を苛責に來る執達吏である。淺ましさをわめいて、私の生活の心痛に彼女の分の瑣事を附け加へに來る恥知らずの闖物である。さもなければ原稿の續きを債る新聞編輯人の使奴である。

　樂園の室、夢の女王、偶像、大ルネの所謂《氣精》、之等の盡は《亡靈》の鈍ましい音なひで、跡方もなくなつた。

　慘めさ！　私は覺えてゐる！　私は覺えてゐる！　さうだ！　此の穴小屋、此の倦怠の常住はほんに我が身の上だつた。茲にあるものとては、やくざな芥だらけの缺け損じた家具類、焰も無なければ燼も無い、痰に塗れた暖爐、埃の中へ雨の線條のついた陰氣な窓、塗り消されてゐなければ未完成の原稿類、鉛筆で忌はしい日附を誌した日記曆！

　して、私が申分のない感銘に醉つた彼の別世界の匂はしさは、あはれ！　何とも言へず嘔つきたい酸敗を交へた煙草の蒸れ臭さと代つてゐる。今は茲に悲慘のあくどさが息づいてゐる。

　此の狹い而も嫌惡に充ち充ちた世界で、ただ馴染の一物が、亞片劑の小壜が私に頬笑む、久しい仲の又虐い愛人である、あらゆる愛人のやうに、ああ！　愛撫と背信とにゆたかな。

　おお！　さうだ！　《時間》は再び現れた。《時間》が今は主宰する。そして此の惛體な老人と共に、その惡魔的な一行が戻つてゐる、《記憶》の、《悔い》の、《痙攣》の、《畏れ》、《苦悶》の、《夢魔》の、《忿怒》の又《惱亂》の。

　たしかに秒又秒は今強く嚴しく調子づいてゐる。して、其の一つ一つは振時計から迸りながら言ふ、——《已こそ《生》だ、我慢のならぬ動きのとれぬ《生》だ！》

　人の世では只一つの《秒》が嬉しい便りを告げるに役立つばかりである、解き知れぬ恐怖を銘銘に起させる彼の嬉しい便りを。

　さうだ！　《時間》が領してゐる、彼はその非道な專横をとりかへした。で、私がまるで一匹の牛ででもあるやうに、彼はその二重の刺針で私を衝き進める。——そら行け！　痴人！　汗せよ、奴隸！　生きよ、墮獄者！》

おどけ手

シャルル・ボオドレエル

新年の賑ひであつた。無數の輕車にゆきかはれる泥と雪とのごたごた、玩具と砂糖菓子との閃き、飽くを知らぬ絶望の蠢き、一番頑固な偏窟者の頭を掻きまはすに足る大都會のおほつぴらな惱亂の日であつた。

このごたまぜとこのわやわやとのさ中を、一匹の驢が鞭を構へた痴者に痛めつけられて、威勢よく跳ねてゐた。

驢がとある歩道の角を曲らうとすると、或る、手袋の、塗靴の、きゆつとした襟飾の、そして、新著の著物に押し込まれた、立派な紳士がこのきづしい動物の前へ恭しく會釋して、自分の帽子をはづしながら云つた。(あけましてお目出度う!) そこで、連らしい者たちの方へ、自慢臭く、その上出來に喝采を加へてもらひたげにふりむいた。

驢は、この立派なおどけ手に氣づかず、その義務の呼ぶ方へ一心に走りつづけた。

私にあつては、私は突如底知れぬ怒りが込み上げた、あらゆる佛蘭西魂を一身に集めたと思はれるこの華美な愚物に向つて。

鏡　シャルル・ボオドレエル

一人の驚くべき人物が入つて、姿見で己れを眺めてゐる。

《――なぜ君は鏡で自分を眺めるのです？　見れば不快なばかりなのに。》

驚くべき人物は私に應へた、《――君、八十九年の不朽の規法に依ると、人は權利に於いて皆等しい。だから、私は姿を映す權利を所有する。快不快などは私の意識だけにしか關することではない。》

常識の名に於いては疑ひもなく私に道理がある。けれども、法の見地からは彼に間違ひはない。

老婆の絶望　シャルル・ボオドレエル

皺かんだ小さな老婆が、銘銘の囃し立てる、皆一同が氣に入られたがる彼の華やかな幼兒を見てすつかり樂しい心になつてしまつた、彼女、小さな老婆のやうにかよわく、して亦彼女のやうに齒も無く髮も無い此の愛らしの者を見て。

で、彼女はこれに笑顏と面白い恰好をしてやりたく歩み寄つた。

けれども魂消た子供は朽ち衰へた善良な女子の愛撫の下にもがいて、家内を悲鳴に充たした。

そこで善良なる老婆は永久の孤獨のうちに退いた。して、片隅に泣きながらひとりごつた、――《ああ？　私共あぢきない年寄女にとつては、氣に入られる年齡は過ぎてしまつた、あどけない者達にさへ。私共は私共の可愛がる赤兒をおびえさせる！》

犬と香壜

シャルル・ボオドレエル

《——わが美しい犬よ、わが良い犬よ、わが可愛のわんわんよ、そばへ來て、市一番の香水屋で買つた上等の香ひを嗅いでごらん。》

で、犬は尾を振り（思ふに、之等のみじめな生物にあつては、之が笑ひと微笑とに相應する表情である。）近寄つて、栓を拔いた香壜の上へその濕つた鼻を物珍しさうに載せた。すると、いきなりぎよつとしたやうに後退りして、咎める調子で私に向つて吠えた。

《——ああ！　淺ましい犬よ、もしこれが排泄物の包みを遣りでもしたのなら、汝はそれをほくほくもので嗅ぎまはるのだつたらう、そして隨分食り兼ねなかつたであらう。斯くて、わが哀しい生の不當な伴侶よ、汝も亦、汝も彼の公衆と似寄つてゐる、彼の・その前へは彼等を憤らせる微妙な香ひをではなく、念入りに選り拔いた滓を差し出さねばならぬところの。》

異國人

シャルル・ボオドレエル

——謎めく人よ、御身の優れて愛する者は？　御身の父か、御身の母か、御身の姉妹か、御身の兄弟か？

——私は父も無い、母も無い、姉妹もない、兄弟もない。

——御身の友は？

——御身等は今日の日迄私が意味を知らずに過して來た詞を使ふ。

——御身の故國は？

——私はどの邊の緯度にそんなものがあるのかを知らない。

——美は？

——私は進んで愛したことであらう、女神の美を、不朽の美を。

——黄金は?
——私は之を斥ける、御身等が神を斥けるがやうに。
——では、御身は何を愛すると言ふのか、不思議の異國人よ?
——私は雲を愛する…　過ぎ行く雲を…　彼方…　驚歎すべき雲を!

藝術家告白の禱り

シャルル・ボオドレエル

秋の日の終りの、何といふ鋭さ!　ああ!　惱ましいまでの鋭さ!　およそ漠とした、しかも濃い敏感といふものがある。そして、《無限》の尖りほど刺戟的なものは何もないのである。

空と海との豐滿の中に眺めを溺らす恍惚のいみじさよ!　寂寥、沈默。碧落のたぐひない純淨!　地平に慄へる一つの小さな帆（その些かさとその孤りとは私の癒すに由ない生存に擬ふ）、油浪の慵い調べ、凡べて之等は私の内に思惟する、又は私が彼等の内に思惟する（およそ夢幻の縹緲の中に我は速かに紛れ込んでしまふ!）、彼等は思惟すると私は言ふ、ただ、空論なく、三段論法なく、演繹なく、音樂のやうに、繪のやうにである。

けれども、之等の思惟は、私より發するにもせよ、外物より迸るにもせよ、やがて餘り

に壓搾されてくる。感激力は逸樂の中に不安を創め、苦難の實驗を創める。緊張し過ぎた私の神經はたぎり立つ惱ましい顫慄から外へ出られない。

今は空の深さが私を眩かせる。その玲瓏は私には物狂はしい。海の無感性、景物の不變易には、私はぞつとする…　ああ！　永久に忍ぶか、又は美を遂に逃れねばならぬとは？　自然よ、魂の刻薄な魅惑者、常に勝ちを制する敵手、私を放て！　私の欲求と私の心矜りを釣り出さぬでくれ！　美の工夫は、藝術家が征服される前におびえてわめくところの決鬪である。

射的場と墓地

シャルル・ボオドレエル

——墓地見晴らし亭。——（奇體な看板だ、——とわが遊歩者はひとりごつた、——しかし、うまく渇きを與へるやうにできてゐる！　さては、この旅亭の主人はオラァスやエピキュウル派詩人を嗜むのだな。骸骨なくしては、又は何かしら生の倏忽を表すしるしなくしては宴樂を設けなかつた古エジプト人の深刻な心意氣をさへ會得してゐるのかも知れない。）

で、彼は入つた。墓標を控へて一杯の麥酒を飲んだ。それから、ゆるゆると葉卷を燻らした。やがて空想に驅られる儘に、彼はこの墓地へと降りた、そこには草がいと高く、いと招き顔に延びてゐて、いと豐かな太陽が領してゐる。

いかにも光と熱とはここに燃えてゐる、滅亡で艶艶しく沃えた花の毛氈の上に、さなが

ら醉ひ潰れた太陽が長長と寢そべつてゐるといふ風だ。雰圍氣には豊かな生氣が——極小物の生氣が震動してゐる、一定の間を隔てて、隣りの射的場から發砲する爆聲が丁度ひそやかな交響樂の咽びのなかに撥ね上る三鞭酒の塞子のやうに空氣を劈くのである。

すると、彼の腦を熱した太陽の下、《死》の爛熟した匂ひの雰圍氣の中に、彼は己が坐つた墓石から囁き寄る一つの聲を聞いた、して、この聲の言ふには、——《呪はれよ、汝等噪がしき生者に故人とその聖き安息とを斯くも意に留めしめぬ汝等の覘板と汝等の旋條銃！呪はれよ、汝等の野心。呪はれよ、《死》の聖壇近く殺戮の技術を硏く汝等待ち兼ねたる必滅者の計算！　もし如何に褒賞は得るに易く、如何に目的は遂ぐるに易く、又《死》を除いては如何に一切が虛無であるかを汝等が覺つたならば、役役たる生物よ、斯くも汝等が身を勞することはなかつたであらうに、又、既に久しく《目的》の中に、唯一の眞の目的の中に唾棄すべき生を置いた者たちの眠りを斯くもたびたび汝等が煩すことはなかつたであらうに！》

夕べの薄明り

シャルル・ボオドレエル

一日は終つた。晝の仕事に憊れた憐れな人人へ大きなやすらひが降る、そして、彼等の思ひが今は薄明りの物柔らかで紛らはしい色合をとる。

けれども、山の高みから夕べの透き明る雲を貫いて、入り亂れた叫喚の一團で成り立つ大悲鳴が距離のために、のぼる潮、きざす嵐を擬ふやうな、一つの無氣味な音色に變へられて、私の露臺に屆く。

何なればぞ、暮方に慰まず、梟かなぞのやうに夜の訪れを逢魔時の相圖と受けとる幸なの人たちは？　その凶凶しいどよめきは山上に懸かつた黑い病院から我我へと來るのである、で、夕べ、煙草を燻らしながら、又、家並の窓每が《今こそ茲に平安がある、茲に團欒の歡びがある！》と告げてゐる巨いな谷間の憩ひを見入りながら、私は、彼方の高みから風の吹き立つにつれ、わがおびえた思ひをこの地獄に似つかはしい音色で搖り宥めるこ

とができる。

薄明りは狂人を刺戟する。——私の思ひ出すのは、薄暮にはまるで病的になつてしまふ二人の友が自分にあつたことである。一人はその時刻には友愛や社交の意識が全く亂れてしまひ、野人のやうに誰にでも出會し次第食つてかかつた。私は彼が上出來の鷄を給仕長の頭へ投げつけるのを見たことがある、その料理の中に何とも知れぬ侮蔑の象形を讀んだと彼は思ひ込んだのである。深い歡樂の先觸れ、暮方も、彼にとつては、最も味ひのあるものを毒するのであつた。

も一人は負けた野心家で、晝が下るにつれ、だんだん苛立たしく、だんだん暗く、だんだん毒毒しくなつて行つた。日中は未だ應揚で人づきもいいこの人が、日のくれには苛立つてしまふ、その薄明りの發作は他をばかりでなく、我とわが身をも物狂ほしく窘めたのである。

前者は己れの妻と兒とを認めえぬ狂人で死んだ。後者はなほ斷えぬ不安の動搖に身を續けてゐる、亦、この人がたとへ共和國と王侯との授けうる全名譽にあづかつたにしろ、彼の薄明りはやはり榮達の夢に燃える嫉みをその胸に點じたことであらう。彼等の精神にそ

の闇黑を張つた夜が私の内には光りを作る、何も同じ原因が二樣のさかしまな効果を産むのは稀らしく見られることでもないながら、いつもそこで私は今更謀られたやうな心悸に打たれるのである。

おお夜！　おお清涼の闇！　汝は私にあつては内生の祭の相圖である、汝は苦悶の脱離である！　原野の寥しらの内に、都の石質の迷路の内に、星むらのきらめきよ、燈火の潑剌よ、汝等は女神《自由》の花火である！

薄明りよ、汝の如何に甘く亦優しいことよ！　夜の優勝にけ壓される白日の死苦かとも地平になほ靡く薔薇の光り、入日の最後の榮光の上に鈍赤の汚染をつける燈架の火群、見えぬ一つの手が東方の深みから取り出す重い氈、之等は生の嚴肅な時に人の衷心に相鬪ぐ一切の複雜な情緒と擬ふ。

なほ踊子達の彼の異樣な衣裳の一つ一つにたとへれば、その透徹る暗色の羅が燃え立つ裾著の婀やかな絢爛を隱現させる樣は黑い現在の下に徴じい過去を突きとめる趣である、その衣に撒かれた金と銀との搖らめく星群は《夜》の深い幽暗の蔭でよりほか鮮かには點じない空想の火を象るものである。

スウプと雲

シャルル・ボオドレエル

わがお俠な憐しの寵物が私に振舞を催した、で、食堂の開放した窓から、神の蒸氣で造つた搖れる建築、觸れ難さの此上ない結構を私に眺め入つた。そして、わが觀想の裡に我とわれに言つた、【——之等の幻模樣は皆、綠眼のお俠な憐しの魔物、わが艶な愛人の眼と殆ど乙甲なく麗しい。】

と、いきなり、私は背中に劇い拳骨を一毆り受けた、そして可愛らしい裏聲が、火酒に燒けたやうなヒステリイ聲が、わが憐しの愛人の聲が耳に入つた。【あなた、スウプを早く食べないの、雲の商法はいい加減にして…】

後光の紛失

シャルル・ボオドレエル

【や！ こいつは！ 君がここに居やうとは？ 君がこんな惡所に！ 香精の吸ひ手の君が！ 聖餐の食べ手の君が！ 全く、思ひもよらなかつた。

——なにね、知つての通りの馬や車といふと僕の怖け方だらう。さつき、大慌てで廣小路を突つ切りざま、僕は泥濘を跳び越えた、死神がどつと四方から疾足出してやつて來る上を下への中でさ、そのはずみに僕の後光は頭から割栗石の泥路へずれ落ちた。あれを拾ふ勇氣は僕は持ち合せなかつたよ。骨節を碎かれる代りにあの徽章をなくすくらゐ鬱いだものでもないといふわけさ。それに、思へば、事によつては禍も幸だ。僕ももう並の人間で、微行もできれば、卑しい眞似もし、道樂三昧もやれる。で、ここにゐるのさ、御覽の如く君等とそつくりだ！

——なにしろ、その後光を廣告で搜すなり、警察の手へ依賴するなりしたがよからう。

——どうして！　僕はここで居心地がいい。君だけだよ、僕に氣づいたのは、でなくても、勿體がつくことはうんざりだ。それに、誰かへぼ詩人があれを拾つて、好い氣になつて冠りでもしたらと僕は樂んでゐる。仕合せ者をこさへる、實に乙だ！　おまけに僕を笑はせてくれる仕合せ者とは！　思つても見給へ、Xか、でなけりや、Zを！　ええ！　どんなに妙だらう！」

貧人の玩具

シャルル・ボオドレエル

私は無邪氣な慰みを思ひつきたい。罪の無い遊び事は實に少い！

君が朝往來をぶらつくにきめて出かける時など、君のかくしへ一錢賣の小發明品をいろいろ詰め込んでおきたまへ、——一筋の絲で操られる背ひく人形、鐵碪を叩く鍛冶屋たち、騎士と尾が笛になつてゐるその馬といつたやうな物を。——で、酒店のあたりや樹立の根もとで君の出會す見知らぬ貧しい子供達に、それを贈物にしたまへ。彼等の眼がとめどなく擴がるのを見るであらう。最初は取らうとしない、自分の仕合せが飲み込めぬのである。すると、彼等の手が矢庭に進物を引つさらふ、そして、彼等は逃げ失せるであらう、ちやうど人間を用心することを習つた猫共が君のくれた肉片を君から遠く食べに行くとほりに。

とある路端の、とある廣庭の格子門のうしろ、奥から太陽に射られた美美しい邸宅の淨

らかさが現れてゐる處に、一人の、綺麗な、すつきりした子供が如何にも愛くるしい別莊著をつけて佇んでゐる。

贅澤と氣樂と富の風習とは之等の子供たちを無力者や貧乏人の子供などとは違つた型からできてゐると思ひたいくらゐ立派にしてしまふ。

彼のかたへの草の上に、塗り上げた、金色の、緋の衣を著付けた、飾り羽毛と玻璃細工とで裝はれた、まばゆい玩具が、主人とひとしく鮮かに横つてゐる。けれども、子供はその選ばれた玩具を構ふ氣がない、彼の眺めてゐるのはこれである、——

格子門の向側の路端、薊や蕁麻の間に、も一人の、きたない、見すぼらしい、煤けた子供がゐる、もし、丁度鑑識家の眼が馬車塗用のニスの下に理想の畵を見拔くやうに、困窮の厭はしい汚染からこれを清めたなら、不公平ならぬ眼には見事な掘出物であるべき筈の、彼の乞食小僧共の一人である。

往來と邸との二つの世界を引き離すこの象徴的な隔障を透して、貧しい子供は富める子供に彼自身の玩具を見せてゐる、それを後者がさも稀な知らぬ物のやうに念入りにためつすがめつしてゐるのである。一體この襤褸小僧が網箱の中でからかひ、搖さぶり、がたつかせてゐる玩具はといふと、それは一匹の生きた鼠であつた！ 親達が疑ひもなく經濟に依つて生そのものから玩具を取り出したのである。

で、兩人の子供は、等しい白さの齒でもつて、同胞らしくかたみに笑ひ合つてゐた。

秋の悲歎

ステファンヌ・マラルメ

マリアが私を去つて、他の星――オリオンかアルタイルか、又は汝緑のヴェニュス？――に行つてより、私は常に寂寥に親んだ。如何ばかり永い日日を、ひとりわが猫と共に送つたらう。唯ひとり、形ある者の聲も知らず、わが猫が幽玄の伴侶、靈である。されば、私は永い日日をひとり我が猫と、ひとりラテン沒落の終末の一作家と過したと言ひ得る、眞白き人の更に無き日以後珍しくも奇異に、この一語に包まれし總べてを愛するより――〔廢滅〕。斯くて、歳の中で私の寵愛する季節は衰へた夏の末の直ちに秋に連なる頃ほひ、そして、日中では、太陽の頽れ入る前、灰色の壁上に黄銅の光線を、硝子窓の上に赤銅を以て息を休める時こそわが漫歩する折である。同じやうなわけで、私の衷心から讀み耽りたい文學は羅馬末期の苦悶詩である、蠻民共復興の面影をも何等忍ばせねば、天主教徒が

習はぬ散文のラテンを稚兒めかして口籠る風情の些かも無い亡滅の詩…

私は之等の愛詩の一つを讀んでゐた。（その麗しい幀裝の匂ひは青春の人の紅の頬よりも私には心がひかれた。）そして、生ける儘の獸の飾り毛皮の中に、バルバリイの風琴が倦み疲れた幽鬱な歌を窓の下で謠ふ時、手を延ばしてゐた。白楊樹並木の大道、曾てマリアが其處を大蠟燭の群と共に過ぎてより、私には春も同じく鬱陶しく見える繁葉の下で奏で奏でる曲、哀しい樂器、さうだ、誠に――熒く洋琴も裂けた絲に光りを與へるギオロンも、けれど追憶の夕照の中に、バルバリイの風琴は私に絶望中の夢を見しめる。今、歌は卑しく樂しげに呟いて、流行後た、平凡な――何處からその序曲が私を銷魂せしめ、さながら私をして物語唄のやうに落涙せしめるのか知らん――悅樂を郊外の心に充たした。私は徐ろにそれを味つた。そして自分を亂す恐れより窓から一錢も投げることをしなかつた、そして樂器ひとりが歌つてゐるのではないと知りたくなかつたので。

哀れ蒼ざめた子供よ

ステファンヌ・マラルメ

哀れ蒼褪めた子供よ、なぜ街頭で騒騒しい金切聲の歌をわめき立てるのだ、屋根の領主の猫共の間へ紛れ込んでしまふ歌を？　お前の歌は　階目の鎧戸も透りはしない。そのうしろに肉色絹の重い窓掛があるのをお前は知らないのだ。

それだのにお前は極り切つて唱つてゐる。歌は執念なのだ、たつた一人で命を送つて行く、誰の上にも寄り掛からず自分の爲に働いてゐるこの小人の。お前は何時かにも親父のあつたことがあるか？　一文も握らずに歸つて來たとて、お前を毆つて空腹を忘れさせてくれる一人の婆さんさへお前には無い。

けれどお前はおまへの爲に働いてゐる、街街で突つ立つて、大人ののやうに出來た汚れ著物を蔽つて、早熟過ぎた痩せ方の、年齢にしては馬鹿に大きなお前は、喰べる爲に奮激して唱つてゐる、他の子供等の敷石の上で戯れてゐる方へ向けた意地惡い眼光をさげもせずに。

お前の聲の上るに連れてだんだん空へ高まるお前の裸頭は、お前の小言の喧しくなればなるほど、小さい兩肩から飛び去りたがるやうに見える。》

小人よ、いつか、町町を長い間喚き廻つてからお前が何か惡事を犯つたとこで、其の頭が立ち去り兼ねぬと誰か知らう？　惡事は何も犯るにむつかしいこともない、さうだ、望みに任せて勇氣を出せば足りる、かうして…　お前の小さな容貌は力に充ちてゐる。

唯一錢も、洋袴の上に希みも絕えてぶら下つた長い手の握つた柳の籠には落ちて來ない——お前はいつしか惡く成らされて何か罪を犯すことであらう。

だんだん威(おど)かしかかる調子でお前が唱ふに從つて、前から知つてでもゐるやうに、お前の頭は高まり詰めてお前を離れてしまはうとする。

その頭は、私の代りに、私よりも價値(ねうち)のない者達の代りにお前が罰を受ける時に、お去らばと述べるのであらう。お前は恐らくそんな爲に世の中へ來たのだ、そして今から斷食をする、私達は新聞紙上でお前を見ることであらう。

おお！　哀れ小さな頭！

生ひたち

ジャン・アルテュウル・ランボオ

I

墨國(メキシコ)、弗羅曼(フラマン)の昔噺より更にけ高い、親も無く殿堂もない、黒眼黄鬘(くろまなこきたてがみ)のこの偶像。稀有な藍と綠のその領土は、船無き海原に添つて縱ま(ほしいまま)に希臘、薩剌瓦(スラブ)、希爾風(ケルト)の名を冠した濱地の上を走つてゐる。

杜の裾には、——夢の花鳴り響き、撩亂れ(かきみだれ)、明るむ——牧場を溢れる鮮かな洪水の中に膝を組んだ橙(オランジュ)の唇の娘、虹、花の氣、海の影を落し、貫き、彩る裸形。

海に隣る平場の上に旋り旋る夫人達、巨女(おほ)の子供達、綠青の苔の中の此上(こよ)ない黒、叢と荒れた小庭との腴な地に目立つ寶玉、——禮拜に充ちた眼光(めつき)の若い母達と大きな姉妹達、

執路軍(シュルタン)の后達(きさき)、擧動と慘虐い(むご)著付(きつけ)との女王達、異人の小女達(こそんな)、しづしづと薄幸な人人。
《可愛い體(からだ)》と《可愛い心》の時の、倦厭(いつき)さよ！

部分譯

朝の雨

ピエエル・ルイス

夜が消え去る、星群(むら)が遠ざかる。一番おしまひの高等内侍もとうとう纖男を引つ張つて連れ込んでしまつた。そして私は、朝の雨の中で、私は砂の上にこんな唄を書きつける。

木の葉はきらめく玉水をつけてゐる。細徑(こみち)細徑(こみち)に交るささ流れは皆泥と朽葉を運んでゐる。雨はほたほた、ほたほたと、私の歌に穴をこしらへた。

おお！　悲しくもただ獨りぽつちの此處よ！　一番若い人達は私を望まない。一番老齢(としより)の人達は私を忘れてしまつた。

部分譯、「ビリティスの」唄より

阿刺比亞の古詩より

首飾り

必ずや御身の送る此の首飾りはゼイナブを悦ばすであらう。けれど此の眞珠の玉は彼女の首には冷たいであらう、そして恐らくは彼女の首を傷けるであらう。

煩悶

私も亦、私も《日》の國に殘して置いた娘の子がある。去るに當つて私は彼女に接吻の首飾りをやつた、その玉の一つ一つは皆涙であつた。

夜は地の上に翅を休める。御身の瞼は御身の眼の上に翅を休める。御身は眠る。

未だ露もないのに御身の喉を濕したのは、それは私の涙であつた。私は幸の失せる日を思つたからである。

いかなれば斯かる時に、うとうとと君は眠るのか？

忍從

私が御身に話しかけてゐるうちに、木蓮の花影が御身の膝へのぼつた。その影の重いが故か、御身は亦私の言葉を耳にかけない。その影を御身は子供でもあるやうに搖さぶる、もし我等の戀の希みにして適ふことなら生れよかしと思ふその子供でもあるやうに。

そして私はちらつく花影を搖する御身を眺めあかした。

沈默に就いて

施與を乞ふかたゐを聽き訊すな。
寢言に戀を告げる女に問ひかけるな。御身の敵を罵る者に答へるな。
《聞としてゐる！》とは決して言ふな、《聞えない》と云へ。

無題　エブン・ゼエドゥウン

オオクウアンの花よりも赤赤と、日は野のうしろに降りて行つた。定めの刻限であつた。

私は駒を繫ぎ、そして坐つた。

御身は來た、わが愛人よ！　で、ひどい顚へに私は襲はれたのである、さながら曙に打ち慄かされた眠り手のやうに。

散文譯より

化粧された愛　アマルウ

爭ひ

——では、あなたはあの人を愛してゐるの？

——さうですとも。

——私もあの人を愛してゐるのを、あなた氣がつかないの？

——もしやと私も苦勞でしたわ… けれど、それなら、私達二人であの人を愛しませう、もし私達のうちどつちかが死んだなら、その時こそあの人が戀人なしにはゐられないことにしませう。

——あなたが… 死ぬつて！ と、もうアンバティイは涙をせきもあへずわめきました。

──それは知れませんわ…

──おお、私の日日の光りなるサダヒイよ。では、あなたは解らないの、あなたを愛してのあまり、私は妬んでゐるのに？

愛の顔

今朝、《愛》の黄金の顔が、バナナの若樹の葉洩れに輝いてゐた。

──おはやう、わが命取りよ！　と私は呼んだ。で、シタは笑ひながら私に答へた。

──私がそれを言はうとしたのに…

ルウドラ

月は空間を碧ませた。野生の鶩は驅ける大蓮である…

HYMNE

おお曙の面ざしの死よ！　おお《時》の初めより凡べての男、凡べての女を懐に納め了つたことに醉へる、花の冠の死よ！　おお鎖された唇の死よ！　おおトリムウルティイの使女、死よ！　おおをののく踊り子の哀願には聾ひた、けれども佛陀の祈願には慈悲深い死よ！

おお創造的滅亡！　おお曙の面ざしの死！

L'AMOUR FARDE, TRADUIT DU SANSCRIT PAR FRANZ TOUSSAINT.

最上の愛

ギリエ・ドゥ・リイル・アダン

人にして、間に合せの幸福ならぬ眞の幸福に運り合つた者、その中へギレム・ケルリスと名乘るブルトン生れの若者を勘定に入れなくてはなりません。

この男こそ幸福の星の下に生れたといふのでせう、又戀する人でこの男ほど好い目を見た者がどれだけありませう。とはいへ、如何に單純で彼の生涯はありましたことよ！

一八八二年のこと、九月の晴れやかな午後も黄昏時、イヹエヌとギレムとが、レンヌの野邊で、とある牧場の柵の近邊に落ち合ひました。イヹエヌはとつて十六になるなかなかの綺麗首、先づ貧に近いある小作女のひとり娘で、母子して町から遠からぬ花森村といふ大きな村に住居してゐるのでした。

この晩方は、二匹の牝犢と半ダアスばかりの牝羊といふ、全體でこれだけしかない家畜

を引き連れての戻り路なのでした。

十八歳の優男のギレムはケレルン男爵家の獵番の息子で、これも赤獲物を獲物嚢にしての歸り路なのです。兩人ながら、眺め合つて見ると、もつと早くに出會さなかつたことを不思議がりました、村は番小屋から二里以上とはないのでしたから。彼等の周圍には、苣蓿畑、未だ花の雜つた刈入後の蕎麥、それに遠方から來る杜の香ひが暮方の空を薰らせてゐる。二人は何や彼やと話を交しました。

イヹエヌは胴衣に差した矢車菊をギレムに贈る。ギレムは美しい赤脚の鷓鴣一羽を彼女に音物にする。そして相引約束で別れて行つた。それを小娘が躊躇ふでもなくうけがつたといふのは、話は結婚にあるので、それに、ギレムは直ぐと彼女の氣に入つてしまつたのでした。

兩人は翌日、花森に程遠からぬ場所、秋がもう點點と紅葉を綴つてゐる徑に出會ひました、——お互に手に手をつないで、何も戀のどうのと思ふでなく、飾り氣のない意中を明し合ふのです。——それからは、日毎に、十月も末に成るまで。逢ふことの重なるに連れ、ギレムのおもひは娘に打ち込んで來ます。

彼は眞心の、信じ深い、情の潔く熱い、又釣合のとれた肌合でした。イヹェヌは遊び好きの婀娜者で、鳥囀りの、多分ちつとにこやか過ぎる子でした。共につみの無い接吻やしほらしい世帶の計畫の中に許嫁を約しました。

別れ際には長い無言の抱締なのです。

ギレムは父親にさへ内證を明さないので、老番人は息子の鬱ぎ勝ちなこの頃の素振りをただ徵兵の時期の間近く成つたせゐにしてゐる。――この事も實際の一部に加はつてゐます。――昔の軍曹殿は夜食の際、彼に聯隊で成功する祕訣等を說きました。

で、おつとりしたギレムの愛著と誠とは、イヹェヌの、大層華やかなばかりで美しい輝きが無く、實のある情を立てるだけのしまりにまるで缺けてゐる所へ目が屆かぬのである。色女ではありませう、戀人にはその性分が向きませぬ。きつと接吻や抱擁より更に由由しい夫婦の契りを、男が前以て挑みでもしたならば、娘は手もなく身をまかせたでありませう。けれど此の信者にあつては、その許嫁を汚す恐怖には情慾の惡熱も激しい惑溺も服してしまふ。そのやうな放縱は體面を忘れ過ぎた褻瀆の振舞ではないか。之が手綱でありました。

イヹェヌはもつと輕はずみな氣分から、實のところ、彼の愼重過ぎる氣質を物足りなく思ひました。――そんな爲に彼の情合がすこしさめさへしました。彼女は時にはこの眞面目くさつた戀に吹き出したくなる。彼女には浮調子で、皮相の感覺でより外解らないのである。つまり、ギレムが〔もつと面白味〕があつた方が彼女にはずつとましなのです。けれども夫といふものは(彼女が思ふには)、これで丁度いいのに違ひない、最初は。

ギレムが兵役に就いた時、別れに當つて、彼女は愛情といふより寧ろ友情を感じたのです。でも、兩人は指環を交しました。娘は待つ筈なのです。五ヶ年もの貞節！ 彼女をよく眺めて見れば、それを信じるのは夢をたよるやうなものではありませんか？ それを、娘が言葉を違へ得ようとはギレムの思ひもよらないところなのです。

出發の朝、市の方へ出かけようといふ時に、娘を抱きかかへながら彼は言ひました。

――なに、少尉に成つて歸つて來るよ、勳章を下げて。

――あゝ！ 私のギレム、と彼女は應へました。(この感動した調子には彼女自身も一寸迷はされました。)若しお前が戰爭で亡くなるやうなことになつたら、私は尼さんに成るより外に心はありやしない！

彼は慄へました。希んでもない約束ではありませんか！　深いいとしさの感激に、男は相手の瞼を長い接吻で封鎖めました…　之が封印でありました！　二人は夫であり妻であります。手紙は毎週出し合ふ筈。——實は、イヱエヌは士官服姿の彼を浮べてつひ夢心地になつたまでのことです。兩人は涙の眼で離れました。お互ひに田舍まはりの技師に一フランの値段で撮して貰つた小形寫眞しか持つてゐないのです。

ギレムは阿弗利加の輕歩兵に編入されて、アルジェの地方に遣られました。

★

當座の手紙は二人にとつて、逢ひ立ての時分と殆ど同じほど甘い銷魂の喜びでありました。

部　分　譯

ディギンヌ・ボンタン

アルベエル・サマン

彼女はリュディギンヌ・ボンタンといふ。人は約めてディギンヌと呼んだ。十二歳に成る、眞心な、纖弱な趣を備へた小娘であつた。はつきりと青く澄んだ瞳には、森の中に人知れぬ碧泉の清冽を帶びてゐた。濃い栗色の長い髮毛は、しなやかに紆曲する絹の濤なして、その弱肩の上に溢れ散つた。その口は上唇の隅に褐色の痣の汚染を止めて、愛嬌と品とを添へた。そしてこの開かれつけぬ唇の奥に、漂ふ髮毛の厚みの下に、碧色の兩眼の底に、優れた又縱まな小さい魂の潜めるのを誰しも感ずるのであつた。きはだつた顔だちは誠にディギヌン・ボンタンを目立たしめた。中にも既に見事な浮彫をなした明らかな輪廓は。

胸の底から情熱を以て湧き上る眞心を心殘りもなく差し出すやうに生れついて、まるで度はづれに優しい志操の彼女は、最も述べ易い思惑をも惡事であるやうに憚つた。他人に

其の意中を悟られたのを感ずるほど彼女にとつて苦しいことはないのであつた。そんな場合には薔薇色の雲が急に彼女の頬を染めて、その眼は一も二もなく俛さつてしまふのである。そしてこの感覺は、もし下手に執拗くする人があると、苦痛といふ所まで立ち到るのであつた。

うまれつき、何よりも先づさきに熱し易く、又物を祕め勝ちな性なのである。ただ獨りの時、彼女は其の場に携へてゐた玩具を狂氣染みて抱き締めることがたびたびであつた。或ひは又、人を避けた一隅にいろいろな想像物を竝べ立てて、烈しい仕草で之等に物言つた。そして、かういふ樣子は、何事にも愼ましい、默りやの小娘を彼女に見慣けた人達をばどんなにか驚かしたのであつた。

彼女は胸に或る意味の愧羞を持つて此の世に生れて來た。其の肉體の無垢、それに彼女の纖細な鋭感性が受け入れるところの物、凡べてそれ等が彼女にあつてはやがて掟となるやうに思はれるのである。その感動の兎毛ほどの漏洩、その情の兎毛ほどの驚異も、彼女には堪へ情のできぬ裸體の疚しさを惹起した。

同じわけで、凡べて微光や沈默や幽玄の趣ある物は格別に心をひいた。庭の奥、暗闇の

中に靜けさ籠る聖堂、人住まぬ室の爽かさ。さういつた場所でこそ、彼女は眞の生甲斐を覺えた。そして我が存在の豐かさに氣もそぞろに成るのであつた。さうした紛らはしい明るみ、鬱陶しい深嚴の氣、微れた彩り、廢れた香氣は、誠に彼女の胸奥の纖細な氣質に生涯染み込むといふ風であつた。

自分の方圖も無い感受性から失ふ所を、彼女はひどく味つた。たびたび、自ら好んでわけもない喜戲を躲した結果が涙を誘ふまでの苦しみの種となるのであつた。で、彼女は努めて氣を引き立てて小さい遊び友達の仲間入りをしようと思ひ定める。一時ばかり遊びに繋がつて我と我を瞞まさうにかかる。それもやがてのこと參つてしまふ空景氣といふもので、たびたび晩に、何がな母の情を受けたさの一圖にその懷に身を投げかける刹那にも、彼女はためらふともなく立ち竦んで、口をつぐんだまま寢床へ行つてしまひました。

斯くまで己が隱れた氣持を打ち明かすの苦味はだんだん彼女に斷念の癖をつけさせた。そして此の癖よりは、次第次第に、狂ほしい、殆ど盲ひた獻身の味ひ、異樣な忍從の嗜慾が生じて來て、底知らぬ悲哀に彼女を引き入れ、又更に虐い、壓搾された樂慾を煽らないではゐなかつた。

ディギンヌは生ひ立つた。そして鬱鬱とした妙齢の危殆の中に、その馴れ難い生得はなほなほ發露してゆく。彼女は今は瑣細な交感にも屈服した。何處かぎごちない姿態はそこに基いてゐる。亦それが彼女に潜んだ銷魂の麗しさを鋭い針先のやうに刻んで見せたのであつた。

中央で分れたその暗色の髮毛は、顳顬を蔽ふがままに滑つて、淨らかな、おつとりと圓みのついた額を、筋違骨をなして房房と飾つた。僅かに色を持つたその碧の眼は遠き古の珠といつた風であつた。いつもむすぶに馴れた唇は鋭感的な劃を彫つた。これを、人は冷たい女、高慢ちきな女とさへ解した。彼女は言はれるに任せて、この判斷に俏せん爲には幾分無意識な媚をもつくらつて、好奇心の隱れ家に都合のいい心の柵をそこに結んだ。斯くして彼女はおだやかな處女の日をたしなんでゐたが、簡單至極な傷ましい一挿話が彼女の生活を覆してしまつた。

モオリス・ダミアンといふ一人の幼な友達が休暇中を國に歸省した。やがて、彼に逢ひ、彼と話を交し――兩家の昵近な間柄から、青年はたびたび彼女の家を訪れるので――廣い、砂の赤い園の小徑で昔の嬉戯を思ひ起すに從つて、ディギンヌの心は次第に怪しく騷ぐを

覺えた。朝の靄のやうになほ彼女の内に立ち迷つてゐる、仄かな優しみに、いと物柔らかな一道の光りが射したのであつた。これまでは取るに足らなかつた管も、彼女の眼には異樣な興を引いた。單調な〔時〕もわれから彩つた。そして彼女は或る發露の惱みと歡喜とに捉はれた。

或る午後、園を見晴らした廣間に二人きりでゐる時、はずんでゐた捗へものの談話がふと行きつまつて、お互ひに向き合つた儘まじまじとなつた。開放つた窓から、彼方の工業市の、馬車の軋めき、鑄造場の槌の音、巷の騷めきなどが轟いてくる。木の葉の絶えぬさやぎは絹をしごくやうな階音であつた。二人の間に打ち明けられぬ何物かの存在が彼等を高まりゆく感動に充たした。ディギンヌは息詰むやうな胸騷ぎがして、その魂は長く蔽ふまつ毛の下にどきつく。居づらさの餘り、彼女はピアノに向つて彈じ出すと、モオリスが寄り添つて來た。彼の心臟は、大きな、不整に烈しい鼓動がディギンヌにも聞えるほど高波を打つてゐる。と、彼女は熱に渇いて燃える唇が自分の首筋に觸れるのを感じた。竦と彼女は、死人の顏色の如く蒼褪めて起ち上つた。頓に搔き濁される水面のやうに、彼女の瞳は黑ずんで、モオリスの上に狂ほしい視線を据ゑた。そして男が一擧動をする暇もなく、

彼女は室の外へ身をひるがへした。

彼女といふ全體の存在が名狀し難い惑亂に陥ちた。やや氣の落ちつくまでには長い間かからねばならなかつた。これは彼女の胸の感性の奥底を容赦なく燒き盡す痛手であつた。彼女が身を包んでおいた暈影が悉くむざんに踏みにじられたのである。モオリスと再び顏を合すことが彼女にどうしてでき得よう。幸ひ休暇も終りを告げかかつてゐて、彼女も何かと口實の種を得た。自ら苦しむるを惜まぬ心、今なほ胸とどろく戰慄の甘さを自らにも隱し立てをしながら味ふ爲に、千筋の絲の厚い綾を身の廻りに織りかけることをしか夢みぬ、處女心の樂欲。

モオリスの出立の朝は、曉方より目覺めて、彼女はわが窓から青年の通路を窺つた。彼女と彼とはムスリンの薄く脆い窓掛だけしか離れてゐない。窓掛はディギンヌの兩手の中に顫へる。モオリスは頭を上げて歩みを緩めた。けれど彼女はじつと身動きもしない。魂中がまるで振り動かされ、締木に掛けられるのである。そして長い長い時間がたつても彼女は未だ其處にゐる、眼の緣に落ちても來ない涙の大粒を湛へて…

モオリスは數年の後にしか戻らなかつた。

おお！　此の歸郷、如何ばかりかディギンヌは心待ちを重ねたことであつたらう！

田舍では他の何處にもまして、家常茶飯の單調の齒ぐるまに噛まれて、内生活が、その傾きある者にあつては異常な濃密性を持つ。

玆に、唯一つの情操を捧げて、石に石を重ね、日に日を重ね、凜凜しく或ひは鬱鬱とした魂の記念塔、運命の寂寥が醸される。かやうに、此の弛やかな歳月の間、ディギンヌは其の感激の力をモオリスと過した二月の記憶の上に注ぎ込んだ。ただの一日も之を思ひ忘れる日は無いのである。わが胸臆の奥底に或る内密の聖壇を營み上げて、長い間彼女は其の中に閉ぢ籠り、身を燒きへらす希望の媚藥にわれを委ねた。彼女が疑ぐり深く祕める此の優しい幽立の心持を誰も疑ふ者は無かつた。これが彼女の生ひ立つにつれて、心にだんだん深く味つて來た變則な巧を凝らした心いきであつた。

青年と顏を合せて立つた時には、彼女は心臟まで凍るやうな痲痺に打たれた。彼女の差出した手は痩えて色褪せた死者のか細い手である。あはれ幾たびか思ひ待つた此の瞬間！空恐ろしい幻滅をのみ彼女にもたらすのではあるまいか？

モオリスは此のか弱い手を取つた。そして無關心に親しげに握る男の指先には過去の記

憶の影も止めてをらぬことが分明過ぎるのであつた。

初めは砕け果てたディギンヌも、日數を經て、やや沈靜を取り直さうと試みた。兎に角モオリスは未だ自由の身であるし、彼の心にディギンヌの面影がほんとに殘つてをらぬかどうかを究めるに何の妨げがあらう。けれども、かう考へを搾る毎に、一時に彼女の血は凍りついてしまふ。そして、そんな口がきけるくらゐなら寧ろ死んだ方が手つとり早いといふことが、おぞましくもはつきりと彼女にはわかるのである。

斯くて數週の間、交り代り最も逆の覺悟に心を轉ぜしめる劇しい搐搦に末梢まで搖り撼かされつつ、彼女は過した。彼女は全身の氣力を聚め、元のおだやかさに少しでも見なほすやうな物言ひや頰笑の好もしい傾きを引き出さうと意を努める。と、次の瞬間には、裏切らんとする乘り超え難い嫌惡に襲はれて、苦衷の考へは何か知らん擧動でたじろいでしまふのであつた。

丁度その時、彼女の友達でリディイ・モオランといふ娘の父親が、數里先に盛んな工場を持つてゐて、モオリスを何かの改良研究に誘つた。青年は受け入れて、田舍に三月滯在した、そして戻つた時には、彼はリディイとの許嫁であつた。

それはディギンヌにはむごたらしい打擊であつた。いづれが最も悲慘であるか確とは見當もつかぬ凡べての當來を、彼女はただ見詰めた。

それより數日の後、ある晩、自分の室で夜の仕度の髮を整へてゐると、手足中が急にだるくたわいがなくなつたので、彼女は窓に肘を凭せて夜氣の爽かさを大息に吸つた。時は春であつた。暮方に空の荒れた名殘りの潦水がそこここ舗石の凹みに光つてゐる。地面から霑つた塵や色を增した綠の泌み入るやうな匂ひが立ち騰る。折折そよ風が目をつぶらせる優しさを運んで來る。ディギンヌは身動きもせずに其の重い髮を傍に垂れた儘でじつとしてゐた。そして體にも亦心にも、涯のない喪心を味つた。ふと彼女の向いてゐる並木路の廣い步道へリディイとモオリスとの何處かの饗應から一緒に歸つてくる姿が現れた。彼等は戀人同志の弛み勝ちな足取りで緩緩步いて行く。人氣のない港の寂けさは彼等の聲音も聞きとれんばかりであつた。ディギンヌは體を乘り出した。彼女はうろたへた、引きつけられた眼光で彼等を見送つた。そして其の人達が樹立の更に厚い蔭へかくれた時、彼女の體は滑つて膝を突いた。烈しい惱みに心をずたずたに引き裂かれて、そして呻きもせずに氣を失つた。

次いでリディイの結婚の後、彼女は夢の廢墟の上に機械的な暮らしを續けた。其の心を覆した悲劇を彼女の周圍に誰あつて知る者も無い。その艶は褪せた。希望が面へ上らせた輝かしい明るい血の波は奥へひつ込んでしまつた。その眼射しは逃れがちであつた。その顏つきはなほ默然となつた。何かの集まりが催される、彼女は之をすべて斷つた、自分の生活が底の方へ突き詰まつてゆくのに苦い滿足を味ひながら。さながら仕合せ者に出來てゐない彼女は悲哀の中に窮極の路を見出だしたもののやうであつた。

外出といふ相も變らぬ田舍暮らしの單調な氣散じも彼女にはうるさいものになつて來た。何よりも孤獨を擇ぶのである。引き籠つた生活に想像力を煽られる人の常として、彼女は此の言葉を以て自身の奥底にある祕かな園を呼び起した。秋の艶消しの空の下に、常春藤や黄楊樹の植はつた暗緑の匂ひ豐かな園、そこに長く長く彼女の念ひは逍ひ歩くのである。

五年間が流れ去つた。と、遽かに、十日も經たぬに、リディイは急性肺炎でなくなつてしまつた。で、モオリスは四歳の男の子を殘された鰥となつた。男の傷心は痛ましいものであつた。世間へ出たてのつらい中から働き者の儉しい青春の力一杯に彼は妻を愛してゐたのである。變事に逢つて見れば、身勝手な、間違ひのない本能に導かれて、彼は工合よ

く慰藉が得られさうな處へ身をよけて來たのである。それは外れなかつた。まだ胸を衝く暗い反抗を押し鎭めながら、ディギンヌは此の新しい役目に心を罩めた。荊蕀の冠へ手を差し延べて、わが髪の上に之をのせたのである。やがて少しづつ賺し賺し、樣樣な筋道を言ひこしらへて死者を生に交へながら、細心な優しさのうちに、彼女は償ひ難い愛著の惱みを和らげるものとなつた。モオリスの亂れた心に時時のおだやかさを吹き入れるものとなつた。

かやうにして、事の當然な成り行きから、モオリスは一年半の後には、彼女に結婚を求めようと思ふに至つた。

彼女の青春の夢は漸く此の傷ましい終曲に屆いたのである。ああ！ 花嫁の純白の衣を三十に近い彼女が著けるのは惱ましい忍從なくしてはかなはぬことであつた。そのあらはな、何とも言へない犧牲と喪心の姿は、教會で最も事情に蒙い會集の胸を衝くに足るものであつた。

彼女は、亡き面影に添はんとする此の新居に、思ひ設けた通りのものを得た、誠實な情と沈鬱な家庭と靜けさと。

けれども、なほ悼ましい事事は彼女の胸を絞つた。

度度のこと、モオリスは幼いルネ――といふのが子供の名であつた――を手にして、無言のまま、兩眼に霧を浮めて、瞶めてゐるのであつた。すると、ディギンヌはわれから苦痛の前に身を進めて、言ふのである。

〔まるでリディイに生寫しですこと、ねえ、あなた？〕

斯かる時、モオリスが拭ひもあへず、髯の上に注ぐ溫かい淚を、彼女も、彼女も亦流さずして如何に堪へられようぞ！

とはいへ、思ひ設けなかつた或る大きな仕合せが彼女の上に生じて來た。彼女は己れが母と成らんとしてゐるのを感じたのである。此の念ひは彼女の胸に乾いた泉を湧き直させた。彼女の胸は迸り張るものに充ちた…　その全肉體は感動の優しさに、さながら返り咲き初めたもののやうであつた。薔薇色の血が頰に上り、耳の緣を紅に染めた。優艶な線が頷から頸に延びて、胴を膨らませ、臀部を圓やかにした。そのしなやかな、そつと凭りかかるやうなものごしは、そつくり、形のあでやかさを露にした。して、ある暮方、身の入り過ぎて長びいた雜談に、彼女も亦、彼女も〔愛人よ〕と呼ばれゆくことをモオリスの眼に

認めたのである。これは誠に詠歎の醉ひであつた。定め分かぬ喜びの中に、彼女は眩くがやうに摸り足に進んだのである。突然、彼女はいぢらしいまで甲斐甲斐しくなつた。いそいそと飯事めいた世帶向きに氣をくばり、新しい調度をそなへ、室室を明るく張りなどした。

部分譯

MON COEUR MIS A NU

シャルル・ボオドレエル

働かなければならぬ、好んででなければ自棄(やけ)ででも。よく〳〵めてみれば、働くのは遊ぶのより退屈ではないからである。

☆

實用の人であることは、私には始終何か大變醜い事に思へる。

一八四八年の面白味は、銘銘が空中樓閣のやうな夢想郷を抱いた點にしかない。

一八四八年は馬鹿馬鹿しさの骨頂といふところで魅力があるに外ならない。

ロベスピエエルのねうちは若干(そこばく)の美語を吐いたところにしかない。

★

佛蘭西革命は犧牲に依つて迷信を强めたのである。

★

女は體から魂を離すことを知らない。彼女は簡易家である、動物と同じく。――それは體だけしか持つてゐないからさ、と諷刺家なら言ふであらう。

★

基督が《饑ゑたる者は幸なる哉、彼等は滿たさるべければ!》と言つた時、基督は蓋然性に就いて計算をしたのである。

語錄

レミ・ドゥ・グウルモン

生活するに二つの樣式がある、感覺を以て、又抽象を以て。空想家(ユトピスト)は、例へ科學者なりとも、例へ微細な事象の優秀な觀察家なりとも、その觀念を敷衍せんとするに當つては、現實との交渉をまるで棄ててしまふ。

戀愛倫理

★

本能に對して、そは誤れりと敢て言ふが如きは、理性の主張したがる一つであつて、隨分理の通らぬ話である。理性なるものは、その本質として、會得することを禁ぜられてゐるさまざまの態度を、數へ上げて表(へう)にする見物の役目をしか爲さぬものである。

戀愛倫理

★

凡べては相關係する。自在なる智識は必定感覺の自由に繫つてある。凡べてを等しく感ぜざる者は凡べてを會得し得ぬのである。凡べてを會得せぬとは、何物をも理解せぬことである。文學、美術、哲學又科學すらも、すべて智慧を以てする人間の擧動は感情に隷屬してゐる。

戀愛倫理

★

人世は、跡形もなく、究度もなく、何の爲ともなく、ただ步む必要によつて步む、或ひは滅びる必要に依つて。

エピロオグ第三卷

★

人生の複雑にして、事物の相互に紛糾交錯してゐることは、一片の藁屑を解くにも、全宇宙にまで遡らねばならぬほどである。

芝生の路

★

運命の衣の中に時時刻刻が提供するところをそのままに受け取るべきである。今日のものは決して再び來ることはない。記憶をこそは蒐集すべきである。後悔をではない。

或る女の夢

★

己れ自らを愛慕し、己れの性質が含むところのあらゆる空な（空な、けれども現實的な、而して之が唯一の眞實である）幸福を引き出さんと努むる者ほど貴い人間は無いのである。人は一つの命をしか持たずして、而もそれが限られてあるを知れ！ 葡萄をとり入れるにはひと時がある、唯ひと時。朝は實が酸い。夕べは熟し過ぎてゐる。汝の日日を過去を歎

くに又未來を歎くに失ふな。汝の時時を生きよ。汝の刻刻を生きよ。喜びは、雨が褪せしめ、風が吹き散らす花である。

リュクザンブウルの一夜

生と藝術と

ロマン・ロオラン

生とは枯淡なる理性と我等の肉眼とが見るところのものの謂ではない。生とは我等が夢みるところのものの事である。生の標準、卽ち愛である。

★

凡べての存在し又存在せんとする者を輝かす太陽、創造の法悅よ！ 創造することを除いて歡喜は無い。創造する者の外に生物は無い。凡べて其の他の者は、生の局外者、地上に漂ふ影である。あらゆる生の歡びは創造の喜びである、卽ち、唯一の焚爐より迸つた力の燃燒——愛、天才、活動、この偉大な爐のめぐりに座を占め得ぬ者達すらも、卽ち、徒らなる野望家、我慾者又放埒者の類までも、なほその色褪めた反映にでも浴して身を溫め

んと努めるのである。

肉體の方面に於けるにせよ、精神の方面に於けるにせよ、創造するは、これ軀體の獄屋を出るのである。これ生活の嵐に突進するのである。これ《存在する者》たるのである。創造するとは、これ死を殺すことである。

★

己れの乾びたる體と何等の生の炎も決して迸り出ぬところの己れの內なる夜とを見守りつつ、地上にただ獨り失踪してゐる無爲の徒に禍あれ！ 花咲く春の木立のやうに生と愛とを以て重く豐滿なるを何等自らに感ぜざる魂に禍あれ！ 世界が名譽と幸福とを以て彼を充すことはあり得べし、而も之は一の屍に冠せしめたまでのことである。

★

人が生活力の旺んなる時、人は何故に生くるやと自ら問ふことをしない。人は生きんが爲に生きる。何故とならば、生きるとは素晴しい事の謂だからである。

生は絶え間なく容赦なき戰場である。玆に、人たる名に恥ぢざらんとする人は、目に見えぬ敵の軍隊と絶えず力爭せねばならぬ、卽ち、彼の、不信にも、人を自ら汚し自ら滅ぼす道に突き遣るところの自然の凶行力、濁つた望み、晦い考へと。

★

——生とは、とオリギエが言つた、生とは何だ？

——一篇の悲劇だ、とクリストオフは應へた、ウラァ！

★

——生者よりも生きてゐる死者がある。

——いや、それはかう言つた方がほんとだ、死者よりも死んでゐる生者がある。

★

眞理を見る要求の無い人人にとつては、如何に生の容易なることよ、眞理を己が欲する

とほりに見て、そこにぬくぬくと寢工合のよい夢心地を拵へ上げる特權を持つた人人にとつては！

★

人はその生涯に於いて、不公平を敢てせねばならぬ年齡がある。敢て、凡べての學び得たる欽仰と尊敬とを一擲し去つて、凡べてを——虛僞をも、眞實をも、——己れ自ら認めて眞としたものの外一切を否定せねばならぬ年齡がある。そのあらゆる教育に依つて、身の周圍に見聞するあらゆる事物に依つて、子供は夥しい虛僞と迷妄とを本質的な眞實に混ぜ合せて吸ひ込んでゐる。かくて、健全の人たらんと欲する青年の第一務は一切を嘔吐するにあるのである。

★

人は生涯の中に體質を變へるやうに、亦魂をも變へるものである。而して、この變化は必ずしも日を追うて徐徐と成就するものではない。全部が一氣に新まる危機といふものが

ある。壯年は魂を變へる。舊い脫骸は死滅する。苦惱の時期に於いて、人は一切終れりと信じる。反つて一切は始まらんとするのである。一の生が死ぬや、他の生は旣に生れてゐる。

★

病はしばしば惠ましい。體を挫いておいて、彼は魂を開放する。彼は魂を淨める。强ひられたる無爲の夜と晝との中に、餘りに露骨な光りを恐れる、健康の太陽では焦してしまふやうな、もろもろの思慮が萠え出る。曾て病まなかつた者は自らの悉くを知り盡したものではない。

★

生に於いては、人の組織の根柢に酷しい變動作用の働く年配がある。かかる時に當つては、身心は普通以上外界に侵害を縱まにされる。精神は衰弱を感じ、漠然とした悲哀が之を襲つて來る。事每に倦ね果て、旣往の所爲は空に歸し、猶未來に何事を爲し得べき的も

つかない。此の危機の生じる年配には、大抵の人は家庭の義務に縛られてゐる。まことに之が彼等にとつては、自ら判斷し自らの方面を定めて新しく力强い生活をやりなほすに必要な精神の自由をとりあげてしまふ羈絆である。如何ばかりか籠れる哀しみぞ！　如何ばかりか苦き惡心ぞ！…　歩め！　歩め！　お前は動き出さねばならぬのだ…　免れられぬ務め、己れの責任たる家庭への配慮は、人を繫いで、轅の間に立つて眠りながら進む困憊した馬の如くならしめる。

——けれども亦、全く係累の無い人は、此の虛無の時に己れを支へ己れをして强ひて歩ましめる何物をも持たない。彼はただ惰性で行く。自ら何處へ行くかを彼は知らない。その力は搔き援され、その意識は暗くなつてゐる。彼のまどろめる此の瞬間に、霹靂の一聲がその夢遊病的步行を中絕せしめるが如きことあらんか、その人は不幸なる哉！　昏倒するの恐れがある。

彼等の生命の蝕の時に、强き種族性に支へられてある人人は幸なる哉！　父と祖父との脚が、正に昏倒せんとする息子の身體を保つのである。頑健な祖先の壓力が碎けた魂を押し上げるのである、宛ら死せる騎士をその馬が運び行くがやうに。

★

死の前に。——

凡べては一溜りもなく振り搖がされる。持ち合せてゐる理性の一切は何の役にも立たない。自分は活きてゐると信じて來た。自分は生に就いて何等かの經驗があると信じて來た。それが、何も知らなかつたことが解るのである。何も見えなかつたことが解るのである。心が織り出した幻影の幕に蔽はれて現實の凄まじい形相からは目隱しされて生きてゐたことが解るのである。苦痛の觀念とゐづき惱む生物との間には何の關係も無い。死の思想と、悶いて死にゆく肉と魂との痙攣、その間には何の關係も無い。あらゆる人の言葉、あらゆる人の智慧などは、現實の此の凶凶しい燿きのそばでは、ぎくしやくする自働人形の類に過ぎない、——日毎に腐れ行く生を絶望的な空しい努力を以てつなぎ止めんとする之等泥と血との存在などは。

★

恥ぢらひを以て又敬虔の念を以てしてさへ、自ら識らざらんとする心苦しい僞善、自ら匿さんとする打ち勝ちがたい生存の要求！　慰めなるものは無しと知りつつ、人は自らの慰めを拵へ上げる。生は存在の理由無しと得心しながら、彼は自らの存在の理由を捏ち上げる。彼は生きてゐねばならぬと自らに說得する。而も彼以外に誰もさうは思はぬのである。必要によつては、彼は死が彼を生きしめんと勵ますのであるといふことを發明するであらう、しかも、それは、彼が死に對して言はせたい言葉を被けたまでであると自ら知りつつ。淺ましさ！……

★

銘銘が順番に時世といふ十字架の丘に上る。銘銘が苦痛を見出だし、銘銘が絕望的な希望と時世の狂妄を見出だす。銘銘が在りし人人の足跡に己れの足を置く、己れの以前に死と爭ひ、死を否み——而して死んだ人人の。

★

自分が愛した人人の小さな墓場、とでもいふやうなものを各人が己れの奥底に持つてゐる。そこに彼等は眠つてゐる。歳月、何物にも擾されることなく、けれども或る日が來る──人の知つてゐるとほり──そこで塚穴は打ち開く。死者達は墓より出で、母の胎内に眠る兒のやうに彼等の思出が憩つてゐる胸の持主、愛する人なり戀する人なりに、その色褪せた唇で微笑むのである。

★

我等の亡き人人に我等を近づける最も確かな道は、その人人に再會する方法は、彼等のやうに死ぬにあるのではない、生きるにある。彼等は我等の生を以て生き、我等の死を以て死ぬ。

動物の苦しみは、自由な意識にとつては、人間の苦しみより尙一層耐へ難いものがある。何故なら、少くとも後者に於いては、それが一の惡禍であり、それを惹き起すものは罪ありと認められる。然るに、動物の無數は、日毎に、悔恨の影だにない無用の虐殺を加へられてゐる。かやうな事を言ひ出す者は馬鹿げて見える。──けれども之は恕せぬ罪である。

そこで、斯かる人が一身を挺して、人間が苦しむべかりし事のもろもろを正算して見るならば、彼は人類に向つて復讐を叫ばねばならない。もし神が在つて之を容すのならば、彼は神に向つて復讐を叫ばねばならない。もし善良な神があるのならば、生靈の最も貧しい者も救はねばならない。もし神は最強者にのみ善良であつて、賤しい者の爲には、人間の犧牲に供される劣等者の爲には正義が無いのであるならば、善良もなく、正義も無いのである……

ああ！ 人間によつて成し遂げられる殺戮の如きは世界の屠殺所に於いては至極些細な事だ！ 動物は互ひに噬み合ひ、穩かな植物、默せる樹木も、彼等の間にあつては猛獸同志である。森の晴れやかさなどとは、文學書を通じてよりほか自然を識らぬ文士づれにとつての出まかせな修辭の常套のみ！… おお自然の平和、生の悲愴殘忍な形相を覆ふ悲劇的假面！

藝術！ 生を抱き締めること、鷲がその餌食に於けるが如くなれ、之を空中に運び去つて、之と共に朗らかな空間に上昇せよ！… そのためには緊握力と廣やかな翼と强い心臓

とがなければならぬ。

★

死の在るところに藝術は無い。藝術とは卽ち生きしめるもののことである。

藝術は如何にも一の享樂である。而して、あらゆる享樂の中の最も陶醉的なるもの、けれども奮鬪の賞與に外ならぬところの享樂、卽ち力の勝利を飾る月桂冠である。藝術は鎭定された生である。

その名にふさふ唯一の最高藝術は一朝一夕の法則の上にある。その善德は實用面のものでもありうるけれども、その眞の、その聖なる善德は、宛も信仰と同じく、超自然面のものである。…太陽は道德的でもなければ、非道德的でもない。太陽は《存在する者》である。太陽は空間の闇を照す。斯くの如くである、藝術も亦。

★

偉大なる藝術家にして自己をのみしか表出せぬ人人がある。けれども藝術家中の最も偉大なるものは、その心臟が咸の爲に鼓動する人人である。生ける神に面と面とを合せて見えんと欲する者は、その思想の空なる蒼穹に於いてではなく、人間の愛の裡に之を求めねばならない。

★

日常の人人に、日常の生活は海よりも更に深く更に廣いものを示す。我等の中の最小の者も自己の内に無限を把持してゐる。一個の人であるといふ單純さを持つ凡べての人のうちに無限は存してゐる。戀人のうちに、友達のうちに、產みの日の輝かしい光榮を苦惱を以て支拂ふ女性のうちに、無意味に身を犧牲にし、誰も氣にも留めない婦人や男子のうちに、無限とは、相互に一より他へ、他より一へ流通する生の波に外ならない…　之等の單純な人人の單純な生涯の一を記せ。世界の最初の日より凡べて同じ一つの母の子たる、相似て相異る、相繼ぐ晝と夜、その物靜かな時代詩を記せ。單純にその展舒するがままに記せ。現今の藝術家等が力を注ぐ精緻な文飾を心がけるには及ばない。御身は咸に話すのであるから咸の言葉を用ゐるがよい。正格の文體だの不純な文體だのといふものは無い。貴

い言葉だの卑しい言葉だのといふものは無い。御身の述べんと欲することを、正確に言ふ言葉と正確に言はぬ言葉とがあるばかりである。御身の爲すことの全部が御身であれ。御身の考へることを考へ、御身の感ずることを感ぜよ。御身の心の韻律が御身の書きものを領せんことを！　文體とや、それは魂そのものであれ。

★

行爲が何物にも妨げられぬ時には、魂の發動する理由が甚だ少い…　藝術の振肅は、藝術的努力を嚴しい制御の下に緊束するにある。この意味に於いて、困窮は嘗に思想の師なるのみならず、亦文體の師であるといつてよい。困窮は、肉體にも然るが如く、精神に眞率を敎へる。時宜に當り言葉に適ふ時は人は決して過言をせず、亦核心の事以外を思はざる習慣をとる。斯くて、生存の時間は比較的少くとも人は倍も生きるのである。

★

最も立派な說も、それが成就されてある作品によつてよりほか價値はない。

眞の藝術家はその作品の將來を念頭に置かない。眞の藝術家は、十年以内に影をも止めずなるのを知りながら、喜んで家の前面に描くことをした文藝復興期の畵家の如きものである。

★

透徹せる時代、透徹せる作品は幸なるかな！　けれども時代が亂れ國民が爭へる時には、その傍らにあつて闘ひ、彼等を勵まし、彼等を導き、闇黑を斥けて、彼等に道を塞ぐ偏見を挫くのが、藝術の務めである。…藝術はその目的として、爭闘を除去せんとするものではなく、生を百倍にし、生を更に强固にし更に偉大にし優秀にせんとするものである。藝術は生に敵對するところのもの一切の敵である。愛と結合とはその目的でありとも、憎惡は恐らく、或る時に際しては、その武器である。…惡をよく憎まざる者は善をよく愛せない。不正を見て之と戰ふことを敢てせぬ者は、全く藝術家たるを得ず、全く人たるを得ぬ。

★

藝術が社會の特權ある一族の所爲でなくなることは、道德上の利益なるのみならず、藝術それ自らの利益である。藝術が、その特權、その恩給、その賞勳、その官尊的榮譽を撤して、國民一般の衆庶のうちに入り來らんことを、私は藝術家として率先待望し、唱道する。私は藝術の威嚴の名に於いて之を唱道する。藝術を汚す者は、恥ぢがましくもなく藝術を濫用して生活する百千の寄生蟲である。藝術は一の職業であつてはならぬ、天禀のことでなくてはならぬ。

煩ひは精神にとつて無用ではない。過大な自由は良からぬ指導者である、それは思想を無感覺と冷淡とに誘ふ。人には針の刺が必要である。もし人の生が斯程短かくなかつたならば、人は斯程生きんと發奮せぬであらう。己れが狹い時の仕切の中に押し籠められてあるを感得する時、人は一層熱心に身を處するに違ひない。天才は障碍を欲し、障碍は天才を成す。

才子となると腐るほどある。我我の文明は一體、全く無用な、卽ち全く有害な才子共でぷんと來てゐる。彼等の最大部分が消えて無くなる時があらば、もつと畫家が少くなり、もつと音樂家が、もつと作家が、もつと批評家が、もつとピアノ彈きが、もつと役者が、

もつと新聞記者が少くなる時があらば——それこそ大した不幸ではなくて、どうして非常に大した幸であらう。

★

一の藝術が衰へることはあり得る、けれども藝術そのものが死することは決してない。藝術は態を變へる。戰爭や革命で荒され搔き裂かれた人民にあつては、創造力が建築で表現されることは至難である。建築は金を要とする、新築の需用や生活の安泰や未來に對する安堵を要とする。造形美術が繁榮するには、一般に、榮耀で晏如とした高等階級、或る種の釣合のとれた文明が必要である。ところで、物質的狀態がもつと逼迫してをり、生活がつらく貧しく心痛に鎖されて外面に榮える由もない時には、生活は己れ自身の內に折れ込んでしまふ。そして幸福に對するその不斷の要求は他の藝術の路を見出だす。美は形を變へて內的となり、奧深い藝術の裡に身を潛める。卽ち、詩、音樂。美は滅びない。人生に死は無い、復活は無い。光りは決して燃え止みはしない、ただ處を變へるのである。光りは一の藝術より他の藝術へ行き、一の人民より他の人民へ行くのみである。もし御身が

それらの唯一つをのみしか研究せぬならば、御身は歴史の中に中絶を、心臓の鼓動し止んだ假死の状態を見出だすであらう。それに代つて、もし御身が凡べての藝術の總體を觀ずるならば、御身は生命の永遠が流れてあるを氣づくであらう。

英雄の氣息

ロマン・ロオラン

我等を取り捲く空氣は重苦しい。舊歐羅巴は欝積した腐敗の雰圍氣の裡に停滯してゐる。偉大を缺く物質主義が思想の上に靠れかかつてゐる… 社會はわれ　わが屑屑した陋しい利己主義の中で窒死しかけてゐる。社會は息迫しいのである——窓を開けようではないか。自由の氣を入れようではないか。英雄の氣息を呼吸しようではないか。

★

私が呼んで英雄といふのは思想や力によつて勝ちほこつた者のことではない。心によつて偉大であつた者、彼等のみを私は英雄と呼ぶ。彼等のうちの最も偉大な一人が云つたとほり、《私は善良のほかに優秀の證左を認めない》（ベトオフェン）。性格の偉大ならざる處に

偉大な人は無い。賤しい衆庶の爲の空虛な偶像があるのみである、——時はそれらを諸共に滅ぼす。成功が何ぞ重きを成さう。要は偉大なるにあつて、爾見えるにあるのではない。

★

偉大な魂は高い梢のやうなものである。風が之を打ち、雲が之を包む。けれども玆にこそ、人は何處にもまして深い呼吸を得るのである。心をその汚れより洗ふ純粹な空氣は玆にこそある。して、群雲の遠のいた後には、斯かる人が人類を領するのである。

★

明け行く一日の前に敬虔であれ。一年のうち、十年のうちの成り行きを思ふな。今日を思へ。說を措け。あらゆる說は德の說ですらも、厭はしく、愚かしく、禍を來す。生を强制するな。今日を生きよ。おのおのの日に向つて敬虔であり、之を愛し、之を重んぜよ。殊に之を色褪せさせるな。その花咲くを妨げるな。今日のやうに陰氣な灰色の時と雖も、尙之を愛せよ。思ひ煩ふな。見よ。今は冬で、凡べて眠つてゐる。けれど此の善良な大地

は醒め來るであらう。御身も一の善良な土地であればいいのである。そしてその如く悿へ深くあれ、敬虔であれ、待つてゐたまへ。御身が善良でさへあれば萬事良く行くであらう。もし又御身がさうでないならば、もし御身が薄弱であるならば、もし御身が成就しないならば、その時は、そのままで尙幸福であるがよい。恐らく御身はそれ以上できないのにちがひない。それなら何故にもつと希まうか！　できない事を何故に悲しまうか！　できる事をこそ人はしなければならないのである…

★

大いなる敵は疑惑である。悿へ情があつて人間らしいのはいい。亦、爾あるべきである。けれども善であり眞であると自ら信じる事を疑ふのは人には禁ぜられてゐる。思ふ以上人は之を信じなければならない。信じる以上、人は之を守らねばならない。

★

倫理の根本義は神經衰弱ならざるにある。

★

世界の最悪禍は自らの欲求を欲求しないにある。自ら企てながら敢てしないにある。一觀念の中途に立ち止まつて、諸方へさ迷ひ又後戻りするにある。矛盾は私にとつては過より遙かに堪へ難い。私は一の觀念を受け入れる時、必ず一種の戰慄なきをえない。何故なら、その觀念が密かに私の理解を超えた空怖ろしい將來を孕んでゐるのを私は知つてゐるからである。けれども、それを受け入れるからには、私はその含む凡べてを受け入れる。して、もし自分の精神が必要とすることの前に逡巡したならば、私は自ら侮蔑せざるをえまいではないか。かかる無氣力は理性の自殺である。

★

生を發揚する凡べてはいい。敵はただ一あるのみ、即ち生の泉を涸れしめ、褻れしめる享樂本願の利己主義。

★

生きた眞理の方へ努めつつある過は死んだ眞理よりもつと饒かでもつと聖である。

★

潔く認識しようではないか——自然は善と惡とに對して無頓著であり、又その故にこそ意地が惡いのであつて、惡人で而も完く健全な者が立派にありうることを。德は自然のものではない。人間の作品である。即ち人間が之を禦がんことを。人類の社會は他より一層強く一層大いな一握みばかりの存在者によつて建設されてゐる。夥しい世紀の凄まじい爭鬪による此の作品を、犬の心の賤民のために傷けられぬ工夫をするのが人の務めである。

★

正義の爲に流れる血は歡喜の大收穫を擧げさせる。生を與へるの高い悅樂、それ以上を生は産むものではない。

★

幸福と天才とは、ストア派の耐忍力、精勵と信念との幾世紀によつて、それらに價する術を知りえた民衆によりほか來らない。

★

幸福とは己れの分を識つて之を愛するにある。

★

眞理とは、洞窟の內壁から沁み出た鐘乳石かなぞのやうに頭腦から沁み出た嚴しい定義の謂ではない。眞理とは、卽ち生である。之を求めることを御身の頭の中に於いてすべきではない。他の人人の心の裡に於いてこそすべきである。御身を彼等に結合せしめよ。御身の欲するままに何とでも思ふはよい。ただ日每人間の浴を取れ。人は他の人人の生を生きねばならない。その運命を享け入れ、その運命を愛さねばならない。

★

私は、生の慘酷から、魂の薄弱から、目をそらす萎けた理想主義を嫌ふ。鳴りの好い言葉の瞞著的幻影に感じ易い民衆に言つておかねばならぬ――逃避的英雄主義は一の怯懦である。世界に英雄主義はただ一より無い。卽ち、そのあるがままに世界を見て――而も之を愛すること。

★

義務の名稱を萬事に、一向取柄のない雜役に、冷かな行爲に、徒らに頑な嚴格さを以て充用するは、生を暗澹たらしめ、生を茶毒するにをはるのみで、その名分の褻瀆である。義務は特殊相である。まことの犧牲の時に當つてこそ爾呼ばれねばならぬ。己れ自身の不機嫌を、他を快からざらしめんとする欲求を、此の名に被けてはならないのである。自分が陰氣臭いといふ不面目な愚かさを所有するからとて、人成しかあれと欲する理由にはならない。自らの不具者的處方を咸に押しつける理由にはならない。德の第一は喜びである。

徳は幸な、自由な、抑壓のない貌を持たねばならぬ。善をなす者は己れ自身の内に樂しみを感ぜねばならぬ。然るに、此の所謂絶えざる義務は、此の小學教師的壓制は、此の躍起となつた調子は、この贅辯的論爭は、この子供瞞しのとげとげしい理窟詰めは、このやかましさは、この不愛嬌は何の魅力も、何の禮儀も何の沈默もない此の脱殼の生活は、存在を實際以上にみじめになしうる何物をも免すことをしない此の淺ましい厭世行爲は、他を解するよりも侮蔑するを易しとするこの權柄づくな無智は、偉大のない幸福のない美のないこの世俗倫理の凡べては、毒毒しい有害物なのであつて、それらの所爲で、徳よりも反つて不徳の方がずつと人間らしく見えるのである。

★

世界は些少の眞實と多大な虚僞とに育まれてゐる。人の精神は懦弱である。全く純粹な眞實には適合しにくい。その宗教、その倫理、その國家、その詩人、その藝術家は虚僞に包まれたままの眞實を彼に提供せねばならず、虚僞はいづれの種族の精神にも適合する。ただそれぞれに依つて區區な變化があるのみ。民衆の間に了解を困難ならしめ、相互の侮蔑を容易ならしめるのはひとへにこれらの虚僞の仕業なのである。眞實はいづれにあつても同じである。けれどもおのおのの民衆が、己れの理想主義と名づけるところのおのおのの虚僞を持つてゐて、凡べての者が出生より死に至るまでそれを呼吸してゐる。彼等にはもうそれが生存の一條件となつてゐるのである。英雄的危機の數次を經て、そこより脱出し得るものは若干の天才あるのみ、而して、その思想の自由な天地に於いては彼等のみが獨自の存在者である。

★

眞摯は智慧や美と同樣に稀な賦性である。之を咸に要求するなら不公平ならざるを得ない。

★

幸ならぬ人人よ、あまり不足を言つてはいけない——人の最も優秀なものは御身等の伴である。彼の人達の敢爲を我等の糧としようではないか。して、もし我等が弱過ぎるなら

ば、しばらくその膝の上に我等の頭を休めようではないか。我等はそこに慰めを得るであらう。それ等の聖い魂からは透徹の力又權威ある善の流れが迸り出る。强ひて彼等の作品に尋ね彼等の聲音に聽くを求めずとも、我等はその眼の裡に、その生涯の經歴の中に、讀み取るであらう。生は苦しみのうちにあつてこそ更に偉大で、更に熟り豐かで――又更に幸福で――あると。

★

人の他者に及ぼすはその言葉に依つてではない、その人物に依つてである。或る人人はその眼光によつて、その擧動によつて、その透徹な魂の默默たる接觸によつて、己れのまはりに和らぎの雰圍氣を放射する――魂に對する魂の權威！ 之を享けるものも之を行ふものも共に知らない。而も世界の生命は此の微妙な引力が統べるところの干滿を以て成り立つてゐるのである。

藝術

アンリ・ベルグソン

藝術の目的は何であるか？ もし現實が我我の感覺や意識をいきなり訪れ來るものであるならば．もし我我が事物と又我我自身と端的に流動し得るものであるならば、私は藝術無爲と云ふを憚らない。或ひは寧ろ我我全體が藝術家なのである。卽ち我我の魂は自然と結びついて間斷なく共鳴するからである。我我の眼は記憶の加勢で空間を切り拔いて時間の中へ無類の畫面を嵌めるであらう　我我の視線は人體といふ活大理石で彫られた、古代彫刻家の作品と美を爭ふ彫像のきれぎれを、通りすがら捕捉し得るであらう。我我は魂の奥底に、或る時は華やかな、又しばしば痛ましい、されど常に原質的な音樂の如き、內生命の絕間〻あらぬ旋律の唄ふを聽くであらう。凡べてこれらは我我の周圍に存在し、凡べてこれらは我我の內に存在してゐる。にも關らず、これらのいづれもはつきりと我我には

感得されてはゐない。自然と我我との間に、換言すれば、我我と我我の自意識との間に一つの幕が介まつてゐる。この幕は常人にあつては厚く、藝術家や詩人にあつては薄く、殆ど透明なほどである。如何なる神女が織つた幕であるか？　惡意あつてか、友愛によつてか？

人は生存せねばならず、生活は事物が我我の要求に如何なる關係を持つてゐるかといふ點で事物を識別せんことを我我に望む。生存するとは働くことである。生存するとは適當な反應を呈するに便利な印象のものだけをしか承認せぬことである、その他の印象は當然朦朧としてゐるか又は混沌として我我に上つて來るのみである。私は眺める、そして見えると信じる。私は聞く、そして聞えると信じる。然るに、この外界から私が見たり聞いたりするところのものは、ただ、私の行爲を明瞭にする爲に私の感覺が選み出したものに過ぎない。私自身で識つてゐるところは表面に觸れたところだけである。行爲に發したところだけである。實は私の感覺と私の意識とは實用向簡易な現實の一面をしか私に渡してくれない。彼等（感覺と意識）が私に與へてくれる事物及び私自身に就いての顯象のうち、人間に不便利な差違は消えてしまつて、人間に便利な類似が强調される。私の行動が出發す

る前に、その路すぢが私の中へ引いてあるわけである。その路すぢは私以前に人類全體が通過した。事物は我我に利なる立場から分類され來つた。わが認知する分類は、事物の形や色よりも多くこれである。疑ひもなく、人はこの點で動物に立ち勝ること遙かに上に出てゐる。狼の眼が小山羊と小羊の差を見分けるかどうかは甚だ覺束ない、狼にとつてはいづれも掴むに易くいづれも食るに良き同じ二つの餌食なのである。我我はといふに、成程牝羊と牡羊の差を見分ける、けれども、此の牝羊彼の牡羊、此の牡羊から彼の牡羊と區別するであらうか？　事物及び生物の個個性は、それを認めるのが我我に物質的に有利でないかぎり、我我をすりぬけてしまふ。（ある人と他の人とを區別する時の如き、）我我の眼が捕捉するのは個性そのものではない。卽ち、全くオリジナルな形と色とのある一定の調和ではない。僅かに實用的な認識を易からしめる一二の特點のみである。

もう一つ言つてしまへば、我我は事物さへも見てはゐない、その事物の上に貼り付けられた符牒を讀むだけに限られる場合が最も多い。需要より發した此の傾向は言葉の影響の下になほ强調される。言語は（固有名詞を除いて）凡べての種類を標榜するからである。物の最も共通な作用とその平凡な外觀とをよりしか意味してゐない言語なるものが、物と我

我との間へ自ら入り込んで、物の形に面を被せて我我に見參せしめる。その形が言葉そのものを造つた需要の後方に退隠し去らないかぎりさうである　これはひとり客觀的のみのことではなく、亦、我我自身の魂の状態が自らの内面にある人格的な、オリジナルな經過を我我に隠してしまふことと同斷である。我我が愛憎の念を經驗する時、我我が悲喜の情に打たれる時、我我の意識に生ずるものは、絶對に自己的な或るものを形づくるところの無數の溶けるやうな色合ひ、無數の奥深い響鳴をもつた自分の感情そのもので果してあらうか？　然らば、私達は皆小說家であり、詩人であり、音樂家であらう。けれども、最も多くの場合、私達は自分の魂の状態の表面的發展をよりしか知覺しない。私達は自分の感情の非人格的な外觀、卽ち、同じやうな境遇では誰も似たりよつたりの事をいふその言葉が千篇一律に表し得たところのものしか捕捉しない。そのやうに、私達自身といふ個人の中でさへ、個人性は隠れてしまふ。私達は普遍と表象との圈、例へば柵を繞らした競技場で動いてゐるのであつて、その中で我我と他との功利の技が鬪はされてゐるのである。運動に夢中になつて、運動そのものが選んだ場所へ、最大便利といふ點で引きつけられて、私達は事物と自分との中間に在る一種の共有帶に、事物に對しても表面的、自分自身に對し

ても表面的な生活をしてゐるのである。けれども、稀には、自然が退屈まぎれに、生活から最も離脱した魂を呼び來ることがある。私がいふのは、反省と哲學との產物である、故らの、論理的、組織的な離脱ではない。感覺又は意識の天稟性に根ざして、見ること、聞くこと、思ふことを何ともいへぬ童貞の行き方でいきなり表現する、自然の離脱をいふのである。もしこの離脱が完全であつて、その魂がいづれの知覺によつても行動の方へ引き入れられぬものであつたなら、世界が未だ見も知らぬ藝術家の魂が生じたわけである。その魂はあらゆる藝術に同時に秀でる。寧ろ凡べての藝術をただ一つに溶かしてしまふ。その魂は、物質界の形・色・音と、内生活の最も微細な動搖と、凡べての物の純粹な本質に透徹してしまふ。けれども、それは自然に對して求め過ぎる。自然が私達の中から藝術家となした人にしても、偶然にも幕の一面を揚げてもらつたといふまでである。ただ一方にのみ、自然が要求の感をくくりつけておくのを忘れただけである。そして、どの方向も一つの官能に通じてゐるのであるから、諸官能の中の一つ、この一官能によつてのみ、一般に藝術家は藝術に委ねられてゐるのである。藝術の種類は玆に本く。稟性の特殊も亦玆に在る。或者は色と形とに感激する。彼は色の爲に色を愛し、形の爲に形を愛する。彼はその

ものの爲にそのものを感じ、自己の爲にするのではない。かくして、その形、その色を透して、物の内生活を彼は洞見するのである。彼はそれを最初は受け入れなかつた私達の感覺へだんだん入り込ませる。私達の眼と現實との間に介まつてゐる形と色との偏見を、少くとも一時は彼が引き離してくれる。かくして、私達に自然を示すべき使命、最高藝術慾を彼は果すのである。

又、他の者は寧ろ己れの内に曲り込む。或る一つの感情の輪廓を描いて數知れず生じた行爲の下に、或る個性的な魂の狀態を隱見せしめる平凡な社交的な言葉のうしろに、彼は、簡單に、純粹に、その感情、その魂の狀態を極めてゆく。そして、同樣な反省力を私達自身の内に目覺めしめる爲に、彼は己れが見たものから何物かを私達に見しめんと思ひを凝らす。卽ち、總合されて、オリジナルな生に蘇り來るところの言語の韻律的配合によつて、表現する言葉が存してゐない物を彼は私達に示す、といふより暗示する。

又他の者は猶更に深く穿つ。言葉にはつきり飜譯のできる喜びや悲みの奧から、彼は言葉とは更に似通はぬ或るものを摑んで來る、卽ち、最も内部の感情よりも更に人間の内部であるところの生と氣息との韻律を、卽ち銷沈と昂奮とによつて悔恨と希望とによつて各

人每に異る活ける法則を。この音樂を放つて、强調して、彼は私達の憧憬に與へる。舞踏の仲間へ加はる往來の人のやうに、私達は我にもあらず引き入れられてしまふ、そこより、私達の奧底に、鳴り出でる時を待つてゐた或るものを亦、彼は私達に顫ひ動かさせるに至るのである。——

かくて、畫家にあれ、彫刻家にあれ、詩家、音樂家にあれ、藝術は、現實そのものと面と面を向ひ合せる爲、實際的に便利な表象や、常套的、社會的に承認されてゐる普遍や、つまり我等の現實に面を被せてゐる凡べてを遠ざけるよりほかに目的はない。藝術はたしかに最も直截な現實の目睹に外ならない。けれども、この感覺の純粹性は便利な常套との斷絕を含んでゐる。官能又は意識の天禀を、特殊に限定された無私を、更には、人が常に理想主義に訟へたところのもの、生の或る無形性を含んでゐる。言つてみれば、言葉の遊びのない意味で、理想主義が魂の中にある時に現實主義が作物の上にあるのである。理想力によつてのみ人は現實に觸れ得るのである。

第二部

研究

私が玆に最も說きたいのは、人の感動が人を常に淨化せしめんとする傾向に就いてである。理路を如何に擴大した學問と雖も、感動の表現であるところの藝術が、人の中心を打ち、人の中心を開放して、之に親む者をして立場を常にこの痛感に求めしめ、人を密切な熱誠の生活に導き入れる感化力を發揮するが如きはない。

三富朽葉――感性論。

賞讃の熱意に充ちた「エミイル・ヱルハアレンの研究」（早稲田文學大正四年四月―五月所載）は朽葉が完成した唯一の研究論文である。なほ、熱心に計畫されたものに、「近代感傷史」（佛蘭西文學に表れたるサンティマンの變遷）と「レミ・ドゥ・グウルモンの研究」とがある。前者は單に參考書目の手記を存し、後者も亦、編者が辛うじて「遺稿雜纂」に整理し得た冐頭の一節と材料一部の覺書とを留めるのみ。

エミイル・ヱルハアレンの研究

伯耳義とその國民性

伯耳義は歐羅巴の十字街である。獨佛英の相牽引する活動圈に於いて同中心を形づくつてゐるのみならず、いつかは結ばれんとする歐洲共和國の首府を以て目されてゐる。この地の人民はヴロン族とフラマン族とより成り、一は羅甸系に屬し、羅馬舊教を信奉し、他は日耳曼系に屬し、プロテスタンである。ヴロンは創意に富み（鷄を以て表象される）、フラマンは完成に長じてゐる（獅子を以て表象される）。この二種族の間は不理解勝ち不認容勝ちで、感情の衝突が多い。而も、彼等相互の又各國の劇しい暗示力と同化力とは彼等に異様な影響を來して、日耳曼系が佛蘭西語を用ゐ、佛蘭西文化に親み、羅甸系がフラマン

語を用ゐ、獨逸精神に親んでゐる。斯くて一種の伯耳義人が混成されてゐるのであるが、原野と海洋とに鍛錬された彼等の頑健で又執拗な活力は物の節度を越え、適量を過ぎ易い。統計に依れば、アルコオルの消費額は伯耳義が最高位にあるといふ。同時に、彼等の發展力は對照の妙を極め、極端に物質的な近代の大都會生活の傍には極端に精神的な厳しい僧院生活が營まれ、工業と農業、社會主義と保守主義、未來と過去又都會の富と田舍の貧とは互ひに固く爭つてゐる。

ジョルダンス、ルウベンス等の奠祭畫家に描かれたフランドルの生活欲とその狂熱は、近代、コンスタンタン・ムウニエの彫刻に、又ヹルハアレンの詩に旺盛の氣を漲らせてゐる。近代伯耳義の文學はこの國の歴史にその比を見ぬ豐滿を致し、カミイユ・ルモニエ、モオリス・マアテルリンク、ジョルジュ・ロオダンバック等の盛名は既に遠く伯耳義や佛蘭西の國境を越え、讃美歌の詩人マックス・エルスカンプ、優秀な批評家アルベエル・モッケル、力強い觀念現實の戯曲家アンリ・モオベル、激發小説家ジョルジュ・エコウド、その他、鑑識ある文壇に尊敬を受けてゐる作家は數多い。之等の滿滿たる選良の中より伯耳義國民性の最も代表的な作家を求めて、私はヹルハアレンに到達するのである。

エミイル・ヹルハアレンは、一八五五年五月二十一日、エスコオ河のほとり、アンヹルスに近いサン・タマンで生れた。ヹルハアレン家は血統を尋ねると和蘭人であらうといふ。祖父はブリュッセル市に羅紗商を營んでゐたが、父はサン・タマンの土地に豊かな地主の暮しを送つた。父をギュスタアヴといひ、母をアデエルといふ。母の里なるドボック家は伯耳義人である。然しアデエルの母系は佛蘭西に屬してゐる。エミイルは敏感な幼時を水陸の展望開けた大緑野の中に過し、次いで、ガン市の厳めしいジェズュイット派の僧院サント・バルブの中學校に感動の多い少年時代(一八六九―一八七七)を送つた。運命の奇なることには、この隱遁の一古壁の中に近代伯耳義文學の大發展力は湊會したのである。ヹルハアレンとロオダンバック、次いでマアテルリンクとシャルル・ヷン・レルベルグ、この二組の同級生が玆に親交を結んだ。ロオダンバック、ヷン・レルベルグは成績に於いて後の二大作家を凌いでゐたといふが、共にまた死を先んじてしまつた。當時、ヹルハアレンは深い信仰に打たれて説教家たらんと望んだといふが、又藝術の方面にも早熟であつて、ラマルティイヌ、ユゴオ、シャトオブリアンを愛惜し、勢ひ込んだ羅曼主義でクラスの修辭學に變動を與へたといふ。然しながら、卒業後、彼の燃える多血質は、己れの存在に伴ふ凡べて

の欲求を自由に發展せしめ得べき生活を求めて、未だ、或る限られた職を定めることを諾はなかつたのである。彼の伯父は或る工場の監督を提供したが、之も彼の心に染まなかつた。ルウヴン大學で法律を學んだのも方針を決したわけではなく、在學中に放肆な生活を送つて、公證人志願生ヴン・ディック（後にワグネルオペラの有名な低音歌唱者と成る）、出版業者ドマン等と週報（ラ・スメエヌ）といふ小新聞を出したりしたが、客氣に馳せた過激論が大學の忌諱に觸れて、刊行十六ヶ月で解散を命ぜられた。一八八一年、二十六歳の法學博士ヱルハアレンはブリュッセルの辯護士組合に記名されて、エドゥモン・ピカアル氏方で見習ひをすることになつたが、三年後に彼は全く法服を抛つてしまつた。文學にのみ彼の志が奪はれて來たのである。或る雨の日カミイユ・ルモニエを訪れた未知の青年がヱルハアレンで、「フラマン風土」の詩稿を見て貰ひに來たのであつた。それ以來兩人の親密が續いたのである。この處女詩集が一八八三年に發表されると、一躍してヱルハアレンの名聲が高まつた。當時伯耳義に動いてゐた新興文藝、象徴主義の氣運は主として「新伯耳義（ラ・ジュンヌ・ベルジック）」、「近代藝術（ラアル・モデルン）」二雜誌の努力によつて闡明されたのであるが、ヱルハアレンもこの運動に力を注いだ一人で、又繪畫の印象主義の熱心な擁護者であつた。一八八六年には「桑門」が出版された。之は

當時フォルジュの沼地を開拓してゐたトラピストの僧侶に就いて親しく觀察したものであるといふ。

〔「フラマン風土」は作者の旺盛な健康の時期に相當する。ジョルダンス、ルウベンス等に描かれた本能的フラマンは彼には凡べての觀念を超えて又なき美感を誘つたのである。〕――チイレエ・グリッファン。

ヱルハアレンは浮世畵式の纎巧を嫌つて、放縱なフランドル生活をその儘な筆を振つた。彼のフラマン美術の燃える傳彩美、卓のまはりを放笑しながら踊り狂ふ暴飮者の群、垣に娘を投げ飛ばす淫欲を發した若者など、酒宴、奠祭、亂舞、狼藉の光景が壯麗な自然主義を以て描き出されてゐる。蠅のくるめく蒸れ臭い牛小屋、肥えた薔薇色の豚が汚物の中を搜る飼養場、下婢が日曜のパンを燒く明るい臺所、寂しい野中を袋を肩にして過ぎる乞食、精神が痲痺して狡く又呆然とした百姓、農家が心臟を以て皷動してゐるやうな麥打ちの響、牧場に寢倒れてゐる荒くれた牛飼女、之等の野趣が濃厚に寫實されてゐる。

田園が黄昏れる、

En un creux de terrain aussi profond qu'un autre,
Les étangs s'étalaient dans leur sommeil moiré,
Et servaient d'abreuvoir au bétail bigarré
Qui s'y baignait, le corps à mi-ventre.

洞穴めく深い地の窪に、
池が襍様ある眠りを連ね、
腹を半ば水に涵る雜色の
家畜に水飼場を供してゐる。

この詩集が現れた時、反對派の一人ヴランティイヌ博士が〔ヴェルハアレン氏は膿痕のやうに潰れた〕と言つた形容は彼の好んで添はんとしたところである。私は寫實と言つたが、寫實以上の一種の誇張の美が之等の詩句を浸してゐる。爛醉と淫蕩との眩暈にさながら文字が重く壓されてゐる。詩作の過程の上にまで生活滿足の欲が開放を迫つてゐる。元來、ヴェルハアレンの權能的な詩才は特に密な制作の捉迫にある。甚だ端的直截な流露が、態度や美學を超えた特殊な効果を彼の詩に賦與するのである。けれども未だこの過激自然主義は言葉の繪畫といふ感があつて、文字が意味と共に搖れてゐないから、力强い描寫も類型的な印象をしか齎さない。ヴェルハアレンの奔放野蠻な嗜欲は整正を重んじる形式を用ゐては至つて不調和が目立つのである。

要するに、その最初の美的刺戟は彼の網膜の外に多くを印してゐない。「桑門」に至つて初めて心的陰影の味ひが浮んで來るのである。烈しい本能生活の繪畫は、更に深刻な精神の逸樂を鑄つたゴティック式彫刻と熟して來た。伯耳義の極端な兩面の特徴を受け繼いだこの多血詩人は、凡べて己れの夢想を昂めしめる衝動を追つて、縱まな樂欲から酷しい禁欲に到達した。彼に宗教の感動を醸した幼い時の濃い印象は辛酸な神祕欲となつてゐる。けれども、もはや彼の信仰心は影を消し、この詩集には、廣漠な過去を背景とした悲壯美に對する羅曼的な藝術意識しか見られない。彼は〔信仰者であるには餘り遲く生れ過ぎた〕。桑門は、もはや、〔悲壯な夢魔の求め手〕、〔無信世界の底へ死に行く神に最後の聖躰盒を齎す〕悼ましい殉道の徒として、彼の心を引くに過ぎない。

暗灰色の地平に現出する天使の行列、聖盃の葡萄酒のやうに薄明りを照す日沒、空に十

字架を描く鐘樓、晩課の鳴鐘、これら田園の夕べの宗教的な映景に浮動する僧侶の群、瞑想的默禱、閒寂とした夜の物凄まじい會合、又唯一な敎儀の下に常に異る人性などがこの詩集の甚だ叙景的な風趣であるが、茲では、彼は繪畫的な裝飾を磨滅せしめてゐるとはいへ、甚だ客觀的な構想に煩され、やはり高踏派の常套的表現に陷つてゐる。態度や効果を重んじ過ぎた結果は、人工的な冷光が作家と作物との間を障つて、多少の幻想の力をよそにしては、個性を不燃質的な類型と化してゐる。この詩集の有効な韻致は多く幻覺にある。

Et te's les moines blancs traversent les champs noirs,
Faisant songer aux temps des jeunesses bibliques,
Où l'on voyait errer des géants angéliques,
En longs manteaux de lin, dans l'or pâli des soirs.

斯くて白衣の桑門は黑い野をよぎる、
碧金の夕べに、亞麻の長衣を纏ひ、
天使めく巨人のさまよふ姿を思はせつつ。
聖書の創始時代さながらに。

これら二詩集には典型の藝術を焦點とした理想が强調されてゐて、彼は未だ、現在に異様な衣裳を裝はせねば美を見出だし得なかつたのである。共に、自發的ならぬ形式美の虛像を現實の上に反映せしめた作品に外ならない。

然しながら、この外的な靈と肉との觀察は、間もなく彼の内部に於いて解決を要する緊しい問題と變つた。相反した烈しい傾向を一身に濃く傳へた彼の性質はフランドル國民の强い對照をそのまま内生の悶爭として現じ來らねばならぬのである。

危機

刺戟に對するヴェルハアレンの反應力は次第に内的に向つてくる。元來彼の感受性は强烈な衝動を最もよく受け入れ、斯かる刺戟にのみ全力を發して共鳴共震する大音叉である。然るに、彼はその生活の過渡期に於いて、佛英獨西へ旅行し、凡べての狀態樣式思潮等は一時に彼の經驗界に突入して、彼に返答を迫つた。大自然の中に生ひ立つた彼にとつては、倫敦などの晤澹たる雰圍氣は息詰る鑛坑内の惡感と大迷宮の驚異とを惹起した。加へるに、彼は胃神經痛を惱み、いささかの驚きにも彼の神經は戰慄の火花を散らすやうになつた。

かかる病者は勢ひ内攻し、外界との交渉を避けて、單調と碌碌との内に沈む。また、この疲勞は心を襲ひ、意志を痺れしめ、虛無の世界を勸める。彼の三部作「夕べ」、「沒落」、「黑燿」（一八八七年、一八八八年、一八九〇年）はかかる徵候の產物である。

この三詩集では、ヹルハァレンの感性は「フラマン風土」のそれとは甚だ隔たつた異様な轉化を來してゐる。麗しい太陽を浴びた夏の花壇はさながら幻術のやうに、悲愴な蠱惑の沼に陷沒してしまつた。同時に、その太やかな叙述は變幻の幽境を現出せしめる喚起と變り、現實を斥けた凄まじい想像が相尅する主觀の光景を映じ出さんとするのである。「夕べ」は鼻持ちのならぬ雰圍氣の物狂ほしい幻覺世界である。「沒落」は題下に（心理の壞頽）とあつて、畏怖に引き込まれる惱亂者の叫喚である。「黑燿」では、變調な神經の輝きが病者の觀念に凶凶しい映象を烙き付けてゐる。

夢魘に歪められ蝕まれた意識の「夕べ」、

Les soirs crucifiés sur l'horizon, les soirs
Saignent, dans les marais, leurs douleurs et leurs plaies,

Dans les marais, ainsi que de rouges miroirs
Places pour refléter le martyre des soirs,
Des soirs crucifiés sur l'horizon, les soirs!

夕べは、地平に磔けられた夕べは
沼に惱みと傷の血を注ぐ、
夕べの殉道を映す爲に据ゑた
紅の鏡めく沼に
夕べは、地平に磔けられた夕べは！

詩人は惡熱の中に絕えず幻模様に親み、反理性の憧憬を以て極寒の感觸に益益沒頭する。

Lacs de Roses, ici, dans la neige, nuage
Où nichent des oiseaux dans des plumes de vent;
Grottes de soir, avec un crapaud d'or devant,
Et qui ne bouge et mange un coin de paysage.

Becs de hérons, énormément ouverts pour rien
Mouche dans un rayon qui s'agite, immobile…

鼓なる雪間の薔薇の湖、
風の羽毛に群鳥を宿す雲。
夕べの洞の金面の蟇は
身搖がず、風景の隅を喰ふ。

事なくくわつと開いた鷺の嘴、
搖らぐ光線の中の凝りついた蠅…

之は外的、客觀的な錯覺であるが、更に内的な自己暗示が腦を冒してくる。

L'absurdité grandit comme une fleur fatale.
荒唐は運命の花のやうに擴がつた。

既にして、生の深淵に狂氣の太陽は昇り初める。非人間的な病者の錯亂は燃え盡きんとする神經の分裂に恍惚を味ふ。

Mourir ! comme des fleurs énormes, mourir !
死なんには！ 度外れに開いた花のやうに、死なんには！

「夕べ」は妄想に止まつてゐるが、「沒落」は更に思想上にも無限の絶望を來してゐる。生は意志を以て威壓せねば跪かずに直立してはゐないといふ苦しい條理を抱いて、詩人が昏迷の中に沈思してゐると、突如、良のやうな生活が浮んでくる。ふと、何者かが彼の意志の無能を嘲笑つて、《汝は無意味だ、汝の徒らな魂にとつては、未來は過去の悔恨に過ぎぬ》と罵る。闇黑な哲學と痛ましい反抗との葛藤に力盡きて、詩人は幼時を憧憬する幽い希みに打たれる。然し、この物思ひから覺めれば、忽ち《倦怠に捲き絡められて腐らんこと》を拒む反撥の精神が、已れの痲醉した《思想と血とを鞭つ》。彼の内に關係を斷つた二組織ができて、一は呵責し、一は苦惱する。生の煩悶は苦難の意志と變じ、自己の侮蔑を免れんとする爭力が生じるのである。《私の希みは斷食に焦され、狹窄衣に乾し減される鐵の僧院の生活にある… 無言の難行のうちに、魂の熱烈をして肉躰全部を廢棄せしめ得んことを！》といふやうな一種の醉ひの中に凡べての秩序ある識域は消え去り、虚無的な基

督主義のみが强調されてくる。又、時には憎惡の凄まじい發作が起る。ベナレスの寺院に蹲る黒檀と花崗岩との獸と成つて、涙もろい群集を唾棄する望み、

Désir d'être soudain cette idole qui ment!

忽ち、かの欺る偶像たらん望み

に打たれる。

「黒燿」に於いては、その病苦はやや推理の力を回復して來た。あらゆる數が舞ひ狂ひ、神神は豺狼の瞳をして過ぎ、純白憂鬱な月の葬列が稻妻のやうに目に痛みを燒きつけて行く等の眩惑、《苦惱》の使徒たらんとする焦燥、荆の冠が已れの惡の夢を醸す腦を刺さんこの切望、《絶えず觀念の鐵の踵で攀ぢ登られる》に困憊した魂が此上ない休息として發狂を願ふ等の悲痛はいかにも相繼いでゐるけれど、更にこの鬱した内部の密閉を離脱せんとする觀照の努力が著しいのである。同時に「都會」、「大法」等の後の大作の題目が多少入つて來てゐる。轉機の近づくと共に、少しく靜まつた彼の理性の空には渦卷く火焰が反映してゐるのである。彼の注意力は、自己の分裂によつて已れの思想が光明から追ひ遣ら

れ、全く解決の緒を失つて、破滅的な悲觀に陷らざるを得なくなつたことに氣づき初める。詩人は霧に鎖されたテエムス河に已れの理性が骸となつて流れ漂ふを夢みた。

Elle est morte de trop savoir,

De trop vouloir sculpter la cause

・・・・・・・・・・

Elle est morte atrocement

D'un savant empoisonnement.

Elle est morte aussi d'un délire

Vers un absurde et rouge empire.

彼は餘りの知識慾に毒されて死んだ。

餘りに原因を彫刻する慾に毒されて

・・・・・・・・・・

彼は死んだ、虐くも、

博學の毒を以て。

彼は錯亂して死んだ、
荒唐な赤い帝國に向つて。

藝術は病心理學に豐かな材料を供してゐる。かの癲癇病者はその發作に當つては並外れた力量を生じる。まして、發達した筋肉は強い刺戟に會つて異常な力を出す如く、藝術家の發達した頭腦は強い刺戟によつて異常な美をかちとるのである。ヹルハァレンの常に擴大的肉迫的な傾向は、その健康期に於いて過激な現實の印象を受けた如く、病に向つても廣く己れを開け放つてゐる。而して強い藝術本能は常に冷たい解剖刀を採るを忘れぬものである。故に、彼は執拗にわれとわが傷を撥いて臨床研究をしたのである。彼の危殆期の作品は生活價の最も內密な與件をも解剖に附したもので、誠に人間苦と藝術力との爭鬪に坐してゐる。かくて、彼が裸の魂を襲つて口を開かしめたこの沈痛な聲は心理研究の貴重な權證である。同時に、彼はこの眞摯な自己實驗に、得難い耐忍と認容と發展との力を獲得したのである。

又、彼の自己嫌惡は《自らを唾棄する》までの烈しさに達した。この闇黑中の悲鳴に對して眞心を以て注がれた一道の愛の光りはいかに懷しく彼の震へる手を疑惑を超えた歡喜

の方へ差し延べしめたことであらう。彼が生涯を通じて深奥な愛敬を捧げることになつた一婦人が、この時に當つて優しい救ひを彼に齎すのである。（この事は別に「ヹルハァレンの愛」に於いて述べる。）

この三部作に至つて、彼の詩はもはや高踏派の不感無覺美を脫却して自家の風格を樹立して來た。魂の晦冥と刺戟の強烈が暈影を仲介とせぬ照應や樣樣の新語法を以て表現されてゐる。彼は言葉の大きな擧動を好む。LOINTAINEMENT, MOROSEMENT, DOUNL—OUREUSEMENT 等の副詞は彼に疊用されて、特別に擴大された感覺が生じる。又、例へば次の連打するやうな頭韻の枚擧は捲きかへる海の印象を有効にする。

La mer clcque ses blocs de flots contre les rocs
Et les granits des quais, la mer spumente
Et ruissalante et détournante en la tourmente
De ses houles montantes,

三詩集とも五十部づつオディロン・ルドンの挿畫がある。ルドンの腐蝕版はさながら病ヱルハァレンの夢の俤である。

（オディロン・ルドンの嚴肅な手はとある巖の頂に一個の人の面を彫刻した。その顔はぶざまで、畸形で、度はづれなものである。――けれどもその持主は實は一の山である。）

――アルベエル・モッケル。

覺醒

ヱルハァレンの激昂は沸騰の極度にまで熱せられ、何等かの換氣なくば自ら破裂するを免れなかつた。そもそも惡瓦斯の如くに充滿して、彼を窒息せしめんとするは何であつたか。之こそ彼の驕慢心であつた。彼が否定の主觀を高めるに從つて、「生」は復讐した。彼は空しく己れの内に閉ぢ籠つて、現實界との交通を拒むに過ぎない。いかなる現實も彼と絕たれてゐないのみならず、彼の心勞して壟斷せんとする自己の世界は狹く息苦しいばかりである。彼の意志は超凡の努力を以て頂點まで到達した。その嶺よりの瞥見に、彼の眺めに映つたものは彼が辿り來つた反理性の道である。茲に至つて、必然の結果としても、

彼の努力としても、方向の一轉化を來さねばならぬ時期に屆いたのである。かくて今まで主觀の小境地にわれとわが身を封じた彼は反つてこの殼を破らんとし、驕慢の面の下に實は怯懦が自己を分裂せしめ、逃避を勸めたその一つ一つの手段を茲に摘發せんとする。詩集「途上顯現」（一八九一）の前半がそれである。

この詩集は黑白の對照を極めて、異樣な彩麗を浴びてゐる。前半は、魂の迷景に何處よりとも知れず凶凶しい幽鬼が次ぎ次ぎに立ちあがつて、生といふ謎を解き示す。暗澹とした平原に闇の老牧者が死の羊を呼んでゐると、忽ち「地平の者」が伸び上つて、己れの意欲の姿におびえ、寧ろ神の鳴り渡る聲の下に苦まんことを望んで、一散に岩や丘を越えて遁走する。――「疲勞の者」は死んだ世紀を身に纏ひ、倦怠に壓せられ、憎惡し且つ苦むといふ、己れの悪病を愛し罵り又誇りともする永遠の悲鳴者である。

鋭い疑ひの眼を見張つた「知識の者」は確信を得んと焦る詩人に、一摑みばかりの科學的認識を以て哲學的綜合にまで演繹するな、汝の守るべき唯一の事は、魂の齒を喰ひしばつて暗默の中に追求し、決して結論を下さぬにあると勸める。――更に偉大な腐爛の王「無の者」が、凡べては漏れなく無限の虛無へ墜落するのだと言ひ放つて、世界の墓に向つ

て哄笑する。

これらの狼藉な誘惑者等は、忽ち、疾驅、光りを踏んで天より馳せ下る「聖ジョルジュ」の前に霧散した。胸白の駒に跨つて、信念の叫びの如き槌を空ざまに、天の憐愍を攜へ、

Le saint Georges cuirassé clair
A traversé, par bonds de flamme,
Le frais matin, jusqu'à mon âme.

光りを鎧うた聖ジョルジュは
炎の跳躍を以て、淨い朝(あした)
私の魂に射(さ)し透つた。

狂氣の叫びは光りに渇した聲である。嫌惡の懊惱は生の喜びに饑ゑた苦みである。之こそ彼が誘惑の中から切に待ち望んだ使節であつた。大理石の輝く純白の國、海の邊(ほと)りの園には善の木立に優しさの實(みの)る處女の王國、そこより、聖ジョルジュは、彼の希望と祈禱との弱つた額へ確固たる敢爲と信念とを吹き入れに來たのである。

J'ai été lâche et je me suis enfui
Du monde, en mon orgueil futil.

私は卑怯であつた。あだな誇りを以て
私は世界を遁れてゐたのであつた。

今こそは(わが希望の聲よ鳴り渡れ… 小川の水の白石も濡れた瞼を見開けよ)と詩人は叫ぶ。誠にこの詩は爽かな復活の喜びに漲つてゐる。夢魔の顋(あぎと)を免れて赫燿たる光明に浴する者の口を衝いて出る讃歌である。

この感激こそヱルハアレンの世界倫理の基點であり、その抒情詩の源泉である、凡べてを賞嘆を以て感じ、疑惑を更に蓄へぬ決定の心を彼に生ぜしめた啓示である。詩形すらも「聖ジョルジュ」に至つて初めて迸るが如き動力律がいいい自由に用ゐてある。

光景は一變し去つた。枝差し交す小川のほとりに、赦免、善、愛、犧牲の四人の「聖女」が在つて、やがて全く彼の開放さるべきを豫言する。彼女等は彼の家に立ち働いて、誤謬

を片付け、悔いを疊み、罪を鎖し、彼の爲に高い思想の聖餐を整へんとする。危機は終つた。

現代詩

社會問題は少壯よりヹルハアレンの留意したところである。半途、夢魔の手に捉はれて、唯我の殼に閉ぢ籠つた彼は、とある清朗の朝、途上に顯現する者があつて、彼に地平の彼方、生の光りを指してより、一層新しい熱意を以て他者の生活の方へ躍進し、斯くて危くも自己の繋縛を解放した。己れと同脈同血なる同胞あるに氣付き、孤獨の誇りを愛他の心痛に代へ初めた。彼は伯耳義に生じかけてゐた社會主義の思想に走り、民主運動に加はり、又、一八九二年、エコウド、フェルナン・ヴンデルヹルト(勞働黨の首領)等と共に、ブリュッセルの公衆會堂に藝術部を設置して、一般民衆の敎育に資する爲、ワグネル樂を演奏し、イブセン、ユゴオ等を講演し、民謠を研究した。

「眩惑の野」、「觸手ある都會」、「曉」(一八九三、一八九五、一八九八)の諸作はかかる熱中の時期に成り、その餘りに主義的な構想は醇粹な藝術を愛する者にとつて多少反撥心を懷かしめるものである。これらの作はさながら「現代」なるものの術語である。現代は茲に

韻律的彫刀を以てその特性のままに刻み上げられてゐる。大都會の坩堝に吸收され打ち碎かれる田園の悲慘、都會の活力とその暗影、集合の偉力と個個の非力、群集と速力と經濟と科學との大結合力とその騷擾、工業と農業との無殘な爭鬪、殖民漂泊の悲劇等、現代の新光景と價値轉換的傾向とが、甚だ雜然たる都會美學を以て、至つて亂雜な、けれども權威ある韻律に歌はれてゐる。

藝術は人生の平凡事に新しい美を賦與する。羅曼派は中世紀の生活を、寺院を又城を美化した。近代生活の惡熱の中から騷擾の美を第一に發見した光榮は、當然ヹルハアレンが之を受けねばなるまい。かやうに、恐らく「美」は絕對的なものでなく、相對的なもので、時と境遇と人とによつて推移するものであるゆゑ、ヹルハアレンが群藝術家に先んじて、現代の美意識に第一歩を進めたといふ事は、彼の大詩人なるを證するものである。

現實世界は甚だ複雜で、あらゆる原形質と醱酵素とを含有してゐる。この中で各人は銘銘の共通點と特點とを試みられる。即ち銘銘の性質を鍊へられる。人が現實界から得來るものは試練を經た己が個性に過ぎない。(この試みに取り挫がれる者は禍なる哉。この試みを强壯劑と成し得る性質のみが日常生活の英雄である。) 然らば、人はその氣質を通じ

て事物を見る。卽ち偉大高明深刻な氣質のみが偉大深刻高明な世界を見る。かくて、常に動搖し常に事物を擴大して感じるヱルハァレンの見る世界は、凡べて無限の發展を內に潜めた世界である。無限大を方向とした世界である。發展の光景は實に彼の驚喜に價する。增大した活力としての大都會、秩序づけられ開明された力としての機械、集合體の行動としての群集等、力を散佚せしめずして密ならしめ、火花のやうに飛散せしめずして巨大ならしめる現代の傾向を彼はいつくしみ、この全動の騷擾を活きた大管絃樂として彼の新美學は味ふのである。

然しながら、「眩惑の野」、「觸手ある都會」に於いては、未だ調子はづれの思想、冗漫な主張、煩雜な言葉、空な容積を盛つた形容等が前述の傾向に甚だ混入してゐて、この二詩集は大成の餘地ある、されど現實に捉はれ過ぎた過渡の作品として見らるべきものである。然し、前者の中から、最も荒唐な眩惑にしかく鋭敏な「狂人の歌」、疫病に對する迷信的な恐慌をとらへた「災」、寂れた田園に暮方を待つてうろつき廻る「禍の勸告者」、後者の中から、窮厄と酸敗との氣に群集が壓せられてゐる「寺院」、病的な都會人の快樂を描いた「觀劇」等の詩は特に擧げねばならない。

「眩惑の野」には、現代の悲慘事、都會の大蛸に血を吸はれる田園の痲痺が表れてゐる。荒廢した田舍の現象はいづれも惑はしの種ならぬは無い。憑物がしたやうな羽搏きで風を刈り取る風車、十一月の疾風に恐怖の叫びを擧げて飛び去らんとする四辻の基督像、看板の腕で《咬まれた骨を風に差し出してゐる》蟲喰んだ宿屋、家家の瘡蓋のやうな屋根、惡運の背像のやうに門に添つてゐる枯木。木立が靜まりかへつて、地平が眞赤になる薄暮の時、禍の麥の蒔き手サタンが、豐作を祈る迷信の群を睨んでゐる。…平原がある、息を吐けぬ平原がある、憎惡のやうにうつろな長長しい平原がある。その上に飢ゑた太陽がまじまじとしてゐる。…クリイムのやうな腐れ沼はのろのろした腕で瘴癘の氣を釀造する。黑い蟇が泥の緣に頭よりも大きな眼を見開いて體を膨らましてゐる。怪物めいた月が身動きのならぬ風で引き懸かつてゐる。玆から「惡熱」が村の方へ出かけるのである。農家の排水渠が閉ぢてあらうと、窓が締まつてゐようと、彼はやはり內に入り込む。そして老爺の椅子の上、赤坊の搖籃の中又落ち込んだ寢床の中に身を休める。燃え殘つた煖爐に埋つてゐる病氣を搔き起す。彼はパンに、汚水に立ち交る。納屋へ上つて襤褸の積み重なつた袋や籠の中で眠る。そして今までは聞えなかつた彼の足音が、或る朝、凶凶しい確りした步

調で梯子段から響いてくる。病兒を抱き締めてみても、善良な天使や古光りのする基督の像に願を懸けてみても、もう駄目である。蒼白い「禍」が住居を共にしてゐて、時計のチクタクに合せて苦悶を寸斷しにくる。悲運の連禱が始まる。…鬱屈した百姓等の狡黠な行ひ、無慈悲無感覺な迷信、漂泊もの等の放埒無殘、あらゆる動物性が平原の路に添うてはびこる。風車は丘の上で大きな骨格を頂點から足下まで呻かせながら、之等の罪業に立ち會つてゐる。…冬の日の乞食は狂人のやうである。雨に濡れたパン、煤のやうな帽子、重荷のやうな背中、その凍つた體で教會の道に立ち並ぶ樣はさながら十字架である。彼等は雨と風との交叉點に住む。彼等の杖は悲慘の鐘の撞木である。彼等はそれを突き立てて、地平から地平に倦怠のリズムを響かせる。そして、遂に《渴きに乾され、饑ゑに穴を穿たれて》、狼のやうに何處とも知れぬ穴の中に俯り込んでしまふ。けれども永久の怯怕のみは未だその顏に殘つてゐる。彼等は、田園の荒廢と凌ぐに由ない曝露との姿である。…見よ、家を追はれる農民共は、

Avec leur chat, avec leur chien,

Avec l'oiseau dans une cage,

Avec pour vivre, un seul moyen :

Boire son mal, taire sa rage.

彼等の猫を持つて、彼等の犬を持つて、

籠に入れた鳥を持つて、

禍を飲み、惡運に從ふ

唯一の生活法を持つて、

路上に立つ。彼等は銘銘の棒の先に《希望で擦り減つた布類》を括り付けて、《雨の飲み手、風の嘗め手、霧の吸ひ手》と成る。彼等の眼前には無限の大道が續いてゐて、その米はいづれも都に紛れ込んでゐる。彼方に「觸手ある都會」が《黑い吸盤と赤い呼吸とを以て》彼等を惑はし、日が沒れると、

Comme un nocturne et collossal espoir

夜の巨大な希望のやうに

平原を領してゐる。(平原は暗く疲れてもはや防がうとはしない。)

都會の魂は未だ混沌としてゐて、拙劣な未來をしか思ひ浮べることができない。昔群集の指導者であつた「僧侶」、「軍人」、「市民」、「使徒」等の立像が、所所に、何かを敎へるやうな恰好をして臺の上に乘つてゐるけれど、彼等の周圍の辻や街路に解け又結ぼれる(大衆のやうな)群集は振り返つても見ない。もはや是等の群集は冷たくなつた歩に繫がれる由を知らぬのである。金が彼等の熱した血を養つてゐる。都會の飢ゑた心臟「取引所」には凡べての狂熱が醸され、それが町の脈脈に流れ込む。彼方には金文字を以て飾り立てられた一大「勸工場」があつて凡べての心、凡べての頭腦、凡べての光榮、凡べての權力、生活の意義さへも金で賣られてゐる。樂堂に「觀劇」する都會人の感覺は異樣に曲げられてゐる。茲に數時間、彼等の倦怠は、色彩と音樂と火群と踊子達のあらゆる肉慾的な嬌態とに快く鞭たれる、彼等の好奇心は不自由極まる人工的淫蕩に妙に引きつけられる。

O le plaisir humain au rebours de la joie,
Alcools pour les regards, alcools pour les pensées,

O le pauvre plaisir qui exige des proies.

おお喜びとは逆な快樂よ、
眺めの爲のアルコオル、思ひの爲のアルコオル、
おお餌食を要求する虐い快樂。

やがて(眞夜中が鳴り、堂が閉ぢ、群集が散じる)頃となれば、茲で鋭くされた彼等の錯覺的淫慾に更に本能の滿足を與へる爲に、外には(自分の魂の喪に服した)「歩道の女」が、

Rouges, dans la brume, ainsi que des viandes,

霧の中に、肉の切れのやうに赤く

待つてゐる。而して、この(自分自身の寡婦達)は性慾に飢ゑてゐるのではなく、金に飢ゑてゐるのである。更に町はづれの「肉切臺」では、女性が商品のやうに賣られてゐる。

又彼方には、煤の雨の中に曉が明け、烈しい白日の太陽も盲目のやうに煙に迷ふ、眞四角な「工場」がある。「港」には、風と共に旅行する浪が船舶に世界を積み込んで、都會へ運んでくる。科學者の「研究」は僅かの確定を得る爲に貴重な頭腦を年月の淵に傾注し盡

してゐる。時には、常に動搖する群集の偉力が忽ち「反亂」を漲らす。けれども不斷は金の軛が巧みに彼等の意欲を引き廻してゐる。

之等の混亂した大動力、之等の經濟を差油とし調革とした大機關は至つて不秩序なものであるけれど、世界を征服せんとする熱を發する。それらの上に、不可見だけれども明瞭な「觀念」、正義と憐愍とが非物質的な光りを放つて運轉を司つてゐる。（茲にヹルハアレンの、力を愛する唯物論と民主的理想とが洩らされてゐる。） この近代都會生活の運行を更に統合して、確とした運命の道に進ましめねばならぬのが都會の「美」である。（美は人間圏の祕鍵である。美は咸に完全な存在を暗示する… 美を希む者は時間を超越するのである… 而して群集が徒らに苦み徒らに光明の方へ手を差し延べてゐる間に、既に、時には、靜寂な魂に映景の如く「美」が現出して――未來の言葉を告げるのである。）

象徵詩

社會思想時代のヹルハアレンが最も藝術價を實現した詩は、之を「幻の里」に求めねばならぬ。この詩集は「眩惑の野」と「觸手ある都會」とのちやうど中間に出たものであるけ

れど、その二詩集とは甚だ選を異にし、「途上顯現」と同じ象徵主義を續けてゐる。彼は凄まじい夢魔の闇黑からは逃れたけれども、彼に萠し初めた熱烈な愛他の精神は、なほ動かし難い生の惡寒に裏切られてゐる。一方、今は理性の統率に依つて、彼の放恣な幻想は象徵的な喚起力を發現し來ると共に、その熱意の哀しみ、希望の苦しみは沈鬱な雰圍氣をこの詩作に充たしてゐるのである。玆には「途上顯現」の個人的な心象よりは更に廣い社會的な地平が展け、彼の思想の疾驅は制約を緩くした自由詩によつて豐富な情趣を放つてゐる。ヹルハアレンに幽玄の感觸を求めれば、この一卷に就いて知らねばならぬのである。

「水を行く人」がある、蘆を口に啣んで、彼方に呼ぶ「者」の方へ流れを溯らうとするのである。彼は疲勞に昏迷し、櫂は波に淩ひ盡された。河岸の窓や時計臺は大きな目を剝いて、彼が無爲の努力を睨んでゐる。けれども彼は一圖に、神ぞ知る時の爲に、口なる青蘆を放たない。墓地には、水松と白楊との間に、「墓掘り」が大地に穴を穿つて、己れの悲慘の屍を投げ入れ投げ入れしてゐる。破れた英雄主義、純潔な思想、愛又罪を震へる手で埋め隱してゐる。…路上には刻苦の「鍛冶師」があつて、焔を浴び、火花に取り捲かれて、幾年とも知れず熱鐵を打つてゐる。その火床の中へ、彼は、執拗な叫び、鋭い世紀の憤怒、

激昂、反亂を投げ入れて、烙印と光りとを與へんとする。魂の鋼鐵を力一杯に打つて生の純粹なエッセンスにまで錬へんとする。鍛冶師の希望は疑惑へも落膽へも曲らない。彼は單純な倫理が人類の調和を發見すべき將來をひたすらに夢想してゐる。その時こそ《人はもはや他に向つて咬みついて已れの權利を固める餓ゑた狼ではない。未だ力の知られなかつた愛が深い優しさと裸の慈善とを以て咸に均しい歡喜を齎すであらう。とする熱誠無私の宥に、金で膨れた嚢は逬裂するであらう。宮殿も銀行も勘定臺も曖昧屋も消え失せるであらう。驕慢が亡びん時、人が、一個の不滅の魂として已れを永久ならしめんとする唯我的な努力を事とする代りに咸に向つて銘銘の境遇に應じた生活を寄與せん時、凡べては單純で明らかとなるであらう。如何なる本にも未だ豫想されなかつた言葉が、複雜暗黑に見えるものを說き分けるであらう。——して、物質も恐らく、何が神であつたかを告げるであらう。》この同胞の信念に燃えて、耐忍と沈默との中に、彼は金敷の上に重い鎚を振つてゐる。誠に、この蠱の洞にまじろがず、人道の思ひを錬る工人はヱルハアレンの姿ではないか。…村の溝の邊りには、「綱製り」が後退りしながら綱を紆らせて、幻覺的な薄暮の奧に、地平線を無限に引き寄せてゐる。突如、地平には昔時の映象が現じた。

Jadis—c'était la vie errante et somnambule,
A travers les matins et les soirs fabuleux,
Quand la droite de Dieu, vers les Chanaans bleus,
Traçait la route en or, au fond des crépuscules.

昔はさすらひの夢遊的生活であつた、
傳說的な朝又夕で、
かかる時神の手は碧やかなカナンの方へ
黃金の路を付けたのである、薄明りの奧に。

昔は偉大な激越な生活であつた。奔馬の上に廣漠の中を荒れ廻る生活であつた。熱烈な幻想の生活であつた。天の白十字地獄の紅十字が各各血を浴びて、物狂ほしい死の榮光を頭に戴く時であつた。又、地平には過ぎ行く現代の姿が映る。茲には科學の努力が神の虛無を照さうとして燃え上つてゐる。精密に檢べられた思想が、蒼穹は無機物のエエテルより成り、死は硝子壜の中で實驗されることを證してゐる。茲には工場があつて、濃い赤熱の物質が洞穴の中で、夜と時空とを吸收すべき新奇蹟を現ぜんとしてゐる。又夕陽の空に

は未來の希望が輝く。彼方には夢想と智識とが二つの階段から同じ高所を目がけて攀ぢてゐる。撞著と背馳とは消え去り、疑ひはその閉ぢた掌を開く。時間といふ斷片的な法則はエッセンスの中に融合する。凡べての魂は自己を神と創造する。かかる樂しい幻覺と共に夜の平和は降つて、星座は空氣の灰の中に希望の石炭かとも煌き出る。…河の上には漁師達が穹窿の星の啓示を見ん術も知らず、頻りに網を打つて悪運を曳き上げてゐる。霧に包まれた彼等の寥しい姿は限りなく詩人の胸に迫る。《彼等の夜に、互ひに呼び交し、互ひの聲に慰め合はぬとは！》この光景は誠にヹルハァレンの魂を苦める社會の惱みである。

この象徵詩集は麗はしい筆觸で幽妙の致を描いてゐる。《水の髪をした》雨、《三百路の交叉街》を行く風、《貧しい羊毛》の雪、之等の自然を浴びて消え且つ浮ぶ影像は無邊の寂寞の中に伸び上り、超自然的な壯重を以て夢幻境を往來し、不可言物の默示がこの小世界に磅礴してゐる。これらの詩に、ヹルハァレンは、幼時の荒唐な想像力と特殊な審美感とを取り入れたのである。《彼の幼時はフラマンの野外、エスコオの岸邊、帆や船や堀割の間に過ぎた。サン・タマンの地は風車、籠編み、綱綯ひ、舟行の國である。霧、氷雪、牧原の溢水多く、時には村落まで汎濫を蒙る海緣國である。わが詩人は最初の強い印象を茲

に受けてゐる。》——ボィレエ・グリッファン。之等の周圍から受けた印象は甚だ彼の個性と密接な關係を生じ、この詩集では殆ど自己の複雜な生面として表されてゐるのであつて、外的な相を失つて、彼の內生の姿と成り、自發暗示とでもいふべき匂ひを放つてゐる。同時に形式としては、極めて多樣な韻律が清新な曲調を錯綜轉轉せしめて、表現の自由を手に入れてゐる。

ヹルハァレンの戯曲

ヹルハァレンの劇は、彼が道すがら殘して行く里程標である。彼の事業の一段落としての紀念碑である。彼が打ち立てる造營の樣樣な見取圖である。

斯くて、「僧院」（一九〇〇）は「桑門」に表された印象と思想との綜合的再造に外ならぬ。聖女を、胸に祕めた戀人のやうに懷しむ優しい僧、何も會得が行かず、ただ漠然と神聖の氣に打たれる單純な僧、神と基督とに鬼胎を抱く野蕃な僧、神の世界を己れの領土として征服せんとする封建的な僧など、「桑門」で種種相として現れた人物が、茲では互ひに影響し合つてゐる。彼等が爭つて希む僧院長の座は神の愛に最も價すべき高い知識の象徵でる

あ。老院長はバルタザアルといふ僧に後任を託したのであるが、この僧は元來父を殺して、正義の裁判を免れんが爲に僧院へ逃げ込んだ者で、常に良心に責められてゐる。彼は衆僧に告白して罪を許された、彼は猶、寺法に背いて人民の前に告白する。彼の心は絶えず悔ひ改めねば魘はれるのである。初めは正義を恐れ、後には正義を感得し、更に正義を以て己れを鞭つことが唯一の逸樂と成る。告白を以て罪を贖ふ神聖な精神も常に人間的狂熱の外ではないのである。

「曉」(一八九八)には、彼の社會思想が「觸手ある都會」を舞臺として顯然と表明されてゐる。ヘレニアンといふ新思想家が過渡期の先覺者たる道に殉じる。やがて、都會の劇しい相尅的葛藤の上には和解の氣運が動き初める。けれども、新しい日を迎へる爲には大破壞が先だたねばならぬのである。この劇には現實と夢想境との間に、甚だ定かならぬ革命主義が强調されてゐると同時に、最も劇的な光景も調子はづれの印象に終つてゐる。

「フィリップ二世」(一九〇一)に、ヹルハアレンは伯耳義の歷史に異彩を放つ人物を捉へ來つて、カトリシスムの裏面を示す。無慈悲凶惡な禁欲家フィリップ二世と、悅樂的情熱的な又飽き易い民衆の友ドン・カルロ。この、飾りを交へぬ烈しい對照は、人生に相伴ふ二極

端、生活欲とその壓力より生ずる狂的な意志とを意味する。この劇では、沈默の場面が、フィリップの冷酷な精神にふさはしい劇的効果ををさめてゐる。然し全體に簡略に過ぎて、十分な展開を見てゐない。

彼の劇は散文と自由詩との混合であつて、平靜な散文の科白が場面の緊張に連れて自ら奔放なリヅムを以て激して來る。元來、彼の劇はその詩作との間にさして區別がなく、劇そのものの實現が目的ではないのである。彼の詩が總體、叙事詩的、戲曲的であると共に、彼の劇は、その詩に於いてするよりか更に複雜な抒情を秩序あらしめる爲の樣式に外ならない。彼が劇に於いて提出する問題と人物とは、對照の豐かな、効果の多い象徵として存在するに過ぎないのであつて、漲溢に生命を見出だす彼の熱情、高潮に於いてのみ十分に發揮されるその才能は、常に中心を抒情に置いてゐる。

宗教的、社會的、國民的な三戲曲の後に、彼は前の諸作よりも一層調和に富んだ「スパルタのヘレン」(一九〇八)を出した。藝術は常に廣い調和の大道へ出なければならない。之は甚だ古典藝術の趣ある運命悲劇である。

あらゆる男性に血を沸かせ、絶えず葛藤、暗殺、戰爭の原因と成つたヘレン、この女王

が、トロイの戦終へて、老王メネラスと共にスパルタへ歸還するところから舞臺は始まり、アトリイド家の血腥い傳說は始まる。時は、優美な文明の希臘ではなく、風俗紊れ、兄弟相鬩ぎ、婦女相戀し、正に人道の嵐來らんとする頽唐期の希臘である。淨らかな眼差、おだやかな會話の何一つ知らず、常に挑まれ常に奪ひ合はれるヘレンは、情慾に圍まれた生活に憊れ惱んで、今は已れの美を厭ふ。斯くてメネラスに汚れた情熱の中から救ひ取られたヘレンは、夫にかしづき、靜寂な家庭のランプの火影に老いんことをしか願はない。けれども地上に超自然な美を享けた者は神神の嫉みに呪はれる。美は平和な幸福である術がないのである。肉身の兄弟カストオル、仇エレクトルすら、共に彼女を抱擁せんと爭ふのである。彼女の夫とカストオルとは暗殺され、彼女は又も一片の餌のやうに情慾の渦中に投ぜられんとする。ヘレンが漸く逃れて森の奥深く入つた時、繁みからはフォヌ、川からはナイアッド、山からはバッカント等の妖精が現れて、彼女を惱ます、大地すらも彼女の美に無關心ではゐない。（ヱルハアレンは茲に萬有神敎的な希臘思想を取り入れてゐる。）地上に隱れ家の無い彼女は、今は死を以てゼウスに祈る。突如、地は大變動に碎け、青やかなエエテルの中に出現したゼウスは傍らにヘレンの座を與へる。かくて、この奇蹟的な破

壞と出現とは希臘の上に輝き初める新しい生命の曙光である…

ヱルハアレンの全力を傾到する所は、抒情の昂揚によつて、人の心を氣高い至明の境へ連れ去らんとする非肉感的な精神にこそ存する。排情慾は、その可能と不可能とに關らず、彼が畢世の熱意である。向上の生に深く志す者は、暗い自然の支配に絕えず打ち勝ち、絕えず精神の高さを進めねばならぬ。唯我的な所有慾の要求に括られる者は自然に負けた者である。本能が發達して精神に向ふ力こそ、ヱルハアレンにとつては最も强い力である。而して、彼の認識に依れば、貴族的ではなく平民的、唯我的ではなく愛他的に向ふ力こそ、至難な、けれども最も完全な力である。彼には愛慾の詩が皆無であると同時に、所謂戀愛劇も無い。彼は何にもまして純粹を愛するのである。

生活頌歌

汎神的感性（生命の相似）。——「觸手ある都會」に社會的であつたヱルハアレンの觀念は、更に深い內生の燃燒に依つて、事象に卽することを自ら離脫し、更に寬やかな生命の流れ

に出會つた。斷片的な現象の奥には常に一貫した性質があつて、透底の眼識に認められるのを待つてゐる。今、ヹルハアレンは事物の變態を通して永久の法則に觸れ來らんとするのである。彼の熱情は到る所强い刺戟に打ち錬へられて、豐滿な識域を贏ち取り、充實した聰明とまで價値を轉じ來るのである。外界へ撒き散らされた豐饒力は、擴大された自己と成つて收穫されんとする。熾烈な完全炭の炎は、今や完面體の結晶を生ぜんとする。感觸より結想へ、赤熱より白熱へ、燃燒より融會へ、漲溢より調和へ。かかる轉成の要期に當る「生の面」（一八九九）は未だ暗い社會思想の空に將に明けんとする曙の匂やかさを漂はしてゐる。この爽かな明暗の故に、この一卷は後の大作にも増して味はるべきものである。

多くの抒情詩は魂の或る心憎い狀態を歌ふ。ヹルハアレンの韻律は之に比べらるべき由を知らぬのである。彼の韻律は、常に動搖し常に感激する彼の生活から迸り出る大息である、渾身の生動である、全部の漲溢である。緊張の苦痛と漲溢の逸樂とに、彼の言葉は猛るが如く狂ふが如く躍つてゐる。時には、彼の詩は眩暈の味ひに醉ひ痴れて、われ知らず蹌いてゐる。彼は誠に己れの生活を以て藝術を創る者である。今、彼の經過發展の道を見るに、之を、搖られ搖られつつ擴がり行く一の渦紋にも例ふべく、常に前進せんとする擧

動を以て、個人的な圈より社會的な圈を描き、又更に世界と相似形の全圓を形づくらんとするのである。斯く、彼が次第に廣く感受性と思想とを開放するに從つて、彼の擴大された認容力は、何物も孤立した外面に盡きてはゐず、何物も靜止した生を營んではゐずして、烈しい共存關係の律が彼をして萬物交感の干滿の中に絶えず流轉せしめてゐることを、次第に深く識得するのである。「生の面」はもはや斷片的な心象の集合喚起ではなくて、離ればなれの環を續ぐ、眼には見えねど存してゐる連鎖關係の探求である。この詩集は、遺憾なく大詩人の風格を備へ來ると共に、瞑想的な題材に充ちてゐる。殊に玆に豐かな發露をなしてゐるのは自然に對する感性である。潑剌とした詩人の呼聲に、自然はさながら息吹き入れられたもののやうに、永い眠りから覺めたもののやうに、鮮かな光りを放つて詩人の大自觀を射映する。風も海も山も地面も森も生き生きした擧動によみがへる。

「山」は啻に地球の瘤でもなければ膨らんだ景色でもない。嵐が坂の上にそのまま石と凝つてしまつたやうな大岩塊の堆積の下には、原子と微塵との微細で而も巨大な生活が化成しつつある。鑛物と水脈とが沈默の内に兀兀と隱れた努力を爲しつつある。或日、彼は炬火をかざして山腹の窟に入ると、忽ち酷烈な自然力が彼に迫つて來る。彼の魂は萬物交通

の交叉點に立つ凄まじい鏡と成つて、《土と岩と火と夜と森と又彼の思想と皆實質を同じくしてゐる》ことを映す。又、數世紀を疊んだ岩層は、過去も未來も現在に蓄積され發現されてゐることを漠然と明す。《私の魂は自らであるに苦む。私の魂は宇宙を要約する極烈の魂と擴がつた。生と死との上に一つの同じ面が漂つてゐて、私は更にそれ等の見分けが付かなくなつた、凡べてが私に現在を以て見えた。》

「森」は宛ら運命と進化との姿である。見よ、《今日、數千年の森は唯一の鳥の領土として、朝夕の火の薄明りに水に影を漂はしてゐる》。此のゴルゴンのやうに奇怪な樫を何時植ゑたと傳へ知る人も無い、彼は無始無終の「生」のやうに永遠である。季節のまにまに、夢を織り夢を解き、かくて力の永久更新を繰り返しつつ、森は擴がつて行く。昔、神神が世紀又世紀に風や空へ投げ出したものが梢を輝かしてゐる。花の裝ひをした一隊が小鬼のやうに樂音のやうに葉隱れに踊つてゐる。數知れぬ蟲や鳥が花に葉に枝に懸かつてゐる。森全體がまるで七花八裂して飛び舞ふ豐盛な交響樂である。この協力生活の合唱を、心ある者は唯鳥の領土として見過す勿れ。過去と未來とを廣く濃く含有せんとする者は、この森の繁榮に深い意味を感得せよ、

Multiplie et livre-toi; défais
Ton être en des milliers d'être.
複合なれ、汝を放て、
汝の存在を千千の存在と解きなせよ。

「墓窟」に入れば、死苦を超えて、生の面に執念の角を打ち込んだ英雄達の悲壯が彼に迫つて來る。玆の空氣は、死んでも死なぬ彼等の鬱積した意志、沈默した息を以て暑く喘いでゐる。さながら、彼等の不拔の精神は埋葬に生き殘つて、已れ等の悶爭を「永遠」の尺度で測らしめんとするもののやうである。《感ぜよ、喜びの滿潮苦しみの干潮がこの雰圍氣に漲り、「死」を熱してゐるのを。》と詩人は叫ぶ。

浪打つ「群集」の中に彼はふと已れの心が綜合され統括されるのを感じる。凡べての打算が熱に浮かされたやうな狂氣の中へ捲き込まれてしまふ。

Et tout à coup je m'apparais celui
Qui s'est hors de soi-même, enfui

Vers le sauvage appel des forces unanimes.

忽ち私は自己の外へ逸して
全動の力の荒い呼び聲に
引かれる者を現出した。

して、彼は、未だ味ひ識らぬ無上の醉ひと大きな生活力とで己れの存在が擴充され、この瞬間、何物かを發現させるのも壓服するのも己れの意の儘なるを覺える。是れ、群集の複合された大威力である。

Un vaste espoir, venu de l'inconnu, déplace
L'équilibre ancien dont les âmes sont lasses,
La nature paraît sculpter
Un visage nouveau à son éternité;
Tout bouge—et l'on dirait horizons en marche,

未だ意識に上らなかつた或る廣漠な希望が
皆の飽き飽きしてしまつた古い平衡を破る。

自然はその永遠性へ
一つの新しい面を刻んだらしい、
凡べて動く——まるで全地平の行進だ。

《流れに沒する一波の如く、無邊際に紛れ去る一羽の如く、潜り入れよ、汝、わが心、之等群集の底へ…》而して、變態的な群集心理を強く濃く味ひ、それらをとり縛つてゐる漠然とした法則を《突如、電光のやうに、汝の内に燒きつけよ。》と詩人は疾呼する。

之等多面多層の變態から、ヹルハアレンは如何なる唯一根本義を贏ち來るか？

開卷第一の「埠頭」に、彼は、風と光りとに行き交はれる宇宙の遊戲から活動の倫理を讀み取つてゐる。

Mieux vaut partir, sans aboutir,
Que de s'asseoir, même vainqueur, le soir,
Devant son oeuvre coutumière,
Avec, en son cœur morne, une vie

Qui　de bondir au delà de la vie!

到達せずして更に出立(いでた)つに如かぬのである、
習はしと成つた作物を
爲遂げて、
もはや生の彼方に跳躍することを絶つた生活の内に、
心鬱して、暮方、坐してあるよりは!

この向上の願望は壓迫し來る四周の平凡力と常に闘爭せねばならぬ。喜びの飛鳥は人間の頭上遙かを翔り、我等には影をのみ落して、その捉へ難きに苦ましめる。けれども苦痛が何するものぞ! 苦痛こそ反つて我等の力である。何故ならば、《生活と苦難とは同一であつて》、呵責の奥にこそ優しい笑ひはあるのだ。《我等は皆各の十字架を抱く基督である。》然らば、

Nourir, avec ferveur, les angoisses pro〔f〕ondes
Dont s'effare l'instinct, mais dont vibre l'esprit.

感激を以て、深い苦惱を養へ。
そこにこそ、本能は怖(お)ち戰(をのの)くとも、精神は撥動する。

《最も麗しい力は泣きつつ屹然として、莊嚴必然な苦みの中へ直歩する力である。》

Aimer le sort jusqu'en ses rages.
運命をその嵐に於いてまでも愛せよ。

たとへ凡べて破碎に終るとも、

Quand même—et claire encore de l'effort vain.
けれども、なほ——空しい努力を以てしても透明なれ。

ヹルハアレンのこの意志は常に宗敎的である。《凡べての誇浮を振ひ落さんとする》者の意志である。《默默として犧牲を甘受する者》、《幸福を去り、畏怖を欲し、好んで動搖の中に殉道的生活を爲す者》、《己れの渴きを飲み、己れの饑ゑを嚙む》者の意志である。時には、

Lassé des mots, lassé des livres,
Qui tiédissent la volonté,
Je cherche au fond de ma fierté
L'acte qui sauve et qui délivre.

意思を生温(ぬる)くする
言葉に飽き、文字に飽き、
私は己れの自負の中に
救濟の行ひ、解放の行ひを求むる。

して、《私の採らうとする行動は、暸(あき)らかな廣い人道の洗禮に浴つてあらねばならぬ、咸(みな)に全力の眞摯を示しつつ、至上の飛躍を以て善良の域を押し擴げつつ。》この焦躁は、生を最もよく生きんとする熱情の餘りである。

O vivre et vivre et se sentir meilleur.

おお生き又生き、して自己を醇化せんには。

而して彼の待望、彼の夢想は常に個人的ならずして種族的、人間的である。

Et je songe, comme on prie, à tous ceux
Qui se lèvent, héros ou Dieux
A l'horizon la famille humaine.

私は想ふ、祈るがやうに、
人族の地平に、英雄にまれ
神にまれ、立ち上らん者達を。

けれども人類思想のバベルはいつも空しい幻滅へ折れ砕けてしまふ。如何なる勇敢な探求も謎の海に難破してしまふ。《それは、全自然がいつかは、未だ知れてゐない強力な坩堝の中に微妙な物體を綜合して造るであらうところの者が未だ生れぬからである。熱烈にして優美な種族が未だ最深奥所まで千千(ちぢ)の根を張り擴げないから、かの待たれる花が咲かぬのである。死んだ過去が意志の全緊張を固く繋いでゐるから、精神が充實した力を發してその新眞理の境地(ミリウ)と適應する術を知らぬのである。人が、己れの内に搖さぶつてゐる未

來の眠りをよく覗き足りないから駄目なのである。》

かくて、詩人は《甚だ單純深奧な唯一法則の兩手の中へ、我等の精神と世界とを合せてしまふ》ところの《靜かな革命》を待ち望みながら、《生れんとする奇蹟》の傳令使として疾驅呼號してゐる。超人族を說き去つて、詩人は更に「ツァラトゥストラ」の哲人と同じ永遠回歸の運命觀を最も大膽な進化說に入れて歌つてゐる。世界生動の全一致の日に、諧調な世界呼吸のゆらゆりで彼の死は絕對意識として甦生するのである。

Mon être entier sera perdu, sera fondu,
Dans le bassin géant de leurs tumultes,
Mais renaîtra, après mille et mille ans,
Vierge et divin sauvage et clair et frissonnant,
Amas subtil de matière qui pense;
Moment nouveau de conscience;
Flamme nouvelle de clarté

Dans les yeux d'or de l'immobile éternité.

私の全存在は騷擾の大海に
沒し去り融け入るであらう、
けれども甦るであらう、千又千の年の後に、
純粹に聖らかに猛く明るく打ち顫へて、
もの思ふ物體の微妙な層と、
新しい意識の時と、
不動の永遠の黃金の眼に
光り射す新たな炎と。

全一致の實現(世界生動)。――彼は萬象に生活本能の發現を見、己れの印象の統一によつて世界汎一の生命觀に屆くのである。多樣な法則を貫く一元の力を識るのである。「生の面」に世界を雙關的に觀じ來つた詩人は「騷擾の力」(一九〇二)に異物の同向運動が完き一致に於いてあるを歌ふ。境遇と時代とに同意する點に於いて、ヹルハアレンは現代人の極致である。何故ならば、その同意は、極點に於いて、卽ちあらゆる力の發露に於いて、現實

の無邊擴大面に於いて、肯定された、底意の無い熱情だからである。この純粹な熱情の圏に現實界を轉置して數へ上げたのがこの詩集である。卽ち言葉の矛盾に陷らない範圍で、この詩集は可能界の寫實である。然らば、何故、現實界に對して斯かる世界を打ち立てるにヹルハアレンが心意を傾倒するかを尋ねるに、恐らく之は彼の激越な信仰欲及び藝術熱から來てゐる。彼は至つて社會的傾向の强いにも關はらず、實際社會に沒頭して自己の分裂に坐するには餘りに理想的な性質を享有してゐる。かかる理想家にあつては自己の理想に適ふ世界、卽ち自己と相似形の世界が是非とも必要なのである。彼の可能界は恐らく哲學的認識の結果ではなくて、信ぜんが爲に造られたものである。又、元來、藝術家が、生活の接觸滿足的な快樂を賭してまで、藝術の醉ひを選ぶものは、斷片的な現實生活にあきたらずして、すべて全部の意識にまで歸納せんとする止み難い完成欲の故である。當面の事實は素材として貴重なものである。然しながら、彼の希むところは常にそのあらゆる可能性の發見にある。而して、その意識の透らぬ隈も無い境地をこそ再現せんとするのが藝術の本能である。して、かかる境地は藝術家の個性と相似形の世界でなくて何であらうぞ！ヹルハアレンの可能界は、彼の藝術的認識と精神的熱情との特に濃密な合致によつて成立つて

ゐる。思想家が如何なる價を棄てても統合せんとする世界に、藝術家が如何なる價を拂つても貫かんとする世界は盡きてはゐないのである。多くの思想家がその全力を空しく竭してしまふ《世界の女王、勝ち誇る必至性》に藝術家が反つて美を汲み取る場合の多いのは興味ある問題である。純粹な藝術家は物を解剖的に見ることの、已れが選んだ職分にふさはしからぬを會得してゐて、事物を全體として最初から感じる故に、哲學家の囚はれる二元の桎梏は、藝術家には反つて對照の妙を成してゐて、創造力の契機と成ることが多いのである。然り、藝術家にあつては止み難い創造の念が根本として重きを成してゐる。「ツァラトゥウストラ」に悲劇的雰圍氣を構成してゐる必至性の認識と自由精神とのディレンマもヹルハアレンの前には平行した軌道のやうに一路として現れるのである。ヹルハアレンの生活本能にとつては、認識が肯定といふ大きな意味の中へ包含され、必至性が力といふ一元に貫かれてしまふのである。

Mais les plus exaltés se diront dans leur cœur;
《Partons quand même avec notre âme inassouvie,
Puisque la force et que la vie

Sont au delà des vérités et des erreurs.)

けれども至上の感激者は心に云ふ

(出で立たう、かくてもなほ打ち勝たれぬ魂を以て、

力と生とは

眞理や誤謬を超越してゐる故に。)

必至性は精神を磨く金剛砂としてのみ、向上の刺戟としてのみ、至高の價値を認められる。《悲痛と煩悶とにも關らず、謎と闇とに挑戰するより高きはない。》

活力のあるところに常時現れるこの爭鬪はヱルハアレンにとつては、外的な障礙に對する內生命の突破を意味してゐる。無意識界の抑壓に對する意識の抗爭である。暗い不感無覺に對する明るい潑剌たる心情の獨立運動である。運命を識域に引き入れんとする精神である。自然の支配に超越せんとする自由の憧憬である。この故に《人は絕えず己れに超越せねばならぬ、己れ自らの驚異であれ》。詳しく云へば、吾人は意識の極端に立ち上つて、廣く目張つた眼を無意識境へ向けてゐねばならぬ。私達は自分の觀念の範圍で動いてゐる。その範圍から常に一歩を踏出さんとしてゐねばならぬ。識域のはづれにかかる隙(すき)の無い姿

勢を取つてゐる者こそ文明の先驅であり、又健全な生の享樂者である。何故とならば、人生の目的は文明にあるのであつて、而して上述の境地にある者こそ人類の弱小と無意識界の偉大とを深く感じ、文明の勝利を希む精神をいよいよ高めるからであり、又かくて、常に「不可能」を目がけて攀ぢ登り、《運命の意志を漸次人の意志と》轉ぜしめんとする至難な飛躍にこそ、人生最大の喜悅が存するからである。かくして、《英雄、學者、藝術家、傳道者、冒險家は各各神祕の黑い壁を貫く。彼等の共同一致にして大孤獨な勞力に依つて、新人は宇宙全部を己れの內に感得するのである》。かかる將來には、

L'homme dans l'uivers n'a qu'un maître, lui-même,

Et l'univers entier est ce maître, dans lui.

人は宇宙に於いて一の主(あるじ)をしか置かぬ、それは彼自身である、

全宇宙は人の內に於いてこそ主である。

卽ち何物にも繫がれず、何物をも繫がぬ自由完成でなければならぬ。

Car vivre, c'est prendre et donner sans lui.

生とは縱（ほしいま）まに取り縱（ほしいま）まに與へるにある故に。

かかる自由主義は、之を要するに、唯物主義に外ならない。物質に於いて常に動搖し常に活躍する根本のものはエネルギイである。ヹルハアレンの精神の解釋はエネルギイの原則と何の軒輊矛盾も無いのみならず、正しくそこから發展した力の方向を意味してゐる。何物も洩れなき徹底唯物觀である。

...la vie est une à travers tous les êtres

Qu'ils soient matière, instinct, esprit ou volonté.

…生は全存在を通じて一である。

物質にまれ、本能にまれ、精神にも又意思にもあれ。

故に、彼にとつては、動いて止まぬ活力は生そのものの本質である。

Changer! monter! est la règle la plus profonde.

變化！ 向上！ は至極の法則である。

《動きの無い現在は世界の誇りを測定するコンパスとは成らぬ。》《昨日目的であつたものは明日障礙と成る。》然らば、《半途に止まるものはやがて途に迷ふのである》。

かかる思想は多くの近代學說に助けられてゐるのは無論であるが、彼は之を枯淡な認識によつて偶然に贏ち得たのではなく、その先天の深い泉から汲み來つたのである故に、潑剌たる情感として韻律を以て迸るのである。彼が一九一一年エルンスト・ルドキッヒ・シェレンベルグに送つた手紙で、自ら述べた通り、《惟ふに、自分の判斷し得る限り、私は故らならず自發的に、力の詩を實現せんと努めて來た。私の最も憂鬱な作物(夕べ、沒落、黑燿(のうちにさへ、當時激昂、狂熱、憤怒に轉じてゐたこの力は、始終その反對、薄弱を排した。次いで、厭世の念が私を去るに從ひ、この力は自他又自然に對しての熱情、亢奮と成つた。常に高揚しつつ、この同じ力は「複合の眩耀」に於いて歡喜に向つて凝聚したのである…》

「騷擾の力」には、その題の示す如く、あらゆる地球の努力が歌はれてゐる。科學、藝術、舊觀を棄てて新たな夢想に代へんとする亢奮、勞働、歐羅巴の世界的濶步等、各自の理想を樹立せんとする現代の大騷擾が玆に轟いてゐる。それらの中には惡夢があり、矛盾があ

り、醜があり、俗がある。それらが何であらう！　それの不撓な奮激からは偉大な美が、大變動の壯觀がおのづから發してくるではないか。

Le siècle et son horreur se condensent en elles (les villes)

Mais leur âme contient la minute éternelle.

世紀とその淒慘とは都會に密聚する

けれども都會の魂は永遠を刹那に籠める。

近代科學の不斷の攻究は既に拵へものならぬ幾多の確實を齎した。《ファウストの叫びはもはや我等のものではない。》《全世界は科學者達の頭腦によつて再考せねばならなくなつた。》詩人の豫感は更に一步を進めて、他日《人の知るであらうところのものを既に信じるのである》。《昔は凡べての無意識界には神神が群つてゐた。》次いで唯一の神が力を壟斷した。けれども認識の擴大するに連れて、神の威力は勢ひ薄れて行く。《神神及び神は無用に歸してゐる、と、ヹルハアレンは一九〇七年メルキュウル・ドゥ・フランス誌に意見を寄せて云ふ、今日、西洋人達はそれらを要としない、久しくより、彼等の思想の大改革はこの點に存する。最初こそ、そこに意識の平衡は破れたれ、漸次、新しい秩序が舊來の

ものに代つて來た…》是までは宇宙の現識が非直接的なものに養はれて來た。然しながらもはや、《統合世界は我我の内に存するのであつて神神の内にではない》。今日、人は自力で進む、而して、現實世界と吾人とのもはや隔てのとれた接觸は、日に日に吾人を向上せしめる契機と成つた。人の内に目覺ましい性質が意識されて來た。自發的な活動力、發展の精神が之である。爾今、このカは何の顧慮もなく滔滔として漲らねば止まぬのである。或る人がエルネスト・ルナンに、神は存在するかと尋ねた時、《未だだ(パ・ザンコオル)》と答へられたと云ふ。ヹルハアレンは「科學」といふ詩の終りに斷じて云ふ、

Et s'il lui faut des dieux encore—qu'il les soit.

若し人になほ神を要するならば――人こそ神であれ！

斯くて彼の哲學は明確な圈を成してくる。人が運命を表現し神を體現する日にこそ、意志と自然との爭鬪も全く調和に一致し了るのである。ヹルハアレンの思想は間斷する所なき勇氣を以て全一致の透見に達した。

この詩集の卷末には、一絲亂れぬ交響樂の豐盛な轟きが見出される。レオン・バザル

ジェットが《藝術の奇蹟》と推奬した「海の上」がそれであつて、象徴と現實との境を縫ひつつ、永遠の波間を分ける人生の船と共に、人の心をして耳に聞えぬ管絃樂の中に浮び上り、漂ひ去らしめるものである。

Larges voiles au vent, ainsi que des louanges,
La proue ardente et fière et les haubans vermeils,
Le haut navire apparaissait comme un archange
Vibrant d'ailes, qui marcherait dans le soleil.
. . . .
Ainsi de siècle en siècle au cours fougueux des âges,
Il emplissait d'espoir les horizons amers,
Changeant ses pavillons, changeant ses équipages,
Mais éternel dans son voyage autour des mers.
. . . .

Il passe en un grand bruit de joie et de louanges,
Frôlant les quais de l'aube ou les môles du soir,
Et pour ses pieds vibrants et lumineux d'archange,
L'immense flux des mers s'érige en reposoir,

Et c'est les mains du vent et les bras des marées
Qui d'eux-mêmes poussent en nos havres de paix
Le colossal navire aux voiles effarées
Qui nous hanta toujours, mais n'aborda jamais.

大帆を風に、讃歌の如く、
熾んなる船首(みよし)、紅の檣索(はしらづな)、
高らかな船は現れた、さながら大天使の
翅を鳴らして日に歩む如く。
. . . .
かくて年の荒く流れる世紀より世紀に、

彼は苦い水平を希望に充たした。
旗印を變へつつ、船員を變へつつ、
けれども旋りめぐる航海を、絶えず。
・・・・・・・・。
彼は喜びと讃歎との響高く過ぎる、
嶋の埠頭、夕べの繋りをよぎりつつ。
して、その鳴り輝く大天使の足に
豐かな滿潮の海は休息を捧げる。

風の手又汐騷の腕は彼等の内より
我等の平和の港に之を押しやる、
我等にいつも現れながら岸に著かぬ
かの驚歎の帆の巨船を。

（すべて引用句に付けた拙譯はほんの意味を傳へるだけに止まつてゐる。ヹルハアレンの詩才は是非原句に就いて味はれたい。）

賞歎の倫理。――（人は世界造營の一斷片である。彼は、己れが部分を成してゐるところの全部に就いて意識と智慧とを持つ。彼は己れが包容され、領されてあるを感得すると同時に、自ら包容し、領する。彼は、一種の奇蹟力に於いて、その祖先が信じ來つた彼の肉身の神と成るのである。思ふに、この種の人力の不羈に對して、抒情の感激が永く沒關心に止まり、しかく廣汎な偉大の光景を頌ふるをなほざりにして置き得ようか？ かかる時に當つては、詩人は己れの見聞想察するところに身を委ね盡して、新しく打ち震ふ作品を心と腦とより生ぜしめるに如かぬのである。）（ヹルハアレン。）彼は外界より内生に向ひ、更に現實の世界に對する可能の世界を打ち立てた。之は斷片的感覺を全部の意識に統合する大造營であつて、渾一世界の觀念的創造である。かかる世界組織の中心たる魂は何であるか。「複合の眩耀」（一九〇六）に至つて、この新宇宙の根本倫理が確定されるのである。「騷擾の力」に生の躍動が歌はれた今は、潑剌たる心情を以て至上の感動に生きる者の信念が告げられねばならぬのである。

我等が他と共鳴するのは常に我等が他と觸れる程度に應じてゐる。我等は宇宙を完全に識らんと欲すれば、我等先づ宇宙と絶對的に同化するだけの全生命力を發せねばならぬ。

縦まに取らんとする者は縦まに與へ得ねば駄目である。然しながら、吾人が自然の法則に繋がれてある限り、吾人はこの法則に迫られた愛、卽ち主我的な愛にしか達せぬのである。縦まに與へるとは何を意味するかと云へば、何人も愛の觀念に想到するであらう。必然の理として、かかる愛には要求が伴つてゐる。我等は生の意義を積極的に於いて肯定する以上、自然に征服された狀態であるところのかかる限られた愛を免れねばならぬ。自己を保存する程度に依つて縦まに與へる程度は減殺される。自己の保存は己れに超越する精神の者にあつては、活力を全く消極に費すに過ぎない。相對境を絕對化せんとする我等は評價の念を超絕價にまで進めねばならぬ。內生命が常に自由を得ん爲には常に主我的な限界を飛び超えねばならぬ。かかる、必然の要求に全然左右されぬ愛の喜びを、ヹルハアレンは賞歎といふ。「複合の眩耀」の開卷第一に、

Admirez-vous les uns les autres.

御身等相互に賞歎せよ。

との辭が掲げてある。互ひに賞歎し合へよ、何といふ至難な境地であらう。如何なる境地とて是程完全な人を求める境地があらうか。けれども人は最も完全に成らんとこそ希まねばならぬのではないか。そして、極まりない嘆賞は、卽ち自己を擧げて愛を外に寄せることは、無限に偉大なものを見得るといふ意味に於いてしか自己を少くせぬものではないか。賞歎は反つて己れを大にし、己れを大なるものと相似形ならしめる祕鑰に外ならない。

Aimer, s'asservir; admirer, se grandir.

愛するとは己れを征服することである、嘆賞するとは己れを大にすることである。

故に、

Il faut admirer tout pour s'exalter soi-même.

高揚せんとするものは凡べてを賞歎せねばならぬ。

之は魂の問題である。抒情の人は己れの個性を射映せぬ境地に就いて眞理を求めるものではない。ヹルハアレンの哲學は感動を以て生命とする。彼は感動の最も純粹な頂點へ到達して、この抒情的眞理を靈感したのである。賞歎の中に超越的な自由を識るこそ、彼に

とつては理解に上越す明達なのである。近代主義を辿り來つた彼はその極致に於いて更に飛躍して、一の宗教的倫理に屆いた。この眞理、この倫理は彼の思索に就いて尋ねるよりも、彼の心境に就いて見るべきである。是非さるべきものでなくて、感ぜらるべく信ぜらるべきものである。彼はその性情として、常に好奇心以上の、或ひは觀察以上の單純高明な熱意を抱いてゐる。神は始終ヱルハアレンの心に忘れられてはゐない、神の存在が彼の頭腦に滅びて以來も、彼はいつも何物かに祈るが如き至上の敬虔と謙遜とを以て生に對してゐる。彼は人生に對する正教徒である、生を極力信じこそすれ、之を試みることは彼の遂に爲さぬところである。彼の幼時は最も深い感動を羅馬舊教から汲み取つた。（おお！如何に洗禮は私を優しさと熱心との内に銷魂させたことよ！　如何に私は神の傍らに近寄らんには貧しくふさはぬ身を感じたことよ！）

Je me cachais pour sangloter d'amour;
J'aurais voulu prier toute ma vie,
A l'aube, au soir, la nuit, le jour,

Les mains jointes, les deux yeux ravis
Par la tragique image
Du Christ saignant vers moi tout son pardon.

私は身を隱して愛に咽び泣いた、
私は一生涯を祈り暮らさうと思ひ詰めた、
曉方も暮方も夜も日も
手を合せ、眼に喜びを湛へ、
私に向つてあらゆる赦しの血を流す
基督の悲壯な姿の前に。

この幼年の篤い信仰は生の信念と形を變へこそしたれ、常に正統的な感激を以て續けられ、最も嚴肅な人生の敎儀、相互賞歎の願望と發現したのである。かくして、物に高い價、新たな光りを見出だすことは誠に人生の理想であり、無意識界を意識界へ推し移さんとする藝術の喜びではないか。

萬有交通の綜合境を全圓として闡明した人は必ずしも乏しくない。嘗、特にヱルハアレ

ンにあつては相互の關係が至つて能動的で、潑剌たる交感が絶えず彼の心情を撼かす。その影響の激しさが彼を間斷なく動搖せしめ、眩暈せしめ、陶醉せしめ、又、純粹熱烈を愛する彼に逸樂を以て世界と同化する大生命力を味識せしめるのである。この絶えず全部の力を牽引し合ふ相互の凝滯のない充實といふ感得が、彼にあつては特に深く濃くあればこそ、生ぬるい論理として現れずに、燃え立つ韻律と成つて爆發するのである。然り、彼には、哲學の認識と詩の熱情と、一見矛盾した二つの能力が甚だ密な一の相同性を形づくつて、分解することのできない抒情的思想が成り立つてゐる。この思想は要するに熱情の鋭い堆積に外ならず、常に噴火口のやうに熱火を貯へてゐるのであつて、その披瀝されるところ、彼は情熱の雨を降らさねば措かぬのである。この熾んな心境は賞歎の理想を得て、限りなく高い融會に達した。彼の汎神的感受性はこの詩集に、「我が家の周圍」、「喜び」、「木」、「風を頌へて」、「人體讃歌」等、豐かな抒情を授けてゐる。

（矮（わい）の灌木より巨大な太陽をまで、自然全部を私は無限に賞歎する。）一瓣一蕋、又麥の一粒、敬虔な愛を籠めずしては彼の手にとられない。

Je ne distingue plus le monde de moi-même ;
Je suis l'ample feuillage et les rameaux flottants,
Je suis le sol dont je foule les cailloux pâles
Et l'herbe des fosses où soudain je m'affale,
Ivre et fervent, hagard, heureux et sanglotant.

私はもはや世界と己れ自身とを別ち得ない、
私は潤やかな繁みである又搖れる枝である、
自分が青白い小石を踏み行く地（つち）である、
ふと私の心引かれる溝の草である、
心醉ひ又熱して、激して、喜悅して、又咽び泣きつつ。

彼は己れの修養せられた本能、卽ち魂に深くこの眩惑を感じ、專念一意そこに透つて、己れの存在を擴充する。

J'existe en tout ce qui m'entoure et me pénètre.

私は私を廻るもの、私に入り來るもの、凡べてに存在する。

この廓然たる自他同觀は生の大潮流に彼一個の存在を融合させてしまふ。彼にとつては、自他を隔てる我は限りなく小さく、我に入り來る存在の力は限りなく廣大である。然るに抑も、

La vie est à monter et non pas à descendre.

生は上るにあつて、下るにあるのではない。

彼はこの觀念をかざして、本能より出でて本能を超越せんとする人生向上の爭鬪へ、その日常不斷の英雄主義を傾注する。昔、神に對して感じた責任を、今は生に對して感ぜねばならぬ。坐して祈る代りに生を琢く活力を働かさねばならぬ。文明向上は吾人の修養された本能にとつて唯一の目的であり、而もその境地を創造するは懸かつて人類の雙肩にある。共存生命への責任の自覺、超自然の自由を過去の絕對境に求めずして、未來の全意識

に創造せんとする向上心、神にまで進化發展せんとする熱意、之こそ本能的賢者ヹルハァレンの敎儀である。

〔未來の步みの方へ同じ爭鬪を以て高揚し行く皆に於いて、己れ自身を熱愛せよ。〕狂氣の惱み、幻滅の苦悶、迷ひ、畏れ、待望、喜び、醉ひ、皆、一つ力の諸形式である。生活美は地を蔽ふ。〔賞歎は世界意識の槓桿である。〕

私はヹルハァレンの生の信念を宗敎的といふ。論理の曲げられぬ、物質的必然と精神的努力との一致した宗敎である。悲哀を守り繼ぐ宗敎ではなくて、底ひなき喜びを頒つ宗敎である。かの何とも知れぬ超絕時間に完全にして空虛な世界を創造した神の消極的福音ではなくて、充實した、常に新たな、常に擴まる世界を無限に創造せんとする人の宗敎である。彼は光榮を人に授け、人より世界の至福を受ける。

La joie et la bonté sont les fleurs de sa force.

喜びと善とは人力の花である。

常に留意せねばならぬのは、ヹルハァレンにとつては、詩を除いては、卽ち抒情を除い

ては哲學が存せぬことである。感激の中に、賞歎の中に、生の眞意義を體得したるこそ、ヹルハァレンの偉大である。彼の賞歎は彼が忠實に一貫し徹底せしめた己れの純粹性への驚歎に外ならぬ。おのれ自身が健全純一なればこそ、至明調和の世界を彼は見たのである。かくて少くとも彼は己れの眞理を發見した。故に、彼の生活美の世界を信じ得ぬ人も、彼の導くがままに明るい國を觀光して、高い生命に觸れ、淨い眞摯に打たれ、幼時衷心からお伽噺に感動したやうに、我を忘れて賞歎の情を發せねばならぬのである。

ヹルハァレンはたびたび同じ題材に就いて、感激を新たにし、更に綜合を密ならしめんとする。「複合の眩耀」に於いては、その詩の大半が、「生の面」、「騷擾の力」の中の詩と同じ境地に就いて歌はれてゐる。

（又、近代の目覺ましい共力の發揚は常に深く人間的現代的な彼の心を引かずにはおかぬ。彼は現代をその發現の全部に於いて頌へ、機械主義、黄金萬能、相尅する複合面を持つた「者」のやうに動搖する群集、科學、大都會、歐羅巴、征服等、凄まじい怖るべき威力に抒情の美を賦與してゐる。

（又、「詞」の歴史を語つて、言葉が全世界の律動に依つて作られたことを說いて、詩に渾

身を擧げて韻律を感じる彼の制作力を發露してゐる。（進み又過ぎ行く映象は咄嗟の言葉に要約される。或ひは荒れる海、おごる山、風の跳躍、雷のはためきに則り、或ひは女性の歩みの嫋かさ、眼の輝き、手のなさけに、或ひは超人の蹶起に、或ひは發情の嵐、狂熱の衝動に則り、凡べて動き擴がり破れ結ぶものに則つて、無限を一頭腦の中に捉へ、之を意識の新しい無限として、至高の生命を存せしめんとした）のが言葉の創造である。素朴單純な元始人の、世界に對する駭きは、詩人にのみなほ生ける觀念を傳へて、敎へられぬ韻律的表現を發せしむるのである。驚歎に於いて識るものは根源に於いて感じる。）

莊嚴な生。——次の大作「莊嚴律」（一九一〇）には權威ある生活の鑑例が示されてゐる。見えぬ鎖に繋がれた「樂園」の囚人の覺醒。

Eve voulait aimer, Adam voulait connaître.

エヴは愛さんと欲し、アダムは識らんと欲した。

己れの荒い力に飽きた「エルキュウル」が烈火に身を投じて、聲も高く歌ふ意志の歡喜、

《その歌はなほ鳴り響いてゐる》。

天馬を捉へんとして苦心する堅忍不拔の「ペルセエ」。基督の墓に眠つてゐた三日間を、超人間の努力を以て主の代理と成り、《靜かな英雄主義》を發揚した「聖ヨハネ」の誇り。潮のやうに羅馬になだれ入る「野蠻族」の大叫喚。至つて拙い結合であつたけれども、歐羅巴を擧げて初めて一致した「十字軍」。腐敗した舊教徒の壓制から、《皆の爲に己れを持して世界を救つた》「マルティン・ルウテル」。シックスティイヌの大殿堂の天井に《己れの心によつて人と世界とを再造し》、又更に飽くを知らぬ藝術欲に惱まされる「ミケランジュ」。その他、《世界語、「金」》、群集の反抗を事もなく威服せしめる帝國の「主宰者」、物質文明の「誘惑」の力、「都市」、「民衆」の壯觀、未來の神人への「祈禱」等が、豐滿な言葉、廣やかな擧動、大きな觀想、熱い心を以て歌はれてゐるのである。

之等の四詩集に至つては、もはや、孤立した個個の詩といふより、世界詩の數章とも云ふべき趣を備へて來た。ヹルハアレンの心境はその源を健全な感激力に發し、完全な圓を晝いて、その終りを賞歎の識得に結んでゐる。この直覺に始まつて意識に終る圈が透らぬ

隈もない光りの圈である如く、彼の現實の認識も物質のエネルギイに始まつて精神の自由に到る明るい世界である。彼の統合世界の感得は、地球を取り捲く天空のやうに、いかなる功過紛糾の上にも淸らかに漂つてゐる。かかる至難な觀念がかくも確固たる信念として詩人に現れた動機は何であらうか。玆で、私にとつては彼の最傑作品と思はれる二詩集、彼が《わが傍らに生息する者へ》獻じた「明るい時」、「午後の時」を、今、鑑賞せねばならぬのである。

ヹルハアレンの愛

「明るい時」（一八九五）、「午後の時」（一九〇五）には、告白、感謝、祈禱、眞摯な愛、裸形の喜び、鮮かな智慧、爽かな默識のあらゆる優しさが輝いてゐる。それのみではない、四周の風光節物は宛ら活きた繪本のやうに、この思慕の光景に浮び添ひ、光りの唐草模樣を描いて、驚きと笑ひと素直と希望とを綰ねてゐる。お伽噺の領土である。さながら樂園の眺めである。然しながら、如何に空想的ならず羅曼的ならぬ深い現實の感動が溢れてゐることよ！

追憶の感動。——暗い惡夢の時に、己れの内に反抗と憤怒とが咬み合ひ竭し合ふ時に、生が艮であつた時に、彼に一人の婦人が現れて、雲に埋もる暮方の窓へ射し入る光りのやうな魂の柔らかな明りで彼の心を濕めた。

Qui vint à moi du fond de ton éternité
Avec, entre les mains, l'ardeur et la bonté.

女性の永遠の奥から御身は私に來た、
兩手に熱誠と慈愛とを以て。

(明るい時第三)

次いで、兩者の間に篤い信賴が生じ、開襟、優愛、結婚と成り、壯年は過ぎ行くけれど常に高まり行く感激を以て兩者は完全な一致を續けてゐる。今はヹルハアレンは彼女から至明の光りを浴びてゐる。けれども忘れ難く彼の感謝の空を訪れるものは闇に洩れて來た光りである。

Je regarde toujours la petite lumière
Qui me fut douce, la première.

私の常に眺めるのはいささかな光りである、
優しくも私に來つた最初の光り。

(明るい時第十二)

Je ne cesse de longuement me souvenir
De ta ferveur profonde et de ton charme,
Si bien que, tout à coup, je sens mes yeux s'emplir,
Délicieusement, d'inoubliables larmes.

御身の深い熱意、御身の鎖魂を
私は永く憶つて止まない、
果ては、突如、私の眼は優しくも
忘れ難い涙ののぼるを覺えるのである。

(午後の時第十七)

長い惡運の間、獻身の道によつて、彼女が彼の激昂を傷けぬやうな勵まし方をしてくれなかつたならば、彼は復と正しい意志を取つて立てなかつたのである、

L'héroïsme secret qui coulait dans le tien

御身の女性の内に流れてゐる隱れた英雄主義　（午後の時第二十）

が無かつたならば。

感謝の祈り。——彼は齎された賜物の如何に已れにふさはぬかに心震へて、この上なき幸福の前に、ただ膝まづくよりない、

Chaque heure, où je songe à ta bonté
Si simplement profonde
Je me confonds en prière vers toi.

ただ、こともなく深い
御身のなさけを思ふ毎に
私は御身に向つて祈りに打たれる。　（明るい時第廿）

彼女に依つてこそ、彼は絶えず聖なる時を過し得るを感じ、かくて蒼白む夜に旋(めぐ)られて彼女が眠りに落ちる時、

Plus humble et plus long qu'une prière
祈禱よりも更に貧しく更に長い　（明るい時第六）

彼の《篤い心を籠めた眼眸(まなざし)が、彼女の閉された瞼の内へ感謝を寄せる》。眞摯な愛。——時には、彼女を黄金の階段(きざはし)を下(くだ)る傳説の花に圍まれた女王と夢みて、彼はあらゆる麗しい言葉で飾つて見る。けれども彼女の深い優しさに觸れては、如何に形容を美にすることが空な遊戲に過ぎぬぞ！　おちついた彼女の明るく淸く白い額、穩かに膝に載せられた子供らしい手、鼓動に連れて膨らむ素直な胸、

Oh! combien tout, hormis cela et ta prière,
Oh! comme tout est pauvre et vain, hors la lumière
Qui me regarde et qui m'accueille en tes yeux nus.

おお！　いかばかり、之等と御身の祈願とをよそにしては、
おお！　いかに凡べてが貧しくむなしいことよ。
私を迎へる御身の裸かな眼眸(まなざし)をよそにしては。　（明るい時第十四）

彼女が留守である時には、彼は待ち兼ねて、路の木蔭で、遠く彼女の方から來る人達を窺ふ。その人達は彼女を見た爲に涼しい眼をしてゐる。《御身を觸つた彼等の指を私は接吻したくも思ふのである、して彼等に怪まれるやうな言葉を發したいのである。して私は永いこと彼等の歩みの響くを聞く、かなた、年よつた夕べが傾く夜を支へてゐる影へ。》

（明るい時第二十）

夜は下る。その日のことに充ち足りて、快く悔いの無い一日の終りである。

C'est la bonne heure où la lampe s'allume,

ランプの點る麗はしい時、

日ねもす愛し合つたことの默認が雰圍氣に匂ひを籠める。

Et l'on se dit les simples choses

して簡單なことに就いて話を交し、

些細なことに就いて熱い思ひが交はされる。

（午後の時第十二）

最も固執する最も強い愛をも變質せしめる習慣といふ悍婦、それにも彼等の奥底の無い優愛は絶えず打ち勝つてゆく、

Je te regarde, et tous les jours je te découvre.

御身を眺める日毎、私は更に御身を見出だす。

かくも彼女は己れの美を損はずして老いゆく、かの只おのづからな胸の氣高さを以て、常に若く常に秀でる女性の一人である。事もなく深い心を贏ち得て、常に爽かで新たな魂を保つ女性の一人である。曙光のやうに、小兒の魂のやうに、

Ta force est d'être frêle et pure infiniment.

御身の力は限りなくか弱く淨らかなるにある。

（午後の時第十四）

彼女は、自らの存在を認めぬ程《己れには貧しく、二人には大膽な》（明るい時第十一）愛に依つてのみ、己れの生を自覺する。

誠に彼女は人の希みを高めしめ、人の心を温める。詩人は彼女の生命から至誠の理を汲

み取るのである。

Que tes yeux clairs, tes yeux d'été,
　　Me soient sur terre
Les images de la bonté.

御身の明るい瞳よ、御身の涼しい瞳よ。
　　私にとつて、地上に於いて、
善良の姿であれ。

（明るい時第十九）

默識。―― 彼等が地意なく惡熱なき愛を以て、人には二人の狂人かと思はれるやうな深く高く內密な又透明な優しさを交す時、（活きた沈默彼等の知らなかつた言葉を告げ）、信仰なき彼等を思はず合掌對坐せしめる。彼等よりも更に神聖、更に純淨、更に偉大な何者かが、彼等の相思を通して目醒める。

Joignant les mains, sans que l'on prie,
　　Tendant les bras sans que l'on crie,

　　Mais adorant on ne sait quoi
De plus lointain et de plus pur que soi,
　　L'esprit fervent et ingénu,
Dites, comme on se fond, comme on se vit dans l'inconnu.

祈るにあらで手を合せ、
　　叫ぶにあらで腕を伸べ、
　　云ひ難なく自己よりも
遙かに淨らかなものを
　　優しい熱意に思慕しつつ、
共に未知の生に融會するもののやうにあれ。

（明るい時第二十一）

彼等の靜思默坐は汲めども盡きぬ喜びの清涼な泉であつて、かかる時凡べての言葉は無作法過ぎる、互ひの眼眸のみが魂を聽き合ふのである。時には餘りに貴重なこの幸福が空恐ろしく思へる。

Mais notre amour étant comme un ange à genoux
Prie et supplie
Que l'avenir donne à d'autres que nous
Même tendresse et même vie,
Pour que leur sort, de notre sort, ne soit jaloux.
Et puis, aux jours mauvais, quand les grands soirs
Illimitent, jusques au ciel, le désespoir,
Nous demandons pardon à la nuit qui s'enflamme
De la douceur de notre âme.

私達の愛は膝まづく天使のやうに
祈り又願ふ、
將來が他の人人にも
私達と同じ生、同じ感動を賦與するやうに。
彼等の運命が私達の運命を嫉まぬ爲。

亦、荒れた日に、凄まじい夕べが
空に絶望をみなぎらす時、
燃え立つ夜に私達は赦しを乞ふ、
私達の魂の靜けさをば

（明るい時第二十二）

又、無數のダイヤモンドの焰が沈默の瞳のやうに穹窿の沈默を燃やしてゐる時、かたみに魂の告白をする程美しきはない。かかる時、生はその流れを集めて靈氣を凝らすのである。《靜かに手を合せよ、柔しく思慕せよ。眞夜中の蒼穹に、おほらかな淨い勸めが、見知らぬ曙を漂はす》。（明るい時第十）

之等の我知らぬ祈念、未知の勸告はヱルハアレンの撓め難い情感を常に至高の存在に觸れしめる。彼の純粹性は愛を情欲に塗れしめる術を知らないのである。否、愛は、彼にあつては、世の常ならぬ喜びを高めしめ、人生の空に新しい希望の曙光を透見せしめる。

Sitôt que nos bouches se touchent,
Nous nous sentons tant plus clairs de nous-mêmes

Que l'on dirait des Dieux qui s'aiment

Et qui s'unissent en nous-mêmes.

私達の唇が合されるや否

さながら愛し合ふ神神が

私達の内に結び合ふかとまで

私達は身の明るきを覺える。

（明るい時第二十四）

この胸の聖なる明るみを浴びて、世界が彼等に現れる時、光りの園は見え、永遠の歌は聞える。

Ceux qui vivent d'amour, vivent d'éternité.

. . . .

Et pour eux seuls, les paradis chantent encore.

愛に生きる者は永遠に生きる。

. . . .

して、彼等にのみ樂園はなほ歌ふ。

（午後の時第二十二）

智慧。——《よくある通り、時と氣分とは、氣まづい時やよこしまな氣分は、私達の心にも烙印を押した》ことがある。只、《明るく熱く輝やかな眞摯が私達に喜ばしい忠告を與へた。で、私達は互ひの前に優愛を以て咽びつつ、互ひの心の淺はかさを打ち明け合ふ》。

Ainsi,

Très simplement, sans lâcheté ni sans blasphème,

Nous nous sommes sauvés du monde et de nous-mêmes.

かくて

只素直に、卑怯をもせず冒瀆をもせず、

私達は世界から又自分自身からも助かつたのである。

（午後の時第二十五）

いさかひの中に己れの錯ちを見出だすこの純情を以て唯一の自明の判斷とする彼等の魂は凡べての變動に生き殘つて、永く遠く相携へて行く。老いと重くかさなる日日が何するものぞ。

Puisque je sais que rien au monde
Ne troublera jamais notre être exalté
Et que notre âme est trop profonde
Pour que l'amour dépende encore de la beauté.

世に何物も私達の
感激の生を亂しはせぬのである、
又、愛がなほ美に懸かつてあるには
餘りに私達の魂は深過ぎるのである。

（午後の時第八）

かかる鎭魂の融會にあつては死も亦恐怖を齎さない。愛は死生の門を潛つて、暗い無意識界へまで道しるべと成る。《御身は、とある夕べ、私にうるはしい言葉を云つた。こちらへ傾いてゐた花はきつとその爲に私達を好きになつたのであらう、その中の一つは二人を觸（さは）る爲に私達の膝に落ちさへした。御身の話は、近く私達の老年が熟し過ぎた果物のやうに自ら摘み取られねばならぬ日に就いてであつた。——御身の聲は親しい抱擁のやうに私の身を締めた。御身の燃える心が如何にも落著いて立派なので、この時墓に向ふたどたどしい道が眼の前に開けたとて、私は何ともないのであつた。》（午後の時第二十九）

女性の白い額にはしばしば優秀な理性の光りが漂つてゐる。女性は己れの個人であることを忘れ勝ちな程打ち開いた胸を持ち、凡べてを微笑の中に解決してゐる程單純である。この純一性を以て、彼女は生よりも死よりも愛に生きる。私はヱルハアレンが感得した倫理の原型をこの小品集の中に見出だし、その大作よりも遙かにこの素直な賞歎の光景を愛惜するものである。

ヱルハアレンの愛は常に非肉感的、非情欲的であつて、常に、感激、熱意、獻身と同化する。而して彼の徹底的な經驗はいつも超越の喜びにまで上らねば措かぬ。彼の心境は物質以上、肉體以上、感覺以上の氣を放つてゐる。女性は誠に鏡である、彼女によつて、彼はおのれの最も深奥な心境、賞歎の愛を見出だした。

私は限らねばならぬ引例に苦む。《靜寂を以て麗しい夏の時》の燃える外光のやうな文字も茲には捨ておかねばならぬ。

國民詩

彼は「幼時の感動」を告げて云ふに、『ああ、私は如何に熱中してこの地の人民を愛したことよ、その不正をまで、その罪をまで、その不德をまでも！… 私はその種族であり、その悲喜は私のそれであり、又夕べ、ランプの下で、教科書に依つてその光榮を讀む時、その顏は私の物思ふを眺め、私の志を立てるのを眺めてゐる、といふことをのみ、ひたすらに感じたのである。』と。彼は故國の地、己れの種族に熱誠を寄せると同時に、フランドルの地を抱いて唔く烈しく豐かなエスコォの流れを鍾愛してゐる。『この地の者は、その家族は、その種族は、その悲みは、その意志は、その願ひは、汝の默默とした景色に己れを見出だす。』（英雄）

この小愛國家は常にその心を變へてはゐない。その最初の韻律をフランドルに汲んだ彼は、又その老後の詩作をフランドルに捧げてゐる。茲ではもはやフランドルの單純な外觀ではなくて、畫一され、理會され、變化に富み、展開に豐かなフランドルの讃歌である。「フランドル全土」の圏は五詩集の連環を以て成る。「最初の感動」、「砂丘の花環」、「英雄」、

「切阿の市街」、「平原」（一九〇四、一九〇七、一九〇八、一九〇九、一九一〇）が之である。之等は他の大抒情詩とは獨立した愛國詩であつて、要するに限られた意味のものである故、茲に多く語る餘地はない。

第一の詩集には甚だ豐かな幼時の敏感が鮮かに追想されてゐる。エスコォの岸の廻り、船は『夢が風の羽飾りを付けて優遊する如く過ぎ』、夕べとなれば、星の下に優しい帆が並ぶ。風の接吻、空氣の息、又樣樣な自然の愛撫は幼い者に驚いたやうな笑ひを誘ふ。この詩集には、云ひ難い微妙な雰圍氣、幼時の肉體を心づかぬ小天地が靜光を浴びて現れてゐる。

「砂丘の花環」は深い感銘と寫實的な風光との浮織である。廻り繞る砂丘の上に、大海に背を向けて並ぶ漁村の生活が、點彩派的情趣を以て、熱い同胞の心から歌はれてゐる。彼がフランドルの男女子弟を鍾愛する滿腔の熱意は、おほらかに刻まれた韻律の上に躍動してゐて、詩の實現の成功不成功を問ふ前に先づ景慕の念を抱かしめるものである。彼は種族に優しい心を寄せると共に、その默默たる舊友、土地を忘れはしない。

Ce saule là, je l'aime comme un homme.

この柳、私はこれを人でもあるやうに愛する。

老木を朝も夕も又夜もいつもいつも彼が行つて眺めるといふ「柳」の詩に、彼の自然にまで及ぼす寛く溫かな懷抱が掬される。

第三の「英雄」でフラマンの歷史的人物が歌はれてゐる。之は、藝術價を裏切らぬ意味に於いて、麗しい國民讀本である。切實な思想と明確な筆致が見事に平行して、甚だ錯雜した映象を均勢を以て綜合してゐる。玆には特に彼の對偶の才能が發揮され、大きな比喩の波が相繼いで紆り紆つてゐる。

「大膽シャルル」の詩に、シャルル・テメレエルとルイ十一世とを對比して、《テメレエルの魂は一つの森であつた、巨木や奥深い藪が一杯に有る》と。又、《ルイ十一世は、毒である前には蜜と黐と（罠の意味）であつた… 彼が充ちみちた生の甘酒を飲むと、その唇は愛の代りに憎惡を味つた》と。

次の句にルイの性格は躍如としてゐる。

シャルルが皆に狩り出されて、猛り狂ひながら
ロオレエヌ州で倒れ。狼共に喰はれた時
雪と荊棘との中で、彼を咬み裂いた牙は
ルイ十一世の歯の貪りを露した。

又、次の一句は適切な斷案的名句である。

Entre la France ardente et la grave Allemagne.

熱烈なフランス、重重しいドイツ。

「ルウベンス」の詩はこの奠祭畫家の特徴を云ひ盡してゐる。

御身の畫は、傳説の女戰士にまれ
女王にまれ、又天國の聖女にまれ、
いづれも猛烈な旋舞の中に
逸樂を事としてゐる。

「切阿の市街」、「平原」には外光又屋内の豐かな景情もあるけれど、輕い筆觸を以てしたものが多く、ヹルハアレンの飛躍的な感興を制御してゐて、狹い窮屈な印象を與へる。

ヹルハアレンの藝術

《すべて眞の詩人が思惟するところは、その存在の全局、その骨骼、その筋肉、その神經と共鳴反響する。これ、事物よりその魂に通ずる感動の薰染あるに依るのである。

《この確實にして立所なる響應は詩人の全存在に一の動搖を、一の特殊なる發動を生じる。彼に詩句の律格を供するはこの内密深奧なる運動である。韻脚類音等はこの律格を强調し、規して、之に造營を與へるに過ぎない。

《詩人はその本性として、一の感激家である。勢ひ、筆を執るに當つては、その情熱と思想とは、豐盛、熾烈、至高の生命を帶び、壯大の境に揚り、その自らなる權能に於いて調和し、かくて美に達するのである。

《故に、詩人直接の目的は自己を表出するに在り、間接の目的は美に達するに在る。》(ヹルハアレン。)

象徴派勃興に際して、ルネ・ギルが、和聲主義又は象徴的器樂主義の名の下に、ボオドレエルの「萬物照應」、ランボオの「母音」等の詩を演繹して、色と音との符合に詩學の方法を發見せんとした時、レニエ、ギイレエ・グリッファン、ステュアアル・メリル、アルベエル・モッケル等と共にヹルハアレンもこの運動に加はつた。ギルの說が奇矯な異論に終つたのは、萬物相應の感性を數學的に解釋したからで、《匂ひ、色、音はいかにも相應じる、けれども之は感情上の事であつて、科學上のことではない》(レミ・ドゥ・グゥルモン――文壇遊歩第四卷)。かくて、ギルの詩的術語の研究は徒勞に歸したけれども、ヹルハアレンの動力的な韻律に、鳴り轟く管絃樂の趣は効果ををさめられたのである。形容詞、重語の夥多、造語、術語の濫用、語氣の逼迫、對偶法、頭韻法等によつて、彼の詩は特に濃密な雰圍氣を形づくる。

ヹルハアレンは高踏派として發足し、次いで頽唐派、象徴派と成つたが、「觸手ある都會」以來全く黨派の影響を脫却して、自己の藝術を發展せしめ來つた。ユゴオの影響を受けたことが最も著しく最も長い間であつたといふ。之等の事は措かう。又私は玆で彼の詩學を研究することもできない。只簡單に大まかな印象を述べるだけである。彼が云ふ通り、

彼は力の詩人である。彼の詩の特徴は、激しい藝術本能を以て表現の生硬を貫く突發力と、その放電的な展開を飽く迄も擴大し續ける固執と、その奔騰を急に斷ち切つてしまふ强烈な一閃とにある。その發するや心身の熱と躍動とである。印象の强過ぎる爲肉體の惱みと反撥とが一時も早く開放を迫るといふ風に、彼は己れから言葉を裂き取る趣がある。刺戟に對して緊張と活躍を以て答へる動力の律である。汽關車のやうに重いカダンスを以て動き、漸次加速的な快速に轟轟と鳴り渡る。

又、或る時は、更に劇的、更に叙事詩的である。その初聯は起らんとする嵐の前、樂劇の發端のやうな緩く大まかな低音である。やがて緊張し高まり行く經過に連れて、迅速な旋風的烽火的交響樂が息もつかせず人の心を奪ひ去り、狂熱の極を越えて、いつ知らず決定的な共鳴と轉じ行くのである。或る時は未完成の觀のままで轟き渡つてしまふことがある。けれども常に充ちみちた感激の放縱に終つてゐるのである。感激詩はともすれば誇張に陷る危險、卽ち確固たるリヅムの伴はぬ大げさな表白と成る恐れが多いけれど、一面、抒情詩に無限の豐満と權威とを與へる。所謂抒情詩が動もすると内攻的に成り勝ちであるに比して、更に直接的な發露の目覺ましさが感激詩には生じる。ユゴオの海の詩は凄まじ

い幻覺を與へるとしても、ルコント・ドゥ・リイルの熱帶の詩は壯大な光景を描出してゐるとしても、海のリヅムに湧き返り、風や森のリヅムに騷立つてゐる激發の直截は、之をヱルハアレンに求めねばならない。

彼の詩は勞作の跡を止めてゐる燃えるやうな記述である。沸き溢れる想念を片端から數へ上げんとする速かさと、それを大きな包括に纏めんとする收容力と、この荒く烈しい尨大とには、唯一必須の表白を練り上げる錬金詩人や、感受性の纖細な撰擇に聞く心憎い詩人の味ひ識らなかつた裸形を以て迫り來る美がある。眩暈の翺翔がある。彼は己れの能力を自由に運用する無拘束を嗜む。彼はこの潑剌たる全力を以て雄辯的に唱道する。彼の詩は倫理宗教とそのジャンルを混同するを必ずしも恐れない、何にまれ、彼にとつては生氣の充ち溢れたものが美であり、詩である。彼の詩は抒情詩の限界を遙かに擴げ去つた生活頌歌である。

彼は生に對して正教徒的である。正教徒が神の莊嚴に鎭魂したやうに、彼は生の光景に魅せられる。その故に、彼は簡單明瞭なものの强い効果を知り、巨大なものの壯重な律を知つてゐる。盛んなもの、豐かなもの、烈しいもの、騷がしいもの、强いもの、あくどい

もの、甚だ唐突な變化、甚だ刺戟的な對照、甚だ相違したものの統一、暗夜の稲妻、平原の嵐、地平の連續、海の傳說、山の幻覺、近代の群集力と古英雄の雄姿、物質と精神との肉迫、之等に對する特殊な醉ひを彼の透明な魂は味ふ。その故にこそ、甚だ高遠な理想であつて而も强烈な酒のやうに人を醉はすものがヹルハアレンの藝術である。刺戟を超えた激動があるとせよ、人は皆一種異樣な感覺喪失に打たれるであらう。人の頭腦には入り兼ねる廣大な對象があるとせよ、人は之の前には比較の能力を缺いてしまつて、反つて崇高な觀念を得られぬであらう。ヹルハアレンの純粹と激越とは之等に敢て觸れんとする。それには異常の神速强大な敏感を要するのであるが、この點に於いて、彼の强味は、その放恣な想像力、卽ち眩惑と、その擴充された熱情、卽ち感激とに存する。ヹルハアレンの傾向は正しい發展を辿つて、もう恐らくその論理的な極致に届いてゐる。而して、その蠱惑的な喚起力とその超越的な倫理とは遂に調和の味ひを完成してゐない、卽ち前述の敏感の域を渾成して完全な藝術を出だしてはゐない。然しながら、彼は確かに或る種の單調の偉大を捉へた。堂堂とした單調の激しい轉換、之が詩壇に彼の齎した天才である。彼は風のやうに撞突牴觸するを恐れない。雷のやうに無味な轟きを轉廻せしめるを恐れない。十字

街、工場のやうに、煩はしさ惱ましさと化するを恐れない。啻、その單調、その煩しさは常に沸き返り、力に充ちてゐる。その用語は豐かではあれど、放膽、その交響樂はかなり人に印象を强要するものである。啻、それに伴ふ彼の純粹性が何とも云へぬ氣高い匂ひを放つて、それらの騷音を醇化し、他の小調和音よりも遙かに魂の耳に快からしめる。誠に彼は己れの生存そのものを以て詩を書いた。故に彼は屢々代表的斷案的定義的な確固性をその詩句に齎す。彼は詩壇の野蠻人である。そのやや歌ひなれぬ荒い喉音、その偉大な激越、而して文明人の何者も持ち得ぬその濃い純粹性！ 凡べて大なる傾向はこの熱い眞摯を伴はなければ現實力を失ふ。ヹルハアレンにキャプリスが無いのは恐らく彼を羅曼主義から救ふ唯一の德である。その熱情は凡べて現實を擴大し、その想像力は凡べての映象に驚く。然しながら彼に空想は殆ど無い。

私は更に、彼の詩を、あらゆる單調を涵し、あらゆる變化を吐いて、常に動き止まぬ海に譬へる。いかにも、巨浪の飜る時も、平波の和やかな時も、海が常に單調であるやうに、彼の詩は單調の層疊である。けれども倒瀾が常に人を驚かし、藍光が常に情趣を失はぬやうに、彼の詩は飽くを知らぬ新味を以て人を引きつける。

彼の詩は内容の漲溢と等しく、動搖した長短錯雜形である。或る行は驀らに奔馳する。或る行は繋がれたやうに一字躍つてゐる。又或る數行は連禱のやうに熱意を籠めて單調を列ね、又或る數行は電光のやうに急速突然なジッグザッグを成し、又或る數行は怒濤のやうに連山のやうに嵐のやうに大きく荒荒しく強い層疊を以てせられてゐる。輕い母音の《LA JOIE》は踊り、捉音の《DITES》は猛り、亂暴な《QU'IMPORTE》は投げつけるやうに、重重しい《IMMENCEMENT》は泰然としてゐる。

ヱルハアレンの生活

昨年の春、リエエジュで、詩人アルベエル・モッケルの爲に催された會合に於いて、ヱルハアレンは白耳義フラマン地方に佛蘭西語の重要なことを强說し、ヷロン種族のモッケルに向つて述べたには、《君が君の種族を固持するやうに、私も己れの土地の種族を固持する者である。數世紀を通じてそこに生を享け來り、己れの族の少しく粗野な、けれども深大な力、神祕に享樂を感じるまでの烈しい神祕欲、過默であつたり過激であつたりするその强情等を愛する者である。己れの種族が在り來つた通りに在り、その傾向その追求が本

然なるにせよ、修得なるにせよ、何一つ失はれてあらざらんことを希む者である。己れの種族が、約言すれば、能ふ限り成就されてあらんことを、又その故に、その一修養の一なる佛蘭西敎化を決して減退せしめざらんことを希む者である。》と。

誠にヱルハアレンは己れを知り、己れの種族を體得し、且つ深い愛を之に捧げてゐる。荒荒しい激發的な表現、交互錯綜して動搖してゐる格調、擬聲と重語との放膽な措辭、又感覺が常に眩惑にまで上り、感動が常に漲溢にまで熱する無節度、常に踴躍的直接的全力的決定的信念的で、野蠻なけれども健全な純粹性、神祕に渴き信仰に饑ゑる徹底欲等、彼の特性はその種族の代表的風格を具備してゐる。一種族に潛在する根本精神が最も密に漲つた個人ありとすれば、その人は天才と呼ばれねばなるまい。恐らくは之が最も人間的な天才であらう。

ヱルハアレンはフラマン人でありながら、フラマン語を用ゐぬのみか殆ど之を知らぬといふ。又白耳義の國すらも智識階級殆ど擧つて遺存なく佛蘭西語を採用してゐる。この事は、言語學上又人文發展上、大國語の勢力に就いて興味豐かな一例を供するものである。

佛蘭西の藝術は十九世紀後半以來顯著な化成力を示してゐる。現今かの國の藝術は外來の選良に依つて甚だ多彩多趣な發露を致してゐる。ヹルハアレンも亦、甚だ佛蘭西の感性とは異つたフラマン地方色を以て、佛蘭西詩壇に、ユゴオ又は現時のポオル・クロオデルをよそにしてはその比を見ない鳴り轟く一大音階を新たに加へ來つた。

も一人の外來の大詩人、希臘精神を以て佛蘭西の詩に豊絶な美を浮び添へたジャン・モレアス、何人よりも佛蘭西語を鍾愛したこの希臘人は、或る日、ヹルハアレンを稱して《ベルギイの大詩人》と云つた。傍人がその意の不明瞭をただすと、モレアスは説明して、《それは恐らく彼は大詩人だといふ意味さ、そして又恐らく彼は佛蘭西の大詩人ではないといふ意味さ。》と。

唯物的定命論、藝術科學主義の哲人レミ・ドゥ・グウルモンは、その「象徴主義の追想」で、《ヹルハアレンは言葉と思想とにあらゆる大膽を持つてゐる。わが時代の大詩人であるには、も少し確かな嗜みをよりしか缺いてゐない。時には人がかう思ふ、《ああ！ 彼がコンピエニュかサンリで生れてゐたならば！》けれども之は無駄な事である。彼はアンヹルスから來つた。その獨立的な性質はわが嚴格な語法に撓められる術を知らない。》と述べて

ゐる。

いかにもヹルハアレンは、佛蘭西を代表する詩人であるには、餘りに麁い感受性を持つてゐる。然しながら彼の詩集を開く者は、その缺點を超えて、その生硬な韻律の奥からいかに人を撼かす力が發し來るかを知つてゐる。彼の詩は、彼の叙事詩の壯大と雄辯の狂熱とを持つてゐる。人は思はず引き入れられ、感激を以て聽き入り、偉大な夢想の空へ高められるのである。パイプオルガンにピアノの纖細を求める勿れ。吾人が呼吸する全空氣を取り入れたこの大風琴は、現代のあらゆる調節を以て激しく息づき、至大の力ある祈禱の響を以て、未來の神の方へ漂ひ行くのである。然り、彼の詩ほど、現代といふ意識に明らかな藝術は恐らく見當らぬ。彼は現代の生活をその錯誤に至るまで認容してゐる。現代の表現と願望とは彼の韻律的彫刀を以て、勇ましい努力の形に於いて刻み上げられた。彼は歐洲に於いて機械と工業との近代生活に美を賦與した最初の人である。マリネッティイの未來主義、ジュウル・ロマンの全一動主義も彼の影響があつてこそ恐らく生れたものであらう。それだからといつて、《社會主義がヹルハアレンにその豫言的詩人を見出だしたこととはならないのである》（ギイレエ・グリッファン——「エミイル・ヹルハアレン」）。

恐らく、ヱルハアレンが都會の、物騷がしい文明の詩人と成つたのは、寂しい海邊の村に生ひ立つた彼を都會の惡熱的空氣が誇大な驚異に浴せしめたからこそであらう。驚歎は常に彼の詩を發せしめる。（私は驚きの稠き者である）（騷擾の力）。群集と工場と停車場と港とを熱心に歌つたからとて、彼が田園を愛する心は勝るとも劣つてはゐないのである。

彼は、都會といふ大蛸が觸手を伸して田舍の農夫を吸ひ寄せる魔力の威に打たれると同時に、田園の靜光を更に衷心から懐しんでゐる。彼はその生涯の大部分を幽寂の地に送り、歐洲戰亂の前までは、夏秋をホネル河岸のカイユ・キ・ビクの小村に住ひ、春は花粉熱（自然の旺んな發萠に連れ、燥いた空氣に刺戟される呼吸器病。ヱルハアレンと自然とが春の同じ惱みを受けることは兩者の交渉が深く密なるを思はしめる。）を避けて海岸に出で、冬のみを巴里市外のサン・クルウに暮してゐたのである。巴里ですらも彼は注意深く社交の生活を避ける。彼は機會ある毎に、利己の心を以て周圍の時と適應し、法律さへも之を爲さぬ抑制を以て人の向上心を共力磨滅せしむる愛想よき人人、思慮ある人人の溫柔と聰明とが如何に恐るべき中毒性のものであるかを痛論する。

彼は簡單明瞭を好み、（私は自分自身と一致してゐる。之で十分である）と云ふ。彼は物

質的成功に目をくれたことも無ければ名譽に走つたことも無い。彼にとつては生活の實現は卽ち藝術であつて、その間に何の扞格も無い。同じく、（私が創作するのは頭腦を以てのみならず、眼を以て、手を以て、全身を以てするのである）と彼が云ふ時、何人もその眞實を感ぜずにはゐられぬのである。シュテファン・ツワイグが深い感動を以て、（ヱルハアレンに暇を告げて歸る時、又、彼の書を閉ぢた時、人は同じ深い喜び、等しい熱意、生を更に淨らかに、更に確かに、更に永遠に見しめる同樣な幸福の感に打たれる）と、彼の生活と藝術との一致した印象を說き、（彼に接する者は已れを富ます）と、感謝の心を以て云ふ時、私はそこに何の欺りをも間違ひをも感じ得ぬのである。

今日、獨逸に於いて、最も人望ある詩人はヱルハアレンである。リヒアルト・デエメル、ヨハンネス・シュラアフ、オットオ・ハウゼル、シュテファン・ツワイグ、ライネル・マリア・リルケ、オッペルン・ブロニコウスキイ、エレナ・レエヂルト、エルンスト・ルドヰッヒ・シュレンベルグ、その他の詩家が熱心な敬意を彼に捧つてゐる。それだけではない、例の汎日耳曼主義辯がこの醇粹日耳義詩人への賞讃にも多く含まれてゐるのを、私は甚だ快からず感じる一人である。獨逸の精神、獨逸の理想！　ヱルハアレンの天才が獨逸文化に第二の故

鄕を見出だしたといふが如き妄想に對しては、平民的な血が脈に流れ、精神に於いて貴族的、性質に於いて革命的な佛蘭西の氣象を愛して、ヹルハアレンが夙に「佛蘭西親交協會」を同志と共に起してゐるといふ事實を以て答へれば足りてゐる。何故ならば、彼の生活はとりもなほさず彼の藝術だからである。彼の最も人道的な觀念現實思想は正に彼のものである。彼はフラマン族である。

露西亞に於いては、重に社會的な見地より、智識階級が主として「眩惑の野」、「觸手ある都會」、「曉」等に感動を受け、諸大學は之等を敎科書に採用してゐる。英吉利に於いては、彼の名はアアサア・シモンズ、エドマンド・ゴッス等少數の人に知られてゐたのみであつたが、彼が今次の戰禍を避けて渡英してより騷がれるやうである。スノビスムに了らねば結構である。スカンディナギャでは、エレン・カイ、ゲオルグ・ブランデス等に熱心に受け入れられてゐるといふ。

ヹルハア　ンの名は今日殆ど世界的であるけれど、彼の詩が直接味はれずして、思想的に知られる傾きのあるは誠に遺憾である。藝術家は、その說のいかに貴重なるにもせよ、常にその作品に就いて見られねばならぬ。藝術を限られた意味に於いて味はんとする者に

は藝術の嗜みは得られない。凡べてに括られぬ藝術の裸形をよそにしては思想の當否が何であらう。思想の功過は常に藝術を陷れる。私を以てすれば、ヹルハアレンの大作と云はれる「騷擾の力」、「複合の眩耀」を捨ておいて、小品「明るい時」、「午後の時」を選ぶは容易な決斷であり、又「サン・ジョルジュ」、「海の上」等の麗しい調和は彼の社會的傾向の詩全部にも代へ難いのである。赤裸な感動を以て表現の自由を體得したヹルハアレン、私の鑑賞はそこに盡きてゐる。

(ヹルハアレン氏はその氣息を以て小故國の地平を擴大した、して、バルザックが、忘恩な又優しいトゥウレエヌ(バルザックの故鄕)に向つて爲した如くに、彼はフラマン平原に、己れの理想と己れの藝術との麗しい人間王國を寄與したのである。)(ギイレエ・グリッファン。)今やヹルハアレンは白耳義に於いて至高の崇拜を受けてゐる。多く國民詩人としてであらうが、之は至當なことであつて、藝術そのものの遍在性は一國に限られるに由無いのである。然らばヹルハアレンにバルザックの憾みは無い。ヹルハアレンがルウベンスの光榮を歌つて、(御身は大きな家に王として歸還する。全フランドルは御身のものである、御身のもので世界があるやうに。)といふ詩句は、やがて彼の爲の言葉であらう。又彼はユゴオ、

シェクスピイヤを讃めて、《彼等は彼等の世紀を偉大にした》と云ひ、ランブランのやうな天才者の創作力を斷じて、《もしそれ、數世紀經過の後彼等が何人よりも彼等の時代をよく實現して見えるのは、とりもなほさず、彼等が自己の頭腦によつて時代を改造し、ありのままにではなく、己れが之を變形せしめた通りに表したからである》と。

かかる時代詩人を、現時に於いて、ヹルハアレンをよそにして、何人に求め得ようか。

—一九一五・二—

人物

（懷かしのヹルハアレン）を送る唄はみづから告別する唄「微笑に就いての反省」と共に朽葉の絕筆である。彼是照らし讀めば、同じ歲の冬より春への詩人の心の（營み）を悟ることができる。早稻田文學大正六年二月號所載。「ポオル・ヹルレエヌ」の紹介はもと某靑年雜誌に需められて成つたものであるが、朽葉は之も亦早稻田文學（大正五年六月號）に寄せた。

ヹルハアレンを思ふ

季節は人にとつて絕えざる警告であり、地上に於ける世界の姿である。宇宙は旋轉して時を刻みつつ、一齊に人の感覺のほとりに響を落す。その響も今はさながらお休み時間のやうに閒然と成つてゐる。冬！　凡べては一先づ終つた、又新たまらうとする企ての前に立つて後ろを見返れば、時の梭が織りなしたものは凡べて明らかな眞であつたことが感じられる。

今日、冬は虛無の上に眞白い模樣を描いてゐる。街は墓のやうだ。その上で見えぬ枯葉の群は快濶な沈默を以て笑つてゐる。

晴れやかな冬の光りを慕つて日向の壁に凭つてゐると、乾いた空氣から私は或る淋しさを吸ふ。この淋しさは、私の魯かな魂に（自ら良く識れ）との聖なる招待である。

この厳しい靜けさの時、何事ぞ、心の英雄エミイル・ヹルハアレンが禍を得て死んだといふしらせを聞く。

あさましい戰亂のさなかにあつて、强い眼と篤い心とを持つ者は禍ではないか。人の面（おもて）に畫かれた凄まじい獸の形相を見詰め得る者はその感銘をいかに深く心臟に刻むことぞ。善と美とを愛するやうに造られた魂にとつて醜惡なものはその情操にいかなる打擊を與へることぞ！　ヹルハアレンはかかる人である。

到頭！　到頭、運命は、彼の心肉の故鄕が「血みどろの白耳義」と化した光景に、

・・・・・・・・en Flandre,
Et des hameaux en feu, et des villes en cendre
Et de la longue horreur, et des crimes soudains
Dont avait faim et soif, le sadisme Germain.

(La Belgique sanglante.)

・・・・・・・・・フランドルにおいて、
村村を火に、市市（まちまち）を灰に、
恐れを長く、罪をすみやかに、
獨逸のサディスムが爲すに飢（かつ）えた

この凄慘な光景に、證人たる苦惱からこの熱い胸の持主を救つた。

ああ、この生存の海原、愛と死とのおほ波！　日夜流れて詩人の心を搖り撼かす。エミイル・ヹルハアレン、御身の魂の動搖の跡に思ひを寄せることなくして、私は御身を地（つち）の彼方に去らしめることはできない。貧しい言葉ながら遙かに尊敬の意を餞けずては御身を歸らぬ途に立ち出でさせることはできない。

★

ヹルハアレンは一種の見方をもつて事物を視た最初の人である。一種の事物を初めて視た人ですらもある。而してこの唯一の感性に正に適當な表現を寄せた初めての詩人である。彼はある種の自然、ある種の文明の最初の讀了者である。彼に依つてならでは人の感じなかつた處の生動する意識の列がある。何故なら、經驗の深みからそれらの意識の鮮かな背

像と韻律とを刻み得るまでに、彼のみが醇化の力を發したからである。人は多く或る事象に對して、甚だ强い印象を受けながら、漠然としかその何たるを識別し得ず、詩人が是れと深く共鳴し、是れに正確な形を賦與するまでは理會し得る能力を持たない。詩人は世界を識り、人は詩人に依つて世界を認める。一定の方法（メトオド）に依るのではなくして、一層直接な一層内的な、卽ち一層直覺的個人的な意識の釣瓶を無意識界に降して、最も新しくして朽ちざるものを酌み來るのが藝術の事である。ヱルハアレンは、（おお詩人よ、御身は何も說明しない。けれども御身あつてこそ一切の事は證明のできるものとなる。）とポオル・クロオデルが意味した處の詩人である。

近代の亂雜で繁盛な都市生活、尨大な造營、運輸機關の輻輳等の現象は、騷然としたこの總合的天才の擊つが如き跳躍するが如き權能の詩を要とした。その創見は渾沌たる現代意識の烈しい渴望と抱負とに最も撥揚的な表白を與へたものであり、その慫慂は我等の複雜な生活に最も高い飛躍の念を湧かしめるものである。その故にこそ彼は「歐羅巴の詩人」であると同時に現代の代表的詩人である。また彼は啻に現代の詩人ではない。自然と人と

の永遠な光景に眺めを向けて、彼は猛く熱くまた素朴な象（かたち）に世界を寫した。

彼は人事の進步を頌め、自然の豐滿を讃へるに、素直にあからさまに叉密に切に、白粉のない愛と誇張のない熱情とをもつてした。この心境とその天賦の代表性とは、近代の諸傾向をよく綜合し得て、巨大な指南車のやうにその極致の人道にさへ向つて手を差し延べてゐる。相矛盾し渾沌とした諸諸の現象を、また精力（エネルジイ）を、彼の魂は坩堝（るつぼ）のやうに熔し込んで、一の燃える理想たらしめた。

（（全歐土は彼の聲によつて語る。して、彼の聲は現世紀を超えて高くあがつてゐる。））（シュテファン・ツワイグ。）その全歐土は今日惡と禍と流血と焦土との巷ではないかと問ふ人があらば、獨逸は領土こそ歐羅巴の中央にあつても組織的な野蠻國に過ぎないのであつて、ヱルハアレンが代表する處の文明の列に位し得ず、また、いかなる國民性と雖もその理想に向はずしてその卑（ひく）い望みに驅られるものは善良なヱルハアレンの熱誠と甚だ緣遠い處に落ち行くに過ぎないと答へねばならない。

Toute la vie est dans l'essor.

凡べての生は飛躍のうちにこそある。

ヱルハアレンを裏切るものは、この純な詩人を引き下すには至り得で、自ら低くなりゆくに過ぎないと答へねばならない。

理想に依つて生活せずして何の詩ぞ！　詩は優越な生活の感得である。生をより完く活きんとするこそ藝術の道である。かかる高い道に依つてのみヱルハアレンは歐羅巴の文明にその韻律を捧げた。

その熱した容積の多い言葉が逆るところ、火と巖との塊りを噴き出す火山の偉大で亂雜で簡單な壯觀を思はせる。いかにもヱルハアレンの詩は完成を缺いてゐる、けれども人が好んでその不完全を愛するところのものである。彼の詩は整へられた庭園ではなくとも、生生として延び擴がつた深林である。自發的なものに豐富な餘りの光榮ある不完全である。

彼は智慧に依つて事物を想察せず、官能によつて心情によつて事物と相應へる。彼は事

物を悟ることをしない。彼は事物を親しく見る。彼は事物を烈しく衝き動かす。かくて彼は事物の表面から、それの動機を成してゐる内容そのものにまで届く。彼の迅かな眼光が事物の表面を滑る時、彼は實に快い敏速と確實とを以て事物の容積と運動とを摘み來り、續いて之に天才的な數擊を加へて、その意義を獲得してしまふ。彼は威を以て斷ずる底のこの烈しい天才的打擊を詩中に反復する。是れ、彼の詩が複合的で連續的で、秩序の整然としないその詩の中に、秩序整然用意周到な詩に於いてよりも更に生氣潑剌とした眞實を生そのものから單純直截に奪ひ來つた趣がある所以である。彼が粗く大きい筆觸で人と自然とを喚び起し來り躍動せしめる創造力は、人を驚歎せしめ、人にその激越な詩術とその魅力とを鍾愛せしめずにはおかない。

彼はしばしばホイットマンのやうに晴れやかな氣息と博い道とを歌ふ。溢れる喜びを以て力強い愛の領土を歌ふ。ただ、更に感覺の層に富み、更に暗示に豐かで、一層強い光りを放射する。ホイットマンは瀑の如くヱルハアレンは濤の如くである。私はジャン・モレアスがホイットマンの詩を聽かされて（これはナイヤガラだ）と言つたといふ話を思ひ起す。天賦の想像をその限度にまで押しすすめた點に於いて、人を根柢から惑亂せしめる巨大

な暴力に常にひきつけられる點に於いて、事象を汎神的な幻覺を以て擴大せしめ、自然の現象世界から統一的な魂を喚び起し來る點に於いて、その手法がしばしば波瀾重疊といふやうな劇的な點に於いて、關聯するところが多いので、ユゴオとヱルハアレンとはよく比較される。

いかにもヱルハアレンは羅曼主義と象徴主義との間に架け渡された一の巨いな橋だと言へる。羅曼主義の後を受けて、ヱルハアレンの眞摯な熱想は無限に連續した自然の神祕を遠く探り入つた。けれども私はむしろ玆で羅曼主義の傾向とヱルハアレンの行き方との相異點を言はうと思ふ。

ヸクトオル・ユゴオやその周圍の詩人達は純粹な詩人とはいへない。彼等の詩は敍述的な雄辯によつて外的要素が多く交つてゐる。又しばしばユゴオの偉大は形容の偉大で、内容が伴はず、徒らに（無の周圍に躍り）廻る趣を呈する。僅かばかりの絢爛をでも、之を支へるに豊かな内容を以てせねば空疎な誇張に陷るのは藝術の常であるのに、この點をおろそかにするのがちやうど羅曼主義の特徴の一つであつた。

ヱルハアレンの詩はユゴオのそれよりも更に激發的であるけれど、この悲愴の身振りに

陷ることをしない。ヱルハアレンの詩は、言はば、具體的な抒情詩で、内的な直接的な發動であることを忘れない。

羅曼派はその傾向として勢ひ綺麗事と挿話的な枝葉とに渡つてゆく、彼等は内部性に缺けてゐる。彼等を周圍的と言ふならば、ヱルハアレンは中心的である。彼は性格の權威を以て詩に達した。感情の高揚によつて、事物又世界は彼にとつて自己の延長に過ぎなくなるのである。

羅曼主義の後繼者として、ヱルハアレンは、この主張より生ずべき結果を殆ど悉く贏ち得、而もその内的にして同時に遍在的な統合の感覺はこの主義の片輪なところに痺れ入らなかつた。

彼は曾て罅いたやうな而も類稀に豊かな聲音を以て都會の偉大と暗黒とを醉ひ痴れた如くに歌つたが、最近には靜寂の希みに打たれて、その心は田野を愛し、その魂は晴明に向つた。「莊嚴律」、「スパルタのヘレン」、「搖れる麥」によつて、その推移が窺はれる。以前の騷擾に充ちた權能的な詩と、今日の、潑剌とした、けれども一味の靜けさが行き

渡つた詩と、私はそのいづれを勝れりと言ふわけにはゆかない。凡べてヹルハアレンであり、凡べて彼の眞に充ちた生命である。

ただ私はこの魂の經過を思ふ時、深い感動の胸を衝いて來るを覺える。誠の詩人が言葉を享けて生を歌ふ時、その歌の一つ一つは生きた敎へである。詩人は學者のやうに抽象的な眞理を追はない、自らの眞實に隨つて歩む。至上の眞理は内面の眞實に在るからである。内面の眞實とは自らの感動に對して忠實なるの謂である。

懷しのヹルハアレン！　いかにも御身は幻惑的な感覺の詩を書いた。いかにも御身は群集を、騷擾を、都會を、港を、近代の文明と惡熱とを歌つた。御身は歐羅巴の詩人である。御身は現代の權化たる大詩人である。けれども私にとつては御身はこのやうな鑑賞に盡きること能はぬ熱い思ひ、優しい心の詩人である。私は御身の詩の中心を、眞髓を、御身の純粹性に於いて、御身の愛に於いて求める。御身の素朴にして打ち開いた心情に向つて求める。御身の一圖で熱い詩は誠に人生の經驗に觸れた。御身の後期の詩の隨所に、その内容その對象はいかにもあれ、御身の韻律の隨所に、私は御身の嗚咽を見出だす。喜びにまれ悲みにまれ御身の歌ふところには、持つて生れた善意とその努力とを人生に對して注い

だ者のみが味ひ識つてゐる「人」の嗚咽が聽かれる。笑ひの嗚咽！　涙の嗚咽！　私は御身のこの感激に打たれる。

張り詰めて頑であつた御身の心の莟は、今や花瓣を盃のやうに一杯に擴げて、匂ひと色とをのみならず、その蕋の奧所をまで捧げて、人の飮むに任せてゐる。一面の爽かな空氣の中に自らを見出だした驚きと喜びとは、御身の經過の困難であつたそれだけ、さながら御身を咽び泣くかのやうに笑はしめる。私は御身のこの生命の嗚咽に深く深く打たれる。自らに對して眞であり、自らの經驗に對して眞であり、自らの感動に對して眞であり得たが故にこそ、御身を私は限りなく尊いものに思ふ。

己れに對して眞摯なこと、己れの性向に對して忠實なることは詩人が第一の資格である。思想の修養がいかに完成のため大切な一路であらうとも、藝術上に於いては自らの感性に聽くこと以上ではあり得ない。

現實に打たれて、深い感動を以て響く感性こそ、藝術の愛を知つてゐる。人はその深く撼かされるところに依つて己れの性質を發揮し、己れの性質を遠く發展せしめることに依つて人は眞に活き、眞の生活を識得する者が偉大な藝術を成す。思想の開拓、哲學上の眞

理は詩人の行爲に支へられてこそ一の啓示であり得る。でなければ、實體を離れた空な抽象か懷疑と虛無との限りなき消極に過ぎない。

自らの性格を以て現實の上に更に一の現實を加へ、藝術の上に更に一の藝術を加へた、卽ち、生存の上に一の眞理を齎した人の中に、今日最も眞摯な自己の生涯を經終つたところのエミイル・ヱルハアレンを數へ入れねばならない。彼を知る爲に彼の傳記をたづねる必要はない。詩は彼の活きた傳記である。

その人生歷程は終つた。その作品は人類の希望の星として道標のやうに輝いてゐる。その「血みどろの白耳義」を訴へる聲はさながら勝利の歌のやうに響く。そのおほらかな熱意は存在の邪惡に觸れて高く鳴るからである。その歌は闇をして心の光りに充たしめるからである。生は短い、眠れ、眠れ、ヱルハアレン、いと長き光榮の床に！

―一九一七・一・―

ポオル・ヱルレエヌ

千八百九十六年一月八日の暗澹とした冬の午後、晝間から點されたランプが人生の憂苦を物凄い色合に照し出す霧と底冷えとの暮方、親しい看護とてもない落魄の床の上で永い眠りに就いた一詩人、之が、輕く漂ふ吐息のやうな名の持主、常に若若しい感動の爲に、宛ら開き過ぎた花のやうに身も心も費ひ果たしたヱルレエヌその人の最後であつた。

その亂れた髯、死後に異樣に碧くなつたといふその褐色の瞳、その偏平な鼻、その巨大なお出額頭は、夜暗を警める奇怪な象牙細工の釣燈籠か、鞬靼人のソクラテス、又は彼の罪のうちに老いゆく半人半羊神を想はせる。而影の似たるばかりではない、彼は誠に、體羊蹄の不滅神の魂を己れの内に持つてゐる。獸と人と神との三重の世界を最も緊密に一身に集めた彼は、常に涙を以て己れの罪を洗ひ、言葉を以て己が生命の深い奧底を告白せね

ばならぬ運命を、生れながらにして負つて來た。跡形もなく醉ひ痴れたこの墮獄の小兒が、意識なく才能なく、心の行くが儘に掻き鳴らした胸の緒琴は、人の念に觸れて、情緒を高める音樂となり、萬象に通ふ詩と成り、神聖なものをさへも感ぜしめる。

私はしばしばこの事を反省した。惡を知らぬ善無く、罪の無い純潔は無い。一生を通じて情熱に驅られ情熱の犧牲と成つた者こそ、清淨の生活を說くに最も適した者ではないか。最も麗しい詩は最も熱烈な人間的生活、卽ち最も不純な境地より溢れ出る。肉は悲しい、このユダ・イスカリオテ！　けれどもこの汚れた肉體の内にこそ、優しい心は芽ざすのである。罪は聖火を養ふ油である。ヹルレエヌは、不純に塗れて人生を照した生ける燭の一である。低い生活を以て高貴なものを抱いたヹルレエヌの苦痛の生涯を顧る時、人は己れの顏の上に畫かれた假面を恥ぢねばならない。矛盾に充ちた生涯は一の眞理である。ヹルレエヌほど欺らぬ者は稀である。

ヹルレエヌは說明し難い一の性質である。その粗野な面貌の下にいかに物柔らかな心行が隱れてゐることよ。(烈しくして優しい) とギクトオル・ユゴオが形容したこの大きな子供には、男性の本能の荒荒しさと女性の神經の纖弱さとが兼ね備はつてゐる。彼は一心に

祈禱を捧げる小兒であつた。又啖人鬼のやうにごろつき歩く惡漢であつた。彼は神の愛に醉ふ聖徒である。又肉感に溺れる放埒者であつた。彼は秋の葉のくるめき落ちるにも色蒼ざめて戰慄する夢想家であり、又曖昧屋の賣女の胸に眠る遊治郎であつた。彼の感性は凡べてに等しく打ち開かれてある。あらゆる感覺あらゆる感情は親しく彼の内に入り交つた。

彼は彼の風習に於いて道德家である。彼は正しい罪人である。彼の過ちには、何等己れの非を誇るデカダン主義惡魔主義も混じてはゐない。彼は常に己れの犯した業を悔いる。して又惡の路に陷ちたとしても、彼は心から恥ぢた。この虛榮の世に於いて、彼はその單純を以て、迷へる羊の行ひを自ら洗ひ淨めた者である。彼は邪慾に燃える牛獸神であつた。然しながら彼は基督敎徒であつた。パン神の死後に生き殘つたこの邪敎の子は、罪の愛、苦惱の愛、穢れより洗はれんとする愛、苦業を以て贖はんとする愛に悶えた。彼が斷ち難い煩惱を以て哀しみの中によろめく時、彼程肉慾の逸樂に涵つてゐる者もなく、彼程祈禱の精神に燃えてゐる者も無い。打ち勝ち難い肉體に精神の惱みをひきずられてゆくこそ彼の測り知られぬ美しさである。

彼は思想に於いて子供である。彼は理性に於いて女である。けれども彼の涙は一點も借

物ではない。その前後正體のない魂の奧底より流れ出る聲は凡べて音樂の音であ る。何者かかほどまでに感動の極みに搖り撼かされた者があらう。彼は凡べてを韻律の中に見出だした。

彼にはヴアジルの鮮かさもなく、ダンテの淨らかさもなく、ゲエテの豐かさもなく、ユゴオの激しさもない。ミュッセエ程の熱い息吹すらも無い。彼の優れた詩は辛うじて吐息である。見るからに消えも入りさうな小品詩である。彼は胸奧から唇に浮び上る言葉を呟きつつ、生の驚き、生の悲みを素朴に單純に謠ひ出でた。之こそ彼の偉大である。「秋の歌」、『ガスパアル・ハウゼエ』、「白い月」、「我が心の内に雨が降る」、「屋根の上には空」、その他の多くの短詩は、さながら物の魂の顫動がその儘意識と成つて、神を失ひ幸福と離れ、影と不全との地上にさすらふ無限の悲運にむせび泣くかとまで、人の心を打つのである。この故にこそヹルレエヌは永遠の詩人である。このゆゑにこそ彼は、最も眩惑的な詩人ではなくとも、最も尊敬される詩人ではなくとも、最も親みを以て愛される詩人である。

ヹルレエヌの前にはアルフレッド・ドゥ・ミュッセエがあり、ヹルレエヌの後にはアルベエル・サマンがある。共に感傷的な心の詩人である。ミュッセエのやや乾燥な性質とサマンの技巧

に過ぎた表白と、いづれもヹルレエヌの滯りのない流露を持たない。外國の詩人でヹルレエヌに較ぶべきものは獨りハインリッヒ・ハイネのみである。この兩人はさながら心に痛みを持つ者のやうに、喜びも悲しみもその心に觸れては眩暈と痙攣とを呼び起す。纖細な感性の持主である點でよく相似てゐる。然しながらヹルレエヌはこの獨逸詩人に何等負ふところの影響があるのではない。全く偶然の類似である。又、構想の痕跡を更に示さない、どこともなく洩れ來る響のやうな、ヹルレエヌが形式と內容との融會の致に比しては、獨逸詩人中最も輕妙な笛の名手ハイネと雖も少しく重厚に失して、魅力を缺くのである。

元來ヹルレエヌは外來語に何の影響も受けてゐない。ボオドレエル、マラルメが取り入れてゐる英詩の力强い調子に對しても、彼は一顧をも拂つてゐない。彼は純粹の佛蘭西詩人である。歷史を溯れば、ミュッセエ、ラマルティイヌ、アンドレエ・シェニエ、十八世紀の流麗調の詩人達、ラ・フォンテエヌ、ラシイヌ、又かの精緻なロンサアルに、その正しい系統が辿られる。

けれども彼は傳統に依つて己れの感性を撓める術を知らない。彼の詩は凡べてヹルレエヌ流である。彼の生活が斷片的に轉轉したやうに、彼は高踏派の精錬された詩風を去つて、

己れの氣息を以て、錯綜旋轉するニュアンスの韻律を樹立した。かくて、彼は思はずして自由詩の誘導者の一人と成つた。

ヹルレエヌの詩は全く自發的である。內在の音樂は香水のやうにその詩を匂はしてゐる。藝術家に兩樣の差別があるとすれば、己れの內に音樂を持つ者と、之を持たぬ者とに分けることができる。後者の詩は雄辯的で、前者の詩は音樂的である。ヸクトオル・ユゴオは雄辯の代表的詩人であつた。羅曼派また高踏派の不感無覺主義は正にその遺鉢を繼いだものであつて、遠く文藝復興の形式藝術に血脈をひいてゐる。然るに中世紀風のヹルレエヌは音樂的詩人の模範ともいふべく、雄辯と脚韻との徒らに嚴かな規約を打ち破つた。規法は一の手段に過ぎない。內容が之にそぐはぬ時、規は凡べて空である。

ヹルレエヌは更に微妙な他の法規を見出だした。詩は彫刻ではない、詩は生命の發露を以て響かねばならぬ。彼の「詩術」は《何事よりも先づ音樂を…》である。《餘りに適確なる勿れ、明快に過ぎることを恐れよ… 色彩をではない、暈影を… 雄辯なる勿れ、その首を絞めよ… 韻脚？ そは駄玩具の類である… 御身の詩をして、朝の涼風の中に見出だされるふとした良い出來事のやうにあらしめよ… して、その餘は文學の事である》と。

然しながら、彼は說を立てて作詩法の改革を計つた者ではない。「昔と今」といふ詩集で、上のやうな託宣を吐く遙か以前から、己れの感性の導くがままに自らこの主張を行つてゐたのである。

詩情の改革者、その詩風の創始者として、彼の態度は常に一貫してゐる。その感得の樂慾的なるにせよ、宗敎的なるにせよ、その愛の女性に對してなると天使に對してなるとを問はず、彼は等しく流れるやうな情緖を以て、殆ど差別のない肉感を以て答へる。彼にあつては好色と神祕とは分ち難い。彼の最も淨らかな詩集「智慧」すらも女性の甘い匂ひを以て充たされてゐる。彼は常に感情と理性とを區別する由を知らなかつた。いつも感覺の奴隷であつて、決して體慾に抵抗することをし得なかつた。官能に從へる時の彼は實に凄まじい有樣であつたといふ。この暴君の手を免れるより、彼は又、純にして優しい詩人、輕妙な話し手、善良な友達、物思ひと微笑との遊步者と成り切つた。

世界には各各の運命があつて、皆定められた路を行かねばならぬ。ヹルレエヌは、天の父が絕えず愛を以て呼ぶ所の放蕩息子として地上に生れ出でた。その痛恨の深ければ深いほど、彼は更に惡の橫道に迷ひ入つた。然しながら、かりそめにも主の慈悲に疑ひを置く

紹

ことなく、他

彼は誠に悔い

あらぬ十字架

の味ひを持つ

彼の無邪氣さ

て、いかに感激

ち速くも老いて

今日、リュクザ

るといふその石

う、ヱルレエヌ

朽葉が青春時代の愛誦詩人ジャン・アルテュウル・「ランボオの生ひたち」は、彼の二十二歳の時、文中にも斷つてあるとほり、大體ベリッションから抄譯した小品に過ぎないけれども、素直に、明るく、清新の香に富み、且つ、愛する者に就いては却つて多く語ることを欲しなかつた若い心の潔癖を見ることができる。譯譯「マクベス城の眞相」と共に、彼がこの種のものに指を染めた最初の作。いづれも當時（明治四十三年）雜誌「劇と詩」に寄せられた。彼がジュウルナリスムの餘技を示した「無告の民」は、死後ノオト・ブックの片隅から發見されたものを採つた。大正五年十一月二十五日稿。「最近に物故せる佛蘭西の作家二三」は早稻田文學大正五年二月號最近思潮欄のために物された短文であるが、既にその長篇の研究論文が準備されつつあつたレミ・ドゥ・グウルモンの項は特に潑剌としてゐる。「佛蘭西文壇の現在」は大正二年一月早稻田文學が海外文壇の紹介を諸家に依囑した際編輯員の中村將爲氏が朽葉を促してその一を擔當せしめたもの。之よりして彼の作物は凡べて中村氏在社時代の早稻田文學に發表された。

佛蘭西文壇の現在

最も人間なる者、――天才は彼の内に在る。
　　　　　　　　　　　　　ギクトオル・ユゴオ

世界は麗しい一卷の書と成るために造られた。
　　　　　　　　　　　　　ステファンヌ・マラルメ

見識らぬ戀人たち空中に抱き合ふ。
　　　　　　　　　　　　　エミイル・ヹルハアレン

詩

現代ほど複雜な時代は無いと思ふことは或ひは雰圍氣に捲き込まれた幻想に過ぎないかも知れない。しかし、眼前に浮動する現在の核を摑み、明日を豫言的に指（ゆびさ）すことは、過去の足跡を烏瞰景にして眺めるのと評家の勇氣に於いて差異がある。殊に自己の性格と閲歴とを披瀝せんとする自覺卽ち個人主義の運動が蜂起するに及んで、近代の現象は著しく錯綜したものとなつてゐる。

一八八五年以來、佛蘭西詩界に狂奔した象徵主義は取りも直さず個人主義運動の藝術的出現であつて、又一面外的事實に卽する自然主義を排した理想主義の主張であつた。藝術の自由、因襲の廢棄、殆ど妄想に近い新奇の憧憬、—— 之等の ANTI-RÉALISME の思想は一のメタフィジックを生んだ。世界は此の思考する我を離れて、卽ち我が觀念に造らるるにあらずして存在するものではない。言を換へれば、世界は我の表現である。我は種種の存在を見るのでなくて、わが見るところのもの、それが存在なのである。世界の理想化、觀念の現實化——此の美學的主張が象徵主義の哲學方面を形づくる。この《我》を無限に押し擴めて、生活の形象の内に、傳說の映象の内に、世界に漲る《我》の姿、又我に映る他の姿を歌ふのが表象派の使命であつた。詩人の純個性的なるものヹルレエヌ、純理想的なるものマラルメの兩者が表象派の源であるのは偶然ではない。

藝術の興味は二重に味はれる。藝術家としての態度及びその表現法、卽ち内容と形式の二つであるが、佛蘭西詩界に於いては、表象派以來、形の方面でも一大革新が起つた。當時までの詩は凡べて敍述的表現を以て直接に想を歌つたが、玆に象徵を以て暗示するといふ意識的主張が始まつた。象徵といふのは分解することのできない綜合一致の狀態に在

る一觀念の映象を指すのであつて、如何なる賢察家も明らかには述べ得ぬ眞理の精髓を最も多く含んでゐる筈の獨創印象を韻律的暗喩で以て發表せんとするのである。敍述に依る詩は斯く同感せよと權威を以て讀者に迫る。讀者は一つの出來上つた詩を押し込まれるのである。暗示による詩は積極的な態度を取らずに、ただ眼前に或る姿を髣髴せしめる。讀者は之を認めてその内奥に突き入らねばならない。卽ち、作者讀者の一致點は、彼にあつてはより理解的で、之にあつてはより推測的なのである。

從前の詩の法則は之等の複雜な意想を容れるには餘りに狹隘過ぎる。例へば、羅曼派、パルナッシアン派は、押韻の爲、聽覺の爲にのみ、意味に於いては續くべき言葉を次の句へ送つた。斯かる遊戲的彫琢はその根本に理義を誤つてゐる。音と意と共に最も簡單に止まるところ、そこが詩句の切れ目でなければならないのである。この詩形の改革に就いて、表象派には主に三様の手法が起つた。STÉPHANE MALLARMÉ は婉曲流麗の極致を求めて、彼の鍊金者のやうに詩句を練りに練つた。綴音の選に基いて人を恍惚たらしめる諧調を樹てた。一方 VERLAINE, RIMBAUD は詩句の桎梏を破壞して、共に《心憎い故らの澁滯調》を造つた。ヹルレエヌは幽艶な曲線の律格を傳へ、ランボオは魅惑的、飛躍的な

直線の律格をもたらした。更に律を奏し、均勢の境界を擴大するといふ外に、GUSTAVE KAHN は基調綴音を多く用ゐて自由に飜へる節奏の濤を鳴り響かせた。マラルメを詩の純埋を壓搾し象徴の極祕を此上(こよ)ない念想の中に映してゐるものとすれば、カアンは詩の純情に全音階を顫はせて象徴の燃燒を複雜な樂相(がくさう)の中に發してゐるのである。

暗示といふ暈抹法は實に表象派の特長であるけれど、亦玆に多くの弊が釀される。ややともすれば晦澁の衣を著けた抽象の化物が出來上る。象徴主義といへば殆ど避け難い一種の晦澁性を身に帶してゐるのである。謎めいた隱語の中には多くの具象が潛んでゐる。そして、それらは言葉の上には省かれてありながら重要な關係の鍵となつてゐるのである。元來、言葉の意味は相對的に推移して行く。又、ごく個性的なものである。作家の個性が密度に富めば富むほど讀者は深い直覺力を以て汲まなければそこに兩者の完全な默契は成り立たない。殊に個人的理想的な象徴主義の作品が長く謎語視されたのは無理はない。けれども或る一定の纖細(デリカ)な點まで來ると晦澁なんといふことは消えてしまふ筈である。個性の内奥より自發する感性は最も眞髓のものであるからして最も共通な心理現象でなければならぬ。我に深く刻するところを言ふ時、他はそこに已れの心を見出だす。理解を以て覺らんとする者にのみ解し難くなる。自由なる感覺の聲に自由なる感覺を以て應(こた)へれば、彼我の姿は全く融會し去るであらう。作品にして晦澁なものは無い。あるのは良否ばかりである。エドガア・ポオが《人は他が考へ及ぼし能はぬ事を考へ得るものではない》と言ひ、ショペンハウエルが音樂を指して《意志の直接客觀化》と言つたのは、共にこの要點を捉へて言ふのではないか。(特に玆に晦澁を論じるのは、反對派が常に象徴主義の作に難解を責めてデカダン呼ばはりをするからである。)尤も、初期の表象派は餘りに社會との接觸を忘れて無經驗な瞑想に耽り、餘りに象徴それ自らを興じ過ぎて異樣な空想に逸し、祕教藝術の名の下に數奇なビザンティニスムを凝らした。表象派が新聞記者等の惡言《デカダン》の名を轉じて自ら旗印としたのは面白いとしても、この覇氣が增長して馬鹿げた物言ひの濫用に陷つたのは弊である。象徴主義の畸形兒、消化不良患者の HUYSMANS はあらゆる倦怠と疲勞とに襲はれた擧句の果が神祕的裝飾家となつて、異形な寶塔を築き上げた。彼の藝術は珍奇な一顯現として矜るに足るとしても、例へば繪燈籠に集まる夜の蛾のやうに多くの作家が彼の惡影響の邪路に惱んだ。

雜然たる表象派をやや截然たらしめるものは《自由詩(ヹエル・リイブル)》の旗印である。各自、モデルに

依らぬ個性の印象を謡ふと同時に、それに應じる各自の表現法を求めた。記憶式な詩形の帝國を突破して、銘銘われの詩風を樹立てた。單調な傳統的文飾に律せられずして彼等はおのおのの自然に歸つたのである。革新の行はれるところ、常に《自然に歸れ》の叫びが聞かれる。

元來、この個性主義の運動に團體を生じたのは矛盾のやうであるが、極端に整正美といふ額緣の中に詩を鏤めたパルナッシアンに對する、更に複雜した主張の群が馳せ集まつたに外ならない。VILLIERS DE L'ISLE-ADAM, MALLARMÉ, VERLAINE, RIMBAUD を經て、GUSTAVE KAHN, JULES LAFORGUE が交互に自由詩の道を指示したまでを象徴主義の第一期とすると、その第二期 JEAN MORÉAS, FRANCIS VIELÉ GRIFFIN, HENRI DE RÉGNIER, ÉMILE VERHAEREN, MAURICE MAETERLINCK, STUART MERRILL, ADOLPHE-RETTÉ の諸家は自己の見識によつて各自の道を歩み、各自の異色を出した。その一致するところは、實に詩を解放し、自由にしたといふ過去の事實にしか續がつてゐないのである。一八三〇年の羅曼派以來六十年間の全盛を持續した帝國式規法は、パルナッス帝國に至つて絶頂に行き詰つた末、象徴主義の破壞運動で瓦解し、ここに

自由詩の建設運動で共和的自由思想が確立されたわけである。

主な思潮は斯かる動力に連れて推進してゐるけれどかかる大傾向には多くの傍系を生じるのが常である。第一に彼の十六世紀の七星會に倣つた羅馬派の一派が JEAN MORÉAS, RAYMOND DE LA TAILHÈDE, ERNEST RAYNAUD 等によつて宣言された。廢語古語を近代化する技巧運動であつて、自ら求めてぎこちない表現に陷つた。この派はやがて消滅してしまつた。モレアスの傑作といはれる「LES STANCES」(小唄)、「IPHIGÉNIE」は、彼が氣どり過ぎた擬古趣味を棄てて、表象派のモットオ《個性的表白》を開拓した後に作られてゐる。

ANDRÉ GIDE, HENRY MAUBEL, PAUL CLAUDEL 等は特に一種の觀念現實說を立てて、異樣な感覺の中に生と夢幻との照應を捉へんとし、沈默の味ひ、靈の世界の印象を寫さんとしてゐる。

RÉGNIER, PIERRE LOUYS 等は次第にパルナッス詩宗 JOSÉ MARIE DE HÉRÉDIA の遺鉢を繼いで、古雅な模様と一層整つた詩句とを以て象徴のニュアンスに希臘思想を調理せんとしてゐる。この美學は羅曼派の荒い感傷と自然派の現實味とを弱めて、夢みるが

如き諧調美の中に幽玄の消息を仄かさんとするのである。この二人が共にドゥ・エレディアの娘を配偶としてゐることは或る意味を語つてゐる。

又 GEORGES RODENBACH は獨り離れて、廢滅を描き、寂靜の生を沈思した。

私は之等モレアス、レニエ、ロオダンバックの人人に表象派の陷り易い態度過重癖を咎めざるを得ない。象牙の塔より眺めた人生は夢幻の靜觀を與へ、靈感を熟せしめる。抽象の地に纖細の花を咲かしめる。而して、或る他の重大な感性は歪げられて生きながら萎んでしまふのである。

私はこの《美》の直觀の相違より思ひついて、別に詩家の傾向を二様に分けてみよう。一は主として内心に聞き、時空の觀念を忘れ勝ちに瞑想を嗜む性癖で、他は社會の現象との接觸に重きをおいて、直接簡單に人類の生活に身を投ぜんとする性癖である。前者は感覺的であつて、個性の幽い心を常に忘れず、後者は思想的であつて、人類共存の明るみを常に忘れない。表象派に前者の傾向が多く、表象派の迂遠を責めて新たに起つた人本主義、本然主義、佛蘭西派、完美主義等の數團に後者の傾向が多いことは否まれない。

一九〇二年、ユマニスムの第一人者 FERNAND GREGH は FIGARO 紙上に宣言書を發して、

《パルナッス派、表象派にしばしば缺けてゐるのは人性である。吾人は人間といふ點で共通なのである。然るに、藝術家の人を動かすところは、深く人間たるにあることを彼等は想はない。彼等の後繼者たる我等は其の例に鑑みて、更に熱烈にして心優しい、更に内的にして廣い藝術、直截にして生ける藝術・卽ち約言して人本の藝術を思ふものである。吾人の望むのは感覺のみならず、感情思想を併せ有する全人を語る詩である。凡べて大詩人は、時代を問はず、藝術家たると同時に子であり、父であり、戀人であり、市民であり、思想家であり、信仰家であつた。彼等の詩は彼等の生そのものを歌ふ。美想卽美派・詩想卽美派を經て、今や生卽美を樹つべき時代である。我等は象徴を否む者ではない。ただ、明らかになれと言ふ。美しくして暗い象徴は鍵なき寶玉箱の美しさである。ギニィには麗はしい象徴があつた。而も人は之を解し得る。最も深奧な事をも解き易く言ひなせるものである。思ふままに象徴を積むがよい。ただ、その内部に心臟の鼓動、諧調なる思想あるを感ぜしめよ。吾人は無感性、無連絡に倦み果てた…… 吾人は神秘家でも懷疑家でもない。

吾人は生の中に沒入して、之を解し、これに活きねばならぬ… 詩人よ、共に生を謳ひ、地上の努力を全うせしめよ、無限の中の此の刹那に人の想ひを麗はしい詞に書き記し、次に來る人人に傳へん爲に。すれば、やがて吾人は成し遂げた作物の上に一瞥を投げて、烈しい冥界へ旅立つ前に斯く言ひ得るであらう、『たとへ死後が如何にあらうとも、私は何等の恐怖もない。私は正に人間であつた』と。』

本然派といひ、又 TOULOUSE に起つたトゥウルウズ派の一團といひ、その主張するところ、同胞共存の願望に於いて、切實に社會の一員たらんとする點に於いて、格別ユマニズムと差別はない。トゥウルウズ派の最も主張的、最も告白的な詩人 MAURICE MAGRE はその詩集「人類の唄」の序文に、『長い間詩人は人を離れて夢みた。藝術は其の手にあつて贅澤品となり、選良（エリツト）の特權となつた。爾今、藝術の聲は凡べての爲に起らねばならぬ。今や大數は饑ゑて精神の糧を請ひ求めてゐる。これ、彼等の存在に缺くべからざるものだからである… 吾人の存在は十分に發現し能はぬ懊惱に襲はれてゐる。智慧の果（み）のみ徒らに偶像視され、偏見者流の大勢の爲に吾人は囚はれとなつてゐる。これら虛僞の偶像を滅して、藝術は我等の風俗中に浸潤し、あらゆる生活樣式を抱かねばならぬ』と、藝術の社會化思想を述べてゐる。

又 SAINT-GEORGES DE BOUHÉLIER は本然主義の宣言書に、『我等は人類の壯觀を歌ふ… 地の胎内に生れたる水夫農夫、鷲に近く棲ふ牧人達を讃（たた）ふべき文學來る。詩人は新たに民族と混る… 』と、生の翅を以て詩に熱烈な翱翔を授けんとしてゐる。

又、一九〇〇年、當時頂點に達してゐた WAGNÉRISME の專横を憎んで、MOZART 會を起し、一九〇一年 ÉCOLE FRANÇAISE といふ一詩派を創めた ADOLPHE BOSCHOT は形式の上よりパルナッス派と自由詩派との解決を見ようとして、『律格（リトウム）は詩句の基と成る。何等か一定の法則無くては律格は音樂的表白的であることができない。のみならず律格それ自身であることもできない。一般に、詩は RONSARD 以來 HUGO までに見出だされた律格を以て完成してゐると言つてよい。爾今は古い律格に新しい情緒、感情、思想の更に音樂的な表白を賦與すれば足る。もし危險を顧ず、律格に自由な個性的變改を試みる詩家があつたところで、それは全體の律格改革問題とはならない。──最も重要なのはやはり傳統し來つた要素的律格である』と。完美主義の ADOLPHE LACUZON も同樣な意見を吐いてゐる。凡べて新結社の人人は羅曼派の規律正しい韻律法を採る點にもほ

ぼ一致してゐる。

新運動の起るところ常に二様の意味がある。卽ち、已れに先立つ流派の誤謬を指摘すること、已れの主張の實を擧げること。今、之等の新しい主張はいづれも非社會的傾向を表象派に難じ、徒らに夢魔に親み、奇異を樹てるに泥んで、人本の大道をおろそかにした罪を唱へてゐる。いかにも表象派の初期には時代をなみして、人間離れのした象牙の塔へ籠つた者もあつた。人生に藝術を打ち立てる者にして幻滅と厭世の念とに打たれぬは少い。並勝れた愛著の心、優しきに過ぎ、脆きに過ぎる藝術家の性向は自らの民を作り、迷路を作る。迷路を踏んだ者に更に叡智なる密度の不足を責めるはよい。ただ、人本の詩家達がヹルレエヌの天眞流露を讃へて、マラルメの瞑想、神祕を咎めること甚だしく、範とすべからざる特異の人マラルメが派を樹てたが爲に佛蘭西詩界は十數年の長き、その影響に惱んだといふのは誤解である。象徵主義なる意識的運動はマラルメと其の周圍の人達との接觸に始まつてゐると言つても差支へない、彼等はマラルメの高潔純淨な品性を慕つて、自ら弟子と稱した。けれども、マラルメに誤られて隱遁生活に入つた人は表象家の中心には唯一人も無い。モレアス、カアン、ヹルハアレン、ヸィレエ・グリッファン、ポオル・アダン、

メリル等、皆新結社の人人に數へられぬずつと以前に汎愛の思想を抱いて、現代の渦中に生存の聲を擧げてゐる。

けれども、人本の詩家が唱へる趣意、表象派と異る點は、前者が著しく倫理的色彩を帶びてゐるところにある。彼等の主張は自己の悲喜を歌ふに止まらずして、他の爲に精神の糧を與へるに在る。藝術に敎訓を寄せんとする危機は創才を先にせずして思想を先にする錯誤より生じる。又、餘りに素朴單純ならんとして、彼等の詩はしばしば常識と饒舌との平板調に墮してしまふ。けれども、彼等の藝術的良心はその主張よりも更に深く、更に複雜な、何等の解釋をも許さぬ純境地に到達せねばやまぬ筈である。イスムの中に作物の價値は包まれ終るものではない。グレッグの紅玉のやうな詩、ボッショオの室內樂風の詩、ブウエリエの才氣煥發の詩、それぞれ主張の臭味を脫した爽かな黎明の匂ひを放つてゐる。畢竟、表象派系統の人人が或る意外の美、或る直覺の飛躍を齎したに比して、新たに起つた作家達が鋭さに於いて、密度に於いて劣つてゐるのは、餘りに抒情的であり、努力的であり、進化的であり、木訥であり、喧噪冗漫であり、主義的であるからで、個性の鋭感が精髓であつて共存の思想が後であるといふ理路を敎へてゐるものである。如何に理に於いて

立派な說が現れやうとも、それが直覺（全感性）より出てゐないといふ誇張又は薄弱の印象を與へるならば、人は直ちに受け入れるものではない。イスムの如きは末である。態度といふが如き生ぬるいものを持たぬ鋭感の人、焦燥の人によつて、藝術の炎は燿くであらう。

自由詩派に加らず、又前述の結社よりも主張的運動的でなく、內省に努め靜光を愛する人人がある。例へば聲を飮んで癒すに由ない苦惱を語る處女の如く、常に別離の哀みを告げるにも似た ALBERT SAMAIN、新ルソオと呼ばれて自然の中に自適しつつ、率直粗野な田園詩に至醇の溫情を歌ふ FRANCIS JAMMES・逸樂の苦患・空しい時に對する嫌惡を、曠野に異樣な灰赤色を染める十月の日沒にも似た痛ましい光りを以て描く CHARLES GUÉRIN 等、この三人はかはらぬ友情を契つた仲であつたが、サマン、ゲランは餘りに心弱く、消え入るやうな詩風を實現して、早く地下に眠つてしまつた。この人人は涙多きに過ぎ、力強い生生としたところに缺けてゐる。HENRI BATAILLE は憂鬱な生の哲學を潛めた小兒の印象、え知れぬ恐怖の心持を歌つてゐる。ANDRÉ RIVOIRE は靑春のお

ちつかぬ憧憬と報いられずして傷けられた悲歎との小夜樂を熱い指で彈じてゐる。

又、自由詩を採りながら特殊の異風を樹てて、表象派には傍系たる人人がある。同じく自然の心を歌ふとはいひながら、フランシイ・ジャンムとはまるで違つて、BALLADE の形のもとに民謠傳說に現れた生活の反影、汎神の意象を歌ふのが PAUL FORT である。この人は詩と散文との特長を採つて、その何れでもない第三の形式に自然の釣床に搖られる荒い無智の心を寄せてゐる。

又、世界は生成進化する。萠芽より滿開に、無意義より智慧に、本能より理法に、權利より義務に、――卽ちより良き方へ趨くと、愛他による醇化の哲學を唱へる詩人が RENÉ GHIL である。彼はその實證的勞作を三大部に分けて、第一には個性としての人間を檢べ・第二には人類といふ一大綜合物の發展の跡を究めて、その步むべき道を定め、第三に調和的宇宙觀の詩情詩を終る計畫の下に孜孜として筆を執つてゐる。又、彼はランボオの〔母音〕に色を聽く感覺を更に進めて、子音に管絃樂の樂器の響を結合した。又、東洋の國は不思議に自分を引きつけると言つて、ジャワ語、マレエ語で詩を書いたりしてゐる。

SAINT-POL-ROUX はやや煩はしいまでに複雑莊麗な壁畫の趣を描かんとしてゐる。その表象詩劇「LA DAME À LA FAULX」(大鎌夫人) は斯かる種のものでは傑作と言はれてゐる。MAGNUS と DIVINE の兩人(生の象徵) が幸福を尋ねて、遂に大鎌夫人(死)に刈り立てられるといふのである。

新たに立つた人人が如何に攻擊の聲を擧げやうとも、詩壇の第一流にをり、その識量、その經驗に於いて目ざましい發想力に充實してゐるのは表象派系統の人人である。彼等は本然の知識、人本の熱情に於いて一步も他に讓るところはない。抑も現代の詩家にして汎愛の思想を懷かぬ者、社會と交涉深い作物を出ださぬ者は殆ど皆無なのである。

虹の如く麗しく、火の如く熾烈なカアンの「LE LIVRE D'IMAGES」(映象の文)、希臘藝術の豐艷にして犯し難い純容に生活の俤を浮び添はしめたモレアスの「LE PÈLERIN PASSIONNÉ」(情熱の巡禮者)、闇中に光明を把捉する底の奮激詩人ヱルハアレン、「LES CITÉS DES EAUX」(水の都)、「LA SANDALE AILÉE」(翅ある草鞋) 以來、夢幻を斥けて、幽玄の園に生の花を植ゑつけたレニエ、紅い祈禱と感激とを以て完美的綜合境——最

上の現實を念出する《歡喜の詩人》、《生の詩人》、ギィレエ・グリッファン、「LA VIE DES ABEILLES」(蜜蜂の生活)、「L'INTELLIGENCE DES FLEURS」(花の智慧)より「L'OISEAU BLEU」(碧い鳥)に至つて、神祕の霧を拂つて叡智の禮拜に生活の燈明を點じ來つたマアテルリンク等、表象の藝苑は馥郁撩亂としてゐる。

その他、早くより人類共存の鐘を鳴らし、徒らに迷夢に耽る者を喚び起すに努めたアドルフ・レッテエ、ステュアアル・メリル、凡べてに觸れ、時代精神の奧に突出して黃金の鍵を齎すに鮮かな批評家 ALBERT MOCKEL, CAMILLE MAUCLAIR、日曜の朝に淨い讃美歌を擧げる MAX ELSCAMP、現代の科學化を强烈な色彩で描く未來派の首唱者 F. T. MARINETTI 等の出色の人人がある。

又、社會小說家の泰斗 PAUL ADAM 哲學家の重鎭 REMY DE GOURMONT は象徵主義を守つて終始一貫した、此の派にとつて忘れ難い恩人である。

この狹い縮圖の中では、私は流派の傾向を語るに急がしくて、具體的に銘銘の複雜な特徵を硏究する暇が無い。レニエの言葉を借りて言へば、一夥一夥を數へずして、一房の重

みを量つてみるに過ぎない。

又カァンの言葉を聞けば、《詩といふ藝術最高の形式に於いて第一に尊ぶべきは光明ではなくて、密度と音樂となのだ》。詩界はもはや或る偉大な影響を受けて進歩するやうな幼稚な時代に在るのではない。

爾後は凡べての流派が壞れて個性の飛躍を見るの時であらう。

ひろく佛蘭西文壇を通じて現今最も緊張した向上の叫びを飛ばしてゐるのはヱルハァレンである。例へば、ランボオは焦燥の餘り眞僞を探求する暇なくして新人たらんとした。ヱルハァレンは本能的賢性を以て絶對單法の方へ翺翔せんとするのである。彼一個の存在は死の爲に人類の騷擾の中に溶け入るであらう。けれども、いつの日にか全部の意識に甦るのである。その時にこそ童貞共存の彼は金眼不動の永遠の炎となつて燃え上つてゐるのである。ランボオの世にも狂はしい夢魔をヱルハァレンの本能的賢性に目覺めた慧眼と努力とを以て果して世界から驅除し得るか否か？ 彼の VILLIERS DE L'ISLE-ADAM の ILLUSION の説、LAFORGUE の INCONSCIENT の説、又幾多の愛著心をして世を厭はしめた、押しのけ難い倦怠の牢獄から、果してヱルハァレンの輝く理想境は時間と空間

とを絶せしめ得るであらうか？

眞心の人は愛の爲に傷き、愛の爲に永久の童貞を守つて死の道に赴く。わが躓くところのものに依つてわが救ひを得る人性は、絶望の淵にも驚歎を知り得るものである。ランボオの《私は麗はしさの故に生を失つた》と言ひ、ラフォルグの《FÉMI／I-CULTURE 卽近代の極致》と言ふのは此の感性の一閃に外ならない。玆に於いて、私はマアテルリンクの汎愛の念を歎ぶにも關らず、彼の神祕化に意味を感ぜず、厭味を感じる。彼の叡智(サジエッス)なるものは餘りに人間離れのしたものであつて、本能の驚異を忘れ抽象の弊に墮したと言つて、私は憚らない。《最も人間なる者、天才は彼の内に在る》のではないか。私が最も不思議な現象を感じるのは、マアテルリンクの餘りに豐かな才分は彼の汎愛の大道に神祕の霧を煙らせたことである。そのため彼は宗教的な運命(デスティネエ)を夢みた。これは美しい夢想には相違あるまいが非現實である。人生といふか蒼い闇の中に人人が登つて來ては相識らずに無言のまま西と東へ消え去つてしまふ。マアテルリンクは豐か過ぎる想像を以て、人は永遠に運命の巷に彷徨するに過ぎないと思ひ込んだ。然るに、此の愛の哀しみ、――そこに既に私達は豫言的に相默識してゐるのではないか。ただ、私達は言語不通の爲に相語ることがで

きない。進化の途中にある私達は愛の哀しみそれ自身によつて、藝術によつて相默識し、相照應する。永遠の觀念はそれ自身永遠である如く、驚歎の花はそれ自身人生に共存の芳香を漾らしてゐるのである。人生の園には『惡の華』が咲いた故に尙更に麗はしさと懷しさが强く意識されるのではないか！　私にはマアテルリンクの迷ひの花は更に一異彩を添へる爲に咲き出したものとしか思へない。

消し難い愛の哀しみ、習慣の嫌惡、次いで來る生の倦怠、——之等を純一にした刹那主義の實現實成こそ悠久に健全な詩を語るものだと私は信じる。それまでは、あゝ、焦燥の藝術家！　私は彼等と共に血に塗れた足を旋して眞紅のワルツ曲中に輾轉したい…

小說

十九世紀前半に文壇全體を風靡した羅曼派は GUSTAVE FLAUBERT を境目として現實主義に移つてゐる。實驗の精確、沒我の態度に於いて、「ボヷリイ夫人」は現實派最初の傑作である。物質に卽せずして現質の印象を書きとめるゴンクウル兄弟、調和的、秩序的筆致を以て、やや凡庸な近代生活・ティピカルな人物を描いた ALPHONSE DAUDET 等

は、共に勿體振り過ぎてゐて、ZOLA, MAUPASSANT の烈しい物質の匂ひを帶びてゐない。厭世物質主義者 ÉMILE ZOLA の科學的、社會學的態度は、いつでもその感傷的な底の性質に裏切られてゐる。GUY DE MAUPASSANT に至つて初めて眞の自然主義者が見られる。彼は倫理を交へず、哲學を容れず、藝術觀すらも無いかと思はれるまで無關心な態度で、物の半面を見るゾラの弊をも離れて、在るが儘なる生活の表裏を照した。ただ、この稀らしく完全な自然主義者にも缺點があるといふのは、精確に過ぎて美を忘れたところであつて、『この神經病者は神經の無い筆法でもつて』筋肉だらけの生活を書いた。

心理的創力を貶しめた自然派に慊らず、その缺陷を唱へて立つたのが BOURGET 一派の心理小說家である。當時この派には PAUL HERVIEU, OCTAVE MIRBEAU, ROBERT DE BONNIÈRES 等を數へたけれど、この集合は疾くに消滅してしまつた。それに、この心理小說なるものは自然主義の半面に過ぎないので、その分解的態度に於いては何等の變りもない。物質過重主義に答ふるに內的自然主義を以てしたまでである。ブウルジェの心理は合理と解剖と註釋との地盤を踏むに急しくて、形體とは離れ勝ちである。半面的なること、人爲に墮してゐる點はゾラと更に異らない。共に他を排して自らの主義を發揮した

ところに躓いてゐる。

自然主義の影響を蒙らずに、獨り苦笑してわが性癖を呼び、忍從の思想を小說の形に表す倫理家が ANATOLE FRANCE である。彼は狂暴を嗤つて、善意にして且つ皮肉な一種の佛蘭西氣質の中に心の優し味をも烈しい熱をも包み込むことを始終忘れない。彼は常に反省し、常に頰笑んで、格言と年代記とを編んでゐる。緩かに流れ緩かに淀むやうなその中古的手法は限りなく複雜な構想を古色蒼然たる聖女昇天の壁畫めいた一幅の中に氣韻と品とを添へて巧みに納め了する。彼は懷疑家であるとしても、メタフィジックの境を出でない、熱情家であるとしても俗惡な現實社會に用は無い。小說は自分の靈魂の物語を飾る額緣なのである。或ひは MONTAIGNE, RENAN の列に入るべき思想家ではあらうが、矛盾に苦む創作の人ではない。この聰明な幻想家は多くの作家と違つて、決して厭世的ではない。最近の「LES DIEUX ONT SOIF」(神神渴す)に至るまで四十餘卷に餘る著作の中で、「HISTOIRE CONTEMPORAINE」四卷は彼の代表作である。あらゆる折衝に對して頰笑んでかかる彼の倫理癖が此の豐満な研究の中に躍如としてゐる。「LE LYS ROUGE」(紅百合)は麗はしい戀物語として特に朱書すべきものであらう。一言にいへば、彼は逸話作家の上乘である。

複雜至極で何れとも分類することのできない點はフランスに同じく、常に狂熱と跳躍とに沸き立つてゐるのがオクタアヴ・ミルボオである。この倫理家はフランスとは反對に現實の渦中に身を投じた破戒無慚な惡僧の趣がある。彼には節度を知らぬ亂雜がある。調和を越えた好惡がある。その「LE JOURNAL D'UNE FEMME DE CHAMBRE」(小間使日記)は或る種の社會の底を掘り下げて爭ふが如き力に充ちてゐる。

心理小說の一派が分野を占めると同時に、自然派には分裂が起つた。PAUL BONNETAIN, LES FRÈRES ROSNY, LUCIEN DESCAVES, PAUL MARGUERITE, GUSTAVE GUICHES の五家が、師事してゐたゾラの偏見を責めて、更に深い人本の思想によつて個性の藝術を立てねばならぬと宣言したのである。筆頭のボンヌタンはジュウルナリストの類であつて、大した價値を置かれる人ではない。ギッシュは忠實な觀察を克明に誌す點に於いて寧ろ心理派に入るべき人である。ポオル・マルグリットは弟ヰクトオル(VICTOR)との共作に成る ÉPOQUE (DÉSASTRE, TRONÇON DE GLAIVE, BRAVES GENS, COMMUNE)(災害、劍把、眞心の人人、コンミュンヌ)が戰時の動搖を印象風に描いた代表作

である。分解的にだらだらと委曲を盡す書き方なので、讀者は場面場面の複綜に勞れて、全體を一つの TABLEAU に纒めて見ることができない。ロオニイ兄弟はしばしばとんでもない方向に逸れる。形を忘れて內容を重んじ過ぎる爲に科學の術語を埒もなく並べ立てて、藝術の域を遠ざかることが度度である。けれども、此の二重の作家は人類の流れと個人心理との接觸、世界に漲る近代の熱情的態度を正確な理路をもつて辿る力量がある。此の MODERNISTE の觀念と意氣組が尊い。

又同じく自然派より出た人人に HENRI CÉARD, LÉON HENNIQUE, ÉDOUARD ROD 等がある。エンニックの「UN CARACTÈRE」（一人物）は性格の素描に成功してゐる。ロッドは烈しい危運を敍するよりも靜かな家庭の生活を寫すに長じてゐる。社會問題の作「L'INDOCILE」（不柔順なもの）で華美な時代の葛藤を論じるに不適當な弱點をあらはし、「LE SILENCE」で內省的良心の慧しい跡を辿り得る發露を示してゐる。其の他 LÉON FRAPIÉ は貧者、小兒等の NAÏVE な喜びを好んで畫き、ÉDOUARD ESTAUNIÉ は多くの私生涯の物狂はしい缺點を摘發してゐる。

GUSTAVE GEFFROY の「L'APPRENTI」（徒弟）はフロオベエルに私淑した、重重し

く、敬虔な人性の作である。

PIERRE LOTI は自然主義の影響にあづからぬことフランスと同じく、獨り異を樹てて異國趣味の風物を映景の如くに顯現せしめてゐる。

彼の描くところ、思想もなく、心理解剖も無い。「L'INDE SANS ANGLAIS」（英人の居らぬ印度）、「LES DÉSENCHANTÉE」（失意の女）、「LA MORT DE PHILAE」（フィレェの死）等、常に、衝動の人を、彼の鬱陶しい印象を以て幻燈のやうな境地に蠢かせ、彼自らの痛ましい悔恨を荒涼たる東洋に寄せてゐるのである。此の內心唯我的な幻滅家は亞細亞人の無智と墮落の精神とに彼自らの疲弊した靈魂の倦怠を託してゐるのである。

輓近社會問題がやかましくなるに連れて、所謂問題小說が勃興して來た。元來、革命といふ實驗圈內を潛つた佛蘭西の小說界は社會主義、勞働問題、下級民の反抗等に早くから注目しなければならぬ筈であつた。然るに、「LA COMÉDIE HUMAINE」（人生喜劇）で、七月王朝の設立や市民の動搖、亦、黃金の威力等を精細に觀察した BALZAC も、カトリック思想、貴族の權威の滅び行くを歎じるのみで、その當然の結果たる問題に想ひ及ぼさな

かつた。元來、プロレタリア精神なるものは工業地に生じるにあらざれば完全な形をとることはない。社會といふ舞臺に勞働者が主人公となる前には、改革の氣運は百姓の間に動いてゐた。一郡對一邸の問題は頓て暗中飛躍の怪物等の手によつて市民の恐怖となり、殘忍な慘景となり、遂に文明の全問題と成つた。文藝界ではユゴオの「LES MISÉRABLES」(レ・ミゼラブル)、フロオベェルの「L'ÉDUCATION SENTIMENTALE」(感情教育)を經て、ゾラに至つて全幅を呈した。「GERMINAL」は同盟罷工の歷史を語り、「TRAVAIL」(勞働)は咸の幸福を說いてゐる。LÉON CLADEL の「N'A QU'UN OEIL」(獨眼兒)、CAMILLE LEMONNIER の「HAPPE-CHAIR」(肉鉗)等も同盟罷工の硏究である。JULES CHASE の作は、「BONNET ROUGE」(紅帽)のやうな社會硏究にでも、「L'ÂME EN PEINE」(苦める魂)のやうな、他とは截然たる區劃をなした宗教家の精神を描いても、常に高い理想の標準を忘れないで、而も強い現實の感銘を得しめる。

ブウルジェは「L'ÉTAPE」(推移)、「UN DIVORCE」(離婚)、「L'ÉMIGRÉ」(亡命者)等で改革以前の階級精神の擁護に努め、家庭と國家との爲に民主思想、個人主義と鬪つてゐる。「推移」には先づ家庭的良心の人たれと言ひ、「離婚」には教會分離の不幸を說いて舊

教國教說を立ててゐる。彼の解剖的性向は錯綜した問題にもてあぐんで、展開を待たずに落著を急ぐ嫌ひがある。

最も馬鹿げてゐるのは、自我の教儀を唱へた MAURICE BARRÈS が「國民力の三部作」(LES DÉRACINÉS, L'APPEL AU SOLDAT, LEURS FIGURES)(「根こぎにされた人人」、「起てよ戰士」、「彼等の風姿」)に土地と民族との基本關係を說いて愛國主義にまで發展した經路である。此の才氣煥發の ARRIVISTE は四圍の境遇に應じて見事に自說を實現した。世界に幸福を領せしめるには先づ銘銘が各自の幸福を求めねばならぬ。その幸福を得る爲には一般の情調と自分の思想が一致する振りをするがよい。社會思想流行の時は社會小說を書き、代議精神流行の時は代議劇を書いて、話題を作り、自ら問題の主人公となつて、遂に民心を率ゐるに至るべしと唱して、彼は立派に模範を示した。その後、彼は隱忍な DISRAELISME を棄てて、「LES AMITIÉS FRANÇAISES」(佛蘭西の交誼)や「COLETTE BAUDOCHE」に直截な思想を述べてゐるけれど、元來一鄕土の歷史を說くにふさはしい其の才は、社會、政治の大壁畫を描くには更に廣く重い凝力が足りない。

MELCHIOR DE VOGÜÉ は「LES MORTS QUI PARLENT」(物言ふ死者)の中で過去

の如何に現在を壓するかを說き、新文明と見える代議精神の聲も實は祖先の聲の反響に外ならない、而も汚れた思想の歷史は祟りをなして、吾人をして相憎ましめ相爭はしめると、いふ悲觀哲學を老政治家に言はしめてゐる。又、その「MAÎTRE DE LA MER」(海の主人)は中世紀の騎士道と今日の功利思想とを對照して、進步と墮落との提携を論じてゐる。

ボオル・アダンの「LE MYSTÈRE DES FOULES」(群集の不思議)は選擧や政變の濃い人生の幻影を彩るに不思議に力强い群集の心理を以てしてゐる。更に LAIS LUMET は藝術の作品によつて第四階級民の趣味敎育を擧げんと努めてゐる。彼の「LA FIÈVRE」(惡熱)には田舍の村が思慮ある青年によつて選擧の意義を明かにし、共和黨新聞を發行する等の新努力を記し、「LE CHAOS」(混沌)には目を開いた勞働者の新階級が同情ある小資本家、小經濟家と結んで、一般の風雲となるべき一大勞働組合の機を窺つてゐるところが僩勁に描出してある。

これら問題文藝の人人が遂に政治の方面と融合して、トラストの横暴を挫くこととなつたら、二十世紀文明史の第一頁を飾る光榮を得るであらう。

別に女性の爲に解放問題を提げて、新 ÈVE 讚美の聲を擧げてゐる FÉMINISME の一

派がある。MARCEL PRÉVOST, JULES BOIS 等が之である。例へばプレヴオの傑作といはれる「LES VIERGES FORTES」(强き處女)中の女流藝術學校長ピルニッツは强き處女 JEANNE D'ARC を理想として、自由にして純淨な處女の海を作り、明日の人道の爲に男性の唯我的偏見を示摘するのが新婦人の使命だと演說してゐる。けれども、プレヴオの態度は餘りに興味中心的で、女性の時流に投ぜんとするやまが見えすいてゐる。「LES DEMI-VIERGES」(半處女)の如き好題目を捉へても、彼は輕く書き流してしまふ。思想にしても格別な新味はない。

更に、RENÉ BAZIN, HENRI BORDEAU, ANDRÉ THEURIET の鄕土藝術家がある。中にもバザンは素朴眞摯な筆致を以て、田舍の小財產家と農夫との行違ひより荒れゆく田園を傷み、急進文明の暴力の爲に柔順な生活に慘憺たる運命の來るを哀んでゐる。「DON-ATIENNE」、「LA TERRE QUI MEURT」(滅び行く土地)、「DE TOUTE SON ÂME」(眞心より)等、皆ここに材を採つてゐる。

又、象徵主義を持して小說に主力を注いでゐる人人がある。ユイスマン、ボオル・アダン、

やや傍系ながら、ÉLÉMIR BOURGES, ANDRÉ GIDE 等が之である。ユイスマンは初めは卑賤な社會を研究したが、だんだん人生の佯狂を「A REBOURS」(逆まに)に歌ひ、惡の歡びを「LÀ-BAS」(彼方)に賞翫し、遂に全く官能的な方面からカトリックの莊嚴な乾燥美を選んで、「CATHÉDRALE」を描くに至つた。ブウルジュは「LES OISEAUX S'ENVOLENT ET LES FLEURS TOMBENT」(鳥は去り花は落つ)、「LE NEF」を、アンドレ・ジッドは「PORTE ÉTROITE」(狹き門)を著して、共に現代の幻覺者が如何に紛糾した個單性を持つてゐるか、その態度の如何に凝視的であるかを示した。

ポオル・アダンに至つては、現代唯一の大パノラマ畫家であつて、綜合的時代小說家の第一人である。群集の社會力、軍人の偉力等を強く儼しい筆で一刷毛に描出する。かういふやや雜然たる構圖の中で、彼の說くところは常に選良の生活である。實業にでも、政治にでも、藝術にでも、傑れた見解の人人がある。これら個人の所產を群集に理解せしめ、近代新人道の一王國を造つて、偉業を樹立せねばならぬ。團結を離れた個人個人の運動では動きがとれないといふのである。然し、アダンは OPTIMISTE ではない。最近に苦心の作として騷がれた「LE TRUST」(トラスト)は埃及に於ける資本家、勞働者、社會革命家

の葛藤を敍べて、群集のエネルジイ(悲壯神祕なゼロの層)が徒らに(時)の海に溺れて、PHARAON のやうな顏をした眞理の嗤ふところとなるに過ぎないことを示してゐる。吾人は時間といふ目隱しがある爲に、鼻先の今明日に焦慮するのみで、未來を見透す目が無いのである。その他「ÊTRE」(存在)、「LA FORCE」(力)、「L'ENFANT D'AUSTERLITZ」(オオステルリッツの兒)、「LE SERPENT NOIR」(黑蛇)等、皆、力と理想とを背景にした、時代の人物が描かれてゐる。此の人の作は時には一場の惡夢の如くむやみと入り亂れたものに成つてしまふ。

一體に表象家には歷史小說が多いのであるが、MAURICE MAINDRON のそれの細敍的なのや、LÉON DAUDET の絕叫的なのと違つて、時代の全景に觸れた批評に成り勝ちである。此の派が神話傳說の作に富んでゐるのは言ふまでもない。靈魂の AVENTURES を醇粹な姿に映さん爲なのである。象徵主義は勿論詩界に始まつた運動であるが、亦散文にも豐かな地步を占めてゐる。岐路へ逸したがるのは詩家の小說の弊であらうが、更に深い飛躍の美に富んでゐるのも詩家の作品に多いことは爭はれぬ。

十七八世紀の高手な物語作家を想はしめるレニエの都雅な近代生活の物語には夢と炎が

織りなされてゐる。餘りに形容に過ぎ、餘りに紆曲で、又抽象的な嫌ひはついてまはつてゐるにせよ「LA FLAMBÉE」(炎)、「LA PEUR DE L'AMOUR」(愛の怖れ)、「LE PASSÉ VIVANT」(生ける過去)等の幽い戀の惡寒は讀む者の心に青春の惱みを再現さすに足りる。ピエエル・ルイスは纖細な筆で脆く儚い舞姫の驕姿などを描き出すに妙で、「CHANSON DE BILITIS」、「APHRODITE」など、優しい CAPRICES を傳へて舞文を極めたものである。哲學家でありながら烈しい感情を持つレミ・ドゥ・グウルモンは「LES CHEVAUX DE DIOMÈDE」(ディオメエドの馬)、「SIXTINE」等で不思議な闇の匂ひ、虚無の消息を暗示してゐる。異敎徒の驕激、貴族的排他心の人が HUGUES REBELL である。その「BAISERS D'ENNEMIS」(敵の接吻)は蠱惑の感性に充ちてゐる。其の他、諷喩家 LOUIS DUMUR の「LE CENTENAIRE DE JEAN-JACQUES」(ジャン・ジャックの百年祭)、物質文明讃美者 F. T. MARINETTI の「MAFARKA, LE FUTURISTE」(未來家マファルカ)、ラシンの詩人 CHARLES-HENRY-HIRSCH の「LA VIERGE AUX TULIPES」(鬱金香の處女)等、皆それぞれの發露がある。

HUMORISTES の中では、第一に JULES RENARD を擧げねばならぬ。彼の「POIL DE CAROTTE」(胡蘿蔔の總毛)はさう感情肌でもなく、柔順過ぎもしない、わけの分つた一種の子供の氣分を寫して、田園に生ひ立つ子供の感銘に一の型を造つたと言つてよい。RENÉ BOYLESVE は小都會の風俗、單純な生活を素朴に極めて自然に物語る。忘れてた佛を讀者の胸に喚起させてくれる。TRISTAND BERNARD の「LES MÉMOIRES D'UN JEUNE HOMME RANGÉ」(謹直なる一青年の追懷)は、無意義な人物と平凡なミリウをわけもなく面白をかしく寫生してゐながら、文明生活の凡庸と徒然とを考へさせる。MAURICE BEAUBOURG は底に哀しみを潜めた笑ひを語る術を知つてゐる。CAMILLE DE SAINT-CROIX はユトピア式な諷喩に才を示してゐる。

閨秀作家には GÉRARD D'HOUVILLE, MME DE NOAILLE 等の優しく烈しい女性の情熱を述べる人が多い中に、GYP は上流風俗の煩はしさを冷嘲し、MILRIAM HARRY は異境の縦まな逸樂を歡んでゐる。又 MARGUERITE AUDOUX は「MARIE-CLAIRE」といふ寂びしい少女の告白を著して、世紀の作に數へられた。RACHILDE は思考する二

足獸の愛の苦み、幻滅の物狂ほしさを空想に走らない筆で生生しく書きとめてゐる。

この他、LÉON BLOY, CHARLES-LOUIS PHILIPPE, ROMAIN ROLLAND, ANDRÉ BEAUNIER, LUCIE DELARUE-MARDRUS を始め、擧ぐべき人は盡きない。

「SALAMBÔ」以來興つた批評的時代小說、「TRAVAIL」より盛んになつた社會小說、此の二大潮流は華華しい發展の道に入つてゐる。流派を撤し、MAÎTRE を棄てた文藝界は著しく社會との交渉が密接になつて來た。

劇

佛蘭西の近代劇は一八八二年 HENRY BECQUE の「LES CORBEAUX」(鴉)以來に屬してゐる。「鴉」より五年後，ANTOINE によつて自由劇場が創設され、今日のコメディイ作家は多く此處から生れた。之にやや後れて、PAUL FORT の THÉÂTRE D'ART（藝術劇場）、LUGNÉ-POE の L'OEUVRE（創作座）が出來て、新理想の劇作を研究し、ランボオやギルの說に則つて、Aの場は黑の飾付、Eの場は白の飾付などといふ奇拔を出したり、

場面の意味に應じた匂ひを觀客席へ吹き送るなどの愉快な試演があつた。之等の努力が一般に認められた今日では、新といふことが無くなつて、作の出來不出來だけの問題と成つてゐる。作家ももはや昔の熱はをさまつた。新作家等もだんだん反省するに從つておとなしくなり、現在の劇壇は意氣込に於いて潑剌たるところがない。個人と家庭、社會と群集等の問題が全盛なること、劇に於いても一般の傾向どほりである。史劇も小說界に見るやうな綜合の意味は無くとも常に行はれてゐる。特に劇界に著しいのは姦通の問題を取り扱ふ傾向で、愛情を無くした夫妻は離反した心を冷たい一家に寄せて、徒らに傷け合ふ。夫は外出ばかりする。妻は姦通する。法律や名譽財產などといふ文明の重荷の下にやうともない苦みをする近代生活の本末顚倒を呪つてゐるのである。

GEORGES DE PORTO-RICHE は特に戀愛の作家で、彼の作には社會への要求とか家庭の道德とかいふやうな問題は無い。抑へ難い、運命的な戀愛の悲喜をつぶさに語るのみである。その題材は常に兩性の決鬪で、その主人公は皆、戀の決鬪の名人である。此の決鬪を規すことに於いて、彼は當代の第一流だ。ただ、彼の劇は兩主人公（二人の戀人）の

みのものとなり、他の人物が配景と成り過ぎ、全體として冗漫を感ぜしめるものが多い。その「LE PASSÉ」(過去)、「AMOUREUSE」(戀女)は近代劇に一つの感情心理を開いて、(心の歷史に名を殘す)ものだと言はれる。MAURICE DONNAY も亦常に戀を語る作家だけれど、PORTO-RICHE の烈しきに比べれば、これは優しく勞れた逸樂の陰影を添へてゐる。その「AMANTS」(戀人)は複雜な戀愛心理を ANACRÉONTISME の筆で書き分けてゐる。

JULES LEMAÎTRE の才は複雜を描いて、その煩はしい光景の中から何ともいへない眞の味ひを汲みとらせる。その構想は常に緊縮を缺いてゐるけれど、或るきまりが無くて反つて一種の自然がある。彼は或る精神の狀態を印象風に料理して、美味な饗莚を開いてくれる。「LE PAON」(孔雀)は最もかういふ獨創力に富んでゐる。

JEAN RICHEPIN は漂泊の趣味、貧者の幸福を好んで描き、常套を嫌つて、かなりグロテスクな夢想鄕を現出する。現實や性格は此の人には問題でない。

MIRBEAU の「LES MAUVAIS BERGERS」(惡牧者)は、資本家の父、社會主義の息子といふ親子の衝突を交へて、資本家對勞働者の問題を掲げてゐる。職工の正しい要求を知

りながら、それを肯ぜぬ工業主、職工を饑ゑに陷れて徒らに空言を弄する同盟罷工煽動者、父を責めて反つて同胞なる職工を鐵柵の桎梏に追ひ入れる社會主義者、——皆、羊を誤る牧者ばかりである。これは抑も社會組織の凡べてが煤煙の毒に塗れてゐるからだ、といふのである。「LES AFFAIRES SONT LES AFFAIRES」(事務は事務)も強い個性の型(タイプ)を躍動さしてゐる。

FRANÇOIS DE CUREL の「LE REPAS DU LION」(獅子の宴會)は「LES MAUVAIS BERGERS」と殆ど同じ題材を取り扱つてゐる。ただ、彼は工業の惡熱を描き、これは篭の中にも爽かな空氣の、時に通ふことを想はせる。彼では惡牧者が無辜の羊に毒草を喰はしめ、是では山犬が反つて獅子を打つてゐる。CUREL は又思想の衝突に交ぜて性格の衝突を暗示し、劇と哲學との雰圍氣を造ることイブセンに似てゐる。「LA NOUVELLE IDOLE」(新偶像)、「LE COUP D'AILE」(羽搏き)など、やや宣言的な重苦しさがある代り、濃い映象と確かな解剖との反對な二面にあざやかな浮彫を與へてゐる。

PAUL HERVIEU の作は問題劇の特色と缺點とを極端に持つてゐる。「LA LOI DE L'HOMME」(人の理法)のやうに內容と理路整然たる形とが合致する時は濃い人生を力を

以て再現せしめる。彼が人物は皆型(タイプ)である。或る母ではなくて、母といふ觀念の人を立たせる。EUGÈNE BRIEUX も嚴疊な觀察家で、その百姓、その勞働者、その小紳士は彼のカンブスの中に均勢を保つて正しい位置に就いてゐる。ややどつしりし過ぎた倫理家、雅致(デリカテッス)を缺いた畫家が彼である。HENRI LAVEDAN は世間の華やかな風俗や、偏見だらけの傀儡を賑かに書きこなす。巧みに寫生するのみで、深い考察を經たものは無い。ABEL HERMANT の作は氣分が離ればなれで熱がない。ANCEY に誇張が鼻につくと同樣、退屈を感じさせる。

その他、CAILLAVET ET FLERS FRANÇOIS DE CROISSET, HENRY BERNSTEIN 等、快濶な目まぐるしい HUMORISTE の多い中で、TRISTAND BERNARD と GEORGES COURTELINE の兩人は底に不快な苦味を潛めて、時に社會の不公平を憤る同胞の聲を出だすことがある。前者の「LE DANSEUR INCONNU」(見知らぬ踊り手)、後者の「BOUBOUROUCHE」は懷疑と忍從との泣き笑ひである。

沒技巧の作家 ALFRED CAPUS、史劇の空想に富んだ MIGNEL ZAMACOIS は饒舌に過ぎるけれど、前者の眞摯、後者の才を擧げておく。ROMAIN COULUS は或る特殊な

事件の底を割つて常に人間の淺ましさを掴んで來る。HENRI BATAILLE は意識にのぼらぬ世界の幽暗をやはらかいニュアンスにして描き出さうとしてゐる。閉ぢ籠めた室で煌く星を想像してゐるやうな、劇としての形の壞(くづ)れた作が多い。ÉMILE FABRE は醜を寫して、苦(にが)い厭世の思想を傳へる。

別に EDMOND ROSTAND といふ大立者がゐる。「CYRANO DE BERGERAC」の豪快、「L'AIGLON」(鷲の子)の絶叫に、異數の成功をさめて、たちまち大劇詩家の列に入つた。彼の卑俗な運動劇は COQUELIN のグロテスクな藝と相待つて、物見高いパリジアンに愉快の生粋ともてはやされたことであらう。その詩、その想、共に近代藝術を鼻先であしらつてゐる。先頃、マアテルリンクの「L'OISEAU BLEU」と前後して世に出た「CHANTECLER」は巴里文壇を賞讃やら嘲笑やらで沸騰せしめた。「CHANTECLER」に感服する人は「L'OISEAU BLEU」を嗤ふ覺悟が要ることを注意しておく。

およそ詩家小説家で劇を作らぬ者は殆ど無い。それらは重複するから述べない。マアテルリンクといふ大作家があるけれど、紹介するまでもあるまい。

一九一二・一二・一

最近に物故せる佛蘭西の作家一三

唯物的決定論の哲人レミ・ドゥ・グウルモンが、昨年九月二十七日の夕べ、腦溢血でなくなつた。享年五十八歳、ノルマンディイの舊家の生れで、先祖には名人學者等が輩出してゐる家柄である。

精神の自由を失はずして微妙な問題を探り行く判斷力と、急がず噪がず固くならず動くがままに發展する文體とは、彼の作品の魅力である。彼が縱横に思想問題を分解し、總合し、展開せしめる態度は、さながら蝴蝶の花に纏れ、猫の懶惰に身をゆだねる様に易易たるもので、而も彼の放膽な能力は深い中心の機微に觸れずにはおかない。彼の哲學は誠に創作的な思想に在る。彼の藝術は最も思索的な情緒に在る。彼の評論、感想は非常識的な考察である。彼の小說、物語、詩、劇は觀念の藝術である。

彼は哲學、文學又科學の大部分の基礎と組織とに通じてゐる。而も彼の優越點は、その博識にではなくして、その批判の個性的な所にあるのであつて、彼が問題を提出するところ、讀者は常に思ひがけぬ理路の發展に打たれ、新しい反省を强ひられる。卽ち彼は確かな認識の上に最も個人的な獨斷論を立てるものである。

彼は眞理の追隨者ではなくして、非眞理の探求者である。人生の森に嘘を狩り立てる獵師で彼はある。あらゆる詭辯と矛盾との横路に彼は踏み込んで罠を張る。彼の臨機應變の才といかなる迷路をも恐れぬ經驗とは、その作物をして宛も一編の探險記を讀むが如き好奇的憧憬を人の內に唆らしめる。而もその內容には最も見分け難い人生の迷妄幻想が辛辣なメスの解剖に附せられてゐるのである。この彼の經驗主義的解析に觸れて、誰か己れの渾沌たる幻影の生活に恥ぢぬ者があらう！

運命はあらゆる生命の賽を投げる。この出た所勝負の戲れを、運命がいかに巧みに捲き收め繰りひろげて一絲亂れぬ手捌きを見せるかを感得する事が、常にグウルモンの瞑想と陶醉とである。神祕と懷疑との二重の醉ひを以て彼は叫ぶ、『眞似難き幻術師よ、御身を拜す…　いかによく御身が人生を煙に捲くことよ！』この謎をいかにか解くべき？　之は

理解すべき哲學問題ではなくして、愛すべき至上の藝術品である。（生は讀み難く解き難く定め難い。その故にこそ、最も氣むづかしい者も悲痛な情熱を以て之を愛するのである。）

彼は法律を修めて、一八八三年巴里へ出るとすぐ國民圖書館へ書籍管理掛りに入つたが、その「佛蘭西報知」誌上へ寄せた「玩具の愛國主義」と非時代的な考察が當局の忌諱に觸れて、職を解かれた。それ以來、彼は公の職に就くことを肯じもせねば又就く由も無かつた。

彼の豐富な才能の中に最も重きを成してゐるのは哲學的方面である。彼の藝術と科學とはその哲學的天分を礎とした造營である。

彼は象徵主義者として出發した。その初期の作「シックスティイヌ」（小說）、「神祕的羅典」（中世紀的詩人の研究）、「沈默の巡禮」（抒情的散文集）、「ディオメエドの馬」（小說）等は、異樣な神祕の消息に肉感的な味ひを寄せた氣むづかしい理想主義の所產である。その「理想主義」の研究、「面型」二卷（表象家論集）は文學に現れた理想主義と個人主義との權威ある解釋である。

やがて、彼の研究は著しくその範圍が廣まつた。宗敎、倫理、生理、文法、美學、文學、

美術等に渡る評論、「佛蘭西語美學」、「思想の修養」、「芝生の路」、「文體問題」、「戀愛形而下學」等は、常套的見解を根柢から覆した尖銳な文明批評である。

その「エピロオグ」（生活觀察錄）六卷には、進步の思想、善惡の觀念、宗敎的信仰を嘲り、自由平等正義等の人生の幻影を嗤ふ、このサテロスの面目が躍如としてゐる。

「文壇遊步」五卷はサント・ブウヴの「談話錄」にも比すべきもので、茲に個人的な感性を愛する彼の主觀的傾向が窺はれる。フロオベエル、ボリエ・ドゥ・リイル・アダン マラルメ、ラ・フォンテエヌ等、想像力の最も優れた作家を彼は推奬しておかない。

「哲壇遊步」三卷には徹底的な因果律が、原因結果の渦卷に旋轉する生の相對的限界が力說されてゐる。その第二卷に收められた「人智不變說」は物質不變の說をそのまま精神界に適用したもので、有名な論證である。

小說「リュクザンブウルの一夜」は彼の代表的な創作で、彼の形而上學はこの麗はしい空想譚の中に枯屈を止めずして溶け込んでゐる。

昨年出た「文學の伯耳義」、「嵐のひま」の二册がその最後の著作であつた。その全著書は四十卷に餘つてゐる。彼は「佛蘭西報知」の創設者の一人で、數年前より「思想評論」

といふ月刊雜誌を起してゐる。

反基督教、反合理主義、沒倫理思想、社會侮蔑、個人尊重等は、彼が偏せず熱せざる態度を以て酷しい批判を生活の上に加へた考量の重な題目である。

アナトオル・フランスを現代のヂルテエルとすれば、グウルモンは正しくディドゥロオである。この《後れたるエンサイクロペディスト》、この自由思想家、この幻滅家、このエピキュリアンの否定的警戒を以てこの紹介を結ぶ。

《眞理を求めて而も之を見つけるのは、道理の解る年頃に成つて、クリスマスの晩に煙突の中へ靴を入れておくと同じくらゐ馬鹿げてゐる。》

★

昨年十月十一日の夕べ、昆蟲學の泰斗ジャン・アンリ・ファアブルが九十三歳の高齢で、セリニャンの草庵に絕間なき研究と貧困との生涯を終つた。彼は五年前から仕事を止めてゐた。二年前から足がきかなくなつてゐた。視覺はいたく鈍つてゐたけれど、頭腦は衰へを見せなかつた。

私は彼の高潔の一生が小學讀本に載せられんことを願ふ。茲には、生活難と知識欲との間にあらゆる困苦と鬪つた彼の傳記を語る餘地が無いから、ただ G. V. LEGROS 氏著「LA VIE DE J. H. FABRE」を讀者にお奬めしておく。

彼は一八二三年十二月二十二日佛蘭西南部のサン・レオンに貧民の子として生れた。一八五三年から二年近くアギニョンの中學に教鞭を取つてゐた彼は、既にその初期に「自然科學年報」で發表した膜翅類、芫菁類、その他に關する研究で早くから認められた。ダアヰンは「種の起源」の中で、彼を《眞似難き觀察家》と稱し、パストゥウルも亦彼に敬意を拂つた。一八八〇年以來、彼は「山嶽地方」と呼ばれるセリニャンの地に研究室と昆蟲養成林とを造つて、ここに閉ぢ籠つてしまつた。

「昆蟲學隨筆」十卷（一八七九年——一九〇七年）は彼の長い實驗の生活の劵證である。この著は、彼が得難い博物學者、物理學者、數學者であるのみならず、又優秀な文學者であることを示してゐる。その明快で魅力のある文體は、その豐かな想像力は、いかなる專門的な解釋をもさながら自然界のロオマンスを讀む思ひあらしめる。彼の書によつて、人は乾燥無味な知識を得ず、昆蟲の異樣な本能に打たれ、小動物の世界に展開する劇詩に醉はさ

れる。エドゥモン・ロスタンは、〔彼が甲や肢を描くに、生きて輝く言葉を見出だす術を知つてゐる〕ことを詩で賞美してゐる。

しばしばファブルの昆蟲學はラ・フォンテエヌの「噺」に比較される。誠に、〔天氣を知らうとして己が住家の天窓に首を出す〕蜂や、蜘蛛の子の群が〔太陽を浴びて生きた花火の火群のやうに散りぢりに〕廣い世界へ突進して行く樣や、蟬や蟻の物語、又宗敎的な雌蟷螂の夫を嚙み殺す惡業など、まるで一幅の繪である。彼は單なる科學的觀察家ではない。動物心理の探求者である。玆にこそ彼の著作の高い價値があるのである。

終りにマアテルリンクがファブルへの讃辭を引いておく。

〔偉大な神祕の裏面に當る彼等昆蟲の小祕密を發かん爲に、彼は五十年の孤獨にして忘られたる、しばしば悲慘なほどに貧しい、けれども日毎に眞理が齎す最も人間的な喜悅を以て惠まれた生涯を捧げた。けちな眞理だ、蜘蛛や蝨の風習が提供する眞理などは、と人は言ふであらう。眞理にしてけちなものは無い。眞理はただ一つより存せぬ。眞理の鏡は、我我の定かならぬ眼には壞れて見える、けれどもその碎片の一つ一つは、それが一星座の變遷を映すにせよ、一羽の蜂の飛揚を映すにせよ、至上の法則を藏してゐるのである。〕

その他、「空」、「地」、「植物」、「薪物語」、「ポオル伯父さんの科學談」、「農作の荒し手」、「補ひ手」、「仕へ手」、「曙」等の豐かな作品は、皆少年の爲の讀物として書かれたに過ぎない。科學と文學との蘊蓄を盡して、かくも僅かな望みの爲に傾けるとは！　數學の論文の中にまで創作力を示すファブルの天才が、かくも己れに貧しき心をしか懷かぬとは！

彼は又繪畫の才分を以て人を驚かしてゐる。別に、プロヴンス語で書かれた詩集が一册ある。之もミストラル、オオバネルに比べてこそおとしめることのできる程のものであるといふ。

★

同じく十月二十三日から二十四日へかけての夜の間にポオル・エルヰウゥが突然歿した。社會問題の作家としては彼は第一流であつた。少しく乾燥な、けれども薄弱なところの無い才分と、流れるやうなところの無い几帳面な文體とで、理路整然たる作物を書いた人である。

その重なものは、小說では「仇心」、「鎧」、「殺人アルプス」、「自畫像」、「巽人」、「綠の

眼と青の眼」等、劇では「言葉は殘る」、「鐵地獄」、「焰の流れ」、「迷宮」、「覺醒」、「謎」、「人の理法」、「明日無し」等で、問題作の特色と缺點とを極端に持つてゐる。彼の人物は皆型(テイイプ)で、正しい均勢を以て動いてゐる。

—一九一六・一・—

ランボオの生ひたち

ギクトオル・ユゴオと同じく、ジェラアル・ドゥ・ネルヴルと同じく、ヹルレエヌと同じく、アルテュウル・ランボオは軍人の息子であつて、シャルルギル市に在つた母方の祖父ニコラ・キュイフの家で一八五四年十月二十日に生れた。兩親結婚の直ぐ翌年、父のフレデリック・ランボオ大尉が四十一歳、母のビタリ・キュイフが三十歳の時で、ちやうどクリミヤ戰爭時分に當る。

一體、ランボオといふ名前はオランジュ伯爵家の代代の譲名(ゆづりな)と同じで、兩家には一つ血が通つてゐるらしい。アルテュウルも我が家の言ひ傳へによつて朧ろげながら信じてゐた樣子で「獄屋の中」にも、『私は教會の姉娘フランスの歴史を思ひ起す。粗服を纏うて聖地を巡り歩くべき筈であつた私は、腦中に、荒廢した平原の路、ビザンスの眺め、ソリムの

壘壁を描いてゐる。マリイの敎儀、十字架に懸けられた人の感動は私をしてさまざまの馬鹿げた夢を見しめる…　やがて傭騎兵として獨逸の地に野營するとなつたらどうであつたらう。」などと言つてゐるが、何しろ革命以前の事でどうとも解らぬ。兎に角プロヴンス十字軍の家から脈を引いてゐることは疑ひを容れない。

パテルヌ・ベリッション氏は詳細にアルテュウルの父母の容貌や性行を說いてゐる。烈しい動き易い氣質の父、意志の強い、宗教的な母、この兩親の性質が正しくランボオの性行を說明してゐるのだ。而も兩親は互ひの性格や見解の相違を顧て別れることとなり、母は、一八六〇年、ランボオが六歲の時、五人の子供を引き連れてシャルルヴィルへ戾つてしまつた。戾つたといつても、その父は二年前に亡くなつてゐたので、賴りにするところもない。又、この地方の移轉期としてある盛夏にも間があつたから、やむをえず、騷騷しいブウルボン町に部屋借りをして假りの住居を定めた。然るに、冷かな、峻しさうに見える裏にむつかしい嗜好を隱してゐる此の母には、構ひ手のない無作法な子供達が階段といはず庭や通りといはずがやがやと飛び廻つてゐる職工等の生活の同じ渦卷の中で暮すのは、堪へられぬことであつた。この十年後、一八七一年に、ランボオは「七歲の詩人」で此のブウル

ボン町の追憶を歌つてゐる。その年の例の暴動事件に出會した彼は悲慘な光景と民衆に對する同情の念とで胸が一杯になつて、世界同胞の夢想に心を漲らしてゐた。この詩は愛と叛亂との民主思想の嵐の前兆を自分の過去に求めて、好個の浮彫を刻んだものであつた。

アルテュウルは不思議な人で、生れた時もうはつきりと眼を見開いてゐた。看護婦が襦袢のまま牀上の布團へおろしておいて、ちよつと足らぬ物を探しに行つた間に、この赤ん坊は布團を下りて、階段に向いた戶口の方へ四步匍つて、にこにこしてゐた。

産後も母のからだが勝れないので、アルテュウルは白耳義との國境で、ジェスプンサアルといふ土地の或る釘を造る親切な家で育てられることになつた。或る日、母は工合がよいので突然里へ見舞ひに出掛けてみると、アルテュウルは眞裸にされて、鹽箱の中で獨りはしやいでゐる。も一人乳兄弟の方は綺麗な襁褓に包まれて、搖籠の中にすやすやしてゐるので、乳母を詰ると、さうやつて古い堅い箱に入つて騷ぎ廻るのが此の子には嬉しくつてたまらないのであつた。

一つ上の兄フレデリックより遙に早熟なアルテュウルは八月目から自由に立つて步いた。

ナポレオン町（ティエエル町）に本屋が——今でもある——一軒あつた。或る時、ちやうど四歳になつてゐたアルテュウルはその店先の土臺の上へ匍ひ上つて、硝子の中の海山の冒險を描いたエピナアルの繪をつくづく眺めてゐた。夢中で碧く澄んだ眼をまるくしてゐる此の小天使の頭を見つけた主人は面白がつて出て來ながら、何がそんなに氣に入つたのかと尋ねると、この時分からもう意地張りであつたアルテュウルは身動きもせず、返事もしない。暫くしてから、やつとその繪を指した。本屋が賣つてやらうといふと、お錢の無いアルテュウルは答へられなくなつて、妹のお小遣ひをせびり出したので、主人もその執着に動かされて繪をやつたといふこともあつた。

一八六二年ブウルボンの町を引き拂つて、市で一番空氣のいい《並木の下の》クウル・ドルレアンに移つた。アルテュウルは兄と共にロッサ小學校で初めて羅甸語を習ひ出した。尤も物の讀み書きは前から母が教へてあつた。

この時分の彼の雜記帳の一つに、羅甸の練習や罰課の文字などと一緒に、小說の處女作とも思へるものが書きつけてあつた。妙なことには、少し後に飽くまで人間本位を示し、

歷史の漁り手となり、又病的な烈しい性行を見せた此の人が、その中でをかしいやうな言葉を使つて、グリイキ、ラテンや古代史を詛つてゐる。大學出に依る職業を冷罵してゐる。この幼い心持の中に、後に彼をあれほど刺戟した文學厭惡の芽を尋ねねばならぬのであらうか？ 否、それはただ試驗に對する幼い強い臆心からの激語に過ぎないと思ふ。

本は聖書を好んで讀んだらしく、ラテンやグリイキでノオトが書き込んである。就中、創世記の外に、利未記、雅歌中の雅歌、イザヤ、ジェレミア、エゼキイル、四福音書、サン・ピアンの末文等に讀み返しよみかへした跡が見える。ギュスタアヴ・アイマル氏の「沙漠の家」といふ小說もばらばらになるまで讀んであつた。

その時分はかよわい方のからだであつた。蒼白い中に薔薇色を帶びた卵形の顏、廣く高く《傑れた思想に充ちた額、濃い雁來紅色の輪に圍られて、碧く輝く虹のやうな、異常に麗しい》眼、《その眼はもう既に秀でた腦の働きを反射してゐた》と、級友であつたエルネスト・ドラァエ氏が言つてゐる。誰しも、怜悧な〃臆し勝ちな、何でもない事に顏を赤める、而も意志の強い子供といふ印象を受けた、彼の不思議な知力は既に働き出してゐた。

一八六五年、復活祭の休暇の後からシャルルヴィル中學校の七級に入つて、翌年の十月に六級となつた。この期間に彼は古代史の綱要を課せられ、その聰慧鮮明は教授等を驚かした。六七年には五級を飛び越して、直ちに四級に編入された。

彼の頭腦は至極容易に又速かに學問を取り入れた。實に何の苦もなく、羅甸、希臘の文學も佛蘭西文學も嬉戲せるが如くにして消化して行つた。

彼が一八六九年の翰林院羅甸詩作競爭で易易と一等賞を得たことは、今でもアルデンヌ（シャルルヴィル市所在地）で一つ話になつてゐる。而も僅か十四歳の二級生徒が競作を許されたといふことからして特殊なことであつた。

この試驗に連つた人の話によると、その日は朝の五時半から競作者は學校の一室に集まつて、不安げにどんな問題が出るかと評定し合つてゐた。或る一人が萬國博覽會といふ題になるだらうといふ。皆、六七―六八年の大博覽會の記憶が未だ鮮かに殘つてゐたのだ。と、默然としてゐたアルテュウルは急に立ち上つて、腹立たしげに叫んだ。

――ああ、何ぼ何だつてそいつは下らな過ぎる。そんな問題なんか！

六時に開始の鐘が鳴ると、校長デスドウェ氏が入つて來て、皆の前で嚴封した問題を開いた。その時蠅が一疋羽を鳴らしてゐたのを覺えてゐると話者は言つてゐる。校長の眉が急に顰んだ。同時に、《皆さん、之が問題です》と言ひながら、黑板に ABD-EL-KADER と書いて椅子を下りた。

――それはただ題でせう、說明は？

――皆さん、說明は附いてゐません…

一同、監督の物理教師までも開いた口が塞がらなかつた。校長が出て行つた時に、《僕等は欺かれた！》とランボオは叫んで、そして默り込んでしまつた。銘銘絶望して苦しげに眺め合つた。ランボオはその間ぢつと押し默つて睡つてゐるかと思はれた。この場合シャルルヴィル中學の唯一の賴りとして皆の目は自然ランボオに向いた。

九時にデスドウェ氏が入つて來た。彼は學生達が爪を噛んでこつこつと努めてゐるのを見た。で、彼はランボオに目を止めたところが、この生徒はまるで印度の苦行僧とでもいひたいやうな風態であつた。

――これは、アルテュウル、どうか考へが…

校長が言ひ終らぬ中に、ランボオは腰を抱へて肩をすくめながら、

——僕はひもじいんです！　と答へた。

このイロニイは兎に角、校長はまじめに心配して、食物を直ぐ運んで來さした。アルテュウルは虚心にそれを貪つて、最後のを飲み下し終ると、ちよつと續きを思ひ出す風をした後、間斷なしに紙の上へペンを走らせた。

正午に彼は答案を差し出した。監督がそんなに早く終へる筈はないからと注意しても、ランボオは、出來上つた。而もうまく出來上つた、と言ひ張つた。

校長が五時に答案を集めに來た時、物理教師は絶望の樣子を見せてランボオのを渡した。けれど、校長はこの少年を忘れずにゐて、眼鏡を掛けてその八十節の詩を調べ出した。やがて滿足の微笑が顏に上つて、讀みも終らずに、賞は——こつちのものだ！　取れるよ、確かにと、そして誇り顏に高高と讀み上げた。

ランボオの最初に知られた詩「孤兒のお年玉」もちやうどこの時分にできて翌一八七〇年一月二日の「よろづ雜誌」に載つた。纎細な眞摯な感覺の中に胸の優しさを籠めて書い

てある。この心持は確かに細かく行き屆いた宗教的な家庭の薫化に基いてゐる。と共に、ここまでは、ヹルレエヌの言つたやうな、空想に耽る小坊主、ぶらつき廻る生徒ではなくて、善良な、悧發な、實際的な、母と教師との喜びであり、誇りであり、シャルルヴィル中學の名譽であるところの少年をランボオに見るのである。

一八七〇年には異常な變化がその性格に起つた。

以上、パテルヌ・ベリッションのの「アルテュウル・ランボオの血統と幼時」に依つた。隨分たわいのない事ばかりであるが、ランボオを知るにはその幼時が必要だと思ふ。ベリッション氏はランボオの親友で又熱心な辯者として彼國の文士の讚歎するところとなつてゐる。

何處へとも知れぬノスタルジイを追つて、《昔は書物を繰るに馴れた手で黑人國に象牙、金粉、薫香を取り扱つた》ランボオ、《麗しさに依つて生を失つた》ランボオ、パルナッス派全盛に當り、《新しい感覺》を以て人目を眩惑させたランボオ、《自ら發し自ら消え去つた

光體現出』の跡を辿らうと欲する人は、第一にベリッション氏の「ジャン・アルテュウル・ランボオの生涯」に眼を通さねばならぬ。

ワルシュ氏のランボオの小傳を見ると、一八五一年生れとある。又、シモンズ氏も一八七〇年にランボオが巴里の途に上つたのを十八歳としてゐたやうに覺えてゐる。ベリッション氏に從へば、十五歳の筈である。ここでは無論ベリッション氏を信じておく。

——一九一〇・一〇——

アブデルカアデルはアルジェリアの英雄（一八〇七—一八八三）。杇葉註。

マクベスの城の眞相

メルキュウル・ドゥ・フランス誌から

マアテルリンク氏によるサン・ヴンドリルの僧院でのマクベスの上場は數月來大評判であつた。氏によると、この沙翁悲劇は壯重な圓天井を借り來つて初めて新しい鶩歎を以て今は埋もれ去つた殘酷なそのかみを精しく想起しうるのだといふのである。

古典學から見ると、これは全くアナクロニスムで、マクベスの封建時代でフランクやノルマン人の居城とケルト族蘇格人のそれとを混同するのはまるで方角ちがひであるし、まして、僧院はなほさらである。これを確めるに、當時に就いて記錄を繰ることも要らねば、無數に散らばつた廢墟を尋ねて三方塞がりの巖山(いはやま)の頂上や不愉快な荒野を歩き廻ることも無論必要のないほどのことである。

マクベスは丁抹人やアングロ・サクソンと相爭つた最後の王族(タアン)で、羅馬人の所謂カレド

ニァの野蠻人共（褐色の髮の巨人）の族に權化たる者であつた。而も彼等野蠻人共は烈しい戰士の血を傳へて、獨立を樹てる道を知つてゐた。羅馬の諸軍は彼等の短劍の前に挫けて、グランピアンの敗戰以後は再びハイ・ランドに手を出さなかつた。のみならず、後には、その侵入を免れる方法を講ぜねばならぬやうになつて來て、アドリア海に沿ふカレドニアとロウ・ランドとの間には大障壁を設けるに至つた。この障壁は羅馬の無力を裏書せるものである。世界の優勝者もキムリス、ピクツ、スコッツの地をば一步も踏むことができなかつた。だから、この仇敵同志の間には何等の接觸影響もなく、何等の風俗慣習の相似もない。野蠻族は文明族を拒んだ。ゴオロアと大英國が四世紀五世紀まで隨所に彼等が征服者の天才に同化された市街、道路、建物を設けた時に當つて、羅馬風の構造を用ゐなかつた國は恐らくハイ・ランドの一蘇格あるのみであつたらう。羅馬風の建築は諸國にあつては中世紀に模範たるものであつたが、その勢力は八世紀の頃、ちやうど暗殺された王のネマルコム・コンモナルの以前には蘇格を侵すを得なかつたのである。

故に、この沙翁の劇を飾るに、蘇格の蠻風とは相容れぬ建築を以てするのは、殊に柱の多い内廊下より奥庭に通じ、外庭は厩や召使たちの家や穀倉等の川をしてゐる圓柱を列ね

た羅馬式の雅びた僧院を選むのは全くまちがつてゐる。

酷烈なマクベスはただ王冠を奪はんためにダンカンを弑したのであつたが、沙翁は罪と叛逆との恐怖を精しくしようとして、その卑しい動機をやや寬恕してゐる。史に依ると、マクベスは王の柔弱な女性的性格を排し、殊に王が蘇格には仇なる丁抹人シワアルドの娘を娶つてからは、ややもすれば異國の風を採らんとするのを憤つたので、刻薄な狂暴漢であつたと同時に、彼は祖國古來の傳習のためには勇敢な防禦者でもあつた。事件の前の夏には、實に、羅馬人のインスピレエションを受けた建物の中で、マクベスは夢魂しばしば破れて悲憤のあまり戰慄したといふ。

ピクトの築城法はだんだん規模が大きくなり、又、いろいろ改められたけれど、常に祖先の樣式を守つてゐた。ダンカンの弑逆に用ゐられたマクベスの城も内部が擴大されたといふのみで、蠻人的な考案はちつとも離れてはゐなかつた。

トキイドから北へ登ると、蘇格最古の城の造りが澤山見られる。それが所謂〔ブロックス〕で、漆喰を用ゐない圓い巨塔から成つてゐる。羅馬人の重んじた漆喰法を使はないのが八世紀前の蘇格の著しい特色である。障壁は馬鹿に厚くて扁平な石と泥土とからできて

ゐる。

マクベスの時には構造が大仕掛になつて、壁の厚さが二丈數尺に達した。その中には、外に出口のない三階の四角な塔があつて、小さな梯子を掛けて直ちに木造の大廣間へ入り込むやうになつてゐる。そこで、夜となく晝となく、武士や召使や教師たちや下僕や犬が雜然として、飲んだり、踊つたり、喧嘩したり、殺し合つたりしてゐる。城主のみが壁を抉つてしつらへた私室を持つてゐて、木造の大階段で二階三階へも通じ、胸壁のついた塔の頂上へも登れるやうにしてある。大きな堀が周圍を繞つてゐる。木柵が結ひめぐらしてある。初期の攻擊法では如何ともしがたいほど嚴重で、この巢窟の中に在る住民はどんな長期の攻圍にも挫かれる氣遣ひはない。內庭に沿うた納屋には夥しい糧食が積み上げてあるので、饑ゑに苦むといふこともない。恐ろしいのは內應者だけであつた。

大貴族マクベスの穴はこんな風であつた。すべて蘇格の徒黨に主たる者の城はダンカンの子マルコム・コンモオルの來れるまではかうであつた。

昔の年代史を見ると、ダンカン暗殺はインベルネス城でではなくて、マクベスがデイサイドなるランファナム戰城での討死の後、マルコムがめちやめちやに粉碎してしまつた城

の方で、呪はれた罪の跡を殘さぬため、石までも挫き盡されたのだといふ。インベルネスが壞されなかつたのも此の說を確めるに足るといふべく、そこをマルコムは美しい住居にして丁抹風に飾り立ててゐた。父の暗殺の行はれた場所ならば、そんなことはせぬ筈である。然し、實際はマクベスの血腥い時代には暗殺ぐらゐ大したことでもなかつた。ダンカン弑殺後マクベスは十七年間王位を統べてゐたが、格別顧て後悔した風もなく、やはり、戰爭、殺人、宴會を事とし、多くの城を築いた。そして、最後のダンシナアン城がマクダフに對する憎惡の基となつたのである。ダンシナアンは、アンギュス、フイフ、ステルモンド、エルネダル、ペルスの諸州を支配するため、非常に高い山の上に建てられた。初め、マクベスは之を壯大なものにしようといふところから、自分一人の力では多年を要するやうになるので、諸貴族に役割をきめて築造を負擔さした。マクダフは彼に迎へられようと思つて、極力之に盡したところ、刻薄なマクベスはその勢に危險を感じ出して、遂に欺いてマクダフの城に入り、急に虐殺を始めた。けれど、マクダフが英國へ逃げ得やうとは知らなかつたのであつた。

ロッスのもたらした恐ろしい報知を聞いたマクダフの絕叫が思ひ出されるではないか。

――何と！　我が子等も、共にか？
――妻も子供も臣下も在りし者凡べて。
――麗しき我が所有凡べて！……　凡べてといふのだな！……　おお障獄……　凡べて……　我が麗しき愛兒とその母と凡べて……

蘇格大徒黨の戰は世にも兇惡な歷史である。數世紀に渉る無殘な攻圍、兄弟相殺せる爭ひ、些も温心なき怨恨、常に敗滅の背後に迫れる暗窟の歷史である。

朱に染めた手と壓へ難い勇氣とを持てる凡べての敵の征服者、王と、忠實な朋友ロッキュハァベルの貴族バンクォオの暗殺者、して又、蘇格の狂熱的防禦者なる此の殘忍な貴族はこの時代にあつて正にふさはしいものである。

一九一〇・――譯

無告の民

I

イスラエル・ザングヰルは活動の人で、又文士である。著書中の代表的な作物「猶太人街の子供達」（THE CHILDREN OF THE GHETTO）の如きは猶太氣質を最も活きた觀察を以て把羅剔抉して、この種のものとして近代文學の傑出品の一つである。凡べては空であつて凡べては必要であるといふ際どい點で鋭い意味を見出だし、優れた、けれども常に批判の缺けた慧眼と洞察とを以て、知識界の凡べての事を女のやうに讀み取ることの巧いネオ・ヘブライ詩人メルチツェデック・ピンチャスといふのがその主人公である。

活動の人としてのザングヰルは、一九〇五年以來、猶太鄕土組織會の會頭として歐羅巴

を驅け廻つて、猶太國の復興について輿論と運動とを喚起するに努めてゐる。

一九一四年七月に、猶太人の或る人人は中心機關の創設に就いて討議すべく、黨派のわかちなく九月八日チュウリッヒ新公會堂に集まられたしといふ招待狀を受け取つた。これは何の秩序もなく世界に散らばつてゐる猶太人種に共通した問題、卽ち英國に於ける〔外人法案〕問題、檢閱所並びに船上での移民の苦痛、合衆國の移民制限への抗議、西班牙への移民復歸の便宜請求、波蘭土に於ける猶太人の經濟同盟罷工、羅馬尼の猶太人への市民權拒絶、露西亞に於ける猶太人虐待、エルサレムと瑞西とに於ける猶太大學の計畫、なほ諸多の問題を議すべき會合を設けようといふのであつて、イスラエル・ザングギル之を主宰する筈であつた。けれども、九月四日附の葉書で、チュウリッヒの會議は無期延期といふことが被招待者達に通告されたのである。

かくて戰爭の勃發は、〔コスモポリタンの社會にあつて國家的なるを希臘羅馬の世界が責めたところの、國家的社會にあつてコスモポリタンなる近代の世界が罪するところの〕〔ハアバアト・ベントキッチ〕此の人民を集合せしめんとする最近の試みを打ち碎いてしまつたのである。一九一四年八月四日以降の猶太の民がどういふ破目になつたか、それを今茲

に說かうといふのである。

主な新聞雜誌の多くは猶太人の現狀に就いて記事を掲載することを抑へてゐる。英國の「隔週評論」でハアバアト・ベントキッチ、伊太利の「イスラエル通信」でダンテ・ラッテエス、佛蘭西の「社會戰爭」でギュスタアヴ・エルヹエ等が、猶太人の希望、義務、權利などをやや論(あげつら)つたのみである。そして、當の猶太人の代表者たるイスラエル・ザングギルは亞米利加の「中央雜誌(メトロポリタン・マガジン)」や「日日報知(デエリイ・クロニクル)」等で、彼の同胞の苦痛や武勇を語り、戰爭終結の會議に當つて猶太人の問題が如何なる程度の解決を遂ぐべきかを豫測してゐる。先づ彼の意見を聽取しよう。

開戰の當時、猶太人の手に成る「キョルン新報」が英國を呪詛したとて激昂した英國の一婦人はザングギルに書を寄せて、斯かる新聞紙を默せしめざるを詰つた。けれども、〔所謂猶太人は存在してゐない〕ことを此の婦人は會得してゐないのである。英國の猶太人たる自分は獨逸の臣民たる猶太人の愛國的行動に對して何等の掣肘をも加へるわけにはゆかない。國籍のない彼等に庇護を加へるところの國家に向つて彼等が表する感謝の念はしばしば愛國者以上に愛國的である。之は言葉ではない。事實である。今次、猶太人は銘銘己れ

が生れる運命をもつた國の爲に、卽ち、彼等の二千五百人はセルビアの爲に、その一萬から一萬五千は伊太利の爲に又佛蘭西の爲に、勇敢に戰つてゐる。彼等の中には多くの士官がある。トリポリやモロッコやテュウニジイ、アルジェリイは多くの猶太兵士を戰鬪正面に送つてゐる。亞爾西利步兵及び外人軍團のほゞ二割は猶太人である。亦、英吉利の植民地卽ち濠洲、ニュウジイランド、加奈陀、南亞弗利加、その他英國の所領屬領は猶太人の陸兵水兵を以て充ちてゐる。「猶太の世界（ジユウイツシユ・ウオオルド）」の特別號に發表された英國の猶太人の手紙は、エジプトでは濠洲兵と、青島では日本兵と、北海では大艦隊にあつて、彼等が協力せるを示し、その死傷者表は、かの歷史的な「ブラック・チッチ」や「グレナディイア・ガアヅ」や「キングス・オウン・スコッティッシュ・ボオダラアズ」から最近に編成された「ミッドルセックス」や「マンチェスタア」の聯隊に至るまで、彼等が行き渡つてゐることを示してゐる。

著名なスピイルマンの一族からは三十五人の軍人を出し、ロンドン郊外の一猶太人は五人の子供を戰場に送つて、國王から感謝の手紙をもらつた。

古昔、羅馬帝國の權力内にあつて之を挑むことを辭せなかつた猶太人の勇氣は今もなほ衰へてはゐない。《我我は猶太人の勇氣に打たれた。《猶太的英雄》とは今や我我の通用語で

ある》と、コウノの副總督は述べた。最近數週間のうちに四百人以上の猶太人の兵士が聖ゲオルギイ勳章をもらつてゐる。アラス附近にあつた一戰で、一旅團中四千の猶太兵は生還する者九百に過ぎなかつた。《佛國外人軍團中の猶太人は私の指揮した兵の中の最も秀拔敢爲なものである》と、ブレギィ大尉は言つた。

獨逸墺太利の猶太人亦必ずしも彼等に對するに慈母の愛を以てしなかつた國の爲に犧牲的精神を發揮してゐる。

無論、已れの眞の祖國でない國の爲に猶太人等が善く戰ふのは、土地より惠まれること薄い下層民等がその土地の爲に蹶起したのと同じく、單に義務を成就したといふまでのことであるが、而も彼等が爾く死を敢するに熱心な所以を思へば、異樣に悲愴なものがあるのである。猶太人は二つの名譽を守らねばならぬ、一は已れの生國の爲に、一はしばしば偏見を以て貶められた彼等の性質のあかしを立てる爲に。かくて、新舊宗教や勞働者の國際主義と同樣に、この戰亂によつて四分五裂せしめられた猶太人は互ひに相戰ひ相滅す凄慘な光景を演じてはゐるとも、皆一種莊嚴な同志の徒である。——《凡べて彼等は猶太なる名の名譽の爲に死なんと希つてゐるのである》と、一猶太新聞記者は言つた。

II

長い間、平和主義者等の希望は、宗教や社會主義や經濟關係等の國際力が戰爭を阻止するに力あらんことであつた。けれども、今般の事變は、やや强力な集合體は國民のみであつて、國民の感情が爆發するに當つては、宗教心や階級の利害などはものの數でもないことを證した。

あれほど有力な組織の基督敎が、あれほど熱意に充ちた國際的勞働同盟が戰爭に反抗して立てなかつたところを見れば、分裂した傾向の多い猶太人の集合が手を束ねて渦中に捲き込まれたのは寧ろ當然である。ザングヰルの「猶太郷土協會」は現狀を傍觀するの外ない。

一。一八六〇年に佛蘭西國内の猶太人によつて起された《世界的イスラエル人同盟》が佛蘭西精神に染んで、極東やパレスタインやテュウジニイやモロッコの方面に亘つて佛蘭西の影響を傳へたことは著しい。彼等が獨逸人墺太利人等と行爲を共にした敵側の猶太人と再び相會する時、兩者間に意見の一致を見るや否やは甚だ覺束ない。

二。獨逸に於ける「中央シオン協會」は開戰と共にその機關紙「ディ・エルト」の發行を停止され、その會員は虐遇され出した。一方「獨逸内シオン團」の義勇兵募集は甚だ不結果であつた。

三。祖先の地に生息せんことを希つて、自分の生地を棄て、露西亞から、波蘭土から、亞米利加から又英吉利からさへもパレスタインに集まつてゐた猶太人等は、土耳古の對聯合軍宣戰以前に於いて、既に最も不安な境遇となつた。幸にも、この時の米國大使モルジェントオ氏が猶太人であつて、急遽亞米利加の猶太人に訴へて、之等の正に土耳古人の酷薄な手に委せられんとする窮民に金と食糧とを配布し、同時に亞米利加巡洋艦「テンネシイ」を以て多大の避難民をジャファからアレクサンドリアへ運んだ爲に事なかつたが、でなければ、如何なる危殆を醸したか知れないのである。

四。千五百の猶太人はダアダネルスから砲火を避けて他へ行かなければならなかつた。

五。波蘭土では、荒された四十の市街から、ゲットオ（猶太人町）の住人等はワルソオ方面へ、プラアグ方面へ、ヸエンナ方面へ、ブタペスト方面へ散亂した。今では、ボオランドの猶太人は露西亞の中部へ向つて市から市と溢れつつある。地上千三百萬の猶太人の中、

その一千萬人は戰禍に虐げられ、殊にその三百萬人は波蘭土で最も劇しい苦楚を嘗めてゐるのである。やや安住を得たアスヱルスの手に戰爭は又もや〔流浪の猶大人〕の杖を渡したのである。

七百年間、波蘭土は猶太人のために一の隱れ家であつた。王室の結婚によつて舊敎のボオランドと希臘正敎のリテュアニイとが一體を成した時、その結果として國家と宗敎とは分離を來し、この土地は第十四五世紀の猶太人にとつて宗敎上の迫害のない難有い國となつた。第十六世紀、西班牙葡萄牙の猶太人大放逐の時、獨逸佛蘭西も亦彼等を窘窮し、ボオランドのみが門戸を開いて猶太の移民を容れ、彼等に一種の自治制をさへ許した。殆ど農業專門の土着の民の間に、彼等は都會的工業的要素を形づくつた。今にして思へば、猶太人は今日の大燔牲祭に供へられんために此の地に集まつたやうなものである。ボオランドの分割は彼等を獨逸のダンチッヒ、露西亞のワルソオ、墺太利のレンベルグへ撒きちらした。今日ボオランドと猶太との三分した同胞が相殺戮せねばならぬのは、彼等にとつて手もなく內亂を强制されたも同樣で、ボオランドの悲劇に猶太の悲劇を重ね合せた二重の悲劇である。

猶太人はボオランドの荒廢によつてほぼボオランド人に等しい苦痛を嘗めたばかりでなく、燒かれ、粉碎され、掠奪される市市のみじめを自らわかつのみでなく、しばしば兩交戰者の熱情或ひは惡策に左右されて、間諜とか裏切者とか又井戶に毒を投じたとかいふやうな罪をきせられて、彼等は二人づつ十字架にかけられた。彼等は幾百となく戰爭の獲物として獄に投げ込まれ、銃殺され、笞殺され、絞殺され、生きながら燔かれた。女は凌辱され、住民全部は或ひは敵の前に逃げ惑ひ、或ひは味方自身の軍令に逐ひ立てられた。而も定められた〔猶太人地域〕以外の市市へは免れることはならぬのであつた。之等の市市は國の爲に召傷した兵士にさへ開かれなかつた。

殉難の民の長い歷史のうちにも、かほど暗い章は無いのである。いかにもこの猶太敎徒の苦みは基督敎徒の苦みの測り知れぬ海中に當然沒してしまふべきであらう。けれども、ボオランドと伯耳義とが苦惱によつて後光を放ち、やがては復活すべき希望を以て慰められてあるに反し、伯耳義の苦悶は英雄主義の不朽の紀念として殘るであらうに反して、イスラエルの苦悶は暗く忘れられて、何等の同情のしるしによつても和げられず、何等の國家回復の希望によつてもむくいられず、恐らくは嘲笑をさへ免れぬであらう。

これらの追窮された住民の一團が、冬の夜中を、泣き立てる子供と共に、血塗れの足で歩いてゐた時、自分達の兵士の聯隊に會つた。女たちは夢中になつて、列の中の猶太人達に哀願の手を擧げた。けれども猶太兵士等は子供のやうに泣いて前進するより外なかつたといふ。

III

かほどの勇氣、かほどの苦惱も畢竟するに何の用ぞ。各國民は《神聖な自己主義》の内に、戰爭が齎すべき利益の事に汲汲としてゐる。イスラエルの運命のみは不變のままで、又ある方面に於いては、絕望的狀態のままで續くのではなからうか？

《スラヴ聯隊》と呼ばれてはゐるが、事實その大部分は露領猶太人で成り立つてゐる外人軍團の一志願兵、《その武勇を以て指揮の將校連を驚歎させた》猶太人リトヴクは、一九一五年五月十五日アラス附近で戰死する少し前に書いてゐる。——

《死は私たちの恐れるところではない、迫害された私たち猶太種族のためにそこから良好な結果が生じるであらうかと思へば…　又、その赤子の間に隔てをおかない國のために猶

太人が死を以て報いる道を知つてゐることを、私たちは佛蘭西に示すのである…　一時間の後に私たちは進軍する筈で、佛蘭西のために、全猶太人の解放のために、私たちは死ぬつもりだ。佛蘭西萬歲、共和國萬歲、尊き民主の佛蘭西萬歲！》

來るべき講和會議は一八七八年の伯林會議の時のやうに、各交戰國の猶太人に對して、彼等が死を易しとして贖はんとした國民平等權を授けんことを議するであらうが、之が頗る難問題である。土耳古がアルメニア人についての伯林條款を尊重しなかつた如く、羅馬尼が新バルカン諸邦に於いて民權政治行政權の平等を猶太人に許可すべき當時の決議を一向守らなかつたのは、人の知るところである。一の國家は、たとへ聯邦會議の結果にせよ、外國からの内政に關する容喙に屈するを難ずるものである。伯林會議の干涉は反つて外國に保護される猶太人に對して羅馬尼人の不機嫌を增さしめ、だんだん羅領猶太人の位置を歪めるに過ぎなかつた。彼等は七世紀以上も羅馬尼の地に定住してゐるにも關らず、羅馬尼の法律では外國人と認められてゐる。而も特殊な、《國籍の保護なき外國人》である。如何なる政府如何なる領事にも訴へる由のない外國人である。中世紀にあつた《不歸化外國人》のやうに、彼等は勝手次第な制度に無條件で從はなければならない。羅馬尼墺匈國の

關係が緊張するにつれて、彼等は家を荒され、子女を虐げられ、生れた場所を逐はれ、而も男子は羅馬尼軍隊に編入されて血税を拂はせられてゐる。さりながら、今次の戰爭が少くとも露西亞と波蘭土では猶太人の境遇に著しい變化を齎さざるを得ないと思はれる。

戰爭のはな、露西亞と波蘭土との猶太人は最大の希望を得た。彼等は陸海軍の最高級にまで昇るを許され、又、ニコラス太公が波蘭土への約束の結果として、猶太人は解放を得るわけであつた。紐育の猶太人は殆ど皆露西亞又は波蘭土の生れであるが、彼等は曾や文字で仁慈なるツァアに感謝を表した。けれども、喜びは長持ちがしなかつた。太公の（?）〔一字不明〕ましい進軍の後ろに、ガリシャで露西亞當局によつて布かれた制度はしばしば墺太利のそれよりももつと波蘭土人猶太人につらいものであつた。短かかつたレンベルグの占領中、〘地域〙外へ出づる禁止が無法の度を超えて猶太人に充用された。〘地域〙外に收容された負傷兵の家族は彼等を病院に訪ふことを許されず、露西亞の中部へ引き渡された負傷兵は病院から逐ひ出された。僅か八人の同勢を以て、獨逸の重要な一隊を捕虜にした（?）〔一字不明〕、國家的英雄視された兵士カッツすらその憂目を見た。

露西亞の輿論は動いた。猶太の負傷兵がその戰友の英雄扱ひされてゐる病院に小さくな

つて縮んでをり、己れが規定の線外にあるを氣づかれる恐れより呻き聲も發し得ぬありさまを、レオニイド・アンドレイエフは公にした。露西亞は猶太人排斥の國ではない。反猶太的憎惡は役人共や狂信の司祭達の仕業であつて、二百餘の連名に成る〘知識階級（インテリゲント）〙の宣言書は一九一五年の四月既に發表されてゐる。

〘精神と物質の全力を擧げて、露西亞は戰爭に從つてゐる。露西亞に集まれる民力は手もなく之に參じてゐる。我我は、鬪士の血が徒らに注がれず、露西亞民族によつてなされた犧牲が空に失はれざらんことを希む。戰爭の慘害を受けた後の國民が一層の熱心を以て優越にして光明ある未來のために協力せんことは、我等の固き希みである。この信念に勵まされて、我等が篤く願ふところは、將來露西亞の諸民庶の關係が理性と良心との搖（ゆる）ぎなき基礎の上に据ゑられてあらんことである。

〘然るに、我が歴史のかかる紀念すべき年に當つて、我等は露西亞に居住せる一種族の苦痛が更に新しき苦痛によつて加へられたるを檢して、心痛と當惑とを感ぜざるを得ない。

〘…既に苦めること並並ならず、而も、爾く宗教、哲學、詩の領域に於いて高き眞理を世界に現示し、常に露西亞の生活に努力（?）〔二字不明〕を寄せ、爾くしばしば讒誣を强ひられ而も一再

ならず露西亞に愛慕を示したる猶太種族は、又新しき試練に供され、非道なる（?）罪に處けられてゐる。

『國民的行動のあらゆる範圍に渡つて我等と共に働きつつある露西亞のイスラエル人は、我等と存亡を共にし、國家と國民とに役立たんことを望む眞摯なる證左を豐かに供してゐる。彼等の權利を制限するは、啻に默止すべからざる非曲なるのみならず、實に國家を傷くる仕業と思はれるのである。國家がその力を汲み得又汲まざるべからざるは、露西亞居住の諸人民の團結に於いてこそである。而して諸市民の權利平等のみが國力を不拔になしうるのである。

『露西亞人よ、露國の猶太人は露西亞より他に祖國なきを記憶しようではないか。地上の人にとつて、已が生れた土地よりも親愛なるものはないことを記憶しようではないか。最後に、露西亞の安泰と權威とは、露西亞種族の幸福と自由とは、大露西亞國を形づくるところの諸種族の幸福と自由とに引き離ち難く連繫されてあるを會得しようではないか。之を會得しようではないか、理性と良心とに訟へんがために。而して、我が國家建設（興隆）の根本義の一として、猶太族迫害の棄絕、イスラエル人への權利平等の許容を定めようで

はないか』

役人達は聽かざるが如くで、猶太人の取り扱ひに何の變化をも與へなかつた。ただ、その六月、更にニコラス太公は立派らしい約束を繰り返して、戰後波蘭土は副王の統下に自治制を布かるべしと言つた。又、猶太人については、八月半頃、諸新聞の告げるところによれば、彼等に關する諸法律の改正まで、ペトログラアド、モスコオ、及び皇宮の所在地を除く諸市に彼等の滯在を許す旨、勅令によつて發表せらるべしとのことであつた。この改革は獨軍侵入に從つて諸地（?）方より溢れ出る群のために餘儀なくされたものであつて、許多の民衆を一團として惡疫や困憊のうちに死なしめんと欲せざる限り當然のことではあるが、兎に角刷新の一歩はなされたのであつて、奇怪酷薄な以前の規定に歸るが如きはありえぬことであらう。

八月二日の議會に於いても、殆ど諸黨の領袖の發言が猶太人に拒絕されてあつた權利と自由を得しめる意向であつたといふ。

て猶太人たるを望む』と。ガリボリ半島で負傷した猶太兵の言葉に曰ふ、――『私はこの負傷を誇る。けれども、これがもしパレスタインの地で受けたのであるならば、私は世界の幸福者であつたらうに。』

―一九一六・一一・二五―

意見

「感性論」は大正五年一二月頃の手記を編者が更に取捨整理したもの、未定稿といふよりは寧ろ覺書に近い。けれども、感性(SENSIBILITÉ)は朽葉の標語で、彼はこの標語を出發點として初めて時代批評の如きものを披瀝する計畫であつた。「傳統主義に就いて」は早稻田文學大正六年六月號に同主義に關する意見を求められて成つたもので、(良い市民の印は秩序の愛である)との肯定以外、彼と傳統主義との間には格別關係がない。なほ「感性論」はこの回答文に數行を假し與へてゐるのみならず、絶筆「微笑に就いての反省」其の他の内容とも微妙な相似がある。

感性論　未定稿

Pour vous, monsieur Masuda, qui êtes sérieux dans votre développement.

近代に磅礴してゐるあらゆる矛盾した刺戟は、感性を分裂せしめて、すべての思想を渾沌界に沒了させようとする。中世紀頃から順を追つて、世界の急進的多事と感性の變遷との關係を辿るは、現今の虛無的雰圍氣に對して反省の點を得るに最も有益な研究であるが、私は玆で數世紀に渡つた社會問題、哲學問題宗教問題等を包括して叙述する暇はない。根本に於いて、全部に於いて、感性と相伴ひ、相觸れてゐる美學問題、それにすらもほんの一瞥以上を玆では與へるわけにゆかない。この小文章の目的は冷靜な研究にあるのではなくて、論理の透徹を缺き、多少獨斷的に失するとも、些か警告を發するにあるからである。

肯定と否定と懐疑との烈しい動搖に押し流される現代の感性がその安定を確立するのは容易ではない。この禍は美の領域に於いて最も明らかに觀取される。藝術なるものは種種の認識的表現のうち最も感じ易い秤衡（バランス）だからである。

古典時代と呼ばれる十六七世紀の藝術興隆期に於いては、思想と表現との調和、內的要求に一致する外形の完成が單純直截に統一されてある。人性が中心を把持すること固い時には、堂堂たる影響が汎く行き渡つてゐるのみで、鷄の蹴合ひのやうな狹い流派爭ひはない。

十八世紀より十九世紀初頭にかけての思想の大變動を經て、舊來の制約はもはや近代の心を盛るに足らず、烈しい個人主義の嵐は既成の秩序を吹きまくつた。抽象と修辭との過重が知らず識らずの間に鬱積せしめた反抗の壓力は、雷鳴電閃を伴つて凄じい羅曼主義の强雨と成つた。自然は餘りに人巧的であつた藝術の苑に一氣に殺到したのである。古典派に於いては、人が自然を捕へて己がものとし、羅曼派に於いては、變化多い自然が一定の形式の殼（から）の中に惰眠を貪らんとする人性の無爲を覺醒せしめたのである。けれども羅曼主義は壯麗な光景に充ちてゐるにかかはらず、要するに險惡な天候に過ぎなかつた。破壞の爲の破壞であつて、新しい建設の道を開拓する由もなく、徒らに壯麗な空想に走つて、生活に依つて律せられることを嫌ひ、その實質を生から汲み來らずに、觀念の遊戲に親んだ。夢魔的な雰圍氣の中に强烈な色彩の交響樂が聞かれたのみである。この思想に續いた自然主義の理想は極力現實に卽するといふにあつたが、その根本的誤謬は人が直接世界の眞相に觸れうるといふ科學的態度の誤解にあつた。自然の移植は、要するに、人が各自の性質を以て感じ取る範圍內のことであつて、純粹現實の捕捉は人の能力を超えてゐるといふ點に現實主義は躓いたのである。或る者は新しい主義の建設に絕望して古典主義の復活を叫んだ。けれども人は歷史をやり直すわけにはゆかない。我等の現今までに受けた影響を今更引き去ることは不可能である。斯かる運動は現代の豐富な渾沌をただ貧弱化するに過ぎないのである。

我等は今日非常に擴大されたと同時に極めて紛亂した感性を以て苦んでゐる。和解の道のない相矛盾した傾向と相反した欲求とは人に理解の範圍を廣めたとしても、創造の力を傷めたこと夥しい。自らを測定し、研究し、透見せんとするあまり、己れの感動を自由に

傳へる能力を人は次第に失つて來た。懷疑は多く哲學の始まるところであるとしても、しばしば藝術の終るところである。

けれども懷疑は未だよい。私の最も寒心に堪へないのは、人心が懷疑に慣れて、安價などうでもよい主義、安樂主義の沒感性的錯亂に陷りつつあるなきやといふ點である。日本の國民性は常にその薄弱に於いて尻尾をあらはす。江戸藝術の憧憬者より最新思潮への躍進者に至るまで、或ひは外見のみの思想をひねくりまはし、或ひは情感の狹隘に逃避し、いづれにもせよ空疎な誇張のみ多いのは一に感性の不鮮明に基いてゐる。潑剌たる流露を見ぬところ、常に取るべき姿勢（ポオズ）の腐心を見る。凡べて緞帳芝居の光景である。

人生の第一義は、官能の自發的で獨立的で、何等の掣肘を受けざるにある。各自個性の性質による自由な選拔、個性を重んずる點に於いては排他的で、感性を重んずる點に於いては全的でなくてはならぬ。

一の哲學はその言說者の人格に作用されてのみ眞であり得る。一の思想に透徹する爲に

は人は感じる必要がある。抽象的に知るといふことと眞の感じを經たといふこととの間には何の關係もない。卽ち、思想は嚴密に一の肉體を以て編成されてあらざるよりは重きを成さない。多くの哲學者の思想から、彼等各自の特徵を持つた感性がその思想を形造り、その思想を點彩したところを引き去つてしまへば、それらのさまざまな差別相を含んだ思想の列は、一のブランクな、恐らく虛無そのものの形相であるところの思想と成つてしまふであらう。若しも無が眞理でない以上、差別は眞理そのものである。論理の上に讀まれる一の感性の過程のみが、一の魂の投射のみが、少くとも深い現實、生ける眞理である。その餘は現實の淺瀨、眞理の亡骸（なきがら）に過ぎない。

藝術家は自らの全部をその作物の中に注ぐ。彼の創作史は彼の生活史である。その觀念の一つ一つはその感性の唯一の結果である。その故にこそ、その作品は知識の事を超越して直ちに人の胸の奧底に響くのである。藝術家は最も己れの必然を以て語るが故に、自然が超論理的であるが如くに沒倫理的であり、その性情を以て人の性情に訟へるが故に悲痛な共鳴を呼び起す。

藝術は人の心と相携へて遠く行く。自らの性情に友なくして淋しむ人よ、玆に御身の伴侶がある。藝術は最も眞摯な性情の打ちあけ手である。藝術は說教者のやうに御身を說き伏せんとする底意を以て語らない。たとへ御身を說服せしめたとて、それは御身を撼かしたが故に、御身に聽かれたまでである。

藝術は外から御身に何物かを持ち來るものではない。自らの內より人の內に最も深い感動を傳へんとするものである。

藝術は作家の感動の肖像を描き、作家の感動の韻律を傳へる。私が玆に最も說きたいのは、人の感動が人を常に淨化せしめんとする傾向に就いてである。理路を如何に擴大した學問と雖も、感動の表現であるところの藝術が、人の中心を打ち、人の中心を開放して、これに親む者をして立場を常にこの痛感に求めしめ、人を密切な熱誠の生活に導き入れる感化力を發揮するが如きはない。

人が絕えざる感性の發揚によつて、常に感動の波に洗はれてある時、この不斷の世界との交通に惠まれて加速度的に已れの內に鎖されたものを開放する力を養ひ、その開放によつて他よりの訪れに對して受容力を贏ち得、自他に對して眞摯に而も胸襟を開くの道に進

むものである。その經驗の幸なると不幸なるとを問はず、その感動の笑ひなると淚なるとを問はず、かかる人は生命を開いて、自らの最も深い奧所を以て應へる。嘘と虛榮とは彼にとつて何の權威もない。かくて卑しい人はその告白的心理狀態によつて洗はれ、淨い人はその魂の展開によつて高くされる。けれども人は生れて誰か卑しい心根を持たぬものがあらうか。私を以てすればこの感動の經過のみが人の價値である。その故に最も尊い人性は最も赤裸裸な淺ましい苍よりして反つて生れ出づべきである。上流社會に於いて、純粹は腐敗し易い。少くとも下層社會に於けるが如く、上流社會に於いて、その硏かるべき機會に富むとは思へない。下層社會よりの寶玉はその硬度を遺憾なく試みられて後に輝く。生活、生活、生活とは何ぞ！　步み難き境地を步み拔けた人が英雄であるが如く、淚を以て洗はれてますます光りを增す純粹者が人生の王子である。人の心は必然に觸れて悲愴と成る。この痛感のみが生存の眞髓である。

處女は純粹である。けれどもそれは晴れた日の夕燒けが純粹であるやうなものである。汚れの中に在らずして汚れに染んでゐないといふまでのことである。嵐の後の自然の如く、烈しい煉獄の雰圍氣を經て後に淨らかである者のみが生きた純粹者である、生存の傑作を

行ひを以て書いた藝術家である。子供の純粋、無經驗者の純粋は白紙に過ぎない。

藝術はそれ自身に於いて倫理と何の關係もない。むしろ藝術の愛は多くの人を沒倫理家にする。

感性はその本質として不羈であつて、倫理の主宰するところではなく、倫理の外に在る。感性に善惡はない。强弱濃淡（鮮明不鮮明）があるのみである。感性は生活の基礎たる宿命である。健全な世界に於いては何物も感性を從へることはできない。凡べては感性の導くがままに從はねばならぬ。奴隷的感性を以て生れた者は、いかなる名譽と富裕とを以てしても、遂に奴隷たるを免れない。眞に自然に對面し得るは一に感性の濃密にある。强い感性の持主のみが相對的現實に絶對的現象を識得する。之が人の創造力の極致である。かかる人の感動こそ凡べて愛である。かかる人の理性こそ凡べて正しい判斷である。かかる人の意識こそ凡べて美である。透明な藝術の渾然たる統合力は實に玆に起因する。

シェエクスピアの作品に於いて、凡べては美である。イヤゴオもマクベスも魔女も妍婦も、その姿の眞(まこと)なる點に於いて皆美である。彼等は皆置かるべき位地に正しく据ゑられて

ゐる。之等の正しい秩序は調和の世界を形づくつてゐる。自由な胸にとつて、調和は快い喜びを與へる。調和は博い愛の姿である。博い愛、正しい認識、麗しい純粋は凡べて感性の鮮明より來る。偉大な人は、その感性がひろく世界に開放されてあるといふ意味に於いて愛世家であり、その感得が緻密な經驗を以てされてあるといふ點に於いて正確な判斷者であり、その複雜な感得が凡べて充足した唯一のものであるといふところに於いて獨立家である。

感性が直ちに言葉を發し得るものならば、我は運命を愛するといふに違ひない。

倫理は社會保存の爲である。藝術は生存完成の爲である。倫理は風敎の維持を司る。感性は風敎の原因である。感性の發露するところ倫理はしばしば動搖せねばならぬ。

ああ、この生存の大海、愛と死との波の歌！（苦(にが)い水を口に含んで、常に爽かな波間に漂ふ時）、言葉も足らず、思ひも足らず、日夜の流れに搖れる魂の韻律のみ人の心に高く響

き渡る。瀑なす感動の大管絃楽のみ遠く永く人の心を襲ふ。

季節に冬が旋り來るやうに、人の心に嚴しい緊張の時がある。

逆立ちの藝當を演じて足で鞠を弄ぶが如き似而非藝術家にとつては常に眞の藝術は彼等の嫉妬の種である。紙上で苦しい輕業を勵まねば忘れられんとする彼等は、自由に心ゆくまで歌ふ者を目して、彼は生活を閑却してゐる妄想家の徒に過ぎぬと叫ぶ。藝術の世界に於いては凡べて自由である。歌ふ者は歌ひ、舞ふ者は舞ふ。輕快なるが故に本質的ならずとするは獨逸のプロフェッサァの常である。凡べてを單色にして貧弱なる共通の中に押し込めんとする精神界の社會主義者等こそ禍なる哉。彼等の底には常にあらゆる優秀を貧しい己れの水準にまで引き下げんとする卑屈がある。彼等の思想と言ひ主義といふところは、みな之れ高貴なものに對して含むその怨恨を三百代言的口調でまやかしたくはせものである。衆口は金を爍す。誠の藝術家は誤解と無名とを以て試みられねばならぬ。勇士の運命は悲劇である。肚重にして名譽ある無數の傷を以て彼は倒れねばならぬ。

凡そ一の國、一の世紀は常に混亂してゐる。私が今言はうとするのは、かやうな、人生が自然から賦與された不秩序性に就いてではない。特に二十世紀初頭の日本が物質文明、稱せられるところの功利的社會思想の波に蕩蕩として漂はされつつあるのを私は寒心するのである。

五里霧中に彷徨する者は、やがて灰色の頭腦を持つ。昨日歸趨するところを知らずして焦慮した者が、今日、惰性的にその焦燥の表面をのみ殘して、内心は既に奴隷的忍從の安易な境界に歸著してゐるが如き、荒みはてた狀態を、私は現今の風俗の中から讀み取る機會のあまり多きに驚く。

ああ、賤民共の羨望は著著として功を奏せんとしてゐる。凡べての高貴なもの、凡べての特色あるものを一様な社會主義的情調にまで引き下げんとする彼等の卑屈心は、固より物慾を無私の態度へ導くことはえせず、價値或ひは道德の標準を遙かに低下せしめるに成功しつつある。然しながら、私は玆で社會の改良を說かうといふのではない。

社會主義者は恐るべき社會改良家である。彼等の思想の溜るところ、重く淀んだ死海の

鹹水を湛へて、そこには一尾の潑剌たる魚も躍らない。彼等の平和は一切無差別の平和である。彼等の平和は虚無の平和である。

差別の中にこそ生ける美がある。無差別の世界には混沌があるのみである。質の世界に於いては、銘銘の相違點によつて秩序ある階級を成してゐる。量の世界に於いては、等しく共通したしるしを以て無秩序の亂調を形づくる。凡べて分量を以て計る賤民は一切に平等の權利を要求する。彼等は自ら貴族たらんとはせずして、貴族を彼等にまで引き下げんと焦慮する。更に勝れた思想を持つに價せぬ彼等は、更に上級に昇り得ぬ彼等は、上なる者をひきおろして、彼等と同じ卑賤な制服を纏はしめんと息まく。

自然は彼等を凌辱した。自然は彼等から學者を造らずに職人を造つた。彼等から笑ふ者を造らずして、笑はれる者を造つた。この憤懣はいかにしてか償はるべき？　彼等は自然の秩序を破壞せんとするより外方法を持たぬのである。彼等には更に優秀な認識が缺けてゐる。更に豐かな感性が封じられてゐる。封じられてゐるからこそ彼等は賤民である。

奴隷は自由を欲するものではなくて、奴隷たらんと欲するものである。猫が小判を欲せずして鰹節を欲する如く、奴隷の嗜好物は高い處にあらずして、卑い所にある。

自由とは何ぞ？　自由を與へよ、とはよく聞く言葉であるけれど、我先づ自由な感性を持たずして、何の自由がある。自由な情緒、自由な意志、自由な理會は自由な感性を基礎としてのみ許される。

凡べての行動は必然によつて生じた以上、皆正當である。この事は我我の選擇を超えてゐる。

自然の森に紛れ込んだ者のみが空な自由を要求する。道にあらぬ叢に强ひて入らんとする者は道に迷ふ。人は感ずるに自由であつて、行ふに自由ではない。行ふは人の任ではないからである。

勝手氣儘は自由ではない。凡そ勝手氣儘な者ほど不自由に苛立つ者は無い。自由は必然の認識より生じる。何故ならば、必然を感得する事が人を最も自由な境地に進ましめるからである。絕對世界の空想は相對世界の知識よりも絕對的ではない。透明な世界に於いて

は凡べて秩序である。秩序は自由である。混亂は不自由である。運命は自然を整へる。運命の行動は自由である。人はこの必然を感じ取る。人の認識は自由である。最も綜合的な認識はかかつて藝術にある。藝術は運命の姿である。世界の意識である。藝術は人生に於ける自由の憧憬であり、表現である。藝術以外に自由を求める者はその原因を感性の貧弱に存してゐる。感ぜずして判ずる者は政治を行ふ。豐かにして樂しい知識は凡べて藝術である。貧しくして憐れなる判斷は凡べて政治である。自由なる空氣の世界に於いては、誠の藝術家はその權威ある感性の領分の故を以て眞に人世の王侯である。誠の階級、誠の秩序は彼等の作るところである。群集は彼等の支配の下に成功不成功の巷に幻影を追うて、自ら幻影の如くに生活してゐるのである。

私達はどこへ行くのかは知らないけれど、どこかへ行きつつあることは知つてゐる。生は一瞬も止らぬ。存在は動きである。動きの精神は何であるか、生活の感である。感性を打ち開いて、その彷徨に委せんことは、誠に生命の意義であり、唯一の藝術的權威である。感性の豐富なくして何で積極的な魂があらう。魂の充實なくして何の詩ぞ、何の歌ぞ。藝

術は生活の成就であり、至上の眞實であり、情熱中の白熱である。私は、曾て生活と藝術とを相反對せしめて藝術を消極的と做す者をたびたび聞いた。人生の美に達する道をかくは貧弱ならしめんとするは如何なる少量偏狹の見解者ぞ。美は生のしるしである。最も生きた者のみが美を以て拜される。修辭學と雄辯術との先生がいかほど巧妙な詩術を講じるとも、感動の方法を何で敎へやうか！ 美は感動の自らなる權威である。生命の威力の如何に優しいかを知らざる者のみ藝術を指して薄弱と呼ぶ。或ひは彼等は藝術ならぬものに就いて、その可否をあげつらふ。彼等こそ半死的鈍感者である。『存在するとは感じるにある』(ルツオ)。

己れが熟知してゐる意味の言葉を用ゐて、己れが誠に感じた事を言ふ時、たとへ藝術の天分薄い者と雖も、人の心を動かすことができる。無邪氣な幼稚者は幼稚ではない。一心な愚人は愚ではない。感ぜずして言ひ、知らずして說く者のみがひとり幼稚であり、愚劣である。

天才者の行動がしばしば常軌を逸することは我人共に聞き及ぶところであるが、奇行を

案出するに努めて天才を以てゐる者は、私の常に見知るところである。孔雀を見倣ふ鴉と、貴婦人を眞似る小間使と、天才を氣取る小作家とほど取柄(とりえ)のない者はない。彼等は彼等の差別相(ニュアンス)、彼等の種類(ジャンル)に於いてこそ存在の理由を持つてゐるのではないか。平凡といふことは美の信奉者にあつては大難關であるが、元來何故に人は平凡であるか？　私はかう答へたい、平凡なる人の平凡を飾り、或ひは之を誇らんとするほど平凡なるはないと。平凡な人は一般に信じられてゐるほど單純で素朴ではない。もし或る凡人と認められる人が單純で素朴であるならば、必ずしも彼は凡人ではない。凡人の罪は奇抜ならんとするにある。

奇抜は人の航路に横はる最大暗礁である。ニイッチェの如く感ぜずしてニイッチェの如く文飾する者、トルストイの如く感ぜずしてトルストイの如く修辭する者、かかる人物ほど平凡で、厚顔で、不自然なものはない。而して强ひて己れをニイッチェにまで引き上げ、トルストイを己れにまで引き下げて、徒らに我は超人なり、我は凡人なりとて、自ら欺き、他を律しようとすることそ、その主義の如何に關らず、奇抜ならんことをのみ之努め、外見をのみ之事とする平凡のどん底である。彼等は己れの向上性、己れの平凡性を認めるより前に、先づ虚榮心の支配するところとなつてゐる。感性の自然に向つて打ち開かれざること之に

過ぎたるはなく、思想の制服を無意味に著用せること之より甚しきはない。

文は人である、先づ感性である。文體によつて人を見んとすれば、文體の附燒刄によつて感性の貧弱をあらはし、修辭された貧弱によつて平凡の尻尾を摑まへ得るのである。或ひはその反對が可能である。天才と否とをおしなべて、藝術的表現の要はすべての修辭學を去り、感性の發露に聽くにある。

生活に於いて、始めに生理があり、次に心理があるやうに、藝術に於いては始めに感性があり、次に思想或ひは理性がある。

藝術の人は思想の過重から己れの感性を守りさへもせねばならぬ。いかなる理性も思想も感性を支配し得ず。各の分に應じて感ぜよ。而して先づ感ぜよ。

最も美はしいものは生存に在る。最も豐かな藝術は敏感な共鳴に在る。敏なる感性の汲み來るところ。凡べて活きた藝術の世界である。卽ち透明な秩序である。美は完全な均整

にあるのではない。幾何學者は美を示すものではない。卽ち、美は感性を離れて理性に在るのではない。美は生存にある、動搖にある。ああ、この湧き上り捲き返す、愛と死との大海よ！　いかなる高い秩序もいかなる微細な差別(ニュアンス)も、潑剌たる感性を以て讀み取る人にとつては、この一册の生ける書籍に印されてある。生を飾らんとする者は、自然を改めんとする者は、己れの無能力を示す薄弱な藝術家、目の眩(くるめ)ける生存觀察家に過ぎない。徒らに加へんとする者は誠の點に於いて引く。美を餘計にせんとする者は生を減殺する。かかる人には自然が缺けてゐる。感性が沒却されてゐる。凡べての過ち、凡べての禍は感性の發露せざるより起る。

何物も單純ではない。凡べては相關係してゐる。複雜にして統一ある人格のみが世界を單純に見得る。渾然たる藝術境を感得する。先づ複雜なるニュアンスに應ずる敏感があつて後、強い感動の力は統一的權能を發する。世界を單純透明に示し得る人は、彼が豐富な感性の持主であつて、複雜な自然が齎す凡べての要素をよくそのニュアンスに應じて數へ上げるが故に然るのである。常に新しい世界を常に新しい藝術にまで轉換することは先づ感性の鮮明なくしてはかなはぬことである。

一九一六・初メ

感性論覺書（一九一五・一二？）

Ⅰ　現代の錯雜と無秩序

Ⅱ　感性と生活と藝術と

Ⅲ　藝術と倫理

Ⅳ　藝術と理性

Ⅴ　藝術のための藝術

現代の安價な懷疑（人心懷疑に慣る）と雷同的妥協との沒感性的錯亂（創造力の壞頽）に就いての考察。

――華やかな理想を持つ青年を見ずして悪狡(こう)き成功熱の青年を見る。その他。その原因（羅曼主義、自然主義、古典主義等、簡單な解說。科學、經濟その他の矛盾に富める狀態の膨脹）。

――感情が感覺と釣合のとれぬほど誇張されてある者は、あまりに感ぜんとして冗漫で簡明を缺いた形容に陷る。（SENTIMENTALISTE.）

傳統主義に就いて

凡べての主張は政治的色彩を帶びてゐる。政治は多く黨派的色彩を帶びてゐる。私は黨派の人を嫌ふ。多くの主張は信ずる以上を口にする、私はこの誇張を厭ふ。一體單なる主義主張は、智慧の近視者か認識の石女によりほかの興味を與へない。たとへ眞理の主義がありとも、それが一の鼓動する心臟の響を傳へないならば、卽ち生存の必然に觸れてゐないならば、一個の紙屑にしか價しない空文である。抽象的に知るといふことと眞の感じを經たといふこととの間には何の關係もない。卽ち思想は嚴密に一の肉體を以て編成されてあらざるよりは重きを成さない。多くの哲學者の多くの思想から、彼等各自の特徴を持つた感性がそれらの思想を形造りそれらの思想を點彩したところを引き去つてしまへば、その樣樣な差別相を含んだ思想の列は、恐らく一のブランクな、恐らく虛無そのものの形相

であるところの思想と成つてしまふであらう。說や定義や法則は抑も末である。論理の上に讀まれる一の感性の道程のみが、一の魂の投射のみが生きた眞實である。先づ自らに對して眞であれ。一の思想は一の生理的人格の樣式であれ。

人は自說に忠實なることに依つて價値があるのではない。自己に忠實なることに依つてである。自己の內に變化が起つた時(卽ち變化である)、自說を墨守しないで、この舊想を脫ぎ棄てることを衣更への快さを以てすることこそ高い價値である。社會の事に於いても、もはや自發的でなくなつた傾向に對して忠實であるほど痴愚なことはない。徒らに傳統に戀戀たる者は國民力を正視する資格のない者と言はなければならない。天才は常に一般化する前には沒倫理的で革命的(沒傳統的)である。創力は初め除外例であつて、舊來の傳統を破壞すればこそ役立つ。一の價値は舊慣に泥まず凡べての羈絆から脫却する程度のいかんによつて寧ろ定まるのである。

傳統主義を得て過去の中に拘泥するならば、その人は自由な精神を缺くのみならず、未來に對して一の卑怯者である。最も好もしい傳統と雖もその初めは特殊な力なのである。昨日を斥けよ。今日が常に出發點であれ。傳統は重んずれば足る。餘りに過去の事を氣に

するのは剝製の虎を恐れるに異らない。傳來の事を日毎繰り返さんとするは徐りに生きながら死に過ぎる。けれども傳統主義の意はさうではないのであらう。傳來の事に注意を集めて、國民性に就いての意識を深めんとするは、より良い生活の道を尋ねんが爲であらう。それならば傳統主義は要するに一の方法に過ぎないことを忘れてはならない。

又別方面から言へば、人は自滿自足の狀態にある時は無爲の雰圍氣を形造るものである。人は自發的に發展するものではない。國とてもさうである。糯米が糀たらんとするには酵母を要とする。人は人間との交涉が密切で社會に揉まれるほど個性の發揮に資するところがあるやうに、民衆も他の民衆と相觸れ相混じてその文華を致すのである。排他を意味する傳統主義があらば、私達は反つて之と戰はねばならない。德川の鎖國政治の件は私達が日本歷史で最も苦痛を感じるところである。外來のものは有害物さへ時には無益ではない。一の機關にとつて抵抗は不活潑にまさること萬萬である。劇しい水勢は强い動力を與へる。傳統主義は特にこの著眼點に注目するを忘れざらんことを。

人は己れの外に出るものではない。彼の擧動、彼の所爲は皆己れ自身の肖像を空間に描く一線一畫である。國に民族に何等かの秩序がある以上、その國その民族は中心に於いて

同一色彩を帶びてゐる。一國内の個人的種種相にはその國を一つの圈とした限界がある。之をずつと遠くより見れば全體が一つの特性として現れて來る。この意義を組織的に具體的に省察せんとする主義は、特に社會思想が過渡期の波に漂はされつつある日本の如きに於いては、態度として甚だ賢い、又運動として至極必要である。現實と深い交涉をもつ思想は常に最も生きてゐる。

然しながら、この主義はしばしば常套を辯護し兼ねない。生存の進化に逆行し兼ねない。死んだ眞理を拾ひ上げて、生きた眞理を阻み兼ねない。例へば、傳統主義は史的硏究に重きを置いて、國民の生活史から民族の歸趨を讀み取らんとするであらう。そこから社會の秩序國家の將來にとつて最も熟り多い理解を汲み來らんとするのであらう。

然るに、多くの場合、歷史が敎へるところと事實の內容との間には超え難い淵がある。何故なるかは殆ど實際の衝に當るほかその當を得た感銘を經驗するものではない。體驗者がまことの記憶を以て己れの經た世界を語る時、聞き手は全く異つた事を知るのみである。即ち一の知識を得るのみである。眞の事實から代理的事實、即ち歷史を得るのみである。何故となら機會はただ一だからである。一が遭遇した事を全く同じ狀態で他が經驗するこ

とは決してないからである。諸君は歴史をせいぜい心理的に考案して如實に了解し得た積りでゐるなら大間違ひである。歴史の裡には何人も打ち破り難い空虚がある。歴史は繰り返す。事實は決して繰り返さない。

人は長い時日の鳥瞰圖なる歴史に眼を投げると、今日廢れてゐる樣樣の良い文物制度をその中に發見するであらう。物事は良いと思ふが故に良いのである。昔の時代に行はれた良習慣が今日行はれないとすれば、大抵の場合何等かの正當な淘汰を經てもう良くなくなつたので、今日之等を復活せしめんとするはしばしば單なる幻影に過ぎない。その故に歴史的觀察に依つて今日の制度を變へんと欲するやうな傳統主義は甚だ危險な思想である。

自然主義が現實を、心理主義が因果關係を、共に捕捉し損つて、徒らに狹い解釋を作つたやうに、傳統主義も國民性又は民族性に狹い限界を加へるを以て終りはせぬかを私は氣遣ふ。

論理や幾何の正確はいつも自然性を缺いてゐる。故にそれらを正確とすれば生存は間違ひだらけなのである。ところが元來生存よりも正確なものがある筈がない。何故なら生存が凡べての基調であつて、理性と雖も生存を標準とせねばならぬからである。世界は理解

される前に先づ感ぜられねばならない。いかなる狂氣染みた異樣な感性も理性よりはもつと存在の理由がある。故に眞の理性は感性の自由を意味しなければならない。理性の出しや張るところ常に無理が通つて來る。理性を否むこそ至上の理性である。理性とは存在に對して眞摯なるの意でなくて何であらう！　若し傳統主義が理性に先づ聽くならば獨立な感性に垣を結ばうとするは必定であつて、茲から黨派的社會政策、偏見的倫理に堕ちるのである。

その故に傳統主義は本能の自發性に先づ聽くを以て始まつて欲しい。無智な者、單純な者は學者や道德家より眞實を體現する機會を多く持つてゐる。本能は智慧よりも確かな生存の導き手だからである。之等の簡單な直覺的行動者の世界から魅力ある反省を汲み來るのが傳統主義の第一歩であれ。

傳統的精神に興味を寄せる者は必ず佛蘭西のモオリス・バレスに耳を傾けるがよい。彼は傳統主義といふ主張の創始者であるのみならず、又その最も優れた解說者である。彼の思想は自我の解剖に依つて國家の意義に達した。自我の尊重によつて愛國の精神に徹した。何故なら《民族は集合せる我であるから》と。土地と祖先と民族とは彼の傳統主義の三大

断案である。

一。人は自己の感じと平行した生活をする。而して人が或る土地に住む以上、閉ぢられた感性の持主でない限り、この土地に對するよりも密切な感想があらうか。祖國にあつては人は社會とぴつたり調和した道を進むことができる。他國に於いては人は社會と知的な關係を保つに過ぎない。傳統の根を斷ち切られるからである。

二。我等は自己の内に生じる思考の主人ではない。この思考は我等の智慧から出たものではなくて、因つて來ること遠い生理的組織の射映である。我等は自分の沈潛してゐる環境に從つて批判や推理を立てる。人間の理性は全く玆に繫がれてゐる。我等は皆先人達の足跡を通つて行かねばならない。自家の觀念などといふものは無いのである。死せる先祖は生ける我等の正當な指導者である。卽ち彼等は國民力として我等の内に生きてゐる。

三。國民の中心生命は、その内部の心理行爲は傳統の淀みない實踐の上に係つてゐる。秩序ある社會生活はそれを形造る國民性と合致せねばならぬ以上、民族の感性に依る傳統をその組織の基調とせねばならぬのは當り前のことである。然らば殆ど社會は大いな自己であり、自己は小さな社會である。然らば傳統に就いての愛著的省察は卽ち深い自己意識

である。自己と社會は傳統あつてこそ本能的な近親關係を形成する。人がその生理的組織に依つて心理狀態を異にするやうに、一の社會はその傳統によつて特徴を示してゐる。かかる一民族の特徴に十分な發展の方法を整へるのが傳統主義である。

私はバレスの思想に必ずしも同意するものではない。ただ、過去の堆積された努力を濫りに撒き散らさず、本來の傾向に從つて想像に紀律あらしめ、感性に秩序あらしめ、外れんとする思想を矯め、國の制度とその文明の意義を尋ねて、最も切實で又聰明な伸長を期するといふ一種の緊縮した態度には同感である。

紀律と秩序とは自由を妨げるものではなくて、反つてその進展を容易ならしめる車輪のやうなものである。無紀律の現在と幸福な未來の夢想とは何の役にも立たない。かの快濶なゲエテのやうに紀律を好んで受け入れ秩序ある生活を營むのは社會を愛する人の最も喜びとするところでなくてはならない。諸君が宇宙を背負つて立つのはよい。ただ進んで一小祖國の一良民であれ。良い市民は自分が一員であるところの社會が美しからんことを欲し、自己の資質を擧げて之が完成の爲に參與する。良い市民の印は秩序の愛である。

而してかの世界主義や社會主義や羅曼主義や好事主義や、凡べての抽象的な卽ち空想的

第三部

な思想よりも、傳統主義が先づ一地方の社會の秩序を愛する市民を作らんとする點に於いて、私は熱心な贊成者である。

一九一七・五・——

思ふ、少年の心に刻まれた事物は年を經る毎に何とも言ひがたい仄かな哀愁を與へるものである。僕は小さい時、今でもさうであるが、ひ弱い性で、他の子供のやうに野山を駈けまはるといふこともなく、自分のうちの、築山をとりまいた池の水の冷たかつたことや、前の郡役所の裏手に小高い丘があつて、雜草が丈ぐらゐに亂れてる中で莓の實を徭に澤山通したり、その續きに黄いろい菜の花の香が心持よく匂つてゐたことや、うちの黑塀に添つて細い路が限りなくつづいてゐたことや、——その行つても行つても先のないやうな路を急いで行く人を見ると、妙に胸が一杯になつて涙ぐまれた。——人の顔など、名も知らず、處も知らず、ただ、ぼうつと浮ぶばかりである。

三富朽葉十九歳の手記

遺稿雜纂

この雑纂のうち雑誌に發表されたものは僅か二三種に過ぎない。他は手帳の片隅や獨立の紙片に書き散らしてあつたのを編者が年代順に整理したのである。日誌、感想、論文起草の覺書、簡潔な主張や觀察錄、小說や物語や散文詩の未定稿などの交錯する間を辿つてゆくと、折折、銳い悲哀や佗びしい喪心の取り亂した擧動を見る。やがて底に哀調を湛へた歡喜の言葉が聞え初めると共に終つてゐるのである。そして、そのいづれを取つてみても、この種の遺稿にありがちな筆路の混亂を完全に脫してゐるのは注目に値すると思はれる。（二十二歲から死まで。）

某日午後。―― 私とTと浪花町の河岸を歩いて行つた。澱んだ河水を臨んで、家家の欄干や白亞、黑塗りの倉庫等が亂雜な凸凹を形造つて對岸に並んでゐる。大傳馬小傳馬がそれぞれ荷を積み込んで水面に坐つてゐる。一體舟といふものは混入つた感じを刺戟するものだが、それが周圍のごたごたした空氣と一緖になつて私の頭に重苦しい煩はしさを印した。とある橋を渡ると、その袂の處の新しい家から河の上へ湯殿が突き出てゐる。私は妙に惱ましい心地を覺えて河緣を踏んで行くと、Tが急に《見給へ》と言つて眼を向けた。十三四の、胸を反らした海老茶袴の少女、その眞黑な瞳と私の眼とがぶつかつた、引き締つたセンシュアルな顏に捕へ難い皮肉な表情を湛へてじつと私達を見てゐる。青春の女のすばしこい眼光は男の肉感を魅するものだが。この少女はもうそこまで達してゐた。縐縮緬か何かのごりごりした物を著てゐる。私は足の肉つきが堪らなく可愛いなと思ひながら、《株屋のお孃さんだねえ》と言つた。

あの純潔な脚部を見なかつたら私は、もう男を知つてるなと思つたであらう。私は一時誘惑を覺えて歩みが鈍つた。〔一九一〇・一〇・——〕

★

某日午後。——物の影の徂徠に充ちた私の眼はだんだん無味な疲勞をのみ後腦に映して來た。鬱陶しく蔽さつた雲間を時時かつと洩れる日光、私はその度毎に病人の熱の差退のやうな汗ばみを覺えて、何物にとも知れぬ嫌惡の念が高まつて來た。も少し前閉ぢて來た小說の中の或る意味が未だ私の頭に附き纏つてゐる。幾度も幾度も愛といふものに欺かれた少女が絕望と悲哀に沈んで青春とか幸福とかを考へてゐた。少女の憶ひ起した詩の句は近頃の私には似合しからぬ優しい歎きを感ぜしめた。

Ma jeunesse ne fut qu'un ténébreux orage,
Traversé ça et là par de brillants soleils;

Beaudelaire.

わが青春は闇の中の嵐に過ぎなかつた、
唯そこにここに輝く日光の洩れて來る。

Vous dont je n'ai su que faire,
Adieu, mes sombres printemps.

Madame Valmore.

私には如何にしてよいかわからなかつた汝よ、
さらば、我が暗い春。

美しい青春にあこがれる者には何處にもその青春は無い。鏡に映る月のやうな幸福の影。觀透し難い生命の鎖…

私は小說からセンティメンタルな影響を受けてよしない物思ひに耽つて行つた。然り、誠によしないことではないか。然し、生活の忍從は如何に度度私達に狂はしい光りを閃かすことぞ！　私はメランコリイに充ちて步いて行つた。そして、おでん屋の屋臺の下に坐つて飽かず煮え立つ御馳走の煙を見入つてゐる痩犬を見た。その忍耐は如何ばかりか狂はしいではないか！

巡査が街頭に佇んでみたり徘徊したりしてゐる。そのボックスの蔭まで來て私は思はずしやがみ込まうとした。

無智、永久の無智…

〔一九一〇・一一・——〕

★

驚くことがないといふ DISILLUSION と、驚き呆れたといふ DISILLUSION.（之は勿論わが説ではない。かやうに自らを思へる二個の人間があるといふこと。）

〔一九一一・一二・一二〕

★

未來の希望といふこともわれにとつては光りが薄い。之は現在をほぼ滿足してゐるからである。われは確かに幸福の一端を握つてゐる。此の上の精進は自らの行ひによつておのづからできてゆく。それは自分にとつて確かに樂だ。

DISILLUSION といふことはわれに變形を與へた。この事實を口惜む氣はまるでない。これを是認する。われはわが DISILLUSION の爲に多くの藝術家を識るわれを損はれてはゐない。それに。われは現在を肯いてゐる。

愛する人は幸福だ。VILLIERS DE L'ISLE-ADAM も之を言つてゐる。われは實際の愛には心を鑠かれたにしても、當然藝術家の愛に入つて來たわれは自らを賤むことはできない。實際の愛には鑠かれるといふことを肯定して來た。そして之を是認した。藝術を辿つて行く中に實際の愛に復活することになつた。

然らばこれは信仰であるか。信仰ではない。われは現在にとらはれてゐるのだ。玆にわが MODERNISM が始まる。他の或る人と同じく MODERNISM の人も亦幸福だ。MODERNISM がわれに始まつてゐる。われはわが MODERNISM なるものを知らないから未來の光りも薄い。又われとわが MODERNISM を感じてゐるから自分は幸福だ。幸福はそんなに遠くにあらう筈はない。

「青い鳥」にも書いてある。ただ、青い鳥は依然として子供の掌中にはない。わが感覺と希望とはどうしても一致しない。わが MODERNISM は趣味によつて始まる。信仰にも希

望にもあらぬ趣味！
肉體の趣味、精神の趣味、―― 之は自分の祕密だ。自分を放縱でないといふ者にも反感が起る。自分を道學家だといふ者にも反感が起る。自分は隨分放縱だ。自分は隨分道學家ではない。
ただ、此のわが趣味識を傷ける罵聲を少し遠のいた時に考へてみれば、之を言ふ人に無理はない。此のわが祕密は誰も知らぬものと見える。
わが行爲は自らわが精進となつてゆくであらう。
わが感覺よ！ わが愛する感覺よ！ （一九一一・一二・一二）

★

Notre-ou ma-vie est aveugle et vit... En avant !!! （一九一二・一・一）

★

誕生日（暮方の對話）。――
H、（都雅な花瓶に眼の覺めるやうな花を盛つてゐる。）
S、あなたのお父さんは、では？
H、ええ、醫者は今日夜までは保つまい、この晩方の潮時を越せさうにもないと言ひますの。
S、（衝動的に時計を見る。）もう四時半だ…（當惑の沈默。）
H、（Sに近寄る。聲喉にからまる。）今日はあなたの誕生日でせう。今日あなたと離れてゐると私は息が塞がつてたふれてしまふんです。私はさつき父の枕元に附き添つてゐる間に自分のまはりの空氣が薄くうすくなつてゆくのが解りました。そしてぼんやりと父も私もこの儘窒息してしまふのぢやないかと思ひました。…さうするとどこかの路傍が目に映つて、そこに黑い者が蹲んでゐるんですの、乞食のやうなものが。その時私は室を忍び出して來たんです。…その時の氣持は私には言へません。あなた咎めないで下さい！

S、ええ、私には解り過ぎてゐるんです。私もあなたを離すことはできない。あなたにお歸りなさいといふ言葉が出ないのですけれど…

H、私は今胸の中で父に別れを告げてゐましたのよ…

S、ああ、（嘆息。呟くやうに、）あなたにお歸りなさいとは言へないのだけれど… あなたはここに居られますか？ あなたが歸つて上げないと…

H、（次の言葉を聞くを恐れるやうに、）今、一人になれば私は死んでしまひさうです。どうぞ追はないでね！《必ず女を打つな、花を以てさへも。》といふ、あの小說の言葉は嘘ぢやありません、でないと、私は死ぬよりもつともつと恐ろしい…毒を飲まなくつちやなりません。魂を私壞されてしまふに違ひないんですから！ 歸れなんて言はないで下さい！

（Sの胸にくづをれる。）

S、解りました、解りました。私は魘されたやうな氣持で自分の力以上の事を言はうとしたんです。私だとてあなたに歸られてしまへば、凍えたやうになつてしまふでせう。私には《今》といふ時間の外に、別な時間があらうとも思へません。私は多くの時間を信頼した そしていつも欺かれたんです。あなたを知つてから、私はもう永久性を持つた

生活だの太陽だのは飛び越してしまつてゐるんでしたのに…（間。）私達が《麗しさの故に生命を失つた》人間なんでせう…

H、ええ、生命も肉親の愛も。獨りぼつちの片輪の父の爲に私はどんなに心を痛めたでせう。私が狂人になる日があつても父のことは忘れられません。けれども、私は今あなたと同じ場所の空氣を吸つてゐないと、胸の中が空虚になつてしまふんです。魂の呼吸が續かなくなつてしまふんです。

S、私達もあなたのお父さんとおんなじ盲目なんですね。自然の祕密を取つた罰で私達は人情の眼を目かくしされたんでせう。ね、戀に飾りは要りません。愛し合つてゐながら、愛の外のことが考へられるものですか。僞りの感情で事を複雜にして何になりませう…私の爲に目の見えないお父さんの最後を犧牲にして下さい！ （長い抱擁と沈默。闇紅色の夕明りは黃昏の影を暫く僞る。何處よりか微かなギオロンの顫律が室の中へ泌み込んで來る。その韻には象徵藝術の憧憬と戰慄籠る。兩人は熱病の恢復期にあるやうな遊離した心地でこれを聞いてゐる。）

H、寒氣がします。

S、（低く、）何だか恐ろしい…

H、（低く、）ええ、影が恐ろしい！

S、もう晩方なのだ…

H、（その意味を捉へてびくつとする。）

S、（静かに立つて窓へ行く。）遠くに雪でも降つてゐさうな妙な薄明りだ。

H、窓が恐ろしい。閉めて下さい、どうぞ。

S、（無言にて手早く窓を閉ぢる。）私の心は今合掌して私の誕生日の爲に感謝を捧げてゐるんですよ。私の今振つてゐる乳香には生命と靈魂とが薫つてゐます。此の上ない、二つとない祝福をあなたは授けて下さつた。詩人がよく言ひますねえ、《時の翅》といふことを。その時の翅が鵠の鳥か何かのやうに眞白な羽搏きをしてゐるのが私には見えるんです。そしてその傍に薄青い煙のやうなものが立ち昇つてゐる…

H、（はつきりと、）それは父の死骸を燒く煙なのでせう…

S、（戰慄する。聲をひそめて、）こんな恐ろしい犧牲が要らうとは思はなかつた。けれど今になつてみると解りますねえ。

H、（低く）ええ、ええ、戀には犧牲が要るんだつたんですねえ。何だらう、何だらうと思つてゐたあの祕密な氣持は…　此の犧牲が欲しいのだつた！（間。氣を變へて、小卓の花瓶に近づく。）花がこしらへかけでしたつけ…　御覽なさい、このうつむいた優しい脆さうな花を。私はこの花よりも自分の首が重いやうな氣がしますの。

S、あなたの方がもつと美しく、もつと脆いのですもの…

（沈默。）

H、あなたは血が騷ぐことがありますか？…　どうしたのでせう、私の口の中は血の匂ひがします…

（沈默。黄昏はだんだん濃い蔭を作る。ギオロン、闇の重みに堪へぬやうに音弱る。Hは不知不覺にギオロンに魅せられたやうにて、ギオロンの消えるに連れて蒼白となる。）

H、（この時ギオロンの最後の强摩を聞く。）愛すると言つて…あなた！（Sの足下へ走り倒れる。）

S、愛します！　愛します！…　いつまでも…　死んでからも…　（折れ重なつて倒れる。）

（夜は紅い翅をひろげ、碧い瞳を見開く。）　　　（一九一二・二・一）

★

牢屋の中に朝があけた。

鳥が謡つてゐる。時計が鳴いてゐる。

鳥よ、時計よ、わが爲に何といふ無意味な裝飾であらう。之等とり集めた周圍の中に私の女性を信じ能はぬ悲慘の朝が明けてゐる。

《私はパッションを憎む》とボオドレエルは火の言葉を發した。《私はパッションを憎む》と！　〔一九一二・四・一八〕

★

血の言葉。——小生には悲みもなく苦みもなし。ただ、時には茫然とし、時には涙ぐみ申候。茫然たるは痲痺を感ずるが故にして、涙を禁じ能はぬは感激に打たるるが故に候。

小生の紅き額は FRANCHIR といふ努力の烙印に燒かる。凡べてを飛び越え飛びこえて

滿足を知らぬ心底を彷徨にまかせんこと、わが慘憺たる祈りにして、亦わが生命の秘鑰に候。

時に小生は、赤き三角帆の谷底を指して狂ふを夢み候て、絶息の無感覺を身に覺えながら針路を枉げなとあせること、時に鬼と鬪つて、彼奴をわが天國に引きずりあげ、滿盃の血に醉ふこと有之、之等は小生が紅の喜びに候。

これ小生の赤に候。

時に闇中に貝を繰る音を聞き、時に遠くより谺する太皷の連打を聞き、慄然として腦に金輪の喰ひしばるを忍び、肉に絶對不二の毒を飲み候。

これ小生の黑に候。

今夜は終宵雨を聽く。小生は雨の脚に打たるる朽葉なり。　〔一九一二・六・一六〕

☆

現代傳說その一、乞食傳（未定稿）。——私は今や名高い乞食である。私の祖先も乞食の

大親分であつた。私はマケドニアかブリテェンか見分けのつかぬまでに靄のかかつた異國の海岸を長いこと漂流つた。船を繋がぬ鑠けた砂濱には澤山の小鬼めいた裸形の者がとんぼがへりをしたり、鯱立ちをしたりして、臆し勝ちな私を苦めた。沖には盛裝したヨットや汽艇が臙色の波間を輕く滑つて物語めいた祭禮を開いてゐた。その奢りを盡した綺羅と薫香とは海岸の私にまで目と鼻とを襲つて來た。私は此の時分に悲哀と空想との世界から畸形な知識を得た。私は才を見ずに醜を見、誇りを知らずに恐怖を知つた。直覺！——翅の破れた直覺は私の腦と胸に致命的な毒を注いだ。それからといふもの私は口のきき方が變になつてゐる。

いつとは知らず、何故とも覺えぬながら、私は麥の穗の上にひざまづいて、一心に《美》を祈つてゐたことがあつた。季節は夏で、太陽が熱い光りを射てゐたのに、又私の體は熱に浮かされてゐたのに、私の魂は氷のやうに冷えてゐた。そして私の眼前に天女が出現した。然し此の天女は黒人の天女で、私に SENSATION SEXUELLE といふものを教へてくれたのみであつた。

私は羞耻よりも咎よりも烈しい饑ゑと渇きとに追はれて、手當り次第に《自然》をあさつ

た。私の喰ひ得たものは石塊と木の根と空中の黴菌と、その他のごつちやな汚ない物であつた。その爲に私の內臟は熱を病んで、奇怪な夢魔の所行を肩越しに私は覗くことができた。然し、私の胸は一杯になつてゐるに關らず、私の腹中はますます大空虛を感じてゆく。——そして私は有名な乞食になつた。

如何なる病も私の空腹を毒する術を知らない。如何なる藥も私の空腹を癒す術を知らない。私は光榮を拾つて恥辱とし、酷薄をひるがへして CHARME とするほど曲つた根性になつてしまつた。私は此の世の谷底を彷徨つてゐるが、かう人間離れがしてみると、私は殆ど言葉を忘れて來た。

おお、わが愛する姉妹よ、何故御身等はわが戀を嫉妬の十字架に懸けるのか？

おお、わが慕ふ兄弟よ、何故御身等はわが熱情を孤獨の城に幽閉めるのか？

私は身に襤褸を下げて、悲慘の地を爪で掘る。雨は私の腰を蹴つた。風は私の面に唾した。

私は何者の慈悲をも請はない。亦私は何者の慈悲をも仰ぐ！　私の紅い額、私のただれた手は何を祈り、何を合掌して求めてゐるのであるか？　——私こそ、生活の火を見つけ

出して滿腹しよう爲に、太陽と永久性とを飛び越えん力の爲に、世界に生き殘つた親代代の乞食の子なのであつた…

狂と惡とは閃光のやうに私の瞳を捉へた。私は悲鳴を擧げて太平の頌を唄ひ、血に塗れた足を廻してワルツの一曲を踊りたい！

〔一九一二・六・二五〕

茫乎とした東洋の地を、私は心に擾亂を重ねて宛もなくさまよつた。森の鳥は悲鳴を擧げ、野の獸は光りの如くに走つた。長い間私の肉體は歲月の餌となり、私の魂は石塊を喰つた。私の膝はともすれば叢や溝のほとりにくづ折れようとする。けれども此の惱亂の中にあつて、草に花咲くやうに黃金の希みが私の困苦を飾つた。火と血と鹽とのやうな希み——私は何とも知れぬ烈しい希みを胸に抱き締めて、時の絲の繫ぐが儘に、足をやすめぬこともはや何年であらう！　路傍の石に腰を降せば、此の希みは針となつて臀を刺した。

〔一九一二・七・一二〕

私はわが身に著いた多くの物を賣り拂つてしまつた。私は此の世に存在を保たう爲に、

自己生存の意義を賣りこかした。この肉體に疲勞の感覺を買はん爲には、自分の守り本尊なる夢魔をも賣つた。

今はただ無暗と鋭い一道の如法暗黑を食つて、私は感性の谷間を驅け降る。岩石のやうな JUIF ERRANT の疲勞は私の DÉLICATESSE を遮二無二に壓し潰さうとする。多くの作家は JUIF ERRANT の悲みを書いた。私には彼は恐怖のみを與へる。

恐ろしい人間の群に昨日も今日も交つてゐて、私は賑かな生活を貪る。煤煙は空を舞つて近代生活を祝福した。

賣料も乏しくなつた今は、私は玉突屋へ入つて、自分の物でもない他人の赤や白の玉を勝手にこづきまはす。そして何も拂ふまいとする。玉突屋の主人は主人で、私に依つて退屈か何かを凌げると見えて、私を歡んで迎へる。そして私は竊かに淚を落し、主人はひそかに欠伸をした…

〔一九一二・八・四〕

★

現代傳説その二、惡魔の晩餐（未定稿）。——晩春の薄碧い暮方、銀座通りは玻璃の扉を透して燈火を點じて行く。砂まぶれの柳の絲が何か簇り寄るものを打ち拂ひでもするやうに微風に縺れて閃光を頽ひ落す。

歸り後れた勤め人や女工などが影縮めいて並木の間を急ぎ足に縫ふ外、暫く往來のと絶えた此の夕飯時、私は二人の友達と、とあるカッフェへ歩み寄つた。年若の園田は外來人らしいむせたやうな顔付をして時時ささやく。一番年かさな塙は霧の中に何かを見分けようとする肉食鳥さながらの眼光をして默默と歩んでゐる。私は、あはただしい電車のベル、濁つた夕刊賣の聲を耳にしながら、僅かの間に多くの戀を夢みた。戀の歡樂と戀の怖れ……

〔一九一二・——〕

★

自覺の範疇。——科學者が普遍な内容を見出ださうとして分析を試みる時、藝術家は豐富な IMAGES の總合で獨立な直覺を表現する。科學は人生に應用を與へ、藝術は人生に差違を設ける。例へば倫理問題である自覺といふことは應用的見地より出てゐる國家の問

題とはならない。自覺の意義は他よりも如何ほど密度の過剩あるかといふ點に懸かつてゐる。婦人の自覺といふことが喧しい今日、たとへその濃度が如何に稀薄で見すぼらしくあらうとも、應用道德の曲尺を以て藝術内容の立體圓周を測定しようとする立論家の多いのは甚だ苦苦しい次第ではないか。

〔一九一三・八・——〕

★

INNOCENCE と告白。——優秀の二樣式——わが INNOCENCE の MIRAGE に眩惑される人、われにもあらず告白を口ばしる内壓力の強い人、更に、此の二つ（原質と表現）の天才の FUSION に洗禮された人をこそ、私は理想の藝術家と呼ぶ。

〔一九一三・八・——〕

★

生活と IRONIE. ——近頃よく聞く生活力といふ言葉は無論存在を意識する力といふこ

とであらう。この意識は正しく觀照を排した直觀哲學の內容である。私は方方の雜誌で・先づ生活を痛感せよといふ、藝術を先にする者への戒めに出會した。然し藝術は此の現實力と共鳴する理想力の發現であつて、前額を先にして後頭を後にせよといふやうな空虛な主張に論者は陷つてゐる。生活の痛感者と藝術の表現者とは量に於いて異るのでなくて質の相違に屬してゐるのである。論者は思想の功過に感性の銳敏を瞞されてゐる。これ論者が必然に努力を力說する所以である。努力に依つてそもそも如何なる理想境をか得んとする? 藝術の制作は直覺によつてのみ成される。何馬力かの努力による、DÉLICATESSE と NUANCE とを缺いた痛感は努力の汗に塗れずして最初から出來上つてゐる創作(地上に咲き出る花)と何等の交涉も無い。論者等の IMAGE は感性の全音階で合奏されてをらぬと思へる。少くとも IMAGE と表現との間にあるべき何とも言へぬ銳感の閃きを論者等の文學に見出だすことができない。この意味で論者等の內容的、生活的に對して、私は形式が文學の全部であり(音が音樂の全部である如く)、藝術の爲の藝術が藝術の全部であると言ふ。

哲學的背景を持たぬ IRONIE の文學がはやつてゐる。(例、《かなり…》、《相當の…》、

《だから自分は…》、《…と言つてしまへばそれまでだが》、云云。) IRONIE は聰明を通つて來るものであるのに、御大層な ARRIVISTE の IRONIE は倦厭たる藝者と拳を打つてゐるやうな、溝の上で綱渡りをしてゐるやうな奇拔な感情を以て讀者に見える。

〔一九一三・八・——〕

★

原形と象徵。——文學では感性が原形であつて、文學が象徵である。觀念の經過が原形であつて、その象徵は文章である。更に廣く藝術の上では、感的(感ぜられるもの)と感性との關係が原形と象徵といふ現象になる。この現象を私は映象と言ひ、映象の經過を映嶪と言ふ。

〔一九一三・八・八〕

★

藝術と生活。——感激は唯一不二ではない。忠臣乃木大將もまた感激するではないか。

誠實は藝術ではない。全體は部分であり得るけれど、部分は全體ではない。而も諸君が誠實の主張から努力の主張に當然到達するならば、自分の主張は藝術とは關係のないものであるといふことを自覺してもらひたい。INTUITION と努力とは、誠實といふ共同の色彩を帶びた根本的二元である。そして、藝術は INTUITION をよりしか必要としないものである。思ふに、諸君が努力の歡喜を享ける感激は宜しく MARINETTI のやうに鐵の皮膚、鐵の腕を持つた數馬力の不體的器械力を讃美するまでに到るべきである。諸君の赤い MODERNISME は工場のエンヂンと共に晝夜をおかぬエヴォリュウションに旋轉すべしである。但し、科學より創造へ趨くといふ順序的偏見を捨てねばならぬ。科學は今日の如く明日も亦應用的範圍を出でない。創造は恒星であつて應用的圏内へは流れて來ぬ。同樣に、區別した意味での生活と藝術とは ACTION を共通の GENRE とした二元である。例へば愛と食事とは ACTION を共通の GENRE とした二元である。諸君に、食事を先づ始めよと呼ぶことの如何に卑屈なるかを考へてもらひたい。或ひは諸君の中に推理力の乏しい人があつて、さういふけれど食事から先に始まつてゐることは人生の事實ではないかと言ふであらう。然り。食事は愛の以前に表れる。生活は藝術の以前にあらはれる。幽靈は藝術を造らぬからである。食事の續きは戀愛ではない。生活材料より藝術材料の方がより深い潜在的粘著性を持つてゐる。何故とならば、前者は意識界に屬してゐるけれど、後者は無意識界に屬してゐて、コンヱンションで鮮明にすることができないからである。

NECESSITY を先にせよといふ論は成り立たぬ。必然は無意識自らの動作であつて、生活と藝術とに共通な GENRE ではないか。亦この ACTION (共通な GENRE)を先にせよといふ空な發言がかくれた感性の持主に感性の充實を勸めた意味のものとすれば、むしろ藝術を先にせよと言ふに如かぬ。進化の歷史は實用の歷史である。藝術の歷史は變化の跡をのみ止める。彼は複雜であり、之は單純である。彼は意識的 ÉVOLUTIONALISME であり、之は無意識的 FATALISME である。

良い意味での生活は卽ち《内の藝術》である。その印象を忠實に書きとめるのが藝術の表現である。　(一九一三・八・一七)

☆

H. MATISSE. ——(凡べて REMBRANDT の TYPES は曖昧な様子で晝盲症といつた風で、皮膚に癩を持つた不安な金持のやうである。)ジュウル・ラフォルグ。

MATISSE は人間をよそに癩を描く。女性をよそに懶惰を描く。癩と懶惰とは男女性を毒殺して、生命のない體軀に乘り移つてゐる。形は異樣に主張し、思想は異樣に腫脹し、生氣は腐れ、命は頽れてゐる。彼の畫は一見神經の DÉCADENCE でありながら、實は手法の遊戲に墮してゐる。斯かる畫にして既に狂氣を伴はぬなら、Ce n'est rien に外ならぬ。〔一九一三・九・二〕

☆

現代傳説その三、めざましい綠の岸の物語(未定稿)。——徒らに世界的な片隅の物思ひは常に遙かな季節の風物に如何に引きつけられて、燻る火のやうな異國の土地に抑へ難い

痙攣の跡を眞晝の日と雨の曇りとの洗ふが儘にさすらふこともはや幾年であらう!砂金を掘る騷ぎ、港の波のゆらゆり、限りを知らぬ石塊の續き、いつも眺めを限られる額の眩暈、此上ない祈りの黑燿、おお此の神經の春!

烈しく亦優しいあらゆる希望の空に鴉の礫を抛つ幻滅に追はれて、岬の曙を擁く我が心は感性の谷間に暗黑を吸ふ。此の NUANCE の念ひを汚す酷薄よ、この渴き、この焦れ…この近世的傳説は既に私の爭力を顫へしめる。おお此の悔恨の永遠性はもはや刹那を轉輾せしめる。〔一九一三・九・——〕

☆

平行の發意。——我我が全くの自動的表現を以て書く時、我我が藝術家の素質に富んでゐるほど、讀者は、その筆によつて、おのおのの感性に應じて、未だ意識にのぼらなかつた自家の IMAGE を自らの胸臆に喚起するものである。我我の作が自然との接觸による獨創である如く、讀者の心象は讀書による獨創である。斯かる自由な自覺による作家を暗示

の作家といふ。世には己れの表さんと欲する所を言ひ得て、教育される事を喜ぶ讀者に滿足を與へる作家が多い。之等の有名な大體的作家と暗示の作家とを區別し得るごく少數の讀者の爲にのみ我我の作は發表される。我我は文壇を率ゐんと希ふものではない。我我は文壇と平行せんと意を決したものである。

〔一九一三・一〇・一四〕

☆

現代傳說。――私が象徴といふ時、抽象的、非現實的を意味するものでは更にない。無意識界よりわが感性への、未だ言語にのぼつてゐない消息、反映、照應、流動、卽ちあらゆる濃い現實の祈願を言ふのである。

この世界的希み、この薄命の喜び(增田氏作參照)を以て傳說の神神と我我は摑み合ふものである。

社會的神話。現代的傳說。

現在は未來への一定した法則的豫測を以て爭はれるべき性質のものではない。現在は斯かる叙述を許さぬものである。智識ある著眼にして其の理由を無意識界に置かぬ以上は、空中の夢想郷に終らないのは稀である。

〔一九一三・一〇・一四〕

☆

私は友愛を思ふ每に一つの償ひ難い存念の何とも言へぬ苦(くるし)みに打たれるものである。おおこの蜜の味ひ、この針の毒……

〔一九一三・一〇・一六〕

☆

心の貴族。――進化の事實は弱者と强者との現象にある。社會の基調を規(ただ)す時、個人主義とか社會主義とかいふ對照の一を採つて純粹な精神を致さうとする人は弱者である。かういふ見地から代議精神を稱へる人は民主の廣漠に眩暈した人である。かういふ見解から

個人主義を稱へる人は强者ではない。感情敎育の纖細な結果は强者を心の貴族とする。自由を求める人は內に默識せよ。　〔一九一三・一〇・二〇〕

★

疲れて私は惡夢に魘されて行くのであるか？　私は《死》に近づいた。私は書置を腦中に刻んで、自ら憐み、自ら傷み、淸い者の殉道を苦み！　おお惜み惜んだ！　けれども之が終りである。最後の純粹を擧げて死の雪崩に息を塞がんとしてゐる。抱くべき者を持たぬ自らをひしと抱き締めて、おおこの世界が終るとは…　〔一九一三・一一・二二〕

★

倫理――唯我の自覺は當然自殺を含んでゐる。　〔一九一三・一一・――〕

★

物語、澱（未完稿）。――十月某日、宮島紅葉谷、彼女に別れて第十七日。共棲のおもひでは既に遠世の春の事のやうに我が胸に曇つてしまつたにも似ず、私は次第に烈しい匂ひと彩の嵐、次第に鮮かな悔恨の何とも言へない戰慄に襲はれて來る。昨夜も夢に彼女を見た。否彼女を感じた…　否、彼女の百何十里を超えて延ばした掌に捉へられて、蝶の如くあやしい粉を振ひ落すわが魂の羽搏きを感じた。

午後、惱ましい室を出て、深沈な秋の日の中を何物かに追はれて又何物かを求めて鷄のやうに逍遙つた。紅葉の合掌、谷川の冷氣、樅の繁葉の蔭行く徑、絞りの色に飾られた雜木林へ姿搔き消える小鳥、同族を戒め合ふ葉摺れのささやき、凡べて光りと影と微風とのちらつき搖さぶり合ふ丘より丘を、私は幻のやうに上り又ふらふらと下つた。私はもはや歩くに堪へない足をとある木蔭の草叢に投げ出して、又迫り來る物思ひにふけつた。私は彼女を此の上なく愛したけれど結婚したのはやはり誤りであつた。家庭の仕事の平板に、素直な潔い心を凡化させるのは何たる毒毒しい罪であらう。遠かれ早かれそこへ落ちて行

くべきが人の運命であるとしても、我が理想と賴んだ彼女のさうした經路を親しく間近に眺めたことの狂ほしさよ！　更に惡いことには、臺所や詰らぬ近所合壁の交際は彼女の家庭的な本能に興味を引いた。それが生活の露骨な嘘へ彼女を引き入れる第一歩であつた。彼女の白い心にみじめな生活のしみがつくに連れて、彼女をいつくしむ私の愛は苛立たしい神經に形を變へた。彼女が無邪氣な目を見張つて、私の狂氣めいた焦燥に呆氣にとられる時、私は彼女を呼び醒ます力盡きて茫然とした。私が最終の勇氣をふるつて、彼女の純潔の危機を說く時、彼女は無頓著に滿足の笑を浮べて、『私なんかどうでもいいの、あなたこそ弱いんだから身體を大切にして…　そんなに落膽してはいけませんよ、ね！』と慰つた。

私はとうから人生の欺りの歷史に氣づいてゐた。その歷史は現在を通して未來へも續いてゐる。私は無恥な、曖昧な生活から玉のやうな彼女を隔てて、高い世界に彼女を祕めておかねばならぬと決心したのであつた。この私の志操は彼女をひどく退屈せしめた。それに私とても、全體何が解つてゐるのであらう！　彼女が何の苦もなく生活の習慣を迎へる無邪氣な擧動を何で私が制するだけの暴力を持つてゐよう！　そのおちつき加減は、私を

して彼女は多くの面白からぬ尋常茶飯事の瘠地を掘り割つて何處までも純白の帆を進め得るのではないかとさへ賴ましめた。けれども脆い女性がどうしてつまづかずにゐやう。彼女は私にいつともなく巧みな嘘を吐き初めた。…——私は又、われ知らず失敗と煩悶との月日を繰りひろげつつ、草の上に身を橫へたまま、いつしか午睡の惡夢に陷ちてゐたものらしく、何とも言へぬ寒氣がすると、ふと人聲が耳に入つた。密林にさへぎられて姿は見えぬけれど、何事をか爭つてゐる者の會話らしい。

『私は…　お母さんは私を好かんのです。私は餘計者なのです！』

『さう一圖に言ふもんではない。お母さんだとてお前を嫌ふ筈はないのだから！』

『嫌ひでないでも好かんのです。兄さんだとて、姉さんだとて、皆で私をおもちやにして…　私はどこかへ行つてしまふ、きつと。きつと！』

『お前もも少し大きうなるまでしんぼうしてくれんとお父さんが困るから、な！　こらえてゐておくれ…　どうかな！』

『お父さん。』と少年らしい方の聲は涙に迸つた。やがて賺しなだめる聲と歔欷の咽びとは次第に遠ざかつて行つた。

私も立ち上つた。路を尋ねて行くと大元公園の奥へ來た。夕日が多寳塔の峰をまともに照してゐる。何處からともなく一匹の牝鹿が柔和な眼つきをして寄つて來た。その眼が私に如何なる優しい意味を語つたのか知らないが、懷しい者の前にくづをれる少年のやうに、私も、私も亦、鹿の前に膝を突いて泣いた…

〔一九一三・末〕

☆

現代傳說その四、噺(未定稿)。――この緩かな季節は彼の烈しい季節の時間的運河である。彼の季節の頂點に一の鋭い魂の曙が交つた。その曙は異樣な雲間より洩れてこの縮圖の上に何とも言へぬ爽かな喜びと苦みとの光線を曳き摺つた。その光線は韻律そのものであつて、其の魂は貧兒に宿つてゐた。襤褸を纏つた此の小鬼はよごれた爪によつて詩を刻んだ。インキのこぼれた、疊のへこんだ、汚ない本だらけの室に、ランプの綠を浴びて、彼の鮮かに白い穢れた顏の二つの眼光は何處とも知れぬ異國を遍歷つた。彼は日曜に渴いて學校を恐れた。學校は眼も鼻も口もない癩となつて彼にとつついた。惡夢の中に彼の眺

めを限る地平線はしばしば幾何の對角線の謎と重なり合つた。一切の遊戲を唾棄する彼の日曜に木木は淺綠の葉を淨めて領主の訪れを待ちかまへた。彼は小石を踏みながら、例の如く胸ををどらして、畑のうねから森の中へ紛れ込んだ。枝の小鳥は彼の肩越しに囀の通りに尖つた聲を擧げて彼の顏を痙攣に曲らせ、彼を病的に頰笑ませた。

〔一九一四・一・――〕

☆

感受性の流行。―― ISME の運動でなく、一の RECHERCHE でなく、主張の波動である。合理的排列はある。批評の爲の批評はある。表皮はある。その實がない。ISME の DÉCADECE は MAÎTRE によつて內に求められたものがその樣式の THÉORICIEN や弟子によつて外に稀薄にされてゆくに始まる。多くの ISME が全盛に達した時はその末期であつた。膨脹の勢に壓されて密度に隙ができたからである。古くなつたからである。古くなるとは劣つて來たことである。

この流行の力に牽かれてわが路をいささかも取り違へることのない爲には、これに抵抗

する理性が直覺以外に交へられた人でなければならぬ。〔一九一四・一・三一〕

☆

HELLÉNISME と CHRISTIANISME 又は LATIN 民族と GERMAN 民族、之等の ISME 又は血統を、今日ではもはや純粋ならしめることはできない。BARRÈS 一派の、佛蘭西の國民性を逆轉せしめて CLASSICISME に純化せしめんとする運動は、二十世紀の嵐を突き切るわけにはゆかぬのである。ROMANTIQUE の浸透力は既に髓に及んでゐるのである。

〔一九一四・一・三一〕

☆

私は VERHAEREN の羅列的な感情文明を愛さぬ。おお鮮明な音樂(KAHN)、纖細な現實(RIMBAUD)！ 〔一九一四・一・三一〕

☆

暮方、空は風で暗い色を拭つた。街は素朴に木と土と石との生地を露した。池には水と共に鯉が濁つてゐる。雨戸を頻りに撫でる楓は、何等の主張もない素振りで、忘却のリヅムを描いた。逸れ易い曲り易い脆い心を持たぬ一族を風も亦冷淡に鞭つ。彼等のする事が凡べて自然である快さよ。 〔一九一四・五・二〇〕

☆

人力以上の藝術。——即ち REALITY の FRESHNESS を性質的に感じることが唯一の藝術である。それ等を主張(興味)なしに表現することが作家の藝術性である。

藝術は現實としての事實を含んでゐる。卽ち藝術は性質的分量である。藝術は事物そのものにはないが、現實に貫かれてゐる事實にある。

藝術は現實の復活である。之は實に至難なことである。例へば事實の頂點（例へば最大

苦悶)を經驗してゐる人は、多く現實を復活させる力を持たない。その藝術(或ひは二重の現實性)は僅かに哲學(抽象的方面)によつて觀察されるのみである。Oh no! それはそのリヅムに依つてのみ辿らるべきものだ。でなければ、事實の現實味は死んで來る。卽ち、生の現實と復活の現實とが間隙なく平行して來ない。調和が完全でない。偏してゐる。卽ち哲學は事實を平板にする。數個の濤を海にする。藝術は數個の波によつて海を暗示せねばならぬ。波が如何に描かれてゐるかが藝術の SOUCI である。波を主としないで、海を主とすることは爽かさに缺けてゐる。眞理は常に之にあるであらうが、美は常に彼にある。常に爽かな美は波の起伏にある。現象にある。美によつて眞理を感じ得ぬ者は哲學によつて眞理の鳥瞰景を見るもよからう。私は眞理の深さよりも廣さよりも爽かさを浴びるを喜ぶものである。私にとつては海の CHARME は波のリヅムにある。無限を暗示する波のリヅムにある。無限などはどうでもよい。

〔一九一四・六・七〕

☆

この溫氣で、臭氣を發する生活は遺憾なく蒸れるであらう。夏よ人生の消毒室たれ!

〔一九一四・七・一〕

☆

私はデリカシイの名によつて哲學を大變限られたものだと言ふ。それならそれでよいではないか。何も哲學は藝術の敵ではない。然るに、私は何故哲學に向つて挑むやうな口吻に出でるのであるか。恐らく私は多くの小大家が哲學の蜜の味によつて毒されたことに我知らぬ怨みを持つてゐるのであらう。

〔一九一四・七・一〕

☆

HYMNE. ——私は常に藝術に對して恐怖を感じる。私の常に走らうとする病的な傾向を、(自由なれ)といふ眩暈のするやうな偉大な手でさへぎられるからである。おお最愛の藝術よ、御身に願ふ、私を全部運び去れ。御身に祈る、私の自己を更に更に酷しく敗亡せ

しめよ、私を更に更に反省の心痛に搖られしめよ。私の IMAGINATION を微塵に打ち碎け。御身の根本的な IMAGINATION の一部分と私を成らしめよ。私の貧しい、ほこらしい我を御身の豐富な正しい性質の雪崩(なだれ)に窒息せしめよ。御身の唯一性よ、わが本能を消毒せよ。でなければ、いつそ黴菌と共に私をも燒いてしまへ。おお決して決して私の運命を追ひやるなかれ。御身の名によつて私は如何なる冒險の道に漂ふことをも否まない。ただ、私の暗い時を永遠を以て罰するな。おお、わが頂點が常に曙に、爽かさに、豐かさに、童貞(純粹)に、その他のあらゆる御身の性質に續(つな)がつてあらんことを！ 少くとも私の危機に於いて此の恐怖は御身に捧げられた犧牲者のそれであらんことを！ 卽ち、私の運命は兎も角も御身の掌を離れざらんことを！ 私がそむくことあらば、御身に祈る、怒つて私を鞭ち給へ。決して決して私に冷淡ならざれ。我が祈禱の神たれ。少くともわが平凡性の迷信たれ、おお藝術！

眞も美も愛も御身なくしては空な名前である。それ等の事實のあるところ御身は常に性質として存在してゐる。御身は實に性質的に人生の頂點である。卽ち、あらゆる高いものは御身によつて認められねばならぬ。

〔一九一四・七・一〕

★

あべこべの結果とは？ ――物質文明的傾向。

〔一九一四・七・一四〕

★

今日はまるで季節のオルケストラを聞いてゐるやうだ。薄暗い雨の日が一杯擴がつてゐる。私の呼吸には霧のやうな鋭い空氣が交つてゐる。石が濡れる。葉が搖れる。庭には痺れたやうな笑ひが生じた。

〔一九一四・九・三〇〕

★

「生活表」について。――あらゆる境遇に於いての自分を傳記にすること。――之は連續した數個のお伽噺の唯一性を備へたものとなるであらう。此の著の爽かさは既に一個の現

代的傳說である。此の傳說は一個の詩篇でなければならぬ。なぜなら、自分は藝術家であり、自分の感じた世界は創造品である故。

〔一九一四・一〇・一〕

★

異様な幹が叢に沈んでゐる。餘りに單純な夜の言葉は意識にのぼらぬ樂園を徒らに告げる、告げる。わが幸福は何處に？　――嵐の匂ひ溶け入る束の間の身震ひに！

〔一九一四・一〇・三〕

☆

この數日、私の身に味氣ない時が續いてゐる。

朝、無意味な而も畏のやうな夢から覺めて、午前を徒らに過した。午後、暫く日の當つた間にのぼせたと見えて鼻血が出た。窓から街の上を眺めると、霑つた空氣の物靜かな明るみが私の心をやや顫へさせる。

〔一九一四・一一・一七〕

☆

雨が降つてゐる。長い間、いつからとも知れず雨が續いてゐる。何事かを思ひかへし言ひのこして二人の客は去つた。私もそこはかと机の前に坐ると、ふと、胸に言ひやうのない氣落ちが迫つた。言葉、言葉、唯一の言葉！　まだ生れぬ言葉を尋ねて彷徨ふ意味がいつからとなく私と成つてゐる。おお此の思ひがけない機會に空しい樂園は雨に煙つてのみ露れた。

私は立ち上つて窓の夜を見た。二月の涼しい風は私の額を慰めた。高臺の濡れた燈火は私の視覺を和げた。空はすなほな瞳を開いて此の地のいとなみに爽かな眺めを漂はす。

何といふ遊戲であらう！　否！　何といふ約束であらう！　否！　何といふ苦みであらう！……

生を琢け、恐らくは明かな光りが此の世を照すであらう。此の世の明りの想像に私は眩く。

けれども長い間いつからとも知れず雨が降つてゐて、私は裸かな意味のままで著物をさがしてゐる。

〔一九一五・二・一一〕

★

「生活表」序（藝術に就いて）。——私が玆に出版したのは藝術ではない。ほんの試み（エッセエ）である。其の日暮しの記錄（備忘錄）である。

〔一九一五・——〕

★

レミ・ドゥ・グウルモン研究未定稿冒頭の一節。——如何に人は多く夢みることよ！　人の能力には狹い限界があり、人の行爲には僅かばかりの選擇が許されるのみで、地球は人類の淺ましい檻であり、籠であることを悟つた人は數知れずある。然しながら、辛うじて此の事を睇視しえた者の中、絕望に陷らず、隱遁の無爲に痺れ入らず、信仰に走らず、

黑い懷疑に塗（まみ）れずして、卽ち已れの生存そのものの味ひを汚すか又は一の幻影を捨てるより早く他の幻影に縋ることをせずして、移り行く現在の時時刻刻が宛ら永遠であるかの如く、そしらぬ樣（さま）に、《生活の動搖を無邪氣な眼を以て眺めやるといふ哲學に忠實で》あり得たものがどれ程あるであらう。斯かる透明な思想家、斯かる意識的詩人、斯かる徹底的生活者の一人に、近く歿した佛蘭西の哲人レミ・ドゥ・グウルモンをば數へ入れねばならぬのである。私は、景を變ふる每に焦點をなほす寫眞師のやうに問題をあげつらふ每に論點を新しくする彼が思想の敏捷を感歎するものである。

〔一九一六・初メ〕

★

レミ・ドゥ・グウルモン研究材料覺書。——感性と智識との釣合のとれた事。——思想は結晶した心象であり、智慧は結晶した感性である。

感じる能力と解する能力とは何人にも備はつてをり、又理解力は畢竟感應力の結果に外ならぬと雖も、此の兩者の間に流れるが如き融會を把握してゐる人格は至つて稀である。

人の内に感覺は結晶して思想（觀念）となり、感性は結晶して智慧となる。多くの場合、やがて此の受容力は混濁して、もはや新しい結晶の力を失ひ、其の後の刺激は既成の思想を呼び起す用をしかなさなくなる。此の凝結した記憶の層は新來の感覺を自由に受け入れることを拒む。己れの小さい主義主張に囚はれる蝸牛的人物は皆此の智識の凝結を得て感性の自由を失つた者の類である。斯かる人は世界に觸れた藝術を成す者でない。その成すところは常に道德或ひは政治に墮する。

極めて少數の天稟者のみが常に豐富に成りゆく動搖の淸新を味ひ知つてゐる。常套者流は不動の永遠を空想する。常に新たなる現實世界に生息する精神のみが更新の永遠を識得してゐる。彼等は潑剌たる感覺に密に撼かされて、その度毎に己れの内に心理的變態を刻みゆく敏感の人である。彼等の結晶はいつも次の結晶に移るまでの頃刻的結晶であつて、決して不可入的凝性をば形造らない。新しい感覺毎に新しい結晶を生じる彼等にあつてのみ、常に打てば響くが如き均整が確存してゐるのである。彼等のみが世界を透明にすべき驚歎の眼を持つてゐる。

世界は偉大なるスフィンクスであつて、如何なる哲學もその謎を解き得ない。然しながら、聰明な感性の持主にとつては無量に豐富な啓示の貯藏所である。藝術家にとつては世界は如何に汲めども盡きぬ泉であるぞ。此の泉の飮めども飽かぬ含蓄をグウルモンの優秀な感性は味ひ知つてゐる。眞の藝術家にして、常に新鮮な感性の持主にして厭世家は無い。厭世家は凝固した眼を以て、動きのない世界を見る精神の老人である。或ひは、『厭世家は必定片隅ですねる子供の類に過ぎないのではあるまいか？　さあ、その自分ひとりが好い子の氣持を超越したまへ、出て來たまへ、まあにつこりとしたまへ。何故ひとりぼつちに成りたがるの？　笑ひは笑ひを呼ぶ。仕合せである爲には、先づ仕合せな樣子をしなくてはならない。』（レミ・ドゥ・グウルモン、「文壇遊步第一卷」。）

レミ・ドゥ・グウルモンの矛盾、變說、逆說、詭辯、獨斷等の形容を以て掩はれる點に、私は反つて彼のオリジナリテの尖銳なる現れを觀取せんとするのである。グウルモンの魅力の一は聽く人の耳を彈いて、その判斷を驚異せしめるにある。彼は手品師のやうに、人の思想を煙に捲く者であるか？　然り、又否である。私は彼が人の惡い惡戲的精神を以て

茫然たる讀者の前に巧みな宙返りの輕業を演じて見せる傾向を否みはせぬ。けれども要するに彼の人を啞然とさせるものは、その縱まな精神の輕快にある。否、彼は徒らに詭辯を弄して言葉の遊戯を喜ぶものではない。彼の魂はあらゆる自然の發露に向つて打ち開いてゐる。その導くがままに荒荒しく又細やかに從ひ行き、博い理性を以て之を整理する。その探求の深く成りゆくに從つてその深刻が齎す鋭い逸樂は、彼を驅つて更に加速度的な追求に進ましめるのである。寧ろ彼は極端に理路を追ふものである。（ここに、グウルモン「芝生の路」よりの引例あり。第一部飜譯篇に移す。——編者。）

人は推理をやるに、論理に從はずして已れの都合に從ふ。この傾向を嘲つてグウルモンがあらゆる機微にまで私なき理路を追ひ、結果を恐れずして危險な境地を探り行くが爲に、人は已れの幻影を曝露されて、宛ら夢中に脅されるやうなマジックを感じるのである。此の點に於いて、グウルモンはニイッチェと共に幻影破壞、價値顚倒の哲學者、思想界のプロテスタンである。

彼は人の因習的肯定を打ち破る疑惑の蒔き手である。彼はラ・フォンテエヌと共に、無信は確實を摑む唯一の方法であるといふ。然しながら、此の懷疑哲學者は厭世家ではない。

むしろ一種の樂天家である。懷疑と樂天との反對な二傾向を彼が如何に已れの一身に纒め得てゐるかを解くには、前述の凝滯のない藝術的均整をグウルモンの内に求めてみれば自ら明かである。

如何にも彼には思索的天分が重きを成してゐるけれども、その思索は乾びた認識の用をなすものではなくて、常に世界に向つて自由に打ち開いた感性の發展に役立つ最も創作的な思索である。

彼は深い思索家である故に何物をも疑ふ。彼は高い藝術家である故に生を愛する。而して彼の無私な科學的智識は謎は要するに謎であることを知つた。世界は絕間なき奇蹟の連續である。明日の奇蹟は窺ひ知るべからず、過去の奇蹟は再び歸らぬ。現在の奇蹟の波に驚歎の眼を浴せしめずして、何ぞ右顧左眄して今日を忘れ勝ちな人の多いことぞ！

先づ現在に於いてできるだけ密に生きることを知らねばならぬ。

（ここに、「或る女の夢」と「リュクザンブウルの一夜」とより選ばれたる引例あり。第一部飜譯篇に移す。——編者。）

『藝術と美。――藝術の觀念は美の觀念に屬してゐる。けれども此の最後の觀念も亦調和の觀念に外ならない。而して調和の觀念は論理の觀念にまで還元されるのである。『美とは、その所を得たものの謂である。』茲からして美の我我に與へる快樂の情は生じる。といふより寧ろ、美は快樂として感ぜられた一の論理である。』（グウルモン、『思想の分解』。）

かく說き進めて來れば、女子が如何に多くの場合、知らず識らずの間に、美の對象となりつつあるかに人は思ひ當るであらう。美は一種の快樂である。冷靜な解剖學の眼を以てすれば、腹部臀部に於いて形のくづれた、脛の短い女體は、男體よりも、その美に於いて劣るとも勝つてはゐない。批評眼を通過し難い女子の美が、それにも拘らず、殆ど異論を容れぬまで、人の觀念の內に美の素を成してゐるのは何故であるか？

『これ性慾的幻影の故である。美の觀念は純粹な觀念ではなく、密に肉體的快樂の觀念に結びつけられてある。スタンダアルが美を定義して『幸福の約束』と言つたのは、此の推理を暗に感じたからである。』（グウルモン、『思想の修養』。）

美の開拓は常に倫理家を脅す。

人は常に幸福を求めて焦慮してゐる。彼は推理をやるに、論理に從はずして、己れの都合に從ふ。虛無の觀念に死の觀念を結びつけることを嫌ふ。人性が天國の觀念を生んだことは歷史に徵して明かである。『道理の果に來るものは常に感情である。』（グウルモン。）

此の沒倫理的思想は、昔サモスの聖者がアテエネに說いた快樂の倫理である。基督敎は地上に絕望の敎へを撒いた。凡べて人の子の仕業を蔑み、自然の快樂を無みして、地を淚の谷と呼び、人を悲哀の底に溺れしめた。夢魘的な天國の幸福を代償として、短かくして唯一な地上の生活を誘惑といふ不安の中に沈め了つた。

生は動きである。力の平等とは生の動きの止まることである。

人は現象世界を檢する時、連關せる因果の環から、その物だけ引き離して調べる。人の科學的認識が狹隘で斷片的に過ぎぬのは此の故である。我我は一握りばかりの認識力をし

か把持せずして、而も世界の大法を規定せんとする欲求を持つてゐる。

豐富にして變幻極まりない彼の態度の一つ一つを味つて後、如何なる一の人格にまで之等の變態が還元され得るかを見ることが最も必要である。

グウルモンの博識に就いて。――彼は知る爲に學んだ者ではなく、考へる爲に學んだものである。他の思想に影響されて、自ら(み)の創作を出す術(すべ)を知つてゐる。

彼は烈しい感性を標榜して出發した。その過激な個人主義はおひおひ和らいで行つたけれども、常に忌憚のない高踏を以て文壇に臨んだ。此の根本的性格に、彼の樣樣な變格は鎔(とか)し込まるべきである。美の感性に於いては象徴主義、道德感情に於いては沒倫理主義、哲學認識に於いては理想主義、彼の言表はすべて個人主義の所產である。

〔矛盾は我我に自由の幻影を與へる。〕（グウルモン、「エピロオグ第二卷」）

彼はあざけりを含んで、矛盾する二つの對象の爭ひに立ち合ふ。彼は或る時は一方に、或る時は他方に味方して、味ひ深い遊戲に身を委ねる。爭鬪が終つていづれの勝敗に歸するとも、その結果に就いては彼は頓著せぬのである。彼はただ運命の幻術の妙を味ふ。斯くばかり欺かれまいとする彼の用意の周到は、彼の智慧を尖銳にしたとしても、無意識界よりその豐富な感動を多く汲み來るべき藝術の發露を妨げた。

彼は人類の如何なる高い方面も、形而下學を以て之を解釋すべき現象と成すのである。

理性は認識の鏡であつて、ただ本能の行爲を映すに過ぎない。理性を以て本能を支配せんとするが如きは本末顚倒の思想である。

生を觀ずる者にとつては、彼の意見は常に反省の點を與へる。それは、彼が冷靜な敢爲を以て、眞摯な無私を以て、結果に頓著なく、その思索をどこまでも推し進めてゆくところにあつて存するのである。

彼は烈しい侮蔑と自負とを持つてゐる。自由ならざる者を侮蔑すると共に、自ら囚はれることはその自負のゆるさざるところである。

眞理。——合理主義に對してはグウルモンはその刺すが如き思想の力と毒とを用ゐて假借しない。このまやかしの哲學は觀念の領域と感情の領域とを混同するところの心狀より起る。

道徳といふ現象は感情面に生じるものであつて、道徳の感覺や道徳の觀念といふものはない。道徳の感情があるのみである。感覺は事實である。思想は結果である。感覺の自由があつて後、思想は樂しい遊戲となる。

感情のみが倫理の見地より調べらるべきである。感情は人間の自由の限界である。感情は人の行動を命令する。

感覺は一切の精神的生活の門である。意識も倫理も人格も皆この上に築かれる。感覺は心象に變じ、心象は觀念に變じ、觀念は情緒に變じる。この情緒が常に人の行動を呼び起して、現實の流れに投ぜしめ、この現實に觸れて官能は更に新たな感覺を汲み來るのである。生理的生活が血液の循環によつて營まれるやうに、精神的生活は感覺より出でて感覺に歸る循環作用によつて營まれるのである。〔斯くて、つぎつぎに、感覺は生命の奔流の中に、智慧を練るに必要な心象を吸み取り又放出する。頭腦の作用を經て色薄れ、空しい抽象的觀念となつた之等の心象は、感情によつて拾はれて、活氣づけられる。かくて後、それ等はよかれ惡しかれ、感覺の最も强大な源泉たる人の擧動に影響し、その方向を定めるのである。〕〔一の觀念は爽かさを失つた感覺、消えぎえの心象に過ぎない。〕

感覺によつて心象を得るにすぐれた作家と觀念によつて情緒を得るにすぐれた作家とがある。

合理主義者等の主張は理性をして人の行動を命令せしめるにある。然らば理性とは何で

あるか？

〔理性とは解剖されて表にされた感性の謂に外ならない。〕（グウルモン、「エピロオグ第三巻」）〔感性は理性そのものを含んでゐる。理性は感性の結晶に過ぎないのである。〕（グウルモン、「文體問題」）

カントの感性は冷たかつた。その理性は氷の如くである。ニイッチェの燃え易い感性は彼の理性を火のやうに熱からしめた。初めに生理がある。次に心理がある。人は先づ生きて後思想を定める。人はしばしば逆まに、我斯く思ふが故に斯く生きるのであると信じる。然しながら、我斯く生きるが故に斯く思ふのであると認めるこそ感情を交へぬ正確な認識ではないか。本能は理性に支配されるものではなくて理性を定めるものである。純粋理性批判なるものは理想と感情との野合的産物である。眞理は斯かる混同より生じた迷信的偶像に外ならない。

〔一の主義は、一の生理が言葉に譯されたるものにあらずして何ぞ？〕（グウルモン、「文體問題」）

凡べて純粋な原則、純粋な理想、純粋な理性は無い。凡べて人にある。凡べての藝術、凡べての哲學、凡べての科學すらも、その持主の映象である。一の畫家が描くところはすべて彼自身の肖像畫である。カントの抽象哲學すらも、彼自らの感性によつて描かれた彼の姿ならずして何ぞ。人は己れの外に出でる者ではない。〔一九一六・初メ〕

（次にグウルモンの引例四種あり。飜譯篇の語錄を見よ。編者。）

☆

透明な空氣の中に光りが靜かに充ちてゐる。林の裾に燃え盡きんとする太陽は今し晴れやかな寂寥の花である。この裸かな現實のひと時、凡べては豐かな浄らかさに浴してゐる。潮泡を嚙んで渾身浪にひたる泳ぎ手のやうに、情熱よ、晦い冒險の巷を歴めぐつて來た情熱よ、御身も緊張した面をといて、この遍照の中に、心行くまでほほ笑むがいい。この朗らかな和光は恐らく御身に魂の清明を敎へるであらう。〔一九一六・一〇・一五〕

★

この動揺を何と言はう！

昨日も今日も、天の河が眞白の模樣を掲げてゐる碧空の下を私は行く。色彩の感覺の未だ生ぜぬ前に、光りはいつも私を醒ます。朝の寢床を嬉嬉としてはねる子供のやうに、この純らかな訪れへ身を投げかける時、私は眩ひする樂園の眺めを抱く。昨日へ續く路の邊に腰を降して、わが行く方を見やれば、遙か彼方に一道の塵埃が立つてゐる。晴れた今日の日には、凡べてあざやかだ。空氣より唇に永遠の味ひの熔け交る、この束の間！

宇宙を旋る星くづは既に一齊に時を打つ。微かに震へてわが耳に落ちて來るその響！

〔一九一六・——〕

★

ANDRÉ SUARÈS. —— シュアレスは歌唱を好む。感覺の匂ひ豐かな韻律の人ではなくとも、彼はその人格と直覺との聲を以て人生の唱ひ手である。その晴れやかな熱意は存在の閣に觸れて高く鳴る。熱情の熱情は彼の理性であり、理性の理性は彼にとつて熱情である。熱情の結果としての理性は凡べて秩序であり、理性の中心としての熱情は凡べて昇騰である。《必然は、それが人の心に觸れるに當つて、悲愴となる。》彼は幸福の願求者ではなくして、悲愴な生活者である。卽ち詩は彼の歴史である。其の著「カエルダルの記錄」數卷は彼をして《時》と爭はしめるに足りる。彼は歌唱を嗜む。彼が樣式を理論にとつたとしても、聽くべきはその歌である。その理性の合唱である。その響(高揚)である。

〔一九一六？〕

★

楠正行。

〔一九一七・二・三〕

FRANCHISE ET SILENCE. ——披瀝と沈默。（感想） 〔一九一七・二・四〕

☆

終日讀史。（十六世紀史。） 〔一九一七・二・五〕

☆

智慧と感性。（感性に紀律あらしめること。） 〔一九一七・二・五〕

☆

Je pensais souvent que je pouvais être vraiment utile à une chose, et que si un homme est vraiment utile à quelque chose, pourquoi ce ne serait pas à Cause Unique !

Il faut que j'écrive à M. Goger mon respect et ma reconnaissance. Qui peut l'aimer plus que moi qui suis apparemment ingrat ! Quel plaisir que de le lui parler avec franchise ! J'espère qu'un jour réalise ce plaisir. 〔一九一七・六・一〇〕

☆

社會の秩序。大義名分。 〔一九一七・六・一五〕

☆

藝術とは人の內部の秩序に資する作用であり、科學とは人の外部の秩序に資する作用である。 〔一九一七・六・二〇〕

★

LE CHARME DU PARFUM,—LETTRE DE WHITE.　〔一九一七・六・二〇〕

（ホワイトはマドゥモアゼル・ブランシュがこと。——編者。）

★

INTELLIGENCE.　〔一九一七・六・二三〕

☆

MONSIEUR GOGER の懐しさ——これが私か人生を虚無から引き離して生き甲斐のある場所だと思ふ原因の一つである。　〔一九一七・六・——〕

朽葉の手紙

朽葉の書翰を年代順に置き並べると、彼の自傳に近いものができる。その詩や散文詩の創作と同じやうに、ここでも彼は自己を語るより外の事をしなかつた。彼は償ひがたい孤獨と不可思議な悲哀とを、調和と節度とに富んだ清純な文體を以て、つつましく、悩ましく、鋭く、さりげなく、樂しげに陳べてゐる。この《披瀝と沈默》(手紙五の四〇及び雜纂)は、斯くの如き誠實と氣品との一致は、受信者に與へた感動を將來の讀者にも傳へるであらう。初め編者は明治四十年より大正六年までの多數の書翰を集めたが、紙數を制限する必要から、編者宛の分の一半を除去して、百八通を採用するにとどめ、採用の分に對しても故なき文中削除を行つた。宛名のうち、マドゥモアゼル・ブランシュとあるは《アリエルのやうに輕く飛ぶ舞ひ手》(微笑に就いての反省)にもと朽葉が與へた假りの名で、編者は彼が稀に本名を用ゐた分に對しても之を以て代へることにした。

I

1907—1908

十九歳から二十歳まで

一

試験は十二日に終つた。あれから試験前二日にね、大變苦しいんでね、とうとう醫者にかかつた。その病名がをかしいんだ。それで、押して試験受けたところはいいけど、第一日の數學を見事やりそこねちやつた。

僕が文學に進む所以を一寸明らかにしておかう。才があるからといふんぢや勿論ないんだ。毎日毎日才がないことを歎いてる。ただ、文學が僕にとつては第一の趣味であること。此のやくざな頭は外につかつたとてつかひばえのないこと。又、此の生活が人生の最高であること、人生の目的たる向上の道に最も適ふこと（僕は思ふ）等である。つまり、どつちい、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、にしてもだめなものなら、好きで且ついい方がいい、といふに過ぎないんだ。他の文學に志す人とは大分場合が違ふんだ。すすむべき人だ、なんかと言はれると恥かしいから一寸。

君は試驗が忙しいだらうと思つてちよつと出すのにたゆたつた。暇があつたらいつ終るか知らせてくれ給へ。

いま夏の綠の中に我さめて生の日に見し靜けさよ來る

明治四十年七月十四日（葉書）

三富白樹

増田篤夫君

二

君の葉書はすてきに嬉しく讀んだ。『ふん、己が面白い事をやつてるな。』こんな考へが始終僕は浮ぶのさ。すてきに面白い。

君は僕の性質がよく解つてるね。嬉しい。これも嬉しい。なんだか恥かしいやうな氣がする。うんと書いて見ろ。一寸注意だが、僕のは少くともほむべき性質ぢやないぜ。もつとも、君だつて、白石君だつて、一向に感心しないが。

文藝講演會に引つぱられてゆく、之も面白い。

白石君は出版協會へ行つて「文庫」を買つて來た。福田夕咲、三富朽葉、皷、野田、武志といふ順序ださうな。勿論之も面白い。

モオパッサンの「狂女」、昨日と今日で飜譯し終つた。文章は君直してくれ。

明日來んか。あした來い、きつと。

明治四十年十二月十九日夜（葉書）

朽葉

増田篤夫君

三

僕は君と面白い交際をしようと思ふ。おたがひに絕對の自由で書き合はう。例へば、君が僕にかういふ事を書いてくれといふ。僕は書かうと書くまいと勝手にして、ちつともそれに拘泥せずに思つたまま通信するんだね。僕はもうかなりこれができる。君はやりにくからうが稽古しろ。熱した時は熱した通り感情を僞らずに書く。書きたいとき書く。返事は從つて成るべくあてにせぬ。

僕はすべての友達、知つてゐる者(家の者はのぞく)からはなれたい。自分の感情を掻き廻され、湧きたたされるのをおそれる。君と僕との通信狀態は至極平和だ。此の樣子で行けば僕と白石君が反きあふ時にも君と僕とは離れぬと思ふ。所謂つかず離れぬところさ。僕に戀ひ慕ふ者があるとする。彼女が一點でも僕に侮辱を加へたなら、弊履を捨つる如く捨ててしまふね。些の未練も殘らぬ。況や他の者(女)をやだ。僕はけふ一人を腦中からのぞく事ができた。

白石君は先日中日記をつけようと思つたさうだ。現在思つてゐる事でも書くと僞つてゐる(やうに思へる)、だから止めたと。誰でもさうだらう。

自由に大膽に步く、之が望みだ。

(九行略)… 今日は文士生活がつくづく淺ましくなつた。僕は國へ歸つて漁師でもしたい。

明治四十一年二月十二日夜(封書)　　冬日

增田冬木君

四

ときには

終日われは現の香
吸へるともなく我とわが夢を嗅ぐなる
室のうち。

ときには壁も天井も
くちばみのごとのたうちておそろしくこそ
迫り來れ。

またとある日は貪りぬ。
君の肌に飽く知らず血脈の甘く

むせぶ聲。

されどもなべてわが胸の
寄るところなく泣かまほし（なにゆゑわれは
病みぬる）と。

朽葉

するどき髪を振り拂ふ
霧は病ひに倦みしごと
夕べの空に紛れ行け。

われは總身の痿ゆるまま
綿の如くに息づきて
朽葉に似たる身を思ふ。

明治四十一年二月十四日夜（葉書）

増田冬木君

三富義臣

五

君は人の心も知らないで、なぜ僕を離れたり、離れたがつたりするんだ。然し此の頃は僕も實際どうしていいのかわけがわからぬ。わづかの肉體上の苦痛などが案外精神上に影響するものだ。

僕は君に十分の信頼を持つ。君と僕との間は君の欲するに任せる。僕はいま殆ど自暴自棄にあるんだが、それが僅かといへば僅かな事からなんだ。けれど僕のデリケエトな性質は一切をはふりだしてしまふやうな事はできぬらしい。

僕は君がすくひたい。世の中は蝶蝶とまれかくもあれつていふ事がある。強ひてでもいいからかう觀じてみるんだね。それでもいくらか紛れる。弱くてもなんでもよからう。我等は目前の苦痛に實に堪へないぢやないか。逃れたい、安全にありたい、――唯一の希望は之ぢやないか。

僕は此の數日來齒が痛い。ずきずき來ないで遲緩に永遠的だ。そして僕はその爲に全時間をあけて苦んでる。何もできぬ。學校では本を見る氣にならぬ。歸つて來れば、齒をほじくり、口を洗ふよりほかできぬ。晩は早く寢る。その上眼がある、心臟がある。すべてがくづれかかつてる。要するにこんなくだらぬ事が自分に大變化を生みつつあるのだ。

明治四十一年五月十五日夜（葉書）

三富義臣

増田篤夫君

六

二日ばかり、君に手紙を書かう書かうと思ひながら（僕はいつでも寢て書くんだ）、ランプをつけたままねいつてしまふ。

それに齒痛だ。君は齒の痛みを知つてるか。こんなもどかしくて癪にさはるものはありやしない。そのくせぎくぎくとはげしく痛み出して來た日にや、すべてを忘れて泣き出したいやうだ。

君は今月の末に歸るのか。讀んだ時何だか解らなかつた。昨日見ると月末に歸るとある。

びつくり！　然し、さうなりや僕にとつては都合がいいやうだ。僕が休みになりさへすりや二人で理想の生活ができるんだらう。獨歩に於ける湯河原のやうな所でね、二人で。醫者だつてそれまでも止めやしないんだらう。何しろ歸る前に一度會はう。

僕は此の頃ひどく厭世の念にとらはれて來た。そして生命に對する不安が起る。一日でも長く生きてゐたいんだ。こんなわからずやがあるもんか。僕の頭が鎭靜になつたとは女を思ふ心が薄らいだ事さ、氣候的に。その他は倍舊の形だ。しかし餘程難有い。

（二十九行略）

明治四十一年五月二十六日夜（封書）

三富義臣

増田篤夫君

七

愛する、――さうだ、僕は去年君に言つた。君と僕は非常に似てゐると、白石と君とよりもずつと似てゐると。僕等は同性質を以て相憐むのだ。性が合つてゐるのだ。

白石はまるつきり性があはぬ。けれど僕は眞に言ふ、白石を思ふと何とも言へぬ。悲し

い。僕はほんとうに泣きたくなる。

ああ、彼は生きて、地の上に立つてゐる、ひとり。

どうだらう、ひとり。彼が生れなかつたならば、どんなに幸福だらう。そして僕等も生れてゐなかつたならばどんなに幸福だらう。

さみしい人のかげ。

三人仲よくなりたいものだ、どんなにそれが僕等に嬉しい事だらう。

わかる、わかる。すべて君の言ふ事は解る。信じながら疑ふのも同じだ。僕等は必ずい意味の方へとらう。僕は例によつて書くのがいやだ。思つたことの十分の一も書けぬ。

ああ鳥でさへ
飛んで行く
飛んで行きたい
歸りたい
生れた國の

パライソウ

こんな事を唄つて、冷たいもののない溫かい中にゐたいものだ。

僕は靜かな休暇を待ちこがれてる。學校がある、宿題がある。試驗の及落が常に頭にわだかまつてる。面倒至極だ。

僕は宮島(宮島は陸から一里程ある)の紅葉谷で十日ばかりくらしたい。鹿が歩いてる。如何にも可愛らしさうだ。君は遠くて駄目だらう。何處か幽邃な、靜かな處へ行かう。來月十三日から休みで、十九日から試驗が始まる、試驗が五六日あつてあとは休みだ。何を書いていいかわけがわからぬ。失敬。

明治四十一年五月二十八日夜 (封書)

三富義臣

増田篤夫君

八

お望みによつて成るべく長く書かう。然し何を書かう、何を書かう。今午後六時だ。も

少したつと飯を食つて方方へ出掛けねばならぬ。それ迄の間だ。

けふは先づ高橋（中學の友）の處へ行つて「湖上の美人」を返し、次に白石に行つて原田と加藤との雜誌を取つて、それから加藤に行き、雜誌を返し（介春は明後日歸國する）、喜久井町に行つて今井に傘を返し、原田に雜誌を返して來る積りだ。大變だ。

昨夜はモオパッサンのショオト・ストオリイズを十册とドオデエを買つて來た。ドオデエは面白い。御風の「その前夜」を讀んだ。全くの戀愛小說だ。文章もうまい。讀むべきものだらう。

然し、君は讀書を禁じられたのか。さうでない事を望む。

君の言ふところは全然わが思ふところだ。僕は全く考へた事はない。唯感じるのみだ。苦しい、苦しい。考へるのも苦しいだらうか。考へる人に聞くと、感じるのは悲哀だ、考へるのは疑惑だ、だから此方（こつち）が餘程苦しいと。

僕は實に嫉妬深い。僕は君が僕の獨占であらん事を望む。僕は君の兄貴ぶらん事を望む。君が僕の隱れ家であらん事を望む。子供が夜母の胸に歸る如く、僕は結局は君に隱れん事を望む。僕は贅澤だ。增長してる。

君に言ふ、わが第一の友は增田篤夫だと。

獨步が死んだ。自分が死をいとはぬ時には人の死もさして心にひびかぬものだ。然し、その逸話を讀んだ時は涙が湧いた。

（十一行略）

僕の頭には意味あるものがちつともない。虛無主義でなくて頭が虛無なのだ。死のダンス、破壞の叫び聲もただ空恐ろしく感じるに過ぎぬ。然しそれが何だ。それが羞しかつたり情なかつたりするのが僕にはちつとも解らぬ。まるで幼兒のやうだ。それが何だ。解らぬのが何だ。然し僕はそれが情ない、あぢきない、遣瀨がない。要するに常人より劣つてるんだらう。然しそれが何だ…

僕は今考へてる餘裕はない。ただ書く、書く、まるで白秋の詩のやうだ。

歸らう、歸らう、國に歸らう、いや、その前に君に歸らう。そして二人で終日無言で寢轉んでるのも大いによからう。成るべく早く行く。然し來月三日に卒業式がある。その前に歸りたいと思ふけれど、どうせ後になるだらう。

實に彼等は、わがつきあふ彼等は僕をいぢめる。否、僕がいぢめられるのだ。彼等は自然な事をやつてる。彼等に何も惡い事はない。

（五行略）

ああ歸らう、歸らう、故國の明るい日の下に、そして懷しい君の胸に。

明治四十一年六月二十八日（封書）

義臣

增田篤夫君（神戶）

九

僕は暫く離れる、誰とも。離れたいと思ふ。『ただひとり、』之は誰でも感じてる事だらう。僕は此の頃誰でも癪にさはつてたまらぬ。すべてが僕に突つかかつて來る。それは誰も僕をいぢめるのではない、皆自分が思ふのだ。或ひは自分が惡いのだ、といふ事は知つてる。然し、知りながらさう思ふのだ。結果はつまり同じさ。で、最上の策として、自ら人を離れて『ひとり』となる。戀人を失つて、その地から逃れるやうなものだ。つまり『ひとり』で心靜かに泣きたいのだ。自分を悲み、人を悲んで、『人生』に靜かな、溫かい同情を注ぐのだ。癪にさはるといふのは己れの弱味を見せまいとするのだ。即ち、もう此の時は友達でもなければ親しい人でもないのだ。だからその人人に溫かい情を寄せうるやうになるまで靜かに『ひとり』でゐるのだ。實に餘裕分別のある言葉だらう。

明治四十一年六月二十九日（葉書）

三富義臣

今井國三君

一〇

君もなかなか横著になつた。僕にうつかり同情を表せぬ。然し僕は實際むらむら派で、同情の返事を貰ふ時分には、反つて向ふに同情してるやうな時が多いのだ。右白狀に及ぶ。

（五日頃から來給へ、その方がよからう。）大いに癪にさはつた。少ししか居てやらぬからさう思へ。遲く行くぞ。大切な兩親が待ちこがれてる途中寄つてやるんだ。さうは遊んでゐられぬ。

然し僕は君に言ひあてられて少ししよげた事がある。

（八行略）

へん、僕は强いぞ。僕の新計畫を言つて聞かさう。

一、自轉車を稽古する事。一、游泳術（水に潛りうる）。一、漕舟術。一、デアボロ。

其の他種種あつた筈だが思ひ出せぬ。皆二ケ月で修得して九月より實施の豫定だ。又、

上京後は今井と劍道の他流仕合をやる約束がある。先生のお面を叩いて見せるから見てをれ。

（二十四行略）

活動寫眞は面白い。外國の女のしやならしやならした態度と寄せてはかへす浪が殊に愉快だ。僕は佛蘭西に行く。コルシカに行くのだ。島一帶の山地、花崗岩ばかりの山（花崗岩は眞紅だと）が日に輝いてぎらぎらしてる。復讐の習慣。（あなたがたはどんなならはしがあるか知りませんが、人間は義務を盡さねばなりませぬ、とコルシカ人は言ふ。）噴泉には少女等が群つてる。（おはやう、メドゥモアゼル）と言ふと、皆愉快げに挨拶を返すのだ。意外な山陰に宿があつて、天井は牡蠣の殼で葺いてある。そして亭主はコルシカ人の崇拜する山賊の話をしてくれるのだ。藝術の都イタリイにも行きたい。

僕はわが親愛なるドゥエアゼル諸君がすきでならないのだ。但し、「オン・ジ・イヴ」の主人公のやうなのはすきでない。

僕の字は小さいから君の四頁ぐらゐは書いたらう。もう止めよう。

三富義臣

明治四十一年七月一日午後三時（封書）

增田篤夫君

二

僕は今夜「幽靈」を讀んだ。今讀み終つた。僕は僞善（彼は意識せぬ）を以て固められた牧師を見た。すべての周圍のギクティムとなつて漸く醒めんとする陸軍大尉の未亡人を見た。虛弱の身體（親の報い）につつみきれぬ不安と恐怖を盛つた青年を見た。古い頭腦は如何ばかり人の子を毒するのだらう。その價値の如何は言はず、斯く病的に吾人に教訓を與へてくれるイブセンに謝さねばならぬ。古き彼等は兎もすれば吾人を指して墮落と呼ぶ。而して、如何ばかり彼等は無良心に無反省に又平氣に醜惡なる事を行つてゐるのであらう。古き世を大尉、牧師と見れば、一生をただ犧牲とされた未亡人は過渡期である。最も哀れを見るは子ではないか。彼は故なくして罪業の結晶となつた。彼は親を呪ふ權利があるの

だ。願はくば、彼卽我ならざる事を祈る。

恐るべしランプの油、
火の前に手をかざし見よ、
紅紅と血汁と油、
火はいづれをも吸ふべけれ、
されど火は吸ひぬ油を。

三富義臣

明治四十一年七月二日夜十二時過（葉書）

今井國三君

三

明晩か明明晩歸る。此頃は每日寢轉んで菓子ばかり食つてゐるものだから、胃が益益わるくなつてしまつた。未だ仕度してない、何も。「病間錄」貰ひに行くかも知れぬ。

僕は東京とわかれるのかと思ふと妙に胸がつまる。死ぬかも知れぬ。が、そんな事はあるまい。

（十行略）

試驗に興味をもち給へ。試驗に呑まれちまつたら駄目だぞ。餘裕をつくれ。悠悠たれ。

モオパッサンなんか何だ。僕なら試驗を解決してやる方が餘程面白い。

There is no A'ps before me と行け。

明治四十一年七月四日午後（葉書）

三富義臣

今井國三君

一三

行かうかゆくまいかと何度も思案した。もう行かぬ。「病間錄」は送れたら送つてくれ。どうでもいいや。死なんか恐れやせぬ。死と生との間の一線を越えるのが空おそろしいのだ。しつかりしろ、やけなんか起す奴があるか。試驗に負けつちまつたのか。

僕は今夜六時半にたつ。明朝は既に神戸にあり矣だ。通信は左の所にくれ。

（一行略）

明治四十一年七月五日午前（葉書）

三富義臣

今井國三君

一四

昨晩は楠社の緣日に行つた。一寸妙なことがあつた。こちらへ來てからまだ何も讀まぬ。神戸はかなりひろい。立派な處だが、僕の性にはどうもあはぬらしい。全體に甘いにほひが充ちあふれてゐる。湊川は此處になくてはならぬものだと思ふ。

介春氏の處を敎へてくれ。

もうけふで三日目の朝だ。かすかな旅の感じが始終胸に波立つてゐる。

明治四十一年七月九日朝（葉書）

神戸にて　義臣

今井國三君

一五

此處に古き人人と古き家家と古き空氣が展開される。此の別鄕にはいつた己の不自由さを思つてくれ。

今朝は實に面白い夢を見た。己は始終夢の中で笑ひこけてゐた。君と二人だ。氣まぐればかりやるのだ。長い。すつかり忘れた。何でも寄席には確かにはいつた。一番しまひには、大きな、博物館位はある家（皆疊敷だ）の二階を二人で逃げ廻つた。ほの暗い（晝間だらうけれど戸がぴつたり閉（し）めてある）室（へや）室（へや）の襖を開閉（あけたて）して、種種の機智をめぐらしてかくれるのだ。

空がはれたら、今度は風が強くて舟は駄目だ。一昨日は磯に行つた。榮螺を五六とつた。未だ寒くて泳げぬ。郵便が一度しか來ぬ。君の一つと、あとは東京からの新聞と本だ。不思議！

（十二行略）

父は三日に一度ぐらゐ住吉神社に行つて泊つて來る。然し要するに平穩無事だ。（父とあるは養父を指す。以下同じ。――編者。）

けふはをばさんと墓參りした。

當地の言葉をすこしおぼえた。肉汁（にくじふ）＝皮肉、ありかり者（もん）＝つむじまがり、むがり言（ごと）＝すね言、ささほうさ＝散散。面倒だからあとにしよう。

三富義臣（壹岐）

増田篤夫君（神戸）

明治四十一年七月十八日（封書）

昨日大きな鮑を十二三持つて來た。四つばかり乾して送つてみるから、一分位の厚さに切つて食つてみろ、未だ柔かい筈だから。水につけて食ふのだ。堅くなつてゐたら薄く切つて水につけて食ふのだけれど、そしたら旨くはないからな。君に壹岐の菓子を送らうとしたけれど、腐るとか何とか面倒臭いから止めた。かすてら食ふなら送らう。昨日はお茶うけの代りに小さな鮑を十ばかり食つた。こんな旨いものはないぜ。

一六

けふは朝から魚釣りに行つた、天幕を張つて。父と小山(家來)と三人だ。初めは暑かつたが、沖に出るに從つて淸風面を吹いてえもいはれぬ心地になつた。晝飯を食ふ、握飯に鮑のおかずだ。父は釣り上げたやつを背切りにして味噌で食ふ。悠悠たるおもむきがあつた。飯後、春島(小島)に舟をつけて、父は、身體不隨になつて死に瀕してる八十歲の老人を訪ふ。小山は大平寺の和尚にやるんだといつて、碁石になるやうな石を拾つてる。僕は泳いで、舟の中で晝寢した。父は醉つて歸つて來た。僕はしきりに釣つた。

六時に歸る。

二三日前だつた。晩方、網を立てに行つた。淸介氏と小山と三人だ。波の面がすでに暗い。長いながい網を投じるのだ。丘の方から鐘がきこえて來る。モオパッサンのものを思つた。斯かる時に何があるとおもふ。泌泌たる悲哀だ、悲哀のたのしみだ、悠久たる悲哀だ。

翌朝四時に起きて網を曳き上げに行つた。をこぜ三尾、あかえ三尾、きこり一尾、貝や蟹が五六かかつてゐた。不漁。

夜海に行かうと思ふ。行きたい。父や母が一人で行くのを許さぬので困る。今に月が出たら、舟で夜あかしすることになつてる。

(十四行略)

螢が飛んで來る。

(十四行略)

砂はない、石だ、否殆ど岩だ。樹はうんとある。

今井の野郎、試驗を受けなかつたらしい。

をばさんの曰く、あげいな菓子は下人(げにん)どもの食べるとですもんな、あなた達の口にははいりませぬ、と。

厭だ、といふ事をいゝゝるはんといふ。背はぬから來たのだらう。

〔何か飲みたい、一寸出かける。〕之實に我が羨えゝんたるところだ。田舍は弱る。

昨日は何處かの花嫁御が通るので馬場まで見に出た。母に連れられて挨拶廻りをしてるのだ。家の者は知合なのであいさつした。己は後から大きな聲で笑つてやつた。

をばさんの曰く、暑う御座らうといふばつて、暑うなかぢやもんな、どうし、花嫁御ぢやせん、氣張つち御座る、と。

をばさんの曰く、脇川（醫者）の妹は器量も好し、氣がきいてる、だから己の嫁に好からう、と。(今、女學校に行つてる。)

母の曰く、義臣さんは未だ二十なのに十七八のを持たしてどうするんだ。義臣さんには十二三のを持たして上げる、と。

誰でもいいから話相手が一人ほしいもんだ。東京の美人連が戀しい。

照る日の下に、かの丘に、

われはえ堪へぬものがある。

海よ、海よ。鷗が奇な鳴聲をして飛んでる、魚の頭でもはふつてやると直ぐ飛んで來る。のぞいて見よ、雲の鱗があざやかに映る。海に出でて濤聲を聞け。

然し泳いでると實に恐ろしいぞ。ぞつとする。下が眞蒼だ。さういふとき、浮いてる藻でも手や足に觸れると夢中で逃げ出す、もがいて。夢中だ。けふがさうだつた。上つてから氣持が惡くて堪らなかつた。

もうよさう。

螢が柱のところに光つてる。綺麗な感じが起る。可憐なものだ。

けふは櫓を押して手のまめを破つた。

『一路がある。青年は迷つてる。彼に道徳を說くに及ばぬ。墮落の恐ろしさも言ふに及ばぬ。亦正道のありがたさも言ふに及ばぬ。ただ、彼の肩をつかまへて正道の方へ押してやればいいのだ』と。新渡戸博士つて奴は隨分馬鹿にしてやがるな。

君の方は涼しいのか。暑いぞ、南國の蒸熱だ。

己が勝山に行きたいと言ふと、をばさんの曰く、勝山は別嬪の居りますばい、攻めかけて來て、おんおんおめく、と。

その時は小山が『できん、できん、旦(だん)さんはお前達は要(い)らつしやらん』といふだらうと。

實際さういふ別嬪はおそろしい。

遊戲はもう樂めなくなつた。己はそんな男ぢやなかつたんだがな。情ない者よ。

少し疑問が生じた。書くのが馬鹿に面倒だ(氣がする)。何だかとりとまらぬ。

考へてみれば友達つて奴が何だかわけがわからぬ。

船は梶、扇は要、馬は足、人は心をつかはざらめや。

蚊のやつが耳の中に飛び込んで騷ぎまはつた。馬鹿なやつだ。

こんな人間を思つてみよ、滑稽滑稽。

(四行略)

己の常用語は『そりやさうだ』だ。

もういよいよ止める。

明治四十一年七月二十三日夜十一時(封書)

增田篤夫君(神戸)　　三富義臣(壹岐)

一七

どうした、大分へこたれてゐるぢやないか。どころぢやない、僕もまゐつてる。君の方は便利だらう、僕の所は菓子一つだつて一里行かねばない。そして實際のただ一人だ。家にもいろんな面白くない事だらけだ。

少し近狀を知らせてくれ。試驗は一體どうしたんだ。君は寢言みたいな事言つて來たぢやないか。おれは仔細あつて落かも知れぬ。然しもうどうしていいか、そんな事考へたくない。

君は、君は…

話したい事はうんとあるけれど、まあよさう、面倒くせえや。

君のおかげで增田に大いに慰めさせてやつた。先生、『己がうんと慰めて貰ふつもりでるたのに』と、不平を鳴らしたけれど、己は知らん顔してた。

（二十三行略）

やはり休みになると何もできないね。

一昨日一枚だけ譯した。なつてゐぬけれど、終りまでやつてみようと思ふ。君はきつと面白からう。思へば東京で君等と雜談してた方が面白かつた。然し、だ。君の艶物語でも聞きたし。白石の奴が寂しがつてやがる。その面を浮べるとをかしくて堪らぬ。

三富義臣（壹岐）

明治四十一年七月二十五日（封書）

今井國三君（鹿兒島川内）

一八

記せよ、女位癪にさはる奴はねえぢやねえか。而して、夫婦だ。實に癪の種ぢやねえか。然し、まあ時節柄こんな暑苦しい事は止めにしよう。

（四行略）

君はいいなあ、僕等には景色より何より便利のいい所が一番いいんだ。君はあつさりと兩方兼ねてるからのう。いいよ。

二三日前、實に懷しい夢を見たぞ。續きを見ようと思つてあせつてる。己あ夢を見ようと思つて朝九時までも寢てるのだ。（暑苦しいふとんの中に。）

（十二行略）

ああ寫眞を見るときだ。幼き、少き時を思ふときだ。とき、とき、とき…だ。《世の中の奴め、殘酷な奴等め!!!》とわめきたい。

己は八月下旬に歸る。丈夫にはちつともならぬ。くろくすらもならぬ。

君は怒るのか、或ひはすねて見るのか、或ひは面倒なのか。兎も角も通信は絶えずよこせ。

これから唐もろこしがうまいぜ、あの甘いにほひが、癩病のにほひがだ。成熟せぬほどいい。

わが生れた家は活版屋になつてる。三年前塀の隙から窺いて見たときは池もあつた、築山も確かあつたと思ふ。井戸は知らぬ… 今はどうなつてるやら。

（四十五行略）

明治四十一年七月三十日（封書）

增田篤夫君（神戸）

義　臣（壹岐）

一九

狹い峽の水に、自分は櫓を押し、おふじ（といふ氣がする）は竿をつかつて進んで行つた。下には洋洋とした碧水が流れてる。自分は、おふじが何故、こんな、先へ行つたら道の塞つてしまひさうな方へ行くのかと怪んだ。

何でも故鄕のやうな地に行く爲だ。舟に乘るとき、自分はおふじに、お前の妹（名前は忘れた）は死んだよと言つて、自分も銃丸に頰を打ち拔かれて絶息したと胴中を指して語つた。おふじは悲しさを押しかくして平氣な風をした。見送りに來た數人の人人も《ああ》と言つてざわめいた。

自分も深く深く愛してゐた彼女の事を思ふと、えもいへぬ哀しさに斷腸の思ひがした。

進んで行くと、果して水が盡きて、前を高い丘が障つてゐる。自分は驚いて何か言はう

としたが、おふじは平氣でのぼりかけるので、自分も従つた。砂が多い。石は燒けて、ほろほろしてゐる。上では線路か何かの工事をやつてゐた。おふじは働いてゐる人人を知つてる風で、氣の毒げに、『一寸あの舟を通してくれんで?』と願ふと、直ぐ承知した。自分は前を見ると、細長い丘に添うて蒼い水が湛へてゐるので、成程と思ひながら、舟をその方へ滑らせようと、おふじと共にねらひをつけた。工夫は自分等に同情を寄せて、指圖してくれる。遂に舟をつき落すと、うまく大きな船の傍にほかんと浮いた。

『ああ丁度いいところだ』と、皆も聲を合せた。

皆に心からの感謝の意を寄せて、おふじが先に下りる。私も下りた。小石が多くて下りいい。

『その瓶にひつくればいい』と上から父が呼んだ。足下に自分の菓子瓶が落ちてる。何だかわからないけれど瓶を拾つて下りた。

舟には水が一杯はいつてる。

私はおふじが懷しくつてたまらぬ氣がした。(七月二十七日夜)

懷しい夢とは之だ。勿論もつと遙かに夢幻的なものであつた。是非續きを見たいものだ。

(十二行略)

君の手紙によつて感興が湧いた。故に又書く。も一つの手紙は昨夜書いたのだ。けふは出しそこなつた。もう明日でなけりやとりに來ぬ。

自分は日記をくりかへして見るとき思ふ、自分も哀れな男だと、つくづく。

僕は先日海に醉つた。暑い日だつた。十一時半頃から行つて、一時間ばかりに父と二人で四十尾近く釣つた。晝飯を食つちまふと風が吹く、吹く。浪が舟に飛びついて來る。それでも釣つた。たまらなくなつたので歸つた。歸來何だか妙だ、胸が、今も。暑さ中りに違ひない、然しこんな事はどうでもいいんだ。記せよ、僕は梨を食つた。記せよ、梨を!だ。僕はしばしば經驗があるのだが、氣がつかなかつた。船中にて梨を食ふなかれ、醉ふよ。勿論凪には大丈夫だ。思へ、醉つた人の汚物のにほひを。梨のにほひとまるで同じだ。

目的を以て國に歸つたのさ。それらの目的が自分もはづせば、向ふからもはづれて、わやだ。

親切ぶるから癪さ、ほんとに。義務の親切だ。その上に、僕のはいやなものがある。君は人の中にゐるんだから未だよからう。

洋紙はない。そして、それに書きたくてたまらぬ。手紙よこすとき、一二枚白紙を入れてくれ。それで澤山だ。

「病床錄」は駄目だらう。見る氣は十分にある。

モオパッサンはいつでも送る。己も三四篇以上を讀んだ。その二册は東京へ行つてから貰ふことにしよう。

英語のせんべいを食ひたいものだ。

寫眞を送らう。こちらに來てから、己の覺えぬ自分の寫眞を發見した。それにつけても、

今の我を思ふと言ふにいはれぬ悲哀がある。

唐もろこしはある。けふももう二本食べた。神戸にはうんとあろ。

（十二行略）

明治四十一年七月三十一日（封書）

増田篤夫君（神戸）　　　　義臣（壹岐）

二〇

（四十五行略）

おれは遊ばぬ。遊ぶなんて、そんな呑氣な、人間並な事はやつてゐられぬ。ぢや、何をする。曰く、蠢いてる。《蠢》とは面白い字だ。自轉車なんかいやなことだ。

おれは寂しくない、蠢いてるのだ。

増田の奴は怒つてるぞ、君が――《益田》――こんな字を書くから。

水蜜桃でも手紙でも、どしどし送つてくれ。旨くあり面白くありや反響をするよ、反響

を。

唐もろこしを食へ、旨いぞ。己はあの癩病のやうな甘いにほひが大好きだ。己は君より身體が弱いぞ。だから從つて精力がないぢやないか。いいか、だから己より長い手紙を書かねばならぬのは知れた事だ。

悲觀せぬ奴は二十世紀の人間ぢやないのさ。

けさ門口で、をばさんが《お時さん、何とかかんとか》と話しかけた。己は未だ寢てた。七時頃だ。

おときさんが來たら、いきなり抱きついて、膝の上にのせて、キスしてやらうと思つた。顏洗ふときにやもう忘れた。

昨日はドオデエのお管さんが己に赤飯と菓子を持つて來てくれた。蔭で聞いてると、まるで娘のやうな聲でよく笑ふ。

おれはあれを思ひ出すよ、ほら、やきもち坂の所であつた娘！　眼のきれた涼しさ、紅い唇、然し、ありや嫌ひだ。

増田が言つた、《君は寂しくはないだらうと思ふ。僕等はもう取り分けて寂しいなんて思

はぬやうになつたんだ。つまり、寂しみが僕等の全部になつてしまつたからだ》と。己はさういふ事が一向解らぬが、格別寂しくないのは實際だ。奴だつていい加減な事言つてるんだらう。

水蜜桃は腐つちまふだらう。君の二十八日に出した手紙がけふ（三日）來てる。まさか君の所は東京より遠いんぢやあるまいと思ふが…

ああくたびれた。もう止める。

君はいつ上京する。

明治四十一年八月三日（封書）

今井國三君（鹿児島川内）　　　　義臣（壹岐）

二

女はうるさきものなり。（舊式の女と見たら逃げよ。）勿論開けた人は例外だ。

女の辯口最も爽かなるは人の讒訴を言ふ時なり。多くは同じ女性の惡口なり。

女が人（卽ち女）の惡口を喋喋として辯ずる時は斯く言へ、《私にはいい人も惡い人も解

りません、解るのはただどつちも人間な事です、云云》と。勿論御機嫌は損じやう。
或る國は舊式の女に充ちてる。我が村はそれだ。

椿の木陰にハンモックを釣つて "THE FATHER" をよむ。なかなか面白かつた。"FLY" も讀んだ。少しは抜かした。解らぬ所も大分あつた。いいものぢやない。佛の作物はかるい。いはば、洒落のやうになりたがる。佛國の人達がさういふ風にできてはゐるんだけど、それは違ふ。やはり、幾らか趣味にとらはれてゐるんだ。(作者がだよ。)
モオパッサンの「乞食」を讀んだ。一寸よい作だ。梗概をいつか書かう。
「血笑記」を讀んでも、やはり二葉亭は蟲の好かぬ奴だ。

明晩は舟で遠くイサキ釣りに行く筈だ。眠くなつたら舟で寢る。

來年の夏は房州に一緒に行かぬか。金は一ヶ月十圓もいらぬ。すてきに涼しい家を知つてる。その家を一軒借りるのだ。(ただ心配なのは、丁度その時あいてゐるかゐないかだ。)

夜なんか磯に立つと、清白の思ひがする。あんな所は見た事がない。周りはすべて石の山だ。町に行くにはトンネルの中を通る。(汽車のぢやない。)避暑客は一人か二人だ。宿屋なんか無い。砂地は始終濁つてゐて、汚ないものだ。海の中には浮島がある。
よく漁師が荒い聲で舷を叩きながら鯨を引つ張つて來る。己は漁師を知つてる。すてきに面白いもんだ。夜は岸に立つてゴンズイ釣をやる。(然し、己は好まぬ。)
その家は人氣なき山の中も同じだ。見るは青山白雲のみ。
此處は南國だ。夏蜜柑、桃はもうない。水蜜桃ももうないらしい。梨は家の庭に三本あるから毎日登つて食ふ。もう甘いものだ。唐もろこしももう熟しきつてるので、燒かずに蒸して食ふ。
あんまりくだらな過ぎたな。そこで名言でも吐きたいのだが…

おれは少いときから親密な友達のない事はなかつた。知つてる限り擧げれば、葉茶屋の角しやん(壹岐)。淺草、日本橋、京橋は、皆短かつたので格別の友も無かつたやうだ。飯田町では信ちやん、中澤ヒロ夫。(小供を愛したのは此のこたけだ。和太郎、彼は實に忘られぬ。)神田へ行つてから高橋、未だあつたやうだ。(要するに此の時はさう深くない。)それから二度目の飯田町で君だ。(二度目の壹岐で、直、兵等がある。)——今は三度目の壹岐だ。初めの飯田町にゐた時はよくゴボウにねらはれた。(九つから十五位までゐた。)僕にお稚子になれと申し出た奴等は樋口、酒井、(之は確か華族だ。すてきに庭が廣かつた。よく庭で鬼ごつこなんかしたが、己が始終つけまはされてたのだ。)宇都木、加藤、(之は己が怒つたので申し出でそこなやがつた。)それから、何とかいふのとは大變うはさを立てられたけれど、彼は申し出でだにせなかつた。勿論氣はあつたらう。

樋口は己の顔さへ見りや、首へ手を捲きつけて、喋喋喃喃した。彼はお稚兒になつてくれ、くれ、といふ。己もそいつは嫌ひぢやなかつたから承知した。次にはいやしい事を申し出でやがつた。毎日毎日首に捲きついて口説くのだ。根氣よくはねつけたので、とうとう手をひいた。(しまひには威し文句もあつた。)

酒井は亂暴だ。或る晩いきなり深尾(といふ奴)を以て、第四中學の庭まで來てくれと。(深尾はいろいろ賴んだ。)勿論行かなかつた。

宇都木は己も非常に恐れた。都下有名なゴロ書生だ。(己はきらひぢやなかつた。)

或る晩、(小雨が降つてた。)佐佐部が面白いものを見せるから來いといふ。己は何氣なく相相傘で出かけた。横町の眞暗な所へ行くと大きな奴が大勢立つてた。刹那、逃げようとしたが、もう駄目だ。(つかまつた。)とり捲かれたのだ。佐佐部が宇都木のチゴな事は聞いてはゐたんだが。宇都木は猫なで聲で諄諄と口說いた。勿論頭は縱に振らぬ。己は泣いた。(泣きたくもあつたんだけど、實は嘘泣きだ。)奴は妙な威し文句を言ひ出した。どんなに怖ろしかつたらう、どんなに! 少年の心はこんなにして傷けられるのだ。(十二位だつたらう。)己はわづかに、『なる』と言つた。(少年は怖ろしさから逃れたい爲にもう夢中で言ふのだ。)皆の眞中に挾まれて彼の家まで行つた。(二階を借りてるんだ。)遠かつた。机の前に坐らされて、宇都木が手本を書くと、此の通りの證文を書けといふ。書いた。彼はしきりに字がうまいと讃める。血判をするのに針で指を突いて血を出すんだが、彼は美しい指が痛さうだと言つて躊躇する。己は『痛くない』と言つた。しまひにちよんぼり突い

て、わづかに滲んだのを紙に押した。（彼は立派に血を出して押した。）例の鷄姦を持ち出す。己は、今夜はいやだと言つたら、素直にきいてくれた。

歸りは佐佐部と二人だ。ああ、佐佐部、佐佐部！　一言も口きかなんだ。（彼は何か言ひかけた。）未だよく覺えてる。雨のあがつた廣い路に砂利が山にしてあつた。眞白に光つてた。（明月があつたんだらうけど、夢中だつた。）

翌日から夜は決して出なかつた。それぎり宇都木には逢はぬ。

加藤は幻燈會に事寄せて、『一寸奥まで來い』と言つたが、偶然な事で免れた。

樋口もよく歌留多をやつたあとで、闇中の鬼ごつこだといつて燈を消しやがつた。も一人、草履屋の玄公（息子だ）は、己がいやだといふのに菓子屋へ連れて行つては買つてくれた。己は別の事から怒りつけたので、物別れとなつた。

女とも噂を立てられた。前の質屋の娘だ。己よりずつと大きい。しかも大嫌ひな奴だ。そいつが己の事を何とか言つたんだらう。皆が己の顏さへ見りやはやし立てた。癪にさはつて…　その娘をうんとひどい目に合せたかつた。

友達に就いては言ひたい事がうんとある。

中澤ヒロ夫なんか戀人のやうだつた。顏を見ると可愛過ぎて、いぢめたくてたまらず、よくひどい目に合した、年は同じだつたけれど。おれは強かつた。

もうくたびれたから又書かう。面白くなけりや止める。

思ふと飛んで行つて飛びつきたいやうなのもあるけれど、もう彼等は駄目だ、駄目だ。

忘れられぬは和太郎だ。――おれの小さい時の寫眞を送らう。――和太郎は之によく似てた。

中學時代はまるで悲痛、困苦と無益な憤激とだつた。誰かおれの佛語の智識を羨むものぞ！　それ位で此の傷心が代へられるか。

僅か我が黨は五六人、BLUE CLUB と呼ばれた、でなければ『おゝ！』。我黨の五六人！高橋はただおとなしい。樋田はただぐうたら。ほかは皆、彼等（學校全體）に調子を合さ

うとする。又俗物同士なので合つた。己一人我が黨の陣頭に立つて憤激する。しかも我が黨は敵の奴隷のやうなもんさ。己一人さんざんにやられた。家に歸つて靜かに思ふとき、寳に泣いたね、涙を流して。

劍術をすすんで習つたのを何の爲だと思ふ。その時から見りや悲壯?な考へがあつたのだ。(こんな事、せんも書いたね。つい出るんだ。)

(八行略)

明治四十一年八月五日夜(封書)

増田篤夫君

義臣(壹岐)

二二

先日は餘り下らない手紙を書き過ぎた。僕は東京に歸つて、僕等が互に出會し、遊び歩くさまを思ふ。なかなか樂しさうだ。僕は每晩方自轉車を習つてる。東京へ行つて乘るのだ。君はさうぐうたらになり出したら面倒だらうが、何か面白い活動をやつちやどうだ。但し、活動は直ちに我我にとつては苦痛を意味する。それを見るのが面白いのだ。今井から來た葉書の四端を圓く鋏で切る。之は彼の象徵だ。僕は全く超越してる。空虛なる心を以て別世界に沒頭してる、勿論僕の事だから微妙にだ。

あゝ、誰か知る、我等が心を!だ。極めて情ない驕りを以て斯く思ふ。

君は眠りの生活を續けた方が身體がよくなりさうだ。心臟病者だつたね、いけないのは、晝寢なんかが。

(八行略)

明治四十一年八月八日(葉書)

増田篤夫君(神戸)

三富義臣(壹岐)

二三

増田君足下。

昨朝、モオパッサンの「乞食」一篇譯了した。十一日に稿を起して玆に三日。といふと大分大げさだが、十一頁のものだ。書き直すも面倒だ。歸つてから帳面を見せよう。

(十四日)

The heaven is upward the roof
　So blue, so calm!
A tree, upward the roof,
　Swing his palm.

（十四日）

突氣にもあらず、性格にもあらず、印象派の所謂心もちにもあらず、余は、數人の間にみなぎる情緒を描かんと欲す。これ、モオパッサンに最もよく見るところ、されど我はわが意見をいふなり。

何だか、今迄日露戰史を見てゐたので妙な書き方になつた。

閉塞隊のとこなんか讀むと、からだが痺れる氣がするね。

「青年文」と菓子ありがたう。菓子はもう要らぬ。

君は未だ其處にゐるのか。成るべくゐた方がいいよ。僕は未だ今月中位ゐるつもりだ。

（四行略）

東京へ歸つたら、毎土曜、品評會をやらうぢやないか。寫眞、菓子、其の他文藝の事、何でもいい。

然し君、ちつとはからだを大切にしてくれ。可なりの分別はあるんだらう。

今晩は哀感の湧く日だなあ。

晩方丘に登つて見た。ああ丘の草と石。石に蹲つて考へた… 考へ込んだ。考へるといつて、何も頭にのぼつて來るんぢやない。ただ海や野や畑に眼を凝して眺め入つた。我を忘れてる。ただ哀感。かういふ時に最も哀感のたのしさを味ふのだ。悠久たる趣がある。明日から一日彼方に行つてゐようと思ふ。

永く此處にゐたいと思ふ。

何も書けぬ。ただ君を思つてる。

明治四十一年八月十五日夜（封書）

篤夫君（神戸）

義臣（壹岐）

二四

わが胎内を運る惡血あり。常に沸き立ちてしばしば狂せんと欲す。此の血狂ふときは、親友をも、又自己をも棄てて省ざらんとす。汝之を知れりや。（某日）

（八行略）

一作を出さずして遂に終るかも知れぬ、は至極同感である。けど、君も痛切にこんな事考へてやしないんだらう。

ああ、すべて何かあらん。

（二行略）

君はまだ歸らぬのか？

ああ、すべて何かあらん。

泣きつつ笑へる者よ、我と我が苦痛を樂める者よ、汝の名は我なり。それとても何かあらん。

我はわが一個のわれを思ふ。汝一個よ！　ああ汝一個よ!!!

同病は相憐れむ。

一個汝の頭腦よ、燒かれたる蜂の巢よ、混線せる電話機よ、飯の入れる無き飯盒よ、斷たれたる綿よ、卵の如き顏よ！

今度の博多行は來月四日だ。おそらくはそれで歸らん。

白石曰く、『こんなにして別れてしまふのかしらん』と。

國三君も案外張合の無さ過ぎる奴だ。

自分は書くのは厭だと極めた。卒業してから何を以て食はうかと心配してる。食へぬのはよし。親に『意氣地なし』の一言を浴せられるのが如何にも苦しき事に思ふ。血！血！狂せんとする血！

（一行略）

叔母の前にて泣く。泣くは眞面目なり。そこに刹那の眞面目の一閃あり、そのあとが氣紛れなるに非ずや。

（一行略）

炎炎たる竈の前に坐る。正に黄昏なり。柱に凭れ、手拭もて顔を掩ふ。おさみ婆のいきなり手拭を擧けしとき、我が眼中に涙充ちたり。

餡をべたべたつけて米と黍の團子五六を食ふ。氣持の惡き事限りなし。

昨日夕暮れ、三日前に來れる東京の父歸る。一里の海上を富方の父と共に送る。玉崎の岬角より身を躍らして、わが游泳の技を見す。舟中二人の父は頻笑めり。礒よりは東京の母、當地の母、をばさん、おかの、隣りの老婆、靜枝等見物す。

（東京の父、東京の母とあるは、實父母のことなり。――編者。）

渡良を出でてより驟雨に逢ふ。黑雲浪にうつつて、數陣の風來る。我は裸體の儘、舟尾に蹲つて魚籠をかぶる。皆笑ふ。

歸路すでに暗し。小雨。二三舟の軋轢を聞く。沖に漁火の列を見る。小崎、渡良に一點の火を見る。

（四行略）

明治四十一年八月二十六日（封書）

篤夫君（神戸）　　　義臣（壹岐）

二五

昨日(三十日)、早朝より住吉に詣づ。歸れば黄昏なり。直ちにドオデエ家のお振舞に赴く。午後八時歸宅。

一昨日、――終日海に浮ぶ。鄕の浦にて游泳の競爭を見る。一等賞(大豆一俵)、沖の島の徳太郎が手に歸す。

我は此の地に不足なし。

(五行略)

我は白石の人格を認む。兎も角も氣骨の折れる人だね、彼我ともさ。

百川いづれに流るるとも遂に大海に入るが如くに、いつでも知らず識らず或る問題を考へる――意識して考へてみりや實に下らないんだけれど。――ここらが人格の劣等なるからだらう。

すべてに感服せぬ人がすべてに感服する。

何れにも無能なる人も何かに役立ちさうぢやないか。

我は兎も角東京へ行つたら自轉車を買はうと思ふ。

隱れたる我我が澤山あると思ふ。我も田舍でゆつくり冒險譚でも讀んで一生を了へようかと思ふ。

どうかパンの問題を上手に解決したいものだ。

冒險譚なんか年とりやいやになるだらう。その時あ、家庭料理、果樹栽培法、こんなぢみなもんでいい。

(五行略)

眞劍にラヴをやつたら、すべてが癪にさはるかも知れぬ。己は案外甘つたらしい眞似ができぬらしい。

二日に立つ積りだつたが、風の工合が惡いから、六日か八日の汽船で立つ。

毎晩蠟燭を用ゐてる、我はらふそくを好む。

己ら胃がすこし惡い。例によつて終日口をもぐもぐさせてる。ガスが腹にたまつて叩くとぽんぽんいふ。餘り苦しいときは運動をやつて忘れるのだ。

トゥルゲネフを思ふ。

古き文倶樂(文藝倶樂部)を見て御覧、きつと面白い。僕は未だ印象を留めてる短篇がある。

(十九行略)

明治四十一年八月三十一日夜(封書)

鷲夫君(神戸)　　義臣(壹岐)

二六

吾人をしてちと同情無き批評をやらしめよ。

君は浮足だつてる。いらいらしてるのだ。しつとりしたところはない。君は人生觀と言つたやうなものと何の關係なしに苦しんでるだらう。それだけの餘裕がないのだ？　そして、さう堪らないのは心臓病が大部分の原因をなしてるのに違ひなし。だから、君はすべてをこらへて・心臓の養生をなさねばならぬ。君は心臓についての書を十分に讀み給へ。心得よ、心臓病者はぢきに倦怠の念を起す。(どうせ癒らぬ)と君は思ふだらう、どうせ癒らぬでも、そりや仕方がない。然しだ、今君の思想がどれだけ發達してるだらう。癒らぬでも仕方がないなら、人生をよく味ひ得るまで養生してくれ。

君は微妙なる音を聞いて、一時でも遊魂の夢を見ることができるだらう。大いにいいの

だ。

僕はゴオリキイをニュウ・ロマンティックの範圍に入れたい。

青年會館は、兎も角も行かうぢやないか。君は僕のところまで來るのが面倒なら、二階(三等)の入つた右の端で、丁度舞臺を直下に見下す所へ行き給へ。大概僕の方が先へ行つてるだらう。今井か白石を連れて行くから。「乞食」(ゴオリキイ作)は白石が持つてつたから、彼から送る。

明治四十一年九月二十八日(葉書)

増田篤夫君　　三富義臣

二七

君よ、破れたる心に何をかもとめんとする。我は君を戀す。君は、わが常に君を恐れつつあることを信ぜざるべからず。

されど、今われ『かの女』を思ふの念に如何ばかり惱まされつつあるかを、願はくば記せよ。

われはいま、わが餘裕を作らんと焦慮(あせ)りつつあるなり。

『かの』女、何たる一小事ぞや。

かれ我にありとも、わがやる瀬なき根本の悲歎を如何にし得べき。

されど、されど…

文にすれば優なるかな、汝の血は湧きつつあるものを。

泣きたいか、ふん、泣きたいか、畜生。

更に落ち著いてより又書かん。之より外出す。(午後八時)

十時一寸前に歸宅した。キップリングの"PLAIN GALES FROM THE HILLS"を買つて來た。歸途、曉星時代のクラス・メエト四人と出會ふ。暗闘的な文句を交して來た。思へば心細くなる。彼等が常に多勢なのが嫉ましい。

明日大概行くつもりだ、午後三時過ぎだ。君、僕を解してくれ。僕は決して惡い人間ぢやないよ。

友！

お早く願ひますよ、ちんちん。電車の車掌に一つも好きなのは無し。
苦しいね、お互ひに。何とも他の文句が出やしない。故郷へ、靈の故郷へ。
もう寢よう、坊やの泣寢入りだ。

明治四十一年十一月十九日夜（封書）

篤夫君　　義臣

II

1909—1910

二十一歳から二十二歳まで

一

（十六行略）

萬世橋側の或る店へはいる。その二階。御馳走をはこんで來る女がある。その態度の何ぞ力なき。嬌態を作ることがうまい。しかも、寂しき、疲れたる、若き女だ。こんな女に僕は同情せずにはゐられぬ。

（九行略）

君は詩を讀み給へ、外國のものさ。ヹルレエヌもいいけれど、僕は君に現代の佛詩人の作を讀ませたい。僕は「今代フランス詩人の名作集」（一八六六―一九〇六）といふのを持つてる。君に讀ませたくてたまらないんだ。英語であつたら見ておかう。

（八行略）

けふ、「ものおもひ」といふのを書いた。柔かい、おとなしい、自分一人でしてる戀を書いてみた。

面白いことはないかな。心が索然としてる。

昨晩、大雨の中を錦輝館へ行つた、伯父と。少し離れて横手に庇髪の感じのいい女がゐる。伯父が《あの女はいいね》と言つたので、ふつと彼女を見ようとすると、連のハイカラ鬚男と顔を合した。伯父はそのとき南京豆賣を呼んだ。《南京豆買はうか》と言つたのかも知れぬ。その後僕は女の方を見なかつた。

カナリヤを飼つてる。一生涯、あんな小さな箱の中へ入れて置くのかと思ふといやになつてしまふ。恐ろしいぢやないか。

（六行略）

これだけの手紙を書くのに僕は三日もかかつてるのだ。手紙をくれ。君のを讀む時が一

番たのしい。

明治四十二年四月四日夕（封書）

篤夫君（神戸）

義臣

二

わが懐しき增田君よ。

彼等我を悧口なりとし、或ひは我を恐れて（技倆に於いて）嫌ふならば、滑稽の極みなるかな。彼等我を氣のきかぬとして嫌ふならば、悲慘なるかな。けれど、それは同じ事だ。彼等は彼等、己は己だ。己には行くところがないのみだ。彼等のことは己は知りえぬ。勿論知らなくてもいい。

己は氣がきかぬ。おつちよこちよいだ。卑劣男だ。成程、こんなことは反省でも何でもない。だから己は詩人だ。

愛。

僕は技巧を放縦にぐるぐるとまはして見る。これは天性ぢやない。第二性だ。

眠い。頭が少しふらつく。彼等の顔と君の顔と… 君の顔何ぞなつかしきかな。

言葉頭にあり。筆の先へ出で來らず。睡い。後は明日だ。ビイルを少し飲んでる。失敬。

僕には老人の心は解らぬ。例へばさ、二十八の人の心をわからぬぢやないか。

君、君、君… 君、君、君…

僕の脈が上りかけた。僕は間抜けであれど、できるだけ悧口に振舞ひたい。僕は消極的

に潔い勇氣を振ひ起さねばならぬ、例へばさ、厄介視されるやうになつちやおしまひぢやないか。

彼等と彼等——僕はちつとも侵入される必要はない。こんな主觀は己のくせだ。困る。困つたつて止まぬ。

君は例のにぶちあけたらどうだい。それほど戀しいと極つてもゐないのか、又は意味が違ふのか。烈しい要求がないのか。なんとなくそれどころぢやなくて、もつと危急存亡なものを見てるのか。

他人を容れぬ心＝他人に容れられぬ心。結果は何だらう 零ぢやない。零以上の馬鹿げたものが殘る。而も人生の一大事だから滑稽さ。

滑稽さ、あの禿頭は夢みてる。

死んぢやへば何も殘らぬ。殘つてもだんだん減つて行く。消極の端に立つものだ。

（三行略）

沈默に如くはない、沈默より仕方はない。

明治四十二年四月十九日（封書）

篤夫君（神戸）　　義臣

三

今朝やつと、試驗がすんだ。すべて平凡にやつてのけた。僕は自信といふものが出ぬけれど、又おのづからあがつてゆくことだらう。

今日、來年の特殊研究の掲示が出る。佛國近代小説研究、歐洲最近文學研究といふのが一番面白さうだ。イブセン、トゥルゲネフなんかあるけれど、つまらないね。

雜誌といふもの見るのがいやになつた。未だ何も見てゐぬが見たくもない。

九月まで休みだ。

君の動靜がさつぱりわからぬ。何だか、圓い小さな丘の上の、坐つて肘がつける窓のある室にゐるやうな氣がする。或ひはそんなにのんきぢやないのか。

僕は君が戀しい、話相手も一人も無いぢやないか。僕も大分練れて來たと思ふ。

（七行略）

日が照つてゐる。風が吹く。僕は寢ころんでゐる。思へば、思へば、だ。僕の戀しい人は何處にもゐぬ。

之はやめよう。柱に暦がかかつてゐる。十二日までしかとつてない。十二日は土曜日だ。三枚を剝ぐ。その上に試驗時間表と精神一到…と書いた紙が貼つてある。之は駄足だ。

先日、カナリヤの子をとり逃した。生れたばかりのだ。雨風の日で、庭の楓に宿つてゐた。とうとう何處かへ行つてしまつた。

彼はどうしたらう。

美しい英領印度の女が白人にあざむかれた。彼女は蛭の下から氣絶してた男を救つて來たのだから、彼をば當然自分のものだと思つてゐた。
事志と異ふ。遠い國のことであるのも悲しからずや。

もう三時だ。失敬。

明治四十二年六月十五日（封書）

増田篤夫君（神戸）

義臣

書くことがない、何か少し譯さう。

（アンリ・ドゥ・レニエ、LE MAUVAIS SOIR. ――第1部に編入す。編者。）

四

わが親愛なる今井國三よ。

しばらく會はんので顔が見たくてならぬ。然るに君は僕を敝履を棄て去つたがごとくに思つてるだらう。實に怪しからんぢやないか。君が曾遊の地、湯河原に來てる。詰らねえ所だ。君と一緒なら面白くてたまらんのだけれどなあ。（一言斷るが、我輩の書き方を直ちに卑しむ勿れ。我は戯れの中に最も多く血の涙を有す。之を判讀せよ。）

僕は常に獨りだ。同情し給へ。悲しいではありませんか。

「自然と印象」の君と介春の詩は、我等少年連では君の方をすぐれたりとする。同志――武志、篤夫、義臣。

君は所謂カタクナのモノでしやうがないぜ。（反感を起す勿れ。）僕のウハキモノなることは僕之を反省する。君も反省せよ。

（四十二行略）

先日丸善で、ブウルジェエ、プレヴオ、マルグリットを買つて來た。三才社にももうブウルジェエが來てる筈。上京後は大いに通を振りまはさん。

明治四十二年八月八日朝（封書）

今井國三君（川内）

親愛なる義臣（湯河原）

五

今井君。

手紙拜見。面白く讀んだ。長かつたのが嬉しい。盛んなるかな君や。立派な、しつかりした男になつて來給へ。

僕は一篇の小說を書いて君に送りたく思ふけれど、わが精根なきを惜むのみ。よい詩を作り給へ。僕も今月中に作りたい。

僕は家に苦い顏をしたり、突飛な滑稽を演じたりしてる。君がゐないので行くところがない。

昨日白石を訪うた。彼も隨分にがい顏をしてる。脚も大變よくなつた。彼は秋江が嫌ひになつたと言ふ。そして、僕の髮の分け方のきざなところが秋江によく似てると言ふ。大いに閉口しながら・長尻をして退却す。

（八行略）

シガア買ひは少し振つたね。然し、此のお兄さんを措いてそんなことをするとはすこ

し怪しからん。

（三行略）

臺所に「貸家にあらず」と札打つた家があつた。さてもうるさき世の中かな。かういふ注意こそ國家社會の爲になるのだよ。之以上のことしようとするから反つて碌なことはしでかさん。

モオパッサンの「旅にて」を譯したい。彼には、汽車にて、海にて、なんていふのが多い。僕もにていを一つ書いてやらう。

君の小供衆の爲に健康を祝して、左樣ならとしよう。學校は確か十一日頃に始まる。健在なれ、今井君。

明治四十二年八月二十七日（封書）　　義　臣

國三君（川內）

六

大分無沙汰をした。景氣はどうだね、神戶の。

此の頃は僕感ずる事が多い。友に訪問されるのは實に苦痛だね、外へ出て歩く時はひとりでは何だか外聞が惡いやうな氣がするけど。

最も氣の毒なのは白石の病氣だ。彼も彼是半年近く病床に苦しんでゐる。病ばかりなら兎も角、四圍の事情が苦しいだらう、彼に此の苦を見せるのは隨分みじめなことではないか。彼はた得所があるだらう。僕なんかの及びもつかぬところへ進んで行つてるだらう。君は憎らしいところがあるから、さう同情にも及ばぬ――そこが勿論君のえらい點だ――が、神戸といふ面白い所で君の心的活動は振つたものだらう。

今井が言つた、人類は蜘蛛の絲のやうに端端で他とつながつてゐると。利己的な個人同志に繋がる點がありとすれば、その交錯點はシンパシイかも知れぬ。

教室が暗かつた。金子先生が說くルネッサンス時代の接神術とやら、魔術とやら、其處此處に實現されるやうな氣がする。

金子先生はずんずん錬金術といふ奇怪な神祕を語つてゆく。ぱつと電氣がついた。それが心に印象を與へた。

英吉利窓から見る空は灰色で、地面が之に應じてゐる。

僕は黑木綿の褪せた羽織を著た、丈の高い大學生に引きつけられた。足駄をはいてる。すてきに足が速い。僕は追ひかけるやうに步いた。それでも間が遠ざかる。追ひかけるやうに引きつけられた。

（三行略）

床の上にて、三富生

明治四十二年十一月五日夜（封書）

增田篤夫君（神戸）

七

僕は今電氣の下につくねんと坐つてゐる。靜けさといふものが戀しくてたまらぬやうに思へる。勿論此の靜けさは後の活動を意味してゐねば何するものぞだ。

昨夜暗い軒の蔭で、往來に背を向けて男と話してる十六ばかりの女を見た。何だか沈ん

だ話をしてゐた。さつぱりした荒いかすりのお正月著をきてゐた。その女がおなつかしい。

昨夜、神樂坂で、折を背中にひつかけて、往來の人に突き當りながら歩いてる男を見た。そいつは物も言はずに、うつむいて、よろよろして行つた。

（十二行略）

君はいつ出て來るのだ。待ち遠しくてたまらない。學校なんかきつと通る。安心し給へ、きつと通る。今年は活動しようぢやないか。去年もそんな事言つたかも知れぬが、だんだん眞に迫つて來るやうな氣がする。

チェホフの「ヱロチカ」といふのを讀んだ。男のペテルスブルグへ立たうといふ晩、女はたまらなくなつて戀を打ち明けた。その戀の言ひ出しが、モオパッサンでもチェホフでもいつでも同じだからをかしい。すてきに古臭いコンヱンショナルな言ひ方なのだ。男は例によつてまごまごして、自分は此の女を愛してはゐないのだときめようとあせつて、女をとり逃してしまひ、あとで其の女でなけりやならなかつたと思ふのだ。

僕は此の男を笑ふ資格はないねえ。此の男の缺點が僕の反省すべき點だ。しかし、かういふ艶つぽいところはチェホフは駄目だ。トゥルゲネフ、モオパッサンの方が遙かにうまい。之もチェホフで「ヂノチカ」といふのは面白い。八つになる子供が自分の家庭教師（女）と自分の兄貴とキッスしてるところを見た。それから後はその子供は教師の吩咐なんかちつともきかずに、その顏を妙な目で見て、《僕は見たんだ》と言ふ。その教師の女は初戀なので、それに非常に苦悶するのだ。その子供が兄貴にも《僕は見たんだ》をやつて頭を毆られるところなんか面白い。

此の靜けさを愛す、將に來るべき活動の爲に。

明治四十三年一月七日夜（封書）

三富義臣

増田篤夫君（神戸）

八

僕は今悲境に陷つてゐるのだ。此の大切な二ケ月をただ無意味に寢たり起きたりする爲

に費さんとしてゐるではないか。

おれのからだのおとろへは實に非常なものだつた。夢幻の中に落ち込んだやうな、くづれ行くやうな、肉體の此の疲勞を誰が知つてる？

君と僕との生活はこれから一面に類似し來ると同時に、他面に隔たり行くのではあるまいか？

僕は神戸ステエション上の西洋料理屋、あの重苦しい外形が目にこびりついてる。

僕は人のゐない時はなんともいへぬあはれな姿をしてゐる。

僕は人に敵對せぬほど溫良な人間でもないよ。

兎も角、おれは今捕虜だ。「巖窟王」といふ活動寫眞はおれと無關係ではない。

僕はね、此處へ來てから友人といふものがあると氣がつかない日が多いよ。

浦田が僕の知つてる小川といふ娘と元氣よく驅落するところを今朝夢に見た。僕は二人に停車場で會つた。停車場の傍の寫眞屋には浦田の小さな寫眞が出てゐた。それはアナトオル・フランスを若くしたやうな顏だつた。

僕は馬鈴薯をゆでて貰つて鹽をつけて食つてる。

今日ははじめて自分で鬚を剃つてみた。

アンドレイエフの「地下」といふのを昨日讀んだ。死をむやみに恐れる酒びたり男が赤ん坊を見て、一種の永久の光りといふやうなものを感じるといふのだ。自分は此の赤ん坊

になつていつまでも生きて行くんだといふ光明小說だつた。然し、それが人間の缺陷たといふ意味かも知れない。

明治四十三年七月十三日（封書）

篤夫君（神戸）

義　臣（壹岐）

九

變な氣持で日を送つてゐます。今、僕は日向ぼつこをしながら《女》といふものを考へてゐるのです。隣りでは泊り込みの藝者が男に三味線を敎へてゐる。

生活の忍從！

・・・・・・・・・・・・・

「ランボオの生ひ立ち」なんて詰らぬものを書いて、僕は閉口してしまひました。今度は少しいいものを書きます、必ず。

御健康を祈る。

明治四十三年十一月六日朝（繪葉書）

福士黄雨様（大磯）

三富義臣

一〇

このつさは寂しくてね。

寒くなつて來ると、僕はころけるやうに寢てしまふことが時時あるんだよ。その氣持の惡さは何とも言へない。

今夜は君の戀しさに終點まで步いて行つた。行くつもりではなかつたとしても、それだけ近寄つてみたかつたわけさ。

君はクロポトキンを讀んでゐる。或ひは外のことをしてゐる。

僕もデレッダを讀んでゐる。そして、お互ひに心の中で思ひ合つてゐればそれでいいんだね。

III

1911——1912

（一行略）

明治四十三年十二月十七日夜（封書）

増田君

M

二十三歳から二十四歳まで

一

（四行略）

僕の胸は蝶蝶の翅のやうに粉つぽい、何ともいへぬむせぼつたい羽ばたきをしてる。

サマ　の物語に、《彼女は胸に或る意味の羞ひを持つて此の世に生れて來た。》と書いてある。僕はこんな優しい作家の一言にどんなにか同情を注ぐだらう！　そしてデリリアスな苦しみをする。今ではこんな時間が僕にとつては一番樂しい時だ。

今のところ僕にとつては電車が一番僕のセンシュアリティイを充たしてくれる。僕は電車が好きだ。

今夜は演伎座へ行かうと思ふ。君は行く氣はないかね。

思郷病——NOSTALGIA.

田代が福住樓といふところから葉書をよこした。多分湯河原だらうと思ふ。君行つてみてはどうか。

さよなら。

明治四十四年八月二十日ひるまへ（封書）

増田君　　　　　　　　　　　　　　三富

二

増田君。

僕は今、カナリヤの羽で手頸を撫でてゐる。DELICATE な感觸が色色な優しい SENSUOUS な經驗やら想像を僕に繰り返させる。

僕の前には MAETERLINCK の「やけた鍵」といふ詩集があいてる。僕はその中から「午後」と「徒然の圓舞」と「燃ゆる盃」とを寫しとつてみた。

《我が眼はわが魂を艮に掛けた。》と書いてある。《芝生の上と我が動かぬ物思ひとの上に水が欲しい。》と書いてある。

《我が手は乾いた草を摘み取る、
我が曇つた眼は睡眠を摘む、
病人にはさはやかな水が無い、
洞穴の花には日が當つてゐる。》

と書いてある。

ここで僕は VILLIERS DE L'ISLE-ADAM の「CONTES CRUELS」（殘酷な物語）といふのを思ひ出した。それには、《女を決して打つな、花を以てさへも。》とあつた。これは僕には忘れられない言葉だ。

又、僕の肘のところに、JEAN RICHEPIN といふ人の「眠りの森の美女」といふ脚本が擴がつてゐる。FOLIO 版とでもいふのか、馬鹿に大きな版だ。僕は序幕の PROLOGUE

だけしか未だ讀んでない。FAIRY の GARDEN で雉と蛙と梟が春が來たやうだと問答してるのだ。

（八行略）

この春 D'ANNUNZIO が FRENCH で書いて、SARAH BERNHARDT が演じた、SAINT-SÉBASTIAN の MARTYR といふ脚本を松葉氏から借りて來た。讀みにくい。D'ANNUNZIO はすてきに語學が上手で、ヴァジルの LATIN でさへ流暢に讀むんださうだ。といふ話を聞くと、如何にもうまさうだね。僕等は LATIN のヴァジルなんて知らないけど…

（四行略）

MALLARMÉ は LONDON で長い間英語敎師をしてた。英語の調子の入つた MALLARMÉ の文は僕に文章の力を敎へてくれる。この文章は優しみの勝つた佛文の中では異色だ。LUXURY を盡した模樣の中に一つ素燒の瓶が匂つてるやうなものだ。純粹の佛文を巧く書く人は RÉGNIER だ（僕の知つてる限り。）

この二三日は本を讀まない。本を擴げてぢつとしてゐる。然し、格別考へてもゐない。何と言はうかな。夏のだんだん DEGENERATE してゆくのを感じてゐるのだ。MALLARMÉ は夏の末から秋の初めとなつてゆく季節が一番好きだと言つた。僕も此の一月ほどが好きな時だ。もう時時急に薄ら寒くなる時がある。こんな時は腸を吹きえぐられるやうな氣がして厭な氣がするが、何かしらん厭な SENSATION は四季いづれにもあるのだから仕方がない。

ほんとにもう、惡夢を冷たい風に吹き醒まされるやうな、そして觸感を喜び初める時季となつた。僕はもう電車の中で自分の SENSUALITY を感ずる氣分になつてゐる。

さよなら。

明治四十四年八月二十二日午前（封書）

三富生

增田篤夫君

三

來月十日までの期限でアンナ・カレニナを書いてゐる。散歩する暇もない。まだ六十枚

しか書いてない。金がとれたら一杯やらうではないか。だから、君も何か書き給へ。僕は懶惰から覺めた。仕事があるのが實にありがたい。ビイルも碌に飲まない。からだの工合はずゐぶん亂雜になつてるけれど、僕はそれをおちついて見てる。からだなんかはそもそも末だ。

君もほんとに酒を節し給へ。からだの爲よりエゴオの爲にね。エゴオが酒の爲に打ち消されてゆくのがまつたく惜しいぢやないか。いいか、正體を失つちまふなんて愉快なことだ。だけど、正體が失へぬのなら、そんな馬鹿げた無駄な狀態は考へものだよ。さうとなれば、酒なんか大したもんぢやない。ほんのりといい氣持のとこでやめておけば、それでバッカスへの勤行は十分だ。お互ひに、いつそのこと、も少し VOLITION を發達させようではないか。僕等はからだが强壯つて奴になれるんなら、それはいい。だけど、さうぢやないのだ。してみれば、からだなんか第一の問題ではない。

僕は伊香保から新橋へ著いた時には袂に五錢しかなかつた。晝飯が食へないから伊香保せんべいを食つた。それでも馬鹿に腹がへつちやつてね、何だか面白かつた。此處へは指環と洋傘を曲げて來たのだ。十二三日頃までゐる。來られたら來給へ。然し、所なんかど

うでもいい。からだの工合も氣にかけずに、しつかりと氣持を持つてみたまへ。僕は君に之を切望する。

明治四十四年九月三十日（封書）

今井君　　三富（箱根）

四

人間には口で言はうにも言はれぬ祕密がある。その祕密が現代に生れた僕等には思想よりも意識力よりも打ち勝つてしまつた。その祕密は僕を騙つて或る詩を寫させたり、又同じ詩を無意味にしたりして見せる。僕は僕の頭をその祕密に捉へられ過ぎてゐる實驗を昨夜感じた。

今日は太陽の光りに感謝を感じた。

《何故に斯くは多くの嘘を》と人間はば、

《わが虛空を飾る星の必要なれば》と我答ふ。

といふ詩があつた。今夜のわが闇を飾る星は何だらう？？？

今日午後は、歸國するといふ今井に牛込見附までついて行つた。僕が『寂しい』と大聲を上げる。その時に、今井でも田代でもない、ひろちやんでもない、君が何か言ふ。それが僕にどれくらゐ共鳴するかといふことも昨夜知つた。君が居ないのは寂しいよ。

もう夜になつた。隣りに藝者があがつて御祝儀をつけてる。懐かしき藝者よ。僕は都都逸と藝者を抱く。

湯河原は湯が少いから夜中は湯をとめとくんだつてね。君困りはしないか。

レタア・ペエパアと封筒、今夜あたり送る。

左樣なら。

明治四十四年十二月十八日夕（封書）

增田君（湯河原）

三富

五

靜まりゆく夕暮の數十分間がここにある。

今日は机の前に坐つて、サマンの詩を二つ三つ見かかるともう日が暮れて來た。サマンは夜の靜けさを歌つてゐるけれど、僕にとつては夜は惱みである。

僕は若いサマンの戀が知りたい。

僕は二つ三つ習作を書いて、それから佳作を出す筈だ。その時が待たれる。

封筒とレタア・ペエパア、一昨夜送つた。

「決闘」、面白く讀んだ。僕は寒い國の作家とあまり同化することができない。ラアエフスキイの感覺は君のそれによく似てる。然し、君とラアエフスキイは無論別別だ。少し無禮な尋ね方だが、君はラアエフスキイと同じ境遇だと僕に言つたのか？　フォン・コオレンといふ人には妙な錯誤がある。

昨日は何だかひどく不愉快だつた。今夜は淺草の活動でも見ようか。今月は碌に外へ出なかつた。外へちつと出たい氣がする。寒いと何も彼もおつくふで困るね。

VILLIERS DE L'ISLE-ADAM の短篇に、「暗い物語、なほ暗い物語り手」といふのがある。これを今夜讀まうと思ふ。

僕は死神が人を殺すたびに感じる寂寞の恐怖と人間が死を讃へる狂ほしさとを、ごく短かく書いてみたい。

寒い。風呂が沸いたさうだ。すつかり夜になつてしまつた。

左樣なら。

明治四十四年十二月二十一日夜（封書）

増田君（湯河原）　　　　三富義臣

六

（六行略）

―ラァエフスキイには僕も同感ができるよ。ただ僕は、《吾人は…》といふやうな言ひ草が一寸癪なのさ。

レッテエの詩の譯を書いてみよう。一年ばかり前にノオトに無駄書きしといたものだ。僕はレッテエよりもマアテルリンクやギリエ・ドゥ・リイル・アダンやギュスタアヴ・カアンやギイレエ・グリッファンを愛する。レッテエは詩として第二流ではないかと思ふ。

僕は來年から詩を盛んに書く。「ザンボァ」の二月號へ出すつもりで今書いてる。君も出すべきものを書き給へ。

（レッテエの詩「冬の唄」、本全集飜譯篇にをさめたれば玆には略す。――編者。）

面白い詩だらう。僕の短詩を一つ紹介しよう。得意なんだよ。僕は詩を書く見當が少しついて來たやうだ。

（詩「仇花」、同じく第二詩集に收む。――編者。）

僕の優しい氣持を愛し給へ。僕は GOD を唱ふ詩を書く。僕の詩に涙を認めない者には僕の詩は解らない、といふものを書くのだ。この短詩にだつて僕の涙が籠つてるんだよ。あてられるだらう、効能書ばかりで。ほんとに書く。

一昨日は丸善へ行つた、註文書を持つて。クリスマス・トゥリイの間を歩いて、本を四冊

買つて來た。――

フランソア・コッペエ　　罪人
バルヹエ・ドオルヸリイ　　極道
マルセル・プレヴオ　　新女手紙
ヹエベル及びヸリイ　　通りすがり

僕はヸリエ・ドゥ・リイル・アダンの「最上の戀」といふのを飜譯する。（LE MEILLEUR AMOUR, PAR VILLIERS DE L'ISLE-ADAM.）

POE も讀みたい。

左樣なら。

明治四十四年十二月二十五日（封書）

増田篤夫君（湯河原）

三富

昨日はクリスマス・イヴでニコライから鐘がごんごん響いて來て、僕をしてジュウ・マティアスを思ひ起させた。

七

今月の末から來月のごく初めに於いて小さい INTIMATE な會を催さうではないか。場所はどこか友達の家でよい。文藝の會として純な氣持で集まりたい。三上君達は來てくれるだらうか？　そして腹案のある人達には演説をしてもらひたい。僕は「フウゴオ・フォン・ホオフマンスタアルと若きキンナ詩人等」といふのを喋る。これは口ならしだ。二度目の會合には「大作家の祕密」と題して、僕獨特の FEMINISM を ELEGANT な言ひ方で、日本人の未だ知らない氣持が玆に在るといつた風の事を言ひたい。

REVIEW が出來るとすれば、名前は象徴藝術としたらどうだ。いろいろ洒落た名を考へてみたが、この堂堂たる名が一番好い。

明治四十五年一月二十九日

今井國三君

M・Y・

八

僕は憤慨をしなくなつてゆく。痼癖といふ性癖はちつとも和らいでゐないにせよ、僕は

憤慨すべき場合へゆくと沈默してしまふ。之は僕の鬱屈的傾向だ。

（二行略）

痼癪を起しながら沈默してるのは苦しいものだよ。一種の眩暈がして、變な CRISIS が起る。チェホフがよく書いてる奴だ。チェホフは之を書いて噴飯せしめるが、僕のはもつとデリケエトだから、彼の材料にはならない。

先夜はまはりくどい象徴生活論をとなへた。もつと明快に話がしてみたい。君も今までに讀んだニイッチェ、ショペンハウエル、ドストイエヴスキイ、ワイニンゲル等を總合分解して大いに直觀して見給へ。

ALTRUISM の思想と、惡の華、戰慄等の ADVENTURE の思想とは、感激といふ根柢から見る時は、不一致でないと思ふ。感激とは美學でいふ〔美〕なるものだ。美學にも醜美なるものがある。

愼重に研究を要す。

僕は今ボオニエといふ人の本の「象徴主義と自由詩」といふ章を讀んでゐる。獨逸の厭世哲學、超人哲學等を讀みたい。思想家としてはニイッチェに匹敵し、STYLIST としてはフロオベエルとかに匹敵すると誰かが評したジュウル・ラフォルグの厭世觀も讀みたい。

涼しい風が吹くと、そろそろ寒い冬が氣にかかつて來る。冬は僕にとつての諒闇だ。

三富迂生

大正元年八月二十日朝（封書）

增田篤夫君

九

昨夜は失敬。

僕は晦日の例として泥鰌の如くに醉つた。未だ頭と胸とに酒の響が殘つてゐる。

昨夜は行かなくて御免よ。

今日の土砂降りでは立てまい。雨が小止みになれば君のところへ出かけるつもりだ。温泉へ行つて朝から晩まで書きたい、蠶が絲を吐くやうに。

――僕には希望がない。我を憐れめ。

醉へるが如く叫べるが如くに書きたい。

僕には病氣よりも書きたい熱よりももつと毒毒しい悲觀主義がある。僕の厭世熱は沙漠の如くに横はつてゐる。RIMBAUD は生活を破つて新を求めた。僕も之の如くにせねばならぬ。

僕は抽象具象を唾棄して新人と成りたい。

何だか厭な書き方をした。失敬。

大正元年九月一日（封書）

三富義臣

増田篤夫君

一〇

今日は例によつて現實世界を忘れぬ眠りにうとうとして、起きたのが一時。

湯から上つて來ると、君の手紙が机に載つてゐた。

やや曇つた秋の空、谷を縱横に出沒する霧などを眺めて籐椅子に倚つてゐると、終日眺め飽かぬ氣がする。

此處の霧は實にあざやかなものだ。

前の道を駕籠が通り、人力が通り、自動車が通り、馬に乘つた西洋人の群が通る。この家も西洋人が十人以上もゐることが多く、彼等は三三五五逍遙し、又、食堂で快談してゐる。日本人は僕も入れて二三人ぐらゐなもの。

泉質は綠礬泉といふ。鐵分を含んでゐるのだ。硫氣はあるといふけれど、格別臭ひもしない。凡べての點に、景色を除いては、塔之澤の福住の方が遙かに勝つてゐる。女中なども、此處へ來てみると福住は氣が利いてゐるといふことが解る。

この家の庭は大變氣に入つた。玄關の前に、ずつとひろがつてゐるのだ。庭の小高い處に四阿がある。そこに腰掛けて、煙草を吸ひながら暮れるのを待つてゐると、麗はしい漂泊の苦しみを憧憬する心が強くなつて來る。

今、宮の下の電話交換手だといふ娘が六人、家の門前に休んでゐる。

今、僕と一緒に山へ登つた横濱の外國人が歸つて行く。《さよなら》と、バスの聲を出した。

肝心の仕事は餘り手につかないけれど、考へはその方にばかり向けられてゐる。

暮方になると、池の汀や、紅葉の林に添つた電燈に火がつく。

雨が降るのも嬉しく。やや晴れるのも嬉しい。久しく溜り過ぎてゐた疲勞が黑いマントオを展べてくれる。

今日は大涌谷へでも行つて見ようか。獨りを喜ぶ。ただ、時時塔之澤あたりで賑かに遊んで來る費用が欲しい。二三日前塔之澤で二晩遊んで來たので、乏しい金に大穴があいた。僕は荷物をおつぽり出しといて、東京へ飛び出しちまはうかと思つてゐる。

どうも僕には散步の趣味はよく解らぬやうだ。散步のつもりで出かけると、すぐ氣が變つてしまふ。モオパッサンの作に、「散步」といふので、何とかいふ獨身の老人が何年ぶりかで散步する氣になつて、ボア・ドゥ・ブウロオニュへ出かけて行つて、林の中で首をくつたといふのがある。僕もかういふ種類に屬するのだらう。

今、自動車が二臺通る。

左手の山の凹みに、紫雲來迎といふやうな繪にある形で、霧がちよこんと坐つてゐる。

君も自分の氣に入つた點だけを選んで、自分の空氣をこしらへ、その中に沒頭し給へ。すれば、どんな汚ない室の壁も煌く星に飾られた空と變るものだよ。

今、家の前で、若い西洋人の男女二人連れと中年の男とが出會した。立話をしてゐる。三人とも佛蘭西人だ。遠いので聲がよく聞きとれない。《長いでせう》、《惡くはない…》なんといふ、きれぎれの聲が聞える。若い男は快濶に笑つた。

蟲の聲と薄白い光線と、優しい靜かな秋の草花、君は之等を見ると、胸を搔きむしられる氣がするだらう。

今、この家へ《今日は》と言つて、西洋人の男女が入つて來た。見たらば、今の若い佛蘭西人の男女だ。二人は此の家の四阿でお茶を飲まうといふのだ。この二人に僕の持つてる詩集や小說を見せてやりたいね。

凡べて靜かな秋のシンボルを見聞きすると、僕は泣き叫びたいやうだ。谷底へ轉がり込んでしまひたい。かういふ悲慘で又麗はしい出來事が或る晩方僕の身の上に落ちて來るかも知れない。

僕は山の中で餓死するのかも知れない。さういふ時に、僕の苦しみの終りを飾る物はどういふ REVERIE であらう。

（「雨の唄」、第二詩集のために除く。――編者。）

僕はこんなにまで雨の喜びを感じたのは、此處へ來てからが初めてだ。

三富義臣（箱根小涌谷）

大正元年九月十七日（封書）

増田篤夫君（奈須湯本）

二

明二日夜七時半、カッフェエ・ボオリスタの二階で待つてゐる。他の友達とセパレエトして二人きりで快談したい。無理に來なくつてもいいよ。僕は今疲勞し過ぎた頭を固く枕に押しつけてゐる。步き過ぎたせゐか、脚部が痛い。

（四行略）

〔必ず彼處にて待ち給へ。彼の谷底にて御身に落ち合はんこと疑ひなし。〕

僕は向島の百花園へ行つて、優しく脆い秋草と共に風に吹かれたい。さうすれば、僕といふ孤獨な人間の心の牢屋にも薄白い光りが射し入るだらう。そして、僅かながら、僕は僕自らの苦しみに慰めを惠み得るだらう。僕の渇いた喉と淚の激る胸とをお茶と茶菓子がもてなしてくれる…

僕は兎も角獨りで生活して來た。僕の物怖ぢする生活は僕の爲に暗い蔭を造つた。僕は種種に彷徨したあげく、この物柔らかな陰影に包まれて身を終るのかも知れない。

然し、何故僕の敬愛する女の人達は、僕のしなやかな、象徵的な皮膚を味はうとはしないのだらう。僕の壓搾された熱情はヴァジンなる皮膚の上にみなぎつてゐる。それだのに、僕の皮膚の爲に火傷した人もなく、僕の皮膚の海に溺れた人もない。觸れ難い此の皮膚に觸れんとする人はない。

けれども、僕は最近に一人を得た。この人が僕の一生の戀人かも知れない。かういふ戀はごく刹那的に終るといふことを僕は承認しなければならなかつた。

晩れ方、僕はダリヤの花、カアネエションの花、薔薇の花などに繊細な葉を添へた束を持つて歩いた。僕の心は嬉しく又傷んだ。今日といふ OCTOBRE PREMIER も終つた。

もう眠らう。さよなら。

大正元年十月一日（封書）

増田篤夫君

三富義臣

一二

君が或る晩僕のためにギオロンを彈いてくれるとすれば、そのひびきが描き出す悲慘の光景は君と僕とをあらゆる感覺を以て戰慄せしめるだらう。そして、その絲がいきなり切れた時に、君と僕とは抱き合つて最後の悲慘——死——を知るだらう。

それが或る一夜の出來事なのだ。

僕は近頃時時胸を抱いて慟哭するやうになつた。女性は泣くことによつて慰められるが、僕等は泣く時には悲慘といふ無二の毒を飮むのだ。

苦惱を驚歎するのが藝術家の唯一の天分だといふことを僕は知つてゐる。然し、もうぢき最後の一大驚歎が來るだらう。それが死だ。

靈魂は決して赤裸裸に堪へ得るものではない。中世紀の騎士は生より甘い死を求めて十字軍に從つた。僕等は第二の十字軍を組織するのだ。僕の享生は黒耀の旗を立ててゐる。僕は苦しみのうちにひざまづく。

僕は誠のインディギデュアリズムの人は皆童貞だといふことを知つた。

（この手紙、ギュスタアヴ・カアンの譯詩を以て結ばる。飜譯篇、LIED 第二がそれなり。——編者。）

大正元年十一月十日夜（封書）

増田篤夫君

三富

書いておいて出しそびれた手紙（九と一一とを指す。——編者。）を同封する。

僕は一週間に一度づつどこかのカッフェで君と會ふといふことを提議しようかと思つてゐる。然し、そんな悠長な考へを僕は自分が信じてゐさうもない氣がする。君に會ふ度に僕は一種の最後の別れを感じてゐるのだ。

一三

私は悲しく埋もれてゆく日日を送つてゐます。

無言の父（養父のこと。――編者。）の側で、甚だ工合の悪い椅子に腰掛けて、讀書をしてゐると、午後が過ぎて晩方になるのです。一面の硝子窓を越して見える砂原と松の點點、又若い看護婦達の白衣姿。

患者達は皆、ベッドの上に坐つた者、寢た者とも、茫然として疲勞のまなざしを投げてゐます。彼等は皆愚痴も言はなければ怒りつぽくもない。反省する時間が多いので、善意の人になつてゐるのです。

四時過ぎに私は宿へ歸つて又本を讀む。病院ではアドルフ・レッテエの「象徴主義」を讀み、宿ではジュウル・ラフォルグの「女性觀」を讀むのです。本を讀んでゐると、時時涙が喉もとへのぼつて來る。さういふ時に、私を見、私を憐れみ、私の心を愛してくれる女性があつたなら、私はどんなに嬉しいでせう。

ラフォルグは、男性は皆意識のできない世界の爲に思ひを苦しめて、ペシミストになつてしまつた。獨り頭の空つぽな〔女性〕のみが死を恐れないで、生を樂むことができる。長い〔女性の歴史〕を經て、女性も亦厭世家になつてしまつた時に、世界は自殺するのだと言つてゐます。

年下の女性を摑まへるには餘程上手な技巧が要るやうですね。寧ろ技巧を入れてはいけないと言つた方がいいのでせう。然し、愛されようと思ふ心を抑へて、愛するのを許してもらふといふ態度を自然に出たもののやうによそほふのは、頗るむづかしいことですよ。多くの男性（私も）は、わかつてゐながら、ここで躓くものが多い。

私は彼女が無口で泣蟲で、その癖、瞞著家で意地つぱりだといふことを知つてゐる。それに、私は彼女に憧憬されるべき何の能力、何の美をも持つてゐるとは決して思へません。

私は多くの女性の中から彼女を發見した。何人にも勝つて彼女を愛してゐる。これだけの理由で、年上の女ならば私に感謝と愛とを恐らく與へるでせう。

けれども、年下の女性には何よりも先づ美貌と快潤とを持つた者でなければ駄目です。

だから、一時私は絶望したんですけれど、又彼女が焚きつけるので、（彼女は焚きつけるつもりではないかも知れません。ただ、こつちはすぐ焚きつけられたつもりになつてしまふのです。）今、私は五里霧中に彷徨してゐるのです。

彼女の前へ出ると、氣をつけてゐながら固くなる。すると、彼女は頗る無慈悲にすぐ退屈してしまふのです。私は憎らしいやら情ないやらで絞め殺してやりたくなりながら、やはり意氣地なく、ほかの藝者を呼ばされるといふやうなことになる。それから先は彼女等に弄ばれる。而もなほ悪いことには、この男を弄んでも面白くないといふ信念を彼女等に與へるやうに、私が出來上つてゐるのぢやありませんか！　考へて御覧なさい、かういふ悲慘な一場の悲喜劇がありませうか！

彼女の言ふこと、彼女のすることはちつとも辻褄が合はない。勿論私が餘り細かく氣をつけ過ぎるからでせう。けれども、その爲に私の感性は觸れ難いといふ苦しみにいらだつんです。彼女は私をラヴするとは言はない。けれども愛さないとも言はない。キッスせよとは言はない。けれども、キッスすればはねつけはしない。

然し、元來何もこんなに解剖して考へる必要はない。自分の自然どほりやればいい筈な

のです。けれども、そこが惚れた弱味で、技巧をやつてまでも好かれたいと思ふんです。

彼女は始終微笑してゐる。その微笑は快樂や幸福を思はせゝ微笑ではない。見てゐると、私はただむやみとからだが震へて來るのです。氣が遠くなるといふ意味と反對に、氣が近くなるんです。

（女は度度變る、
信ずる者は馬鹿を見る。）

といふ佛蘭西の俗謡がほんとであるにしても、ラヴをしてゐる時にどうしてそんな諦めがつきませうか！

大正元年十二月二十日夜（封書）

三富義臣（福岡）

荒木郁子様

IV

1913 — 1915

二十五歳から二十七歳まで

一

君とは違つた行き方で僕も世の中には堪へられぬものだらけだ。

僕は永久に女性とは絶縁するかも知れぬ。でなければ修道院あたりの悲しく靜かな女性と空や四季の象徴を眺めて物思ひと祈念との生活に埋もれてゐるより外ないであらう。

晩春の曙に隠れて耀く初夏の光りを僕は常に心の中空に望んでゐる。けれども其の眺めは如何に哀しみの炎に燃えて見えることぞ。

僕はだんだん白石の死を傷む思ひに胸を締められる。ああ此の REGRET！

君の顔を見ても、僕は涙腺に異樣を感じる。もう僕等は駄目だね。

庭の楓が窓邊に葉をのばしてゐる。如何に優しくも、嬉しくも、過去の疲勞が熱望してゐる爽かさを顫へる指に傳へることよ。更に、如何に過去の苦しみをひと目に見渡さしめ

ることよ！

僕は彼女と快濶な時間を送る爲には、氣むづかしい孤獨の時間が必要なのだけれど、その機會もなかなか見當らない。僕は大體もう或る機會といふものを捉へる力が盡きかかつてゐる。

彼女は今齋藤君に英語を敎へてもらつてゐる。彼女の上に幸あれ！

三富義臣

大正二年四月二十三日夜（封書）

増田篤夫樣

二

僕の頭のいつでも惡しきことよ。僕は感情をおさへて感覺を讃へるものではない。感覺が富んでゐれば感情はおのづから豐かに成ると思ふのです。さういふ點から發足してゐない感情（不正確な）を厭がるのです。僕の言葉は駄目、僕の行ひも或ひは駄目。ただ僕の藝術に平凡は入り來らざれ。嘘の感情が入るより、豐かなものを生まない STRANGE な感覺だけでも未だましだ。感覺的 RYTHME より生れた LYRISM のみ誠の感情である。

僕はただ感覺のみがほんとの感情を生むものだと言ひたいだけだ。感情が人の優秀證たることは知つてゐる。この貧弱な僕が詩人である爲には僕の持つてゐる缺點は十分に暴露されなければならない。僕は責められれば、僕は藝術的法悅の爲の MARTYRDOM として自分の EGO を責め、自分の EGO を元始的な本能へ行かしめてはならぬといふ證左を得たものとして其の人に感謝する。僕をして徹底的に文明ならしめる友達に SENSIBILITY の賜あれ。

三富義臣

大正三年四月二十三日夜（葉書）

増田篤夫樣

三

一面からの觀察として君の僕に對する睨みはいつでもよくきいてる。けれども、いつでも或物（最も興味ある方面）を見のがしてゐはせぬか。といふのは僕の告げ難い靈魂病（?）のことだ。僕は殆ど始終形式にし難いものの爲に引きつけられてゐる。僕は餘裕がないと言つたのは此の事さ。眩暈（めまひ）がしてるのだ。

此の間は僕は惡いことをしたが、大分君のショパンに傷けられた結果もある。僕の靈魂は痛みを感じる（殆どいやし難いと思はれるほど）と、僕の胸は拗り棄てねばならぬ黑（色ではない）を感じる。かうなると大概萬事休すだ。僕は實際理想家でも現實家でも藝術家でも生活家でもない。又何家でもない。一個の靈魂病者の型だ。

（君はこの事を如何なる點まで信用するか。僕は多分ロマンティストではあるまいよ。）

大正三年五月三十一日（葉書）

三富義臣

增田篤夫様

四

漫性靈魂病者の其の日暮しの晩方です。《今晩は！》人間が反穆的生活を送つてゐる間は、（或ひは永久に、）彼等は皆漫性の生活をしてる。PEUH！

其の後は自分のことにかまけてしまつて御挨拶もいたしませんでした。僕は近頃になつていろいろ氣づくことが多い。今が眞に大切な修養時代です。

漫性的生活を時間的に飛びこえることは、卽ちベルグソン氏の哲學全體は、恐らくはただ第一歩でありませう。尤も此の第一歩への入門を說くのが哲學の性質です。其のあとが大臣ですよ、後が…

常に近代的で、反對者或ひは我が嫌ふ者を研究することによつて自分の弱點を正しく反省し、クラシシズムを祭つて（卽ち恐れうやまつて）君も我もあらんことを！

《我の敵を抱くは、彼の息を詰らせん爲なり。》――ラシイヌ。私は逆に、《御身の息を詰らせるのは御身を強く抱くが爲である》と、人人に言ひたい。ブランシュより宜しくとの傳言です。

大正三年六月二十五日（封書）

三富義臣

青木精一郎様（大阪）

五

フランセエやりませう。僕は君の訪問を喜びます。

今日はまるで季節のオルケストラを聞いてゐるやうです。薄暗い雨の日が僕のまはりに一杯擴がつてゐる。

おお告げよ、告げよ、秋よ、御身の魅力を！
さまざまの女性が目の前に浮んで來る、又さまざまの景色が…

わけても懐しい箱根と宮島とは今日もなほ僕を銷魂の驚きと顫慄とで襲ひます。多寶塔の峰、紅葉谷、嚴島神社の鳩だの鹿、宮島踊り、舞妓、谷を昇る鋭い霧．丘の四阿、夜の燈火の海、絃歌の湧くところ、溫泉のあふれるところ… 下らない事をしやべり過ぎました。僕は感傷的な遊治郎の心も持つてゐるけれど、そんな《四季の中に生死する》ことは、僕の精神が嫌悪します。これは甘い追憶ではなくて、時雨日の幻惑です。

大正三年九月三十日（葉書）

三富義臣

福士幸次郎様

六

啓上。

毎日御無沙汰にばかり過ぎて相すみませぬ。近頃は御起居如何ですか。あなたは大分畫をおかきになつたでせう。奥樣の肖像畫ももうとつくにできましたらう。

僕も年末から佛蘭西十九世紀繪畫史といふやうなものを買ひ込んでありますから、時を見て讀みたいと思つてをります。今年は僕もすこし働きますよ。只今はヹルハアレンをしらべてをります。この詩人についてもカッフェあたりで一夕御話をしたいやうな氣がします。

今日は朝起きると直ぐお湯に入り、ラムネを飲み、西洋菓子を食ひ、コオヒイを飲み、煙草を吸ひ、新聞を讀みなどして、二時間ばかりを過してしまひました。久しぶりで天氣がよいので僕は上機嫌です。さて、これから晝飯を喫して、ヹルハアレンにとりかからうといふのですが、その前にあなたに通信を書きたく思つたところなのです。

洋室と煖爐とがあれば、冬は文學者にとつてはまことに勞作の時だと思ひます。屋根や枯木の上に簡明素朴な外氣が漂つてゐるのを硝子越しに眺めながら生の認識に努めるのは、至極結構な生活と言はねばなりますまい。心情の働きは實に妙なもので、鐵道構內の汚ない草原もそこに遊ぶ少年少女の目には天國のやうにうつるかもしれません。斯かる幼少者の幻覺は決して一笑に附し去ることはできません。何故なら、彼等はごく直覺的な審美眼に豐かであるべき筈だからです。

私も度度この種の樂しい魅力を此の世から受け取ります。そして、それは確かに生とか

死とかいふ實際問題以上のもので、彼の樂園(パラダイス)と符合するものであることを信じてをります。私はこの非肉感的な純粹境を疑ひません。願はくば、斯かる雰圍氣は、私の生涯を通じて私の周圍に漂つてあらんことを！

ヱルハァレンの詩集「明るい時」、「午後の時」にも、私のと同じ意味の賞歎の境地が信念を以て歌つてあります。それを見て以來、私は、この田舎者と思つてゐた詩人を好きになりました。合掌對坐した戀人同志があつて、而も肉感的宗教的のいづれの心地をも持つてゐず、(もし樂園といふものがあらば、そこの住民はいづれにも捉はれない自由の者でなければなりますまい。)ただ充實した熱意に生きてゐるとしたならば、如何に明るい生活でありませうか。

とんだ理想談になりました。今日はこれで失敬。

(三行略)

大正四年二月六日(封書)

三富義臣

青木精一郎様(大阪)

七

久しぶりで御手紙拜見。御元氣旺んで結構。GALANDOH 氏の底拔けぶりも益益あざやかになつたことだらう。

今井君は慈父永逝の後仕末で國元で忙殺されてゐる。

君の豫想どほり誰も何もしてゐない。呆れるほど十年一日的生活だ。倦怠の首輪、無爲の鎖、之等がいつか花輪や首飾りになる日があると思つて暮してゐる。馬鹿らしさを見に來るかね。

大正四年四月二十四日(葉書)

三富義臣

浦田芳朗様(對島)

八

日沒時が來た。わが輩はその日暮しの氣安さに、悠悠と(ヨボ式だ)窓から上を見上げてゐると、曇り日の空がぼんやりと暮れて行く。椅子の中へ陷落し、卓の上へ兩足を載せ、

朝日を吸ひながら、靜かに思ひを錬つてゐるところは、われながら今に傑作を爲出かしさうで頼もしい。

ああ願はくば、頭よ、しつかり頼む！

時時好い景色の又は風俗の繪葉書をくれ給へ。僕はいろいろな土地のことが大好きだ。

友人諸君は變りなし。僕は印度の青年と知合ひになつて片言以上の英語を役立ててゐる。

大正四年六月二十八日（絵葉書）

三富義臣

浦田芳朗樣（釜山）

九

拜啓。

近頃如何？　君が御酒を飲み出してからもう久しいものだが、さうならない前の氣持を思ひ出すこともあるかね？　この手紙が著いたら、君の影を見給へ。影法師の中へは存在の嵐が溶け入つてゐる。

〔旅人とその影〕！

僕のその日暮しの暮れ方に、隣りの下手な三味線が鬱陶しい音色を立て初める時！　大橋圖書館への路すがら、牛込見附の土手傳ひに町町の火が水にかげ射すのをひとり寂しく眺め行く時！　庭の貧しい植木棚の匂ひ仄かな草花に水を灌ぐ時！　心勇まずテエブルの前に無爲の一日を又も始める時！　僕の胸には言葉の悲しみが鬱積してゐる。或る言葉は歌はんとし、或る言葉は泣かうとし、或る言葉は笑はうとし、樣樣の無言の言葉が樣樣の稀な意味と樣樣の豐かな映象とを表現しようとして鬱積してゐる。ああ文字、文字…　文字に心の影が映るものであるなら、如何にわが心の貧しく弱いことよ！　庭の楓はそよ風に搖れて忘却のリヅムを描いてゐる。その如く自然に僕等は意識のリヅムに搖れたいではないか！

君はお父さんがなくなつて大變だつたらう。僕のなくなつた養父が福岡病院へ入つてゐたのは冬だ。僕は病院の門前の宿屋に居たが、その門の木柵に添うて、五六人の果物賣が日を浴びて佇んでゐたのが、未だ目に殘つてゐる。

一月ばかり浦田が上京してゐたが、先月歸つた。他の諸君に格別變りはない。

君はまた出て來るか。僕は來月下旬に銚子へ行く。そしたら成るたけ長く東京へは出た

くない。

（三行略）

大正四年六月二十八日（封書）

今井國三君（河内）

三富義臣

一〇

眠りの中に悸きがあり、夏には常に爽かさがある。僕の生活の空には殆ど常に曙が漂つてゐるけれども、その下には黑く長い悲しみの影が射してゐる。ああこの靜かな無智の光景！　僕の渴きは曙に霑ひ、僕の魂は徒らに惡寒の露を振ふ。この岬の岸を嚙む潮泡は誠に僕の反省を呼び起すにふさはしい。

君の本面白く拜見。僕などにデディケエトした君の突飛と若氣を僕は好みもし、恨みにも思ふ。君の好意に感謝を述べるのは蛇足だらう。難を言へば、あれ程の心理描寫がしつかりした性格描寫を成してゐないことだ。

大正四年八月五日（葉書）

三上於莵吉君

三富義臣（犬吠岬）

一一

もう周圍の風物に秋が訪れて來た。薄ら寒いこの風に吹かれると、僕の胸には明るい夏を惜むおもひが湧き上つて來る。

砂濱に火を焚いて濡れた體を乾す時、小松の中に身を横へて遠く眺めを漂はす時、四阿で日沒を見やる時、波にもまれる時、眠る時、覺める時、幻覺のやうに、REGRET のやうに、捕へ難い輝きが僕の胸にぱあつと夏の姿を照し出す。

年毎に旋つて來る夏よ。その度毎、常に清涼な泉のやうに迸りゆく唯一の夏よ。夏はいつもいつも過ぎ行く。けれども不變の光りを以て、FRESHNESS の銷魂に人を浴せしめてゐる。（僕は感覺を以て盡きてゐるとは決して思はない。ただ感覺が HEART に對して如何に豐かな暗示に富んでゐるかに氣づきたいのだ。）

僕は多くの場合孤獨を守ることに心が向いてゐる。天地の間に孤獨を保つてゐることは、僕には、曠い世界の竪琴に手をあてて心ゆくまで漂泊の歌をかなでる心遣りを齎す。僕は

一つの世界を識つてゐる。ああ僕をしてこの最も素朴な纔欵の藝術を表現せしめよ。

肉體を餘りに持つた藝術は朽ちゆく。けれども藝術の翅は肉體によつて生命の空を飛ぶ」彼等が生活の爲に藝術を用ゐようといふとも、僕等は藝術の爲に生活を用ゐねばなるまい。僕等の理想に浮ぶ藝術は何の爲でもない。僕等の本能には生活は何かの爲であるといふ念が絶えない。僕にとつては本能超越の志こそ又なく尊しだ。

今夜は芝生に轉がつてゐる圓い石の上に立つて暫く月を見る。圓い石の上に延びあがつて人間が月を見てゐるところは好個のポンチ繪だと感じた。

今夜はブランシュは銚子へ芝居見物に行つた。歸りは十二時過ぎになるらしい。

君の手術豫期した程度に於いて効果があれば僕に於いても文句はない。おまけに今月は一つ書いてみるといふやうな調子で書ければ至極結構。

東京も戀しくも何ともないけれど、ここにも少し飽きた。

CLAUDEL 曰く、Heureux celui qui a soif! と。僕もこの意味で仕合せだ。

左樣なら。

大正四年八月二十四日夜（封書）

二

増田篤夫君　　　　三富義臣（犬吠岬）

親しき増田君。

この午後、空に風の鳴る音、浪の巖に碎ける響を聞きながら、緣の籐椅子に凭れてゐると、君への親みの情が心に湧いて來る。

この麤い自然の中にあつて夏中を過してみると、今僕のアスピレエションをさそふものは HUMANITÉ である。今、君が僕に缺けてゐる。君に會ふ日の樂しみを思へば、君が僕の中に占めてゐる IMPORTANCE をよくさとることができる。

一面に白い波頭の立つ沖には鷗が舞ひ、帆の舟が走つてゐる。この忘却のリヅムに圍まれて續き行くメロディイのやうな君の面影を追ふことの如何に心やりなるぞ！

今日の午後の晴れた空に輝く雲の壯觀は僕をして飽かず眺めしめる。この種の裸かな、けれどもやや抽象的に過ぎる純粋に、君の感情を浮び添へることによつて、僕は地上の營みに祝福の宿りを尋ね當てるやうな氣がする。

春のやうに惱ましく優しく又權威ある君をこの不遇薄命の境に REPRESENTE させてみれば、驢に草の冠を喰はれたツァラトゥウストラのをかしな比喩もおのづから思ひ起されて、君の FIGURE が更に CHARMANT と成る。

彼の腹黑い懷疑を君の面影に見出ださぬは如何に仕合せなことであらう。僕は君に親むことによつて、一つの盡きぬ泉を汲む。その味ひは喜びであり、悲みであり、苦しみであり、愛であり、何とも言へぬ甘味である。

君の性質によつて僕は一つの生命の ORIGIN を知る。この夏の末の緣側に坐つて、凡べての問題を棄ててそこへ遡れば、そぞろうら寒いこの季節に、何といふ溫かさに觸れ得ることぞ! この秋の初めに當つて僕に缺けてゐるものは君である。

大正四年九月一日（封書）

三富義臣（犬吠岬）

增田篤夫君

V

1916 — 1917

二十八歳から二十九歳(死)まで

一

御手紙のおもしろさ、なかなかあなたもすみに置けませぬね。又眠くない時にお書き下さい。先夜は歸りに田代と增田にでつくはし、一緒にカッフェエでソオダを飲んでゐるうち、雨がおちて來ました。

今日は十時に起き、午後一時星製藥へ御目見えに行きましたら、僕と同じ候補者が十人ばかり並んでゐて、應接室滿員の有樣は實に滑稽でした。毎日午後四時迄づつくすりの參考書を讀まされるのですとさ。そんなにクスリの本ばかり讀まされた日には、こちらが病人になつてしまひます。けつたいなことや。

書きものの用を三月五日迄と言つたのは二月五日の間違ひでした。十日迄はかかりさうな氣がします。この二月中頃からおけいこを盛んに始めませう。それ迄は英氣を養つてお

おき下され。お酒のこと明日母にきいてみませう。

みなさまによろしく。

大正五年一月二十九日よる十二時過　(繪葉書)

パレッスウ・ミトミ

小林あやめ様

二

(十行略)

私はあなたに逢ふと胸の中がへんになります。あなたと喧嘩をするぐらゐなさけないことはありませぬ。なるべく仲をよくして下さるやう御願ひいたします。私も氣をつけませう。

私達が別れてから未だ三月と少しにしかなりませぬが、何だか大變長い月日がたつたやうな氣がします。まるで夢のやうです。色色思ひまはせば、むねのおくがにえくりかへるやうな氣がします。あなたに對してつらく當つたことばかりが心に浮んで來ます。あなたに何でうらみがありませう、みな自分で自分を責めるよりほかありませぬ。

あなたの書いたもの、あなたの殘して行つたものを見る度に、私はなんとなくお祈りでもしたくなります。

からだをだいじになさいよ、からだはだいじにせねばいけませぬ。

常におん身の幸福を祈る者より

大正五年五月十七日夜　(封書)

きよらかなる　ブランシュ様

三

午後、水族館の魚のやうに玻璃張りの室で薄ら寒い雨の日にとり捲かれてゐる。ポオル・クロオデルの「水の悲み」といふ小品を思ひ出す。かういふ日には僕の聯想は屢濁流の凄じく激してゐる溝へ行く。樣樣の塵芥や小石などが押し流される。ちらと小魚が躍る。爽かな水の眺め、水のにほひが周圍に一杯あふれてゐる。額には慰め、感覺には浴!……(僕は乞食の子のやうだ、素朴性に於いて。甚だまづしく足ることを知る。)

机の引出しをあけると、ブランシュが僕の家を出てゆく間際に、片手で涙をおさへながら、片手でありあはす赤鉛筆をとりあげ、稻荷町の伯母さんの家と自分の家とのアドレス

を認めた紙片が目についた。彼女の可憐な心根は殆ど僕のみが知つてゐる。彼女の行ひは何人にも好かれぬであらう、彼女を欲する者は或ひは多いであらう、彼女を愛する者が無からうことを僕は切に恐れる。

《凡べて墮落の傾向は感性の混亂をそのまま棄ておいて敢て省ぬ習慣を作るところにその起因を發してゐる。》と、この葉書の下に敷いてゐるノオトの表紙に書きすててある。

ああ，僕は彼女の爲に切に恐れる。

來月は「近代感傷史」といふ佛文學研究を書かうと思つてゐます。

大正五年五月十八日（葉書）

増田篤夫君（神戸）

三富義臣

四

「ボヴリイ夫人」譯書難有うございました。原書と對照して詳しく拜見しようと思つてゐます。

LA BÊTISE HUMAINE 對 L'ESPRIT DE FLAUBERT といふ晴れの仕合ひは想像するからに心を樂しませました。

小生の好きな季節になりました。來月半ば頃から犬吠岬の別宅（といふとえらさうですが假小屋のやうな家）へ行きます積り。圖中右側の幹のかげに小さく見えてゐるのが僕の家です。

大正五年六月十一日（銚子君が濱の繪葉書）

中村星湖樣（鶴見）

三富義臣

五

誠に惱む人のみ生存の動かないい所を感得する。惱まぬ人が如何に空疎であるかは君がよく知つてるだらう。

生得 SAUVAGE で慣れ難い僕は又惱む人には心から COMFORTABLE でありたく思ふ。僕の罵詈雜言の中からこの衷情を汲んでくれる君を喜ぶ。事實 COMFORT を與へ得ぬ僕、この衷心だけを持つ僕。僕は君の苦しみを飽かぬ親みを以て聽く。然し君もまた同感を以て僕を慰むるに飽かぬではないか。

ラ・ブランギリエの「愛の備忘錄」といふのに記された《嗚咽に似た微笑》といふ IMAGE は僕のもの靜かな遊歩の同伴だ。僕は常に天の川の流れてゐる御空の下を行く想ひを以て歩む。

大正五年八月十日夜（絵葉書）

三上於菟吉君

三富義臣（犬吠岬）

六

君は未だ旅にお出かけになりませぬか。蟲の聲、蛙の聲、海の聲、雨又風、風光節物凡べてわが胸に觸れて心に障る事多しです。君が秋の怨みは如何？

われ生きて靜心なき時を經ぬ日日に新たなる夢のまにまに。夏の戯れはもはや終りを告げんとしてゐます。今日の雨の訪れは既に別種の消息を運んで來ます。昨の落日は今の松林を彩らず。灯に向へば我に罪ありて心憂き。

大正五年八月十九日（絵葉書）

三上様

三富義臣（犬吠岬）

七

君を思ふ時よく僕の思ひ出す言葉がある、――《Mon développement était sérieux.》（ゲエテがエッケルマンとの會話であつたと思ふ。）誠に君が自らの情緒に依つて思想を遣る時ナポレオンがゲェテを訪れた時の如く、《Voila un homme.》と僕は心の内に如何に度度叫んだことぞ。

Salut Monsieur Masuda, vous, malheureux mais bien généreusement volontaire!

この月の後半十日ばかりは、前半の雨風に引きかへて、日は燃え、砂は鑠けて、海軟風は絶えず息づき、波は珍らしく和んだ。僕は泳いだ、泳いだ。泳いでは砂の上に長くなつて太陽を浴びる。或る時は砂に身を埋めて白日の中に眠つた。おかげでのぼせたと見えて、齒が少し痛み出し、今頰がはれてゐる。

今日は風が強いので、泳ぎを止め、綠の籐椅子に身を凭せて、あしか島あたりに狂奔する浪を眺めて暮す。僕は常にエレメントに依つて純粹を感得する。土や水を愛すること恐

らく僕は人に超えてゐる。晩方磯傳ひにあしか島へ行き、臺灣館でまづい洋食を食べ、歸りは汽車に乘る。僕は裸足(はだし)で歩きまはるのだよ。

こんなことを聞いたつてつまらないだらう。そこで何か書かうと思ふのだが、あいにく今は何も無い。あとは明日…

大正五年八月三十一日夜(封書)

増田篤夫君（神戸）

三富義臣（犬吠岬）

八

風物が凡べて秋の趣と成つて來ました。御無沙汰しましたね。例の氣儘な筆不精をお許し下さい。

夏の戯れはもう終りました。熱心な游泳家の私も二三日中にこちらを引き上げます。

僕は相變らず動搖の内的生活と靜穩な外的生活（閑散、讀書、散歩等）とで消光してをります。

尤もこの年は大分苦勞したせゐか、大分烈しいところが無くなりました。君は幸福を受け取る資格があります。幸福の世界を見失はぬやうになさいませ。資格のある人にとつては幸福はいつでもあります。うろたへると眼がくらんで見えなくなるのです。

大正五年九月一日(繪葉書)

青木精一郎様（大阪）

三富義臣（犬吠岬）

九

御無沙汰しました。僕の氣儘な遣り口をお許し下さい。お葉書二つともよく拜見しました。大いに說あり。書いてなんかゐられませぬゆゑ、歸つてから論爭したし。

凡べては性格にあり。哲學も藝術もその存在の理由を玆に發してをります。僕は哲學の存在を否むのではありませぬ(ジャメエ)。ただ、哲學的認識は部分的で藝術的認識は全的だと申すのです。およそ認識といふことは人の特徵ですが、一定の METHOD を以てこの認識の用とするものを學問と言ひます。所謂哲學は學問の一つです。藝術にはメソッドは不必要です。STYLE があるばかりです。この分け方を承知しますか、しませぬか。承知せねば大いにはなせます… あとは歸つてから…

Je serai au retour dans deux ou trois jours. Je vous prie de m'honorer avec une visite.

Bien à vous,

Y. M.（犬吠岬）

大正五年九月一日（繪葉書）

福士幸次郎君

一〇

西風が朝寢の蚊帳を吹きつける秋となりました。この月末は PLUM-ROOM の大攻擊をヱルダン的に喰ひとめ得ましたか？　君も曲りなりにも元氣のあるのは先づ先づ結構。こちらは晝も家の周圍の叢に蟲が鳴き連れてゐる。晩れ方、海の上にうつすりと匂ふやうな紅が漂ふ。蒼茫としてくらみゆく浪打ちぎはに、白泡を嚙んで海より躍り上る快男子が僕だ。そしてすたこらと風呂へ飛び込む。殘る暑さをせいぜい樂しんでゐる。こちらでは暑い日が何より嬉しいのだ。

火の鳥（犬吠岬）

大正五年九月二日（繪葉書）

今井國三君

一一

相變らず天下の政務の才取りの消息を、又聞きにでも耳にしようとしてあくせくしてゐますか。HAND TO MOUTH といふことがあるが、君のは MOUTH TO EAR だね。そいつは胸にもたれ易いから氣をつけ給へ。精神的下痢をしないやうに頼むよ。毒口はこの位にしておいて、もう秋だね。夏の戯れも終りか。アラッス！　時候はづれの避暑地の寂しさも一寸乙だが、起き拔けに海へ飛び込んで大浪を頭から浴びせられる眞夏の樂しみを思へば、過ぎ行く《時》が恨めしい。御家族の健康を希む。

火の鳥（犬吠岬）

大正五年九月二日（繪葉書）

浦田芳朗樣

一二

引潮時の浪のやうに避暑客達はどつと歸つてしまひました。その後へ濱へ打上げられた魚のやうに私達は殘つてをります。

うちの廻りには晝も蟲が鳴いてゐます。如何にも秋らしい西風が私の朝寢の蚊帳を吹きつけます。避暑地の秋の寂しさは仲仲言ふに言はれぬ趣がありますよ。

度度パンを難有う。もうぢき歸りますから送つていただくに及びません。お父様に依賴を受けましたミカホ丸のことはその後さつぱりと知つた人に會ひません。

大正五年九月三日（繪葉書）

義　臣（犬吠岬）

あやめ様

一三

一昨日母が來て、三才社からとどいたフロオベエルを持つて來てくれた。最初は眞夏の炎熱の日に、木場といつた風な堀割の或るベンチの上でブウヴァルとペキュッシェといふ二人の平凡人が知り合ひになるところだ。そこで二人は馬鹿に仲がよくなつてしまひ、これからいよいよ相携へて、くだらない人世に於ける、RIDICULOUS な人間のオディッセエを始めようといふところだ。（徒勞の感激！）

今朝は起き拔けにひと泳ぎやつて來る。海軟風和やかに、海の胸はおのづから膨らんで、

巖の上にたぎり落ちてゐる。

大正五年九月六日（繪葉書）

火（犬吠岬）

三上於菟吉様

一四

Votre formation intellectuelle! Justement c'est ce que, je crois quand je dis: votre développement était sérieux et le sera.

シュアレスはロマン・ロオランのやうな似而非天才ではありません。今僕が彼のロオマ人的グラァスに就いて說かずとも、「トルストイ・ギヴン」で君は了解するだらう。多分本は十五日に送れませう。今日明日は一寸都合惡し。バレスは僕もよく知らぬが、藝術家、思想家としては、大した人ではないと思ふ。但しグッド・ポリティシャンでせう。

Je suis toujours un peu agacé par son style sec et sa manière prétentieuse.

作家としてはスタンダアルの足下にも及ばぬやうに思ひます。おまけに彼には UTILIT-

ALLIANISME の臭みがあります。彼の名聲はその PRACTICAL な所に負ふところが多いと思ふ。但し、彼が自分の一切をさらけ出してかかる赤裸裸的度胸には感服。之が彼の多くの青年から崇拜される所以でせう。この點では僕も彼のアドマイラァです。彼は強い。

君の質疑中にあるサント・ブウヴに就いて——

近頃、サント・ブウヴは實際アデエル・ユゴオと戀仲であつたことが解つたさうです。半世紀以上も寃罪をきて、性質を賤まれたのは氣の毒ではありませぬか。

何だか亂暴な調子で書きました。君の質疑へ筆を入れてしまつて氣持が粗雜になつてゐるところです。だから君はこの手紙の SÈCHERESSE をゆるす義務がある。

大正五年十一月十四日（封書）

僕のFAIBLESSEについて寛大な増田君（神戸）　パレッスウ　三富

一五

（十七行略）

雨！　雨！　雨！　Toujours de la pluie et des gouttes d'eau autour de la chambre.

昨日藤村氏の「戰爭と巴里」を讀む。豫め恐れてゐた通り讀みながら焦燥の感が起つた。

（二行略）

只今は僕の讀みかけのものは、

CH. DICKENS : DAVID COPPERFIELD.（但し、佛蘭西語の芝居になほしたもの）

CH. MAURRAS : MINISTÈRE ET PARLEMENT.

などです。二三日前に

ANATOLE FRANCE : HISTOIRE COMIQUE.

を讀み了へました。一向詰らぬものです。

藤村氏の著書に、L'ACTION FRANÇAISE（新聞）でモオラスを讀んだ感動が所所散見されます。氏は僕などよりも若若しい樣子で感動してゐますが、畢竟反つて之は僕などのやうな烈しい氣持を氏が持ち合せぬからのことでもありませうか。

モオラスはそのなまなところが反つて特色ですが、僕にはもつとオリジナリテェに富んだ人でなければ承知ができませぬ。(彼の反社會主義に異議はありませぬが。)

...Mais s'il y a, comme disait le général Bonaparte, dans l'art de la guerre des (parties

divines》 inaccessibles au vulgaire profane, l'art de la politique comporte une sphère supérieure à laquelle la démocratie ne peut pas s'élever, quelques facilités qu'on lui ouvre, quelque bonne volonté qu'elle manifeste.

MAURRAS のかういふところには僕も雙手を擧げて BRAVO! を叫ばねばなりませぬ。

三富生

LE 19 NOV. 1916（封書）

増田篤夫君（神戸）

一六

（二十七行略）

近頃僕は殆ど夜中起きてゐて、晝中寢てゐます。

夜中の二時頃に茶漬けなどをさかなにして、冷酒一合ばかりを飲みます。昨日今日は上天氣でしたが、僕は洞穴のやうな眠りの中で、光りから遠ざかつてゐました。といつて、光りに對する僕の愛著がいささかも減つたわけではありませぬ。

僕のやうな天性輕跳な者には頭腦を作り成すことがなかなか容易ではありません。けれども常に輕い氣持を持續することはさほど困難でもありませぬ。

最近はあまり外へ出ませぬ。先月先先月頃はよく夜の二時三時時分まで飲んで歩きました、今井君が重に相棒で。今月に入つて二人ともばつたりとよしてしまひました。

僕は今、樂に日日を暮してゐます。生きて喜びあり死して悔いなし、とでも言ひませうか。死すべきものが活きてゐるといふ意識は誠に味ひ深き GAITY であります。しかもその上に、稀に REALISATION あつて更に PRACTICE なき理想を僕は持つてゐます。

この樂しい知識、聖らかな憧憬は TRAGICAL PERSPECTIVE と共に僕といふ一篇の PATHETIC DRAMA を形成します。僕は役者であり、觀客であり、更にそこ一面に張りつめた大鏡であります。鏡は己れ自身に就いて悲まず樂まず、土砂降りの晩にひよつこり外套を冠つて入つて來る福士君などの影像を映じて、靜かに感動します。鏡は己れ自身に注目し能はぬ缺點の外は完全な注目者で、心理學上感覺と稱せられるものとよく似てゐる。

左樣なら。

義臣

LE 23 NOV. 1916.（封書）

増田君（神戸）

一七

我等が如何にあるか、そして如何にありしか、といふことの外は凡べて閑問題でせう。(是是故に我等は是是でなければならぬ)といふ思想は必ずしも現實でもなく、生ける感覺でもなく、錯覺に充ちてゐる筈の人間としては甚だインプルウデントで、考察家から見れば幼稚な頭腦でありませう。

私にとつては、SUPRÊME RAISON は常に IDÉALISME です。又、或る人は、いや、RÉALISME に留まるにあるといふでせう。僕にあつては LE SENS DE LA RÉALITÉ はいつも IDÉALISME を JUSTIFIER します。シュアレスは(La raison des raisons est la folie.)と申しました。僕にとつてもこれでよいのです。只、之は問題でもなければロジックですらもありません、UN FAIT です。LE RÉSULTAT NÉCESSAIRE DES SENSATIONS EXACTES です。だから、僕を以てすれば藝術は IDÉALISME であります、生活が RÉALISME であるやうに。(現實主義も、それが藝術である以上、理想主義です。)理想的生活はありません。Quelle tristesse certes! けれど

も恐らくその故にこそ、生活は藝術の母なのです。

かういふメタフィジックは恐ろしく平凡です。君は無論世界を又はシュアレスを問題の眼を以て見る人ではありません。Bien contraire! シュアレスは人格です、その文は人格の詩です、藝術家なると共に大思想家、この世紀が幾人も數へぬであらうところの! です。——ただこんなことを一言したくなりました。言つてみれば一向徹しませんが、ただ君がシュアレスの STYLE を讀むことを希む。(無論君にとつては無用の言だが。)

こんなことを言ふと、なほ君は僕を藝術といふことの中へ沒頭する性質と觀るかもしれぬ。またそれがほんとかも知れぬ。ただ、僕は豫め自らを辯解しておく。卽ち——僕は生存上のいろいろな苦しみを藝術で慰められる者ではない、その代り、僕は、自分の生存上の苦しみで、藝術を煩したくない。

生活は藝術よりも大切ではない。けれども生活は藝術を以て如何ともしがたい DOMINATION だ。各フォンクションが別だから、解決すべき問題として比較することはできない。ただ關係を言へば、藝術は中心で、生活は周圍或ひは DÉTAILS だ、ハアトが生理的法則に左右されてゐるやうに、而もハアトの方があらゆる形而下物よりも遙かに大切で

あるやうに。

（九行略）

バレス流で、更に更にバレスより藝術家なるスタンダアルこそ、君のよい讀物の一つではないかと思ひます。

（三行略）

大正五年十一月二十八日（封書）

三富生

増田君（神戸）

一八

とうとう神戸まで出かけましたね。

ずつと前に、神戸であなたにあつたのもちやうど今頃でした。あの時分のことを思ふと何だかいやな氣がします。

去年の今頃は私はひとりで大苦しみをやつてゐましたつけね。それに引きかへて、今年の十二月は大へん氣がしづまつてゐます。

神様に《ありがたうございます》と言ひたいと思ひます。近いうちに教會へ行くつもりです。

いま、私は來年の書きものをいろいろかんがへてゐます。近頃はちつともあそびません。おこりつぽくもなくなりました。

さて、こんな事はどうでもいいとして、あなたもやりたいことは何でもやつてけつかうですが、だらくはしないやうになさいね。

（五行略）

増田君のところは神戸市…です。お母さんと一緒のやうです。今日増田君にも手紙を出しておきませう。今日はこれで左樣なら。

大正五年十二月四日午前三時（封書）

あなたの幸ひを願ふものより

マドゥモアゼル・ブランシュ（神戸）

一九

雨、雨、雨… 燈火に照らされ、蒼白い夜に見守られて坐つてゐると、青春の思ひがよ

みがへつて來ます。又、地は祝福の巢で空は榮光の象といふやうな花の念が湧いて來ます。私は運命に親むことを恐れません。神あらば神を讃へることをたゆたひません。

私は友情に乏しい者ではないやうです。ただ、私はどうも PUDEUR と LÉGÈRETÉ との持主で、DIRECT で SINCÈRE な態度ができにくい。だから僕が議論の爲の議論をしてゐる時、あたたかいものが僕の内にあることがかなりあるのです。僕が鋭い或ひは嚴しい調子になつてゐる時、僕の内に燃えてゐる心がないとも言へません。こんな事をこの年になつて未だ言ふのはお恥かしい次第ですが…

バレスを良政治家と言つたのは無論よい意味でなのです。

僕が過去現在だけを指して生ける感覺視したのは片手落ちの見方とは思へません。過去現在の事はたとへ錯覺にしろ眞の經驗であるが、ここから先へ論理を立てて行くのは危險が多い。僕を以てすれば、そこから先は理想の事です、冒險の事です。過去現在は既に或ひは今書かれてゐます。之を讀んで、次の頁をも解したりとしないのは、人生といふ傑作品を讀む心得として愼重なことでせう。尤も徹底懷疑家にとつては過去現在を讀んだと思ふのは幼稚でせう。然し、たとへ間違つて讀んだにしろ、一行一行づつ讀んだことは事實

です。讀者の目はこの本に向つて開き、彼の手はその頁を繰つたのですもの。この疑ひに對する最後の證人は感覺です。

感覺の前に未來は未だブランクです。かかる認識は決して實用的ではありませぬが、ほぼ正確に近いかと思ひます。

オオギュスト・コントは經驗派の哲學者ですが、而も彼の GOOD INTENTION が彼を誤謬に導いた場合は甚だ多いやうです。これ、彼が認識を實用に供せんとした非藝術的(非理想的)行爲に因るのではありますまいか。

君は精神的勇氣といふやうなものを RÉALISME が含み得ぬとお思ひですか。僕は如何なる矛盾も獨斷も又勇氣も併合したものの意味で RÉALISME と言ふのです。君も僕も RÉALITÉ であり、その生活は現實的行爲 (RÉALISME) です。

——どうです、メタフィジックでせう。——

生活と藝術とが相交涉し相影響することは言ふまでもありません。第一こんな分類はひとへに便宜に依るもので、事實ありやしないでせう。然しながら分類する以上嚴密に分類法に從はなければならない。要は玆でせう。

生活は藝術であつて、藝術は生活である、といふことを誠に言ひ得る人があらば、何のいざこざもありません。

（二行略）

昨日、石川三四郎といふ人の「砲聲を聞きつつ」を讀みました。日本人のものでは近來の好讀み物でした。この人は社會共産黨で、シャルル・モオラスの敵手ギュスタアヴ・エルヱエの賛成者です。

モオラスの感激者たる藤村氏に勝ること數等。（八行略）

神戸…へブランシュが行つてゐます。できるだけ相手をしてやつて下さい。僕はあの子に心を渡してしまつてゐます。君のところへ遊びに行きたいといふから君の住所を知らせておきましたが、間違へて、…と書いてしまひました。今月の中頃から聚樂館へ出るのださうです。宜しかつたら遊びに行つてやるやうにお願ひします。左樣なら。

三富

大正五年十二月四日（封書）

増田君（神戸）

二〇

こなひだの御手紙見ました。

あなたのむじやきでよい性質を私はいつでも愛してをります。

このまへは私がいんきな手紙を出したので、きさくなあなたをふさぎ込ませてしまつてすみませんでしたね。

すぎてしまつたことを今さら考へたとて、しやうがありません。これから兄弟のやうに、又したしいお友達のやうに仲よくいたしませうね。

たびのそらで、さぞおこまりでせう。

だんだん寒くなつて來ましたが、何かほしいものはありませんか。（三十二行略）

男は男らしく、女は女らしくなければ、人間はだめですね。

私も女女（めめ）しい根じやうはすてます。

今日はこれで左樣なら。

あなたの幸福を願ふ者より

大正五年十二月九日夜（封書）

マドゥモアゼル・ブランシュ（神戸）

二一

ホワイト君を散歩に伴ひ下された由、何となく心嬉しく存じます。"PEG O'THE RING"は僕の喜んだ活動の一つです。最終の場面、光りと微風との庭に向つた扉口で兩主人公がフランクな立話をしてるとこは、未だ印象に殘つてゐます。

僕はランド JR. のやうな好青年から隔たること遠いものですが、そちらの娘ホワイトは PEG の趣が奈邊かにあるかに思はれます。僕も L. JR. のやうな感情のフランクニスを彼女に向けたいと思ひます。

昨日は雪交りの雨でしたが、今日は曇り。明日は晴れに相違なし。福士君と別れてから、久しぶりで番町の圖書館へ行きました。途中 SANS ESPOIR DE RIEN といふ風な快い EMOTION を以て大空の下をこつこつ地を踏みしめて行く夕べの樂しさが、僕の伴侶でした。

ホワイトは僕に神戸へ出向いては如何といふ挑戰状をよこしましたが、それより僕はこちらでせいぜい軍用掛りを勸めたく思ふ。

彼女が暫く神戸で遊ぶ氣なら、或ひは稼ぐ氣なら、それは僕の希むところです。蕭何氣取りで一つ後方勤務をやつてみませう。

（八行略）

ラシイヌの詩句に《御身を抱くは御身を締めつけんが爲なり》といふのがあります。僕の感覺や自然に向ふ意識も斯くの如くです、亦。（六行略）

おやすみなさい。

大正五年十二月十一日（封書）

三富　義

増田君（神戸）

最後に僕をしてマムゼル・ホワイトを祝福せしめよ。アンシ・ソア・ティル！

二二

三上君よ、我我は ERROR の中に在る。貧しくて痩せつこけた經驗は貧しく痩せつこけた生活を形づくる。

僕は曾て、一月ばかり昏昏として眠り續けたら、春の太陽のやうに嬉嬉として起き上り得るだらうと思つた時がある。昨今、沒檢束の日日を(やや人爲的に、おちついた心で)送つてゐると、I have horror of the fact of our living だよ。僕等は文學者であつてはならない!

僕等をほぼ青年期を通り越したものとする。そんなら今はどういふ SEASON に在るかと言へば、まあ認識といふやうなものが重きを成して來た時代だらう。

この時代の危險は文學に墮するにある。PROFOUNDNESS へこそ進むべきなのに。人は危險なくしてプラファウンドニスに入らうとする根性があると、文學へ入つて行く。

青春者の文學ごつこは僕をして顰笑ましめる。文學は彼等の理想だ。彼等は文學的な戀などをする。そしてその貧弱な感想が、その貧弱な心を顫はせる。彼等は自分の青春をもてあまし、自分の青春に壓倒されて、なさけない韻律を出す、ひとりよがりのつまらない韻律を。けれどもそれでも韻律だ。

僕等はもうこんな雛つ子ぢやない。僕等は一つまみばかりにせよ、經驗がある。僕等がその經驗などを土臺にして中中穿つた事を言ひ、穿つた感じ方をする時、僕は墮落がその

中に入り込んでゐるのを感じる。これがたまらないのだ。僕等は經驗派だ。けれども經驗の中には(少くともこれを主義とする時)、墮落が一緒に存してゐることを痛感し得ねば、一個のきざな文學者に過ぎない。痛感する人を理想家といふ。理想と空想とを見分けるにはプラファウンドニスの有無を以てする。經驗と墮落とを見分けるには、一種のHORRORの有無を以てする。僕は茲に現實と理想とを結びつけようとする學說を樹てるのではない。現實を以て理想を形づくらぬ者は、貧弱であり、病的であり、墮落者である、といふことが言ひたいのだ。

大正五年十二月十四日（封書）

三上於菟吉樣

三富義臣

二三

こなひだI君から御手紙受取りました。

あなたにも似合はない、くよくよするのはおよしなさい。ヒステリイなんかおつぽらつておしまひなさい。といつても病氣なら仕方ありませんね。あなたの好きなお友だちはも

う來ましたか。二人でユニヴァサル會社のさつぱりした活動でもごらんなさい。ぢきなはつてしまひますよ。

あなたはいつでも思ひやりが深い。けれども、人の事やこれから先の事を今あなたがどう思つてもできないことはしやうがありません。ひとの事を心配して苦しむのはまことに良いきだてです。

お母さんもあなたの心のうちを知つたら、何もして貰はなくてもそれだけで嬉しいでせう。

あなたのわがままらしいむじや氣さの底の方にいつでも優しい心もちがかくれてゐることを私は知つてゐます。そこで私が始終あなたを愛してゐることは言ふまでもありません。

としの暮れになりましたね。

日が短くてこまります。

今は午後四時半。これからこのいうびんを出しながら一寸散歩します。

お正月が來たら、うんと羽根をおつきなさい。

僕はまつすぐに言へば役者はきらひです。ことに、書生役者はどこか根じやうが下びて

ゐて、よく見るといやしい顏をしてゐます。

あなたは、その仲まに居るんだから、よく見てごらんなさい。

今日はこれでごめんなさい。

大正五年十二月十五日（封書）

マドゥモアゼル・ブランシュ（神戸）

あなたの幸福を願ふ者より

今夜はスティンスンといふ女の飛行家が九段の上を飛ぶはずです。

二四

歲の初めを喜ぶ。冬の日が冷たい池水を笑はせ、庭石の上に輕い光りが漂ふ。去年をおつぽり出して、このポイントに無雜作に立つ快さよ。僕にとつては《今日》はいつでも日曜だ。今日より又新しい日曜の列を踏んで、跫音を地上にひびかせませう。

大正六年元日（葉書）

三富義臣

堀江朔様（鎌倉）

二五

御手紙拜見しました。年始狀もいただきました。そのまへの御手紙も今井君から受け取りました。みんな大へん嬉しく讀みました。

あなたも今年は景氣の惡いお正月ですね。いまによいこともありませう、あまりらくたんなさいますな。

私もおほせの通り寂しいお正月をむかへました。けれども去年の正月にくらべればどんなにらくだか知れません。

去年はおどろきましたね。心ざうがとくとくして、胸ばかりくるしく、居ても立つてもゐられませんでした。

それからあともずゐぶん長いあひだ困りました。ご飯を食べかけて急に悲しくなり、はしをおいてあはてて二階へ上つたことなども度度ありました。

それもそのはず、三年のあひだちつともはなれず一緒に暮してゐた人が急に居なくなつたのですものね。

あなたがねてゐるうち、すそをおさへ、肩をつつんでやつたのは何度だか知れません。あなたはよく兩手をまつすぐにふとんの外へ突き出すくせがありました。その手をつかまへて又ふとんの中へ入れてやつたのは何度だか知れません。

あなたの氣だてから、あなたの身體から、どこといつて私の知らないことは一つもありません。そして私はそれをみんな愛しました。

それが急に居なくなつたのですものね。

内に居ても、外に出ても、何か食べても、何か見ても、みんな思ひ出すのはあなたのことばかりでした。あなたに見せ、あなたに食べさせてこそ私はうれしいのでした。面白いものを見、おいしいものを食べるのが、私ひとりでならば、それは反つて悲しみのたねでした。

かういふ氣持はきつとだいじなか愛い子供をなくした人が感じるものでせう。しかもあなたは私のか愛い子供で、お友だちで、また戀人でしたものね。

そのくるしさも少しづつはなほつて來ました。時時はなさけなくなりますが、なんといつても氣持が大分らくになつて來ました。私にとつてこんな有りがたいことはありません。

どんなに有りがたいかは、かういふ思ひをした人でなければ誰にもわかりやしません。たとへば、夜私がねるとします。さうすると、『近頃は夜なかに心ざうがドキンとして、おどろいて目がさめるやうなことはなくなつたな。實にらくで有りがたい。』と思ひながらねむるのです。

ての字でおすしを食べる時、きつと、おすしをつまうとするとたんに、あなたのことを思ひ出して、『ブランシュはうちには待つてゐないのだな』と思ひます。これが前なら、かう思ふといつしよに胸がからつぽになつたやうな氣がします。

今では『さうさ、もう家にゐないのだもの、待つてゐるはずが無いさ。』と自分で自分に答へながら、『うちの者にでもおみやげに買つて行つてやりませう』と思つてつつんでもらひます。

こんなことを書いてゐるときりがないからもうよしませう。つらいことも、うれしいことも、其の時が過ぎてしまへば、もう思ひ出すばかりで、もうまへとは感じがちがひます。

ただ、私はのろまですから、手つとり早くわすれてしまふことができずに、大分時間がかかりましたが、成りたけ何もかも忘れてしまはうとつとめてゐるのです。

だからあなたとはなりたけあはないやうにしたいと思つてゐるのです。

あなたがやさしい氣持で私のことを思つてくれるのは實にうれしうございます。けれども私は自分にできるだけのことをして、あとは成るべく忘れてゐたいのです。（六行略）

あんまりやきもきなさいますな。いよいよしやうのないことがあつたら、私にさうだんして下さい。

あなたは自分のうちの事まで心配しなければならないから、大へんですね。

近頃の御手紙を見て、私は安心してゐます。あなたはしつかりして來ましたね、さうでせう。それといつしよに、からだを大切にして下さい。あなたの苦しみは私のくるしみです。

左樣なら。

大正六年一月六日（封書）

あなたの幸ひを願ふ者より

マドゥモアゼル・ブランシュ（神戸）

二六

（十四行略）

私は昨今癒し難い寂しさを感じてゐます。慰めを欲せぬ寂しさであるだけに靜かにしてゐるよりしやうがありませぬ。

到る所、ハムレットの所謂《家の快樂》が、而も畸形な樣式で横行してゐます。今日私の若いうぶな心を注いだ人人は凡べて私を離れてしまひました。滿洲あたりで肥大漢の間に唯一人とり殘されたやうな心地もします。

We are to-day in the error
Of which I have a horror.

といふ言葉が、こなひだは自然と唇に浮んで來ました。今朝は目が覺めると同時に、淸く暮したいのぞみが胸に一杯湧いて來ました。

尤も之は、自分の BONNE VOLONTE が人生の行き渡つた錯誤で無効に歸した場合、人の中に起るべき感想でせう。

そして自分の中にある錯誤に對して自ら罪する者は、セレニテエに向ふより仕方ありますまい。

Ainsi soit-il avec toutes ces désolations.

左樣なら。

大正六年一月十四日（封書）

三　富

增　田　君（神戶）

二七

いま十二時です。上野のお寺のかねがなつてゐます。火の番がカチカチをたたいてまはつてゐます。もう私もねませう。ねる前に一寸書きます。

ブランシュよ、私はさびしくてたまりませぬ。ゆふべはあまりのさびしさにとこの中へもぐつてねました。

今朝は目がさめると、淸い淸いくらしを送りたい思ひで胸がいつぱいになつてゐました。きたない事は實にいやです。なぐさめ手も何もいりません。さびしくともきれいな心で

くらして行きたいのがのぞみです。けれどもブランシュよ、さびしいのもずゐぶん身にしみじみとこたへますね。（七行略）

あなたは親思ひだから、うちの事ばかりでも苦勞がたえませぬね。たびたび言ひますが、からだを大切にして下さい。（二行略）

先日はあなたは大へんよわい事を言つてゐましたね。といつて、ゐばれもしませんね、私もずゐぶんなさけないことを書きましたから。

あなたは二人またいつしよになる氣がおこつたやうなことを言つて來ましたね。

別れるまぎはまで、《お前ほんとに切れる氣か》といふ二上りが私の胸の中でよくきこえましたが、あなたはほんとにかごの鳥のやうに大急ぎで行つてしまひました。

私が二十日まで待つて下さいと言つたのに、あなたはとても待てないと言ひました。と、芝居ならば、ここで少しうらみつらみを言ひたいところですが、私はお芝居はあんまり好きでないから、それはぬきにしといて、一緒になる時が來ればいつしよになりませう。

それとも、あれは一時のどうかしたはずみの氣まぐれならば、わるいしやれですよ。あんなことはむやみに言つてはいけません。

むやみにくつついたりはなれたりする新しい男や女は、僕はきらひですから。もつとも、僕を一寸なぐさめるつもりだつたのなら、おれいを申し上げます。《ほんとに一緒に成る氣かえ？》と歌つて、今夜はさよならにいたしませう。

おやすみなさい。

大正六年一月十四日（封書）

マドゥモアゼル・ブランシュ（神戸）

あなたのしあはせを願ふ者より

二八

二十八日の御手紙只今拜讀。

先づ君に同意していただきたいことがあります。外でもありませぬ、近頃のお天氣を共に祝はうではありませんか。毎日碧く冷たく澄んだ空に老いた太陽が元氣よく笑つてゐます。彼も昔は隨分意地が惡かつたやうですが、今では齢を加へた餘りおのづから清明を得たと見受けられます。群小俳優共を眺めるこの偉大な老俳優のおほらかな眼ざしは、僕にGAITY を與へます。

燃ゆるものは幸なる哉！

Bonheur à celui qui est ardent ! Parce qu'il aura la sérénité.

（十二行略）

只今下から呼ばれて夕飯を認めました。

菊枝も母も文明館へ「ロロオ」を見に行つたとてをりません。おばあさんが火鉢のわきに坐つてゐて何かと世話をやいてくれます。

おばあさんは近頃の唯一の樂みとしては本を讀むことですが、これは目が疲れるので長く續きません。

また、《お花》が好きなので、今日晝間僕が一組買つて來ました。

その禮を言ひ、その價が七十錢と聞いて肯き、けれども三四年は保つからね、私よりはもちさうだ、と言つて、おばあさんは快げに笑ひました。

誠に然り、誠に然り！　人は、この溫かくさつぱりした情を以て生を終らんことを！

上京したら先づ僕の家に足をおとめ下され。その代り例の淡淡とした待遇ですよ。一向おかまひできないのがこの一家の性質です。その代り冷たい氣持は誰も持つてゐません。

おいでなさい、どうしてもいけなかつたら、又歸るまでです。半日程のみちのりですもの、身輕に出て來給へ。

僕はシュアレスによつて、大人物と相對する術を敎はりました。シュアレスはゲェテを《オリンパスの宰相》と言ひました。甚だ同感。彼は恐らく偉大なポロオニアスでせう。

彼には常にディレッタントの面影があります。といつて、誰が彼をサブスタンシャルならずと言へませうか。

これが彼の偉大ですが、要するに、彼は味ふ方の代表者でせう。アテエネのパルテノンの柱は多島海の明るい空氣の中で豐かな日光を受け、今でも人の肌のやうに溫かい眞珠色を帶びてゐるさうです。

ゲェテから逭つくるしい獨逸氣質を割引きすれば、彼をこの柱に較べることはできませう。

HELLÉNISME が CHRISTIANISME の PROFONDEUR をゆるがし得ぬが如くで、彼の特徵もあります。

ブランシュも可哀さうに苦勞をしたことでせう。

けれども、士は已れを識る者の爲に死し、女子は已れを愛する者の爲に貌つくりす、です。

彼女が女學生の生意氣にかぶれ、きつい顔をして戀愛などと口をそらし初めたところから、彼女の罪であるところの不幸は胚胎してゐます。その責任の大半は懸つて僕にあります。而もその結果を十分に彼女が受けねばならぬことは當然です。

苦勞したのはむしろ彼女にとつて不幸中の幸でせう。物質上境遇上の安慰があつたら、彼女が今持つてゐる或る裸かな感じ、或る寒い感じさへかほど IMPRESSIVE ではあり得ずして、錯誤の道へ彼女は突進したことではありますまいか。而して THE MORE, THE WORSE. でしたらう。少くとも一時、この障碍は彼女の《坂に車》の勢をそぎました。

（五行略）

彼女が思ひがけぬ美徳（ヹルテユウ）を發揮せぬ限り、彼女の將來は TÉNÈBRES に向つてゐますね。

彼女が首を突つ込んでゐる（職業だか道樂だか知りませんが）ものは、僕は簡單明瞭に

好きません。その連中の下卑た根性を彼等の表情から讀んで御覽なさいといふことを、彼女に注意したこともあります。

けれどもこの猥（いやら）しい仕事も彼女といふ子供にとつては時間を幾らか華やかに紛らす玩具であり、同時に中中しほらしい氣持の稼ぎでもありませう。

何か外の玩具的稼ぎをと思ひますが、只今あり合せませぬ。せいぜい氣をつけておきませう。

この事に就いては、いづれ御目にかかつた節御觀察をさづかりたいと存じます。（二十九行略）

昨日晝間神樂坂で WHITE と同じカテゴリイに入るべき顔の、丈高で皮膚のよい十八ばかりの藝者を見かけました。その夜日本橋通りで、細面の、BONNE À ÉTREINDRE の西洋娘が日本青年の腕に縋つて歩んでゐるのに會ひました。

前者は SENSUELLE で後者は VOLUPTUEUSE でありました。

然し、かういふ途上 COLLECTION の中で、近來最も僕の記憶を占めてゐるのは、昨年夏銀座通りで行き違つた十四歳前後の西洋娘と、同じ秋電車で乘り合せた、深川の不動へ

參詣した歸りらしい二十三四のあきんど家の年增娘とです。

昨日の二者が SENSE に訴へるに反して、昨年の二者は SENTIMENT に訟へます。こちらの二者の方が遙かに立ちまさつた感銘を與へました。

御目にかかつて、親しくこの NAÏVE な CHARMEUSE のお話をしたいと思ひます。

用事はほぼ述べたやうです。では左樣なら。

餘白がありますゆゑ、僕の拔粹帳から一句。(古語ですから少し綴りが違ひます。)

Dedans mon livre de pensée
J'ai trouvé escripvant mon coeur
La vraie histoire de douleur,
De lermes tout enluminée.

——Le Seigneur de Blois.

大正六年一月二十九日 (封書)

增田君 (神戸)　　三富

二九

飛んだ無作法な御招待と間拔な御訪問とで兩日にわたり貴兄を惱まして相すみませんでした。貴重なお時間をなまけ者共が大分お潰ししました。その點に於いてこちらは大分時間を有益に暮したといふ逆判斷ができ上ります。どうぞお懲りなく御好意の御交際を願ひ上げます。マダム・ナカムラの御懇情痛み入りました。何卒くれぐれよろしくおとりなし願ひ上げます。

大正六年二月十二日 (葉書)

中村將爲樣 (生麥)　　義

三〇

十七日に來た。

君は前の日に立つた由きいた。僅かのことで會へなかつたのは殘念。尤も今度は僕何となく意氣上らず、靜かな我が家の二階で納まつてゐたい。衰へたる哉。我は今刺激を愛せ

ず。樂みそのうちにあり、といふやうな聖人の氣持が解つて來るやうでは、もう青年もおしまひだね。

さよなら。

大正六年二月十九日（鵠沼書）

今井國三君

三富義臣（伊豆山）

ブランシュは案外元氣です。彼も前途を思ふと一寸眞暗になるらしい。しかし彼も僕も性質上現在宗徒だから《明日無し》流に遊んでゐる。

昨日は熱海に行つた。今日は湯河原へ行く積りだつたが、面倒臭くなつて衆議一決でおやめ。只今演藝場で何かあるさうだから見に行く。明日立つ。室は君のをぢさんが居た室だ。

三一

十七日こちらへ來た。

濤聲枕を漂はすだ。生活は最も馬鹿げた、或ひは最も荒唐な官能を基礎としてゐる。君、最も良く生きようと思ふなら、決して深く考へる勿れ。動く者は考へない。考へる者は動かない。後者は一切の中に沙漠を見出だす。この沙漠を賑はすものは誠に精神的英雄だ。けれども、彼は如何に生活よりの追放者であることぞ。彼は人間の決論（終極）である。而して人間の希望から最も遠きものである。卽ち、人間はできるだけ英雄たらざらんとするものだ。

成つてないぜ君、生活つてものは！

海は人に盲目の術を敎へる。　The rest is silence ………………

…………………………………………………

……………………………………明日歸る。

大正六年二月十九日（鵠沼書）

浦田芳朗君

三富義臣（伊豆山）

三二

先日は結構なものを送つてもらひましたね。うちの者一同でぱくつきました。

今夜、雨、今寝る前です。

おだやかな夜を喜ぶ。

雨の夜などは燈火が懐かしいものの一つになる。そして靜かに坐つてゐれば、さまざまな愛著が心に上(のぼ)つてくる。ああ、之等を情慾に塗(まみ)れしめる勿れ。之等を枯淡ならしめる勿れ。ただ、虚無の闇を照す此の世の明りであらしめよ。

春が深くなるに連れて、我等の微笑も深くならんことを！　そしてやがて輝く夏に入つた時、影さへも匂はしい光りが我等と共にあらんことを！

三富義臣

大正六年四月十五日夜（繪葉書）

堀江朔様（鎌倉）

三三

LETTRE もらひました。

なかなかいそがしさうですね。あまり深入りをしずに、いいかげんで切りあげて、早くかへつてゐらつしやい。

京都は東京のやうにほこりつぽくなくていいでせう。こちらももう青葉の季せつになりました。

マリアさまの歌、『たまなるロザリアのきさきを祝ひただへよ』を時時うたつて下さい。

私も天國のことなどをおもひながらうたつてをります。

神よ、ブランシュにさいはひをたまへ。

火

大正六年四月二十一日（封書）

マドゥモアゼル・ブランシュ（京都）

三四

拜復、いつもおくれまして何とも恐縮。

今度はいつものパレッスとは一寸違つて、ここ数日寝る目もろくに見ないで急用に追は

れてゐました。例の「傳統…」、今日夜中に書いて明朝御送りいたします。御間におあひでしたらよろしく願ひ上げます。溫かになつて來たら、むつかしい事を言ふのが厭になり、書きながら自分で感動するやうな小說でもやりたくなりました。五月は四季のうちで私の最も選む月です。

左樣なら。

大正六年五月十五日朝（葉書）　　三富義臣

中村星湖樣

三五

しばらく御目にかかりません。御元氣を祝す。私は度度 MÉCHANT で不眞面目でした。それらを御許し下さい。といつて、もうこれからはさうでないといふわけではありません。眞面目な空氣が沈滯した空氣にならうとする刹那に私が急に不眞面目になるのは止むを得ません。そんなことはどうでもいい。僕の書いた字が君から笑ひの目を以て讀まれればいいのです。

僕も七月早早銚子へ行きます。序での時話しに御寄り下さい。

大急ぎで寢床へもぐる前に記す。もう夜明けです。

大正六年六月二十日夜（葉書）　　OISEAU FEU.

福士幸次郞樣

三六

昨日書いた手紙を出さないうちに、今しがた今井が十八日の手紙を持つて來てくれました。で、少し書きたします。

私は何もあなたにたいしてうらみがましいことを思つてはをりません。過ぎ去つた事については私のはうが行きとどかないことだらけです。

私が何かあなたのやくに立ちたいと思つてよけいな事をしたばかりに、とんだ苦勞をあなたにも御かけしました。

（三行略）

あなたに學問をすすめたのは、むろんあなたを苦しめるつもりではなかつたのです。

私はあなたに愛情を持つてゐたればこそ、わざとけんぢゆうな事をしました。

それらの事が、あなたを苦しめただけで、けつきよく何のやくにも立たなかつた今になつてみれば、あなたにあやまるほかありません。そしてただこの心もちを汲んでもらふよりほかしかたがありません。

さうです、こんな事になるくらゐなら、あなたのしたいままにして、もつとやさしくしてゐればよかつたのです。その方がどれだけ私の氣持もらくでしたらう！

さて、過ぎた事は何としてもいたし方ありません。とにかく、私はかういふ氣持ですから、あなたをうらみに思ふやうなことはさらにありません。私があなたの爲にしようと思つた事は皆しつぱいにをはりました。（四行略）

あなたのことについて、もう成りたけさし出口はしないつもりです。けれどもおなぐさみまでにお聞き下さい。

むかしの言葉に、

『士は己を識る者の爲に死し、女子は己を愛する者の爲に貌す。』といふことがあります。かくべつむづかしいことぢやありません。つまり、『男といふものは自分のねうちを知

つてくれる人の爲にどこまでもつくすがいい。女といふものは自分を心から愛してくれる者の爲におけしやうをするがいい。』といふのです。

この文句は私はほんとだと思ひます。（四行略）

なんだかおせつけうになりましたね。もうよしませう。

私はさうなさいといふのぢやありません。そんな自分勝手はきらひです、ましてや、あなたと私とはとにかくゐんが切れた仲です。

大正六年六月二十日夜（封書）　　　義臣

マドッモアゼル・ブランシュ（京都）

三七

長い御手紙ていねいに拜見しました。

そちらでの出來事は、私もたいていけんたうがついてゐましたから、今更承つてもかく別おどろきはいたしません。

實は私も、あなたはうは氣な方ではないと信じてゐましたが、この五月中にはじめて今

までのまよひの夢がさめたやうな氣がしました。じじつは仕方がありません。
あなたがいつたいにうつり氣でないとは、どうも言へなくなりました。
それで實はこなひだぢゆう、あなたに手紙を出す氣もなくなつてゐたのでした。
けれどもブランシュよ、あなたは氣立てのよいかたです。これは私がよく存じてをります。（四行略）
あなたが、とかく浮世は面白をかしくくらすのがいいといふ氣があると、口前のよく、てうしのよい人間を好きになります。
あなたがさういふくらし方をなさると、あなたにたいしての私の愛情はだんだんきえてゆきます。
と言ふと、『そんなら愛してもらふにはおよばない。何も愛してくださいとたのみやしまいし。』とあなたは答へるでせう。
けれども、さういふ風にかんしやくを起さないで、ここをかんがへて下さい。
人に愛され、親まれるといふことは、ずるぶんうれしいことですよ。私などは金よりも生命よりも何よりもさういふ目にあひたいのです。自分を愛してくれる人のかんがへはでいきるだけきかねばなりません。
女としてのたしなみをなくさぬやうにすること、品をたもつてゐて下さい。
あなたは役者仲間を御存じです。そしていやな連中だと思つたら、だんぜんとよして下さい。
あなたが何何劇團の花形だといふやうなところへこぎつけても、私にはちつともそんけいする氣にはなれません。
あなたが、御こづかひには不自由しても、世けんからはちやほやされなくても、又は馬鹿にされても、まじめなくらしにかへるならば、ごくすこしの人たちは、あなたを心から愛し、心からそんけいし、そしてあなたは、くもりのない氣持のいいくらしができるでせう。そして私は夢ちゆうになつて、あなたを愛してしまふでせう。そして、その愛情のおかげで、あなたのおかげで、この馬鹿者の私もだんだんえらくなれませう。あなたを自分のものにするしないは、私にとつて第一番のもんだいではありません。これが私のおねがひです。そして、あなたはそれができない人ではありません。
ただ、人は自分の慾望をかつてにしておくと、反つてだらくをしたがるもので、えらく

なりたがるものではありません。だから、心を引きしめてかからなければなりません。

世の中はそんなものぢやない、といふ御いけんですか？

世の中なんかどうだつてかまはないぢやありませんか。

なんだかむづかしい事ばかり言つて御たいくつでせう。ただ私はまじめにかう思ひます。だから書きました。

《そんな立派な事を言つたつて、あなただつてやつてはゐないぢやないか。》と言はれればさうです。けれども私はたびたびしんからさうしたいと思ひます。人はさう心がけねばならないと思ひます。ブランシュよ、どうぞさんせいしてください。

大正六年六月廿四日夜（封書）

か愛いマドゥモアゼル・ブランシュ　（京都）　義臣

九月に御目にかかるのを樂しみにしてゐます。今のところ、御手紙に書いてある氣持をあなたが九月までさへ持ちつづけるかどうかは信ようがおけません。失禮な言葉ごめん下さい。

三八

今夜はしづかな晩です。雨がポツリポツリ落ちてゐます。ドブの水が音を立てて流れてゐるほか、何の物音もしません。時時、池の鯉がはねます。

私は本を讀んでゐましたが、もう眠くなりました。そこで私は目をとぢてじつとしてゐると、頭にあなたのことが浮んで來ました。かういふ晩にあなたのことを思ふと、私はまことに悲しくなつてくるのです。

あなたはほんとにふしあはせですね。私はあなたがかあいさうでしやうがありません。あなたはかくべつ泣き蟲ぢやありません、それだのにあなたはたびたび泣きました。じつさい泣かなきやならないやうな目に何度もあつたんですものね。あなたは氣だてがいいから、苦しい時が過ぎてしまふと、それをわすれてしまひます。そして又苦しいはめに落ちるのです。

こんな事を書いて行つてもしやうがないから、止めます。

とにかくブランシュよ、あなたがなさけない時苦しい時には私といふお友だちがあるこ

とをわすれて下さいますな。私はかくべつなんのおやくにも立ちません。けれども誰でも人のなさけがほしくなる時があります。さういふ時には、自分に心をよせてゐる者があると思へば、ちつとはなぐさめになるでせう。

あなたの言ひ方で言へば、（目に鳩がとまりました）。もうねます。

あなたはよく私の胸に顔をあてて眠りました。私があなたをどんなにかわゆく思つたか――それがもしもあなたにわかる日があつたら、たぶん其の時あなたは私に愛情を持つやうになるかも知れません。（七月二日夜）

朝のうちに雨がやんで、だんだん風が出て來ました。

昨日今日は涼しい日です。（五行略）

御きげんちつとはなほりましたか？

私はいよいよ五日に銚子へ行くことになりました。母と二人です。

暑さにあたらないやうに氣をおつけなさい。氷はどくですから、あんまり飲まないやうに。

夏のあひだ、からだをよくしておいて、秋から一つしつかりやらうではありませんか。あたらしく、しんきまきなほしにやりなほしませう。未だ若いんですもの、今からへこたれてはだめです。ただ、ダニのやうなやつに喰ひつかれないやう、ドクムシのやうなやつにさされないやう、ようじんがかんじんです。

さいしよからまちがひなくはやれません。やりそくなひはかへつて爲になります。生れかはつたやうな氣でやりませう。（四行略）

今日はこれで左樣なら。

大正六年七月三日（封書）

マドゥモアゼル・ブランシュ（京都）　義臣

三九

命令によつて五日の朝眠い目をこすりこすり出發した。

晩方より靄大いに起り、霧笛に海岸的氣分をたつぷり味ふ。海水の冷たいのには驚いた。入るどころぢやない、足が濡れたばかりで痺れるやうだ。

今夜は霧笛の鳴りやうがをかしいと思つたら、機械に故障が出來たらしく、止めてしまつた。水夫が心ぼそいだらう。

LETTRE DE BLANCHE はこちらへ轉送の勞を乞ふ。

昨日七十度、今日晝七十三度、只今六十九度。東京も肌寒だらう。風が寒くて歩き廻れない。こちらへ著くと直ぐ、難船と漂流の話を聞いた。海、海、海… 何もかも海の匂ひがする。

大正六年七月七日（繪葉書）

三富義臣（犬吠岬）

今井國三君

四〇

我儘な御無沙汰を御許し下さい。いつぞや下された雜誌も拜見いたしました。君の御厚情を嬉しく存じます。

ミレエとセザンヌに就いては私は何も存じませぬが、二人とも私の大好きな畫家です。君の論文によると、『そのところを得たものが美しい』とミレエが言つたさうですが、これは美學の根本義ですね。セザンヌのモデル臺はお手製で、或る日友達がモデルになつてあぶながると、『君が平均のとれたポオズを取りさへすれば大丈夫だ。』とセザンヌが言つたさうです。ところが、その友人つひに居眠りをしたので、臺諸共がらがらと倒れたといふ話です。

こちらへ來てから一週間になります。四五日霧で閉口しましたが、昨日今日はやつと夏らしくなりました。今日初めて泳ぎました。

いづれそのうち一度お目にかかつて、ゆつくり話したいものですね。青春もどうやら過ぎてしまつた今日、カッフェなどではなく、何處か靜かな山中の旅籠屋か何かで、公平な經驗談などを話し合ひたいものです。君の DEAR MADAM もそばに居て聽いてくれるといいですね、女性に聽かれて耻かしいやうな話ではありませんから。披瀝と沈默、これが私のこれからの心得です。今日はこれで…

大正六年七月十四日（葉書）

三富義臣（犬吠岬）

青木精一郎様（大阪）

四一

御無沙汰をした。

こちらはともすれば濃霧がおこる。未だ泳ぐほどの暑さにならぬのですすめなかつた。殊に一昨日から測候所に濕度下降の三角白旗が上つて、昨日などは北風六十六度といふ寒さだ。然しまあ早い方がいいだらう。こちらは都合も何もないから、二十日の午前八時半發で來給へ。(兩國驛は國技館前下車だよ。) 必要品、――浴衣、海水著(只のシャツでも澤山だ)、枕、書物少し、手拭その他自分の日用品等。それからおみやけとして天文圖(星座の位置を示したもの) が欲しいのだ、買へたら頼む。三省堂か富山房にあるはず。猿股、手拭類は豐かな方がいい。

それから出發前に僕の家の近所へでも行つたら一寸二階へ上つて、床の間の褐色の本箱の下段から、"L'ÉCORNIFLEUR" (四六二倍、繪入本) を持つて來てくれ給へ。著者は JULES RENARD.

大正六年七月十八日 (繪葉書)

今井國三君　三富義臣 (犬吠岬)

兩花形の優劣に就いては異說があるが、いづれ口頭辯論で…

切符は犬吠まで買ひ給へ。犬吠驛で待つてゐる。二等一圓八十錢位。

四二

月見草よわれを導け夢の路

大正六年七月二十四日 (繪葉書)

堀江朔様　くち葉 (犬吠岬)

四三

白波や毛ずねの黑を洗ひけり

大正六年七月二十四日 (繪葉書)

浦田芳朗様　三富生 (犬吠岬)

四四

愛欲のむねを濁すや暮の濤

LE 24 Juillet（犬若仙ケ岩渡望の路の繪葉書）

増田篤夫君

この路は私の大好きな路ですからお目にかけます。

くち葉（犬吠岬）

四五

お手紙見ました。

近頃はなさけないお手紙がおほくて、讀むはうでも心ぼそくなります。そのうちにだんだんよい事もできてきませう。あんまりがつかりしてはいけませぬよ。

そちらはお暑いのに芝居をやつてはたまりませんね。あつさにあたらぬやう氣をつけて下さい。

私は毎日およいでゐます。

今日は犬若で舟をこぎました。

おととひは朝四時過ぎに起きて、あしか島へまゐり、波うちぎはへMA CHÈRE SHIRO と書いてみましたが、波が來てすぐ字を消してしまひました。

それで今度は水力電氣のわきへ、白い砂の中へ黒い砂でていねいに、ただ MA CHÈRE と書きました。その字は今でもちやんとのこつてゐます。

そのわきへすわつて時時私はあなたの事を思ふのです。バカですね。

三四日前から三上君と今井君とが遊びに來てゐます。にぎやかです。

明日はすこし遠くまで舟をこいでみるつもりです。

こなひだ心中があつて、娘のはうだけがうちの下へあがりました。かあいさうに！

今日はこれだけにします。今、ねる前です。

左樣なら。

大正六年七月二十五日（封書）

マドゥモアゼル・ブランシュ（大阪）

義臣（犬吠岬）

四六

灯のみどり影浮くなかに君を思ふ。

Souvenir d'Asikajima, c'était, comme vous savez, Midsummer-Light-Folly.

大正六年七月二十八日夜十時（繪葉書）

堀江朔様　　くち葉（犬吠岬）

四七

蟹の泡飛ぶや午睡の夢白し

暑さ御見舞申上げます。

大正六年七月晦日（繪葉書）

松居松葉様　　三富義臣（犬吠岬）

〔氏名の下に地名の註無き分は東京發信者しくは東京受信なり。――編者。〕

朽葉年表

明治二十二年

八月十四日、長崎縣壹岐郡武生水村四十番戸に生る。本名、三富義臣。父、道臣。母、まつ。

道臣氏の回想記に曰く、——

…是より先、明治二十年七月、私は鄕里長崎縣壹岐石田郡（當時、壹岐は二郡に分る）の郡長に任命せられ、同月東京から赴任した。東京生れの妻はこの時初めて踏んだ鄕里の地で義臣を分娩した次第である。

思ひ起せば、當時私は四里餘を隔ててゐる勝本浦といふ處に避暑してゐたが、倉皇として馬に飛び乘り、歸宅したのである。之を今回の出來事に照してみると、そこに何か因緣があるやうにも思はれる。…（三富朽葉今井白楊追悼錄より）

明治二十九年

四月。――本家長崎縣壹岐郡渡良村千百六十二番地三富淨（伯父）の養嗣子となる。

同月、實父母の一家と共に東京に移る。

二三轉學の後、富士見小學校に入る。

明治三十五年

四月。――富士見小學校高等科二學年を終業して、曉星中學校に入る。

明治三十八年

諸文藝雜誌に詩・短歌等を投書す。十七歲。

明治四十年

雜誌「文庫」の特別寄稿家となる。

四月。――曉星中學校卒業。

九月。――早稻田大學高等豫科文學科に入る。

十一月。――雜誌「深夜」を發行す。同人、三富朽葉、白石武志、增田篤夫。續かず。

明治四十一年

七月。――早稻田大學高等豫科終業。

九月。――本科英文學科第一部に入る。

この年、佛蘭西象徵詩人ステファンヌ・マラルメ作散文詩「秋の悲歎」を原語より飜譯す。別に、エミイル・ブレモン作「若き詩人河の對岸に住める愛人を思ふ」の譯詩もあり。前者は翌翌年、雜誌「劇と詩」に發表、後者は發表せず。本書三富朽葉詩集飜譯篇收錄の詩及び散文詩は當年（二十歲）より大正三年（二十六歲）までの所譯なり。

明治四十二年

五月。――自由詩社を結び、パンフレット「自然と印象」を大體月次刊行す。同人、人見東明、加藤介春、福田夕咲、今井白楊、三富朽葉。後、山村暮鳥、佐藤楚白、齋藤寬、福士幸次郎等加はる。

明治四十三年

四月。――親友白石武志病死す。（享年十九歲。）

六月頃、自由詩社解散す。

冬、牛込神樂坂の一レストランの一室に倶樂部を置く。若き藝術家等の加入するもの少からず、談笑夜を更かす。主宰者三富朽葉、この集會に SOIRÉE DES GRIMACES の名を與ふ。朽葉感ずるところあり、暫くにして解散す。

前年より引き續いて、「自然と印象」、「早稻田文學」、「文章世界」、「劇と詩」、「創作」等に詩作を發表す。凡べて本書三富朽葉詩集第一詩集に收錄。

別に、「ランボオの生ひたち」、「マクベスの城の眞相」（飜譯）の二論文を「劇と詩」の爲に執筆す。

明治四十四年

七月。——早稻田大學卒業。二十三歲。

二三年前より、佛蘭西近代詩人の作物を耽讀し、象徵主義精神に親熟す。

多く創作せず。僅かに、「雨の唄」、「冬の唄」、「CANTIQUE」、「仇花」、「現在」、「唄」等を、「三田文學」、「朱欒」等の雜誌に寄せたるのみ。筐底に藏するところ亦多からず。然れども、朽葉が詩人としての自覺はこの時漸く切實となる。以下作品、凡べて本書三富朽葉詩集第二詩集に收錄。

明治四十五年　大正一年

二月。——「日曜日」の詩作あり。發表せず。

今井白楊、增田篤夫と共に、文學・美術・音樂・流行等の各記事を含む雜誌を刊行せんとして成らず。（因みに、後年（死前）、之に社會・經濟等の各記事を加へたる雜誌新たに計畫せられ、前記二名の外、福士幸次郎等參加す。）

愛——マドゥモアゼル・ブランシュ。

…身に魂に鮮かな映象を浴びた不思議な名乘り合ひの記憶…（大正三年作散文詩「生活表」）

大正二年

一月。——「早稻田文學」に、論文「佛蘭西文壇の現在」出づ。十四日、養父三富淨病死。直ちに家督相續して、本家戶主となる。

結婚——マドゥモアゼル・ブランシュ。

大正三年

八月。——「早稻田文學」に、散文詩「生活表」出づ。

彼の象徵主義の頂點を示す時代なり。

大正四年

四月、五月。——「早稻田文學」に、論文「エミイル・ヹルハアレンの研究」を分載す。

大正五年

別離——マドゥモアゼル・ブランシュ。

二月。——「早稻田文學」に、論文「最近に物故せる佛蘭西の作家二三」出づ。

六月。——「早稻田文學」に、論文「ポオル・ヹルレエヌ」出づ。

大正六年

二月。——「早稻田文學」に、論文「ヹルハアレンを思ふ」出づ。

六月。——「早稻田文學」に、論文「傳統主義に就いて」(「土地と祖先と民族と」と改題せられて)出づ。

八月。——「早稻田文學」に、散文詩「微笑に就いての反省」出づ。絶筆となる。

八月二日、犬吠岬別莊所在地にて水泳中、今井白楊と共に溺死す。享年二十九歲。

八月二日午前のことである。二人(三富今井)は飄然銚子町に出掛けた。今井君に郵便局の用事その他があり、三富君に若干の買物があつた爲でもあつたが、之等は必ずしもその日を要す

ることではなかつた。つれづれなるまゝに漫歩してみたくなつたのであらう。

初め遊覽鐵道を利用する筈であつたが、發車時刻に後れたので、徒歩銚子町に向つた。この間の里程、遊覽鐵道に從へば、四哩六鎖である。

銚子町ではビイル一ダアスが主なる買物であつた。そして歸途又豫定の列車に乘り後れた。次の發車を待つ程の事もないので、再び徒歩歸路に就いた。ビイルは中半ダアスを商店に預けて、相共に殘り半ダアスを携へた。

犬吠驛に近く海獺島なる驛がある。驛前に毎夏三富君が無聊の折に立ち寄つた珈琲店がある。この時もここに珈琲を啜つて小憩をとつた。

別莊より數丁の所に日頃ゆきつけの一農家があつて、店に青物や草花を擴げてゐる。二人はここにも寄つて、晝餉の膳に上る茄子を求めた。後に主人の語るところによれば、この二青年は常に快活で、來れば、何事か戲言を交へずしては去ることをしなかつた。然るに、この日ばかりは共に口を噤んで語らず、いたく疲勞の體に見えた。ただ無雜作に風呂敷を投げ出し、主人が包むに任せた。顏色やや靑ざめて、態度に力が無かつたといふ。

別莊に歸りつくと二人は元氣を恢復したらしく見えた。直ちに衣を更めて波打際に下り立た

うとした。母君はその日の天候と或る不可思議な理由とに促されて、しきりに二人を止めた。この日は空模様悪しく、濱風の吹き廻しが何となく不安であつた。海は常よりも鞺鞳の響高く、別荘の前庭即ち斷崖の上に立つて望めば、波浪岩に當つて碎ける狀物凄く、波打際はただ眞白に見えた。

二人は暑いから一浴びあびて來るといふ輕い言葉をのこしてこの斷崖を驅け下りた。

時を隔てて、一老人が二人の遭難を報じて來た。……（追悼錄より）

遺骸、今井國三は五日午前十一時半、三富義臣は八日午後零時半、いづれも遭難場所を程遠からぬ處にて發見せらる。本銚子にて荼毗。朽葉の葬儀は、十五日、東京青山齋場に於いて神式を以て行はる。墓所、麻布區笄町大安寺內。白楊の葬儀は、十七日、鄕里鹿兒島縣川內町白和町眞光寺にて佛式を以て營まる。墓所、平佐の墓地。白楊に兄弟無く、朽葉に兄弟姉妹無し。

十月。――三富道臣、山下市助（白楊叔母君の夫君）の手にて、「三富義臣君今井國三君追悼錄」上梓せられ、親戚知己友人等に分たる。編纂責任者、福士幸次郎（今井）、增田篤夫（三富）。續いて、遺稿編纂の議ありて、將來の爲各擔當者選定。三富朽葉の

分は增田篤夫之を擔任す。

大正七年

八月。――銚子君が濱（三富家別莊所在地）に、遭難場所に面して、「涙痕の碑」建てらる。碑文左の如し。

嗚呼朽葉三富義臣白楊今井國三の二人は大正六年八月二日此海中に游泳するに際し突然巨浪の襲ふ所と爲り相救はんとして力及ばず卒に相擁きて波底に沒し溘焉不歸の客と爲り畢れり悲哉二人は齊しく早大文科の出身にして同窓同齡境遇均く意氣相似たり而るに不幸中道にして逝き平生の志業一朝泡沫に歸して復すべからず此恨綿綿として盡くる期なきを奈何せむ嗟乎蒼蒼たる上天此二人を生じ忽焉として之を奪ふ哀哀たる父母豈永く望思の涙なきを得ん哉乃鼓に其痕を銘し而して長く之を弔すと云

大正七年八月

朽葉實父三富雪洲建之

赤松鶴堂書

大正十五年

九月。――三富朽葉詩集（全集）出版。校訂編纂者增田篤夫。發行者長谷川巳之吉。著作權者三富家（東京分家）。

三富朽葉詩集　完

三富朽葉詩集　總目次

第一部

第一詩集……〔三―一〇六〕

顫律……五

水のほとりに……九

長嘯……一一

殘餘……一三

午睡の歌……一六

I……一六

II …… 一八
III …… 一九
IV …… 二一
V …… 二三
夜の鳥 …… 二四
パステル …… 二七
悲しい散歩 …… 三〇
二階より …… 三二
花瓣と花粉 …… 三四
I …… 三四
II …… 三五
III …… 三六
IV …… 三七
初花 …… 三八

シルエット …… 四〇
雜沓の中… …… 四一
冬の初め …… 四三
十二月の夜の曲 …… 四六
STOVE …… 四九
冬の歌 …… 五一
夜曲 …… 五三
黃昏の歌 …… 五六
夕暮の街 …… 五八
のぞみ …… 五九
私は… …… 六〇
焰の繪 …… 六一
經驗 …… 六三
黑框 …… 六五

午後の發熱……六七
微笑……六九
SPLEEN……七一
ピアノ……七三
憂鬱病……七五
I 雨……七五
II 夜……七七
四月……七九
六月……八一
切抜書……八三
I……八三
II……八四
III……八五
IV……八六

メランコリア……八八
メランコリア……九〇
秋のなげき……九三
夏の曙……九五
黄昏の薄くらがりに……九七
公園の秋……九九
墓場のREFRAIN……一〇二
盲人の歌……一〇四
第二詩集　營み……〔一〇七—一四六〕
CANTIQUE……一〇九
I……一〇九
II……一一一
仇花……一一四

SENTIMENT …… 一一六
現在 …… 一一八
盲人の唄 …… 一二一
深夜 …… 一二三
冬の唄 …… 一二五
I …… 一二五
II …… 一二七
III …… 一二九
唄 …… 一三二
寨を囲む麥の穗よ…… 一三四
雨の唄 …… 一三六
日曜日 …… 一三八
山の木木の中に…… 一四〇
土地 …… 一四二

序曲 …… 一四五
散文詩集　生活表 ……〔一四七―一八〇〕
魂の夜 …… 一四九
鑠けた鍵 …… 一五二
海 …… 一六〇
生活表 …… 一六二
微笑に就いての反省 …… 一七三
飜譯 ……〔一八一―二〇八〕
冬の唄（アドルフ・レッテエ）…… 一八三
LIED（ギュスタアヴ・カアン）…… 一八六
LIED（ギュスタアヴ・カアン）…… 一八八
わがさすらひ（ジャン・アルテュウル・ランボオ）…… 一九〇

SENSATION（ジャン・アルテュウル・ランボオ）……一九二
蜻蛉（アドルフ・ボッショオ）……一九四
ETAT D'AME（シャルル・アドルフ・カンタキュゼエヌ）……一九五
若き詩人河の對岸に住める愛人を思ふ（エミイル・ブレモン）……一九六
LE MAUVAIS SOIR（アンリ・ドゥ・レニエ）……一九八
NEVER MORE（ジャン・モレアス）……二〇〇
彼女は…（シャルル・ギルドラック）……二〇二
日曜日（ジュウル・ラフォルグ）……二〇四
港（シャルル・ボオドレエル）……二〇七
窓（シャルル・ボオドレエル）……二〇八
醉ひ痴れよ（シャルル・ボオドレエル）……二一〇
二重の室（シャルル・ボオドレエル）……二一二
おどけ手（シャルル・ボオドレエル）……二一六
鏡（シャルル・ボオドレエル）……二一八

老婆の絶望（シャルル・ボオドレエル）……二一九
犬と香壜（シャルル・ボオドレエル）……二二〇
異國人（シャルル・ボオドレエル）……二二一
藝術家告白の祈り（シャルル・ボオドレエル）……二二二
射的場と墓地（シャルル・ボオドレエル）……二二五
夕べの薄明り（シャルル・ボオドレエル）……二二七
スウプと雲（シャルル・ボオドレエル）……二三〇
後光の紛失（シャルル・ボオドレエル）……二三一
貧人の玩具（シャルル・ボオドレエル）……二三三
秋の悲歎（ステファンヌ・マラルメ）……二三六
哀れ蒼ざめた子供よ（ステファンヌ・マラルメ）……二三八
生ひたち（ジャン・アルテュウル・ランボオ）……二四一
朝の雨（ピエエル・ルイス）……二四三
阿剌比亞の古詩より……二四四

首飾り……二四四
煩悶……二四五
忍從……二四五
沈默に就いて……二四六
無題（エブン・ゼエドゥウン）……二四六
化粧された愛（アマルウ）……二四七
爭ひ……二四七
愛の顏……二四八
ルウドラ……二四八
HYMNE……二四八
最上の愛（ギリエ・ドゥ・リイル・アダン）……二五〇
ディギンヌ・ボンタン（アルベエル・サマン）……二五五
MON COEUR MIS A NU（シャルル・ボオドレエル）……二六八
語錄（レミ・ドゥ・グウルモン）……二七〇

生と藝術と（ロマン・ロオラン）……二七四
英雄の氣息（ロマン・ロオラン）……二九一
藝術（アンリ・ベルグソン）……三〇一

第二部

研究……〔三一一—四二〇〕
エミイル・ヴェルハアレンの研究……三一三
人物……〔四二一—四四二〕
ヴェルハアレンを思ふ……四二三
ポオル・ヴェルレエヌ……四三五
紹介……〔四四三—五二六〕
佛蘭西文壇の現在……四四五

最近に物故せる佛蘭西の作家二三……四八四
ランボオの生ひたち……四九三
マクベスの城の眞相……五〇三
無告の民……五〇九
意見……〔五二七—五五八〕
感性論……五二九
傳統主義に就いて……五四八

第三部

遺稿雑纂……五五九—六二〇
朽葉の手紙……〔六二一—八二二〕
I（一九〇七—一九〇八）……六二三

II（一九〇九—一九一〇）……六八五
III（一九一一—一九一二）……七〇七
IV（一九一三—一九一五）……七三七
V（一九一六—一九一七）……七五五
朽葉年表……八二三
編者の註……中四・一〇八・一四八・一八二・二二一・三四三・四四四・五二八・五六〇・六二三
三富朽葉肖像
三富朽葉筆蹟
犬吠岬紀念碑一
犬吠岬紀念碑二

三富朽葉詩集總目次 完

三富朽葉全集

大正十五年十月十二日印刷
大正十五年十月十五日發行
第一刷千五百部

定價三圓八十錢

著者 故三富朽葉

發行者 長谷川巳之吉
東京市芝區下高輪二二

發行所 第一書房
振替東京六四二二三
電話高輪一二九四

印刷所 英文通信社印刷所

第一書房刊行書目

著者	書名	體裁	定價
上田敏遺著	上田敏詩集	四六判七百六十頁 背皮金泥美本	定價 三圓八十錢
野口米次郎著	表象抒情詩	四六判百四十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	第二表象抒情詩	四六判百四十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢
堀口大學著	詩集砂の枕	四六判二百八十頁 表紙木判刷美本	定價 二圓
堀口大學著	譯詩集月下の一群	菊判七百六十頁 背皮金泥美本	定價 四圓八十錢
アポリネエル著 堀口大學譯	動物詩集	四六判ジュフイ畫 繪入金泥銀泥美本	定價 二圓
佐藤春夫著	佐藤春夫詩集	菊判本文二色刷 表紙木判刷美本	定價 二圓八十錢
日夏耿之介著	日夏耿之介詩集	全三册豫約非賣品	讓價 五十圓
三富朽葉遺著	三富朽葉詩集	四六判八百八十頁 背皮金泥美本	定價 四圓五十錢
堀口大學譯	譯詩集空しき花束	初版別製	近刊
三木露風著	三木露風詩集	初版別製	近刊
西條八十著	西條八十詩集	初版別製	近刊
茅野蕭々譯	リルケ詩集	初版別製	近刊

第一書房刊行書目

著者	書名	體裁	定價
土田杏村著	日本支那現代思想研究	菊判三百餘頁	定價 二圓五十錢
土田杏村著	戀愛の諸問題	四六判四百九十頁 總クロオス美本	定價 二圓三十錢
矢野峰人著	近代英文學史	菊判八百卅頁特刷 挿繪入總クロオス美本	定價 六圓五十錢
矢野峰人著	詩學雜考	四六判百八十頁 白バクラム美本	定價 一圓五十錢
三木露風著	露風詩話		近刊
慶大教授ヴァインズ著	野口米次郎論	四六判二百四十頁 口繪入バクラム美本	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	ブックレット(既刊廿五册)	四六判百二十頁 口繪入二枚或四枚	各册六十錢

第一書房刊行書目

松岡讓著	法城を護る人々	四六判全三册 白布金泥美本	上巻生活篇 二圓六十錢 中巻信仰篇 二圓三十錢 下巻批判篇 二圓六十錢
佐藤春夫著	女誡扇綺譚	四六判百三十頁 背バクラム木判刷美本	定價一圓
岸田國士著	岸田國士戲曲集	四六判二百八十頁 背クロオス函入美本	定價一圓六十錢
田島淳著	田島淳戲曲集	四六判二百八十頁 背クロオス函入美本	定價一圓六十錢
佐藤春夫著	佐藤春夫戲曲集		近刊
飯塚友一郎著	歌舞伎細見	菊判千二百頁 挿繪三百餘美本	特價八圓五十錢
灰野庄平著	大日本演劇史		近刊

第一書房刊行書目

ポオル・モオラン著 堀口大學譯	戀の歐羅巴	菊判三百四十頁 背赤平金泥美本	定價二圓五十錢
ポオル・モオラン著 堀口大學譯	レキスとイレエン	菊判總バクラム 用紙書簡紙美本	定價二圓
ジュル・ロオメエン著 堀口大學譯	キネマシナリオ ドノゴオ・トンカ(科學の奇蹟)	四六判二百四十頁 木判表紙瀟洒	定價一圓三十錢
フイオナ・マクラウド著 松村みね子譯	かなしき女王	四六判二百九十頁	定價一圓八十錢
ジャン・ラシイヌ著 內藤濯譯	悲劇 ブリタニキュス	四六判背皮西洋 木版色刷二枚美本	定價二圓
柴田天馬譯	聊齋志異	菊判三百九十頁 唐紙帙入美本	定價三圓

第一書房刊行書目

著譯者	書名	體裁	定價
大田黒元雄著	洋樂夜話	四六判二百八十頁 黒赤クロオス美本	定價二圓
大田黒元雄著	歌劇大觀	四六判八百頁函入 總クロオス美本	定價四圓
大田黒元雄著	名曲大觀	四六判三百十頁 黄布表紙美本	定價二圓
大田黒元雄著	靈西亞舞踊 七百五十部限定出版	四六倍判原色版十枚寫眞四十枚 特製最上本	定價十圓（十五年中） 特價七圓五十錢
大田黒元雄著	音樂の横顔	四六判二百八十頁 挿繪十枚美本	定價二圓
大田黒元雄著	海外音樂旅行 華かなる回想	四六判二百三十頁 背黒バクラム美本	定價二圓
大田黒元雄著	西洋音樂入門	四六判樂譜入 總クロオス函入	定價一圓三十錢
大田黒元雄譯	水の上の音樂	四六判二百三十頁 背白バクラム美本	定價二圓
ロマン・ロオラン著 大田黒元雄譯	近世音樂の黎明	菊判三百三十頁 バクラム總クロース 挿繪十二枚美本	定價三圓五十錢
ロマン・ロオラン著 大田黒元雄譯	過ぎし日の音樂家	菊判四百五十頁	近刊
アダム・カアス著 大田黒元雄譯	管絃樂及び管絃樂法の歴史的研究	菊判五百餘頁 樂譜入バクラム 總クロオス美本	定價五圓
シリル・スコツト著 大田黒元雄譯	音樂に關聯せる近代主義の哲學	菊判二百餘頁	定價二圓
リムスキイ・コルサコフ 服部龍太郎譯	ロシヤ音樂年代記	四六判 挿繪十[illegible]美本	定價二圓

Tomuchi Shoten
OGIKUBOEKIKITAGUCHI